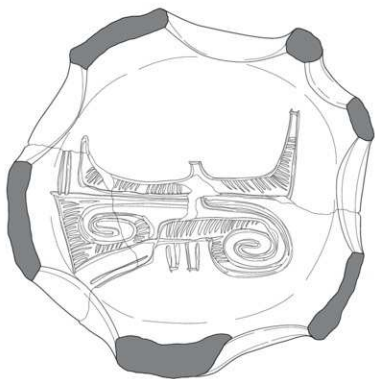


— 茨城県土浦市 —

あかみどういせき にしちく  
**赤弥堂遺跡 (西地区)**

— 県営畑地帯総合整備事業 (担い手支援型) —  
— 坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2011

土浦市教育委員会  
有限会社勾玉工房Mog i



## 序

土浦市は霞ヶ浦や桜川など、豊富な水資源に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため、市内には集落跡や貝塚、古墳など数多くの遺跡が存在しています。このような遺跡は、当時の人々の生活や環境を知る手掛かりとなります。また、現代に生きる私たちが、豊かな生活を送ることのできる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化財を保護し後世に伝えることは、私たちの大切な任務であり、郷土の発展のために大切なことです。

この度、上坂田地区と下坂田地区において大規模な畑地帯総合整備事業が計画され、今年度は下坂田の赤弥堂遺跡について、記録保存を目的とした発掘調査が行われました。調査の結果は本文に記載されているとおりですが、土浦の古代の解明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、関係者の皆様のご協力とご支援に対し厚く御礼を申し上げます。

平成 23 年 3 月  
土浦市教育委員会  
教育長 富永善文

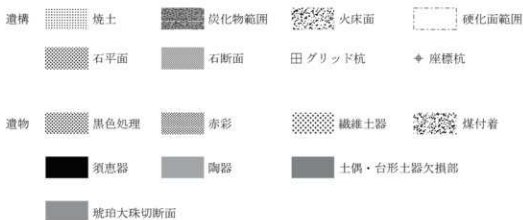


## 例 言

1. 本書は茨城県土浦市下坂田1173番地他に所在する赤弥堂遺跡（西地区）の発掘調査報告書である。
2. 調査は土浦市から委託を受けた有限会社勾玉工房Mogiが実施した。
3. 発掘調査面積は3,600㎡である。
4. 調査期間は、平成22年10月8日より平成23年1月31日まで実施した。また、出土品の整理作業および報告書の作成は、平成22年11月1日より開始し、平成23年3月10日まで実施した。
5. 発掘調査は現地調査を長谷川秀久・大越直樹（発掘調査員）が担当した。  
整理作業は大賀 健・長谷川秀久・大越直樹・大賀さつき・鈴木徹が担当した。
6. 発掘調査の参加者は以下の通りである。（敬称略）  
鈴木敏信 小野 豊 佐賀 実 谷中 昌 宮本富夫 露久保三郎 柿崎 昇 箱守よしい 榎戸洋子  
金塚 暎 小池一司 森永典昭 小角みや子 鈴木利勝 高野美智子 河野紅仁子 大野幸枝 大木幸子  
吉田正子 藤田美代子 仲田 仙 佐藤利男 青木 誠 大山年明 川又誠一 横田忠利 沼田久男 岡田 春  
榎戸 徹 齊藤京子 小玉明子 中嶋かつ 持田 清 米山秀昭 田中正治 郡司 勇 根本 滋 友部政夫  
小島廣史 小林卓生 牧田保身 能勢谷久尚 本田仁子 小野瀬健一 山藤直樹
7. 整理調査は有限会社勾玉工房Mogiにおいて行い、参加者は以下の通りである。  
遺物基礎整理作業 谷 旬 田中一穂 石山 啓 須賀澤一憲 川口和之 根本時子 篠原美代子  
稲坂なお子 石津弘子 伊藤久美子 前田やす江  
遺物実測作業 大賀さつき 上田敦子 阿天坊弥生 石橋明子 囊庭紀子 小川美由紀  
デジタル編集 高橋歩美 森優里絵 岩崎美奈子 塩澤佑介 橋邊明子 川口和之  
事務・経理 橋邊明子 石橋明子
8. 本報告書に用いた遺構写真は、長谷川秀久・大越直樹が、また整理作業における遺物写真は、大越直樹・石山 啓・鈴木 徹が撮影した。
9. 執筆分担  
第1章第1節 黒澤春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）  
第1章第2節 大越直樹（有限会社勾玉工房Mogi）  
第2章第1節・2節 関口 満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）  
第3～5章 大賀 健（有限会社勾玉工房Mogi）
10. 現地での基準点測量は芦田測量に委託した。
11. 本報告書に関わる出土品および記録図面・写真等は、一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管している。
12. 本遺跡の略号はASSW 赤弥堂遺跡（西地区）とした。遺物の注記もこれに従っている。
13. 本遺跡の発掘調査から本報告書の作成に当たり以下の方々に協力を賜った。ここに記して感謝の意を表すものである。（敬称略）  
寺村光晴 川崎純徳 齋藤弘道 瓦吹 堅 上野修一 塚本師也 戸田哲也 角張淳一 藁科哲夫 篠原 正  
林田利之 及川謙作 茨城県教育委員会文化課 茨城県南農林事務所 土浦市産業部耕地課  
有限会社カワヒロ産業 佐々木建設株式会社 小坂建設株式会社 株式会社マツイ商会 芦田測量

## 凡 例

1. 第1図は国土地理院土浦2万5千分の1地図常陸藤沢を用いた。
2. 本書に記してある座標値は世界測地系第IX系を使用している。
3. 堆積土層の観察および遺物の色調については、『新版標準土色帖』2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を用いた。
4. 標高は東京湾の平均海拔を示している。
5. 本報告書における実測図は各区別の全体図は600分の1、遺物は1分の1、2分の1、3分の1、4分の1、5分の1の縮尺で掲載した。尚、一部の遺構・遺物に変則的な縮尺を用いた場合には、スケールをもってその倍率を表した。
6. 本遺跡の報告書に掲載した遺物写真は、一部を除き、基本的に実測図の縮尺に合わせて掲載している。
7. 本遺跡の報告書に用いた記号およびスクリーンは以下を表す。



8. 遺物の注記に用いた略号は以下の通りである。  
遺跡名 赤弥堂（西地区）・・・ASSW  
住居跡・・・SI 土坑・・・SK 溝・・・SD ビット・・・P 道路状遺構・・・SF  
性格不明遺構・・・SX  
尚、貝層を有する8区SK01は貝塚としての番号は付していない。
9. 図中に示した「K」は攪乱を意味する。
10. 本遺跡において検出された遺構が欠番になった場合、遺構番号の振替は行わず、調査時の番号のまま報告している。
11. 本遺跡出土遺物の修復にはセメダインCおよび樹脂材のアラルダイト5112・5113を用いた。

# 本文目次

## 序・例言・凡例

### 目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	(1)
第2節 調査の経過	(1)
1 発掘調査	(1)
2 整理作業	(2)
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	(3)
第2節 歴史的環境	(3)
第3章 調査方法と標準堆積土層	
第1節 調査方法	(6)
第2節 標準堆積土層	(6)
第4章 調査成果	
第1節 遺跡の概要	(7)
第2節 検出された遺構と遺物	(7)
第1項 1区	(9)
1 住居跡 (S1)	(9)
2 土坑 (SK)	(15)
3 溝 (SD)	(26)
4 ビットおよび遺構外出土遺物	(28)
第2項 2区	(30)
1 住居跡 (S1)	(30)
2 土坑 (SK)	(32)
3 溝 (SD)	(34)
4 遺構外出土遺物	(34)
第3項 3区	(36)
1 住居跡 (S1)	(36)
2 土坑 (SK)	(54)
3 性格不明遺構 (SX)	(94)
4 ビット	(95)
5 溝 (SD)	(98)
6 遺構外出土遺物	(99)
第4項 4区・7区	(101)

[4区]	
1 住居跡 (S1)	(101)
2 土坑 (SK)	(103)
3 溝 (SD)	(103)
4 遺構外出土遺物	(104)

[7区]	
1 住居跡 (S1)	(104)
2 土坑 (SK)	(104)
3 ビット	(106)
4 遺構外出土遺物	(106)

第5項 5区	(107)
1 住居跡 (S1)	(107)
2 掘立柱建物跡 (SB)	(110)
3 土坑 (SK)	(111)
4 道路状遺構 (SF)	(115)
5 ビット	(117)

第6項 6区	(117)
1 溝 (SD)	(117)
2 遺構外出土遺物	(118)

第7項 8区	(119)
1 住居跡 (S1)	(119)
2 土坑 (SK)	(120)
3 道路状遺構 (SF)	(128)
4 溝 (SD)	(130)
5 ビット	(131)

## 第5章 まとめ

第1節 台形土器と内面に 絵画が描かれた台形土器	(133)
第2節 赤弥堂遺跡出土の 連弧文様式土器	(134)
第3節 琥珀大珠	(137)
第4節 土偶	(138)
第5節 発掘された赤弥堂遺跡の全体像	(139)
第6節 自然科学分析	(141)

# 挿図目次

第1図 遺跡周辺地図	(序)
第2図 周辺の遺跡	(4)
第3図 標準堆積土層	(6)
第4図 赤弥堂遺跡全体図	(折図1)
第5図 赤弥堂遺跡(西地区)全体図	(折図2)
1区	
第6図 1区東側全体図	(7)
第7図 1区西側全体図	(8)

第8図 1区西側標準堆積土層	(8)
第9図 SI01	(9)
第10図 SI01出土遺物	(9)
第11図 SI02	(9)
第12図 SI02出土遺物	(9)
第13図 SI03	(10)
第14図 SI04・08・SK20	(10)
第15図 SI04出土遺物(1)	(11)

第16図	S104出土遺物(2)	(12)	第62図	SK01	(32)
第17図	S105	(12)	第63図	SK01出土遺物	(33)
第18図	S105出土遺物	(12)	第64図	SK02	(34)
第19図	S106	(12)	第65図	SD01	(34)
第20図	S107	(13)	第66図	2区遺構外出土遺物	(34)
第21図	S107出土遺物	(13)	3区		
第22図	S108出土遺物	(14)	第67図	3区全体区	(35)
第23図	S109・SK14	(14)	第68図	3区標準堆積土層	(36)
第24図	S109出土遺物	(15)	第69図	SI01	(36)
第25図	SK01・02	(15)	第70図	SI01出土遺物	(37)
第26図	SK03	(15)	第71図	SI02	(38)
第27図	SK03出土遺物	(16)	第72図	SI02出土遺物	(39)
第28図	SK04	(16)	第73図	SI03	(40)
第29図	SK04出土遺物	(16)	第74図	SI03出土遺物(1)	(41)
第30図	SK05・06	(16)	第75図	SI03出土遺物(2)	(42)
第31図	SK05出土遺物	(17)	第76図	SI04	(43)
第32図	SK06出土遺物	(17)	第77図	SI04出土遺物	(44)
第33図	SK07・08	(17)	第78図	SI05・06・07・17	(45)
第34図	SK09・10・11	(18)	第79図	SI05出土遺物	(46)
第35図	SK09出土遺物	(18)	第80図	SI07出土遺物	(47)
第36図	SK10出土遺物	(19)	第81図	SI10・同出土遺物	(48)
第37図	SK11出土遺物	(19)	第82図	SI12・SK35・38・75・86	(48)
第38図	SK12	(20)	第83図	SI12出土遺物	(49)
第39図	SK12出土遺物	(20)	第84図	SI13・15・SK66・67・68・71・72・73	(49)
第40図	SK13・15	(20)	第85図	SI14	(50)
第41図	SK13出土遺物	(21)	第86図	SI14出土遺物	(50)
第42図	SK15出土遺物	(21)	第87図	SI15出土遺物	(51)
第43図	SK16	(21)	第88図	SI16	(51)
第44図	SK18	(22)	第89図	SI16出土遺物	(52)
第45図	SK19	(22)	第90図	SI17出土遺物	(53)
第46図	SK20	(22)	第91図	SK02出土遺物	(54)
第47図	SK20出土遺物	(22)	第92図	SK03出土遺物	(55)
第48図	SK21出土遺物	(23)	第93図	SK06出土遺物	(55)
第49図	SK22出土遺物	(24)	第94図	SK07出土遺物	(55)
第50図	SK23	(24)	第95図	SK11・12	(56)
第51図	SK25	(25)	第96図	SK11出土遺物	(56)
第52図	SK25出土遺物(1)	(25)	第97図	SK12出土遺物	(57)
第53図	SK25出土遺物(2)	(26)	第98図	SK14	(57)
第54図	SK26	(26)	第99図	SK14出土遺物	(57)
第55図	SD01	(26)	第100図	SK17	(58)
第56図	SK26出土遺物	(27)	第101図	SK17出土遺物	(58)
第57図	1区ビットおよび遺構外出土遺物	(29)	第102図	SK09・18・19	(58)
2区			第103図	SK18出土遺物	(58)
第58図	2区全体区	(30)	第104図	SK19出土遺物	(59)
第59図	2区標準堆積土層	(30)	第105図	SK21・22	(59)
第60図	SI01	(30)	第106図	SK23	(60)
第61図	SI01出土遺物	(31)	第107図	SK24	(60)



第108 図	SK24 出土遺物	(60)	第155 図	SK66 出土遺物	(84)
第109 図	SK25・58	(61)	第156 図	SK68 出土遺物	(86)
第110 図	SK26	(61)	第157 図	SI18・SK69・70	(86)
第111 図	SK26 出土遺物 (1)	(62)	第158 図	SK69・70 出土遺物	(87)
第112 図	SK26 出土遺物 (2)	(63)	第159 図	SK74 出土遺物	(89)
第113 図	SK30	(64)	第160 図	SK78	(90)
第114 図	SK31・同出土遺物	(64)	第161 図	SK78 出土遺物 (1)	(90)
第115 図	SK34・76	(65)	第162 図	SK78 出土遺物 (2)	(91)
第116 図	SI10・SK34・76 出土遺物 (1)	(66)	第163 図	SK80	(92)
第117 図	SI10・SK34・76 出土遺物 (2)	(67)	第164 図	SK80 出土遺物	(92)
第118 図	SK35	(67)	第165 図	SK81	(92)
第119 図	SK35 出土遺物	(68)	第166 図	SK82・83	(93)
第120 図	SK36・37・74・77・79	(68)	第167 図	SK82 出土遺物	(93)
第121 図	SK37・79 出土遺物	(69)	第168 図	SK84	(93)
第122 図	SK39・41	(69)	第169 図	SK85・同出土遺物	(93)
第123 図	SK39 出土遺物	(70)	第170 図	SK86 出土遺物	(94)
第124 図	SK40・45	(70)	第171 図	SK87	(94)
第125 図	SK40 出土遺物	(70)	第172 図	SX01	(95)
第126 図	SK42	(71)	第173 図	SX01 出土遺物	(96)
第127 図	SK44	(71)	第174 図	3区ビット出土遺物	(97)
第128 図	SK44 出土遺物	(71)	第175 図	SD01	(98)
第129 図	SK45 出土遺物	(72)	第176 図	SD01 出土遺物	(98)
第130 図	SK47	(73)	第177 図	3区遺構外出土遺物	(100)
第131 図	SK47 出土遺物	(73)	4区		
第132 図	SK48	(73)	第178 図	4・7区全体図	(101)
第133 図	SK48 出土遺物	(74)	第179 図	4・7区標準堆積土層	(101)
第134 図	SK50	(75)	第180 図	SI01・同出土遺物	(102)
第135 図	SK50 出土遺物	(75)	第181 図	SK01	(103)
第136 図	SK53	(75)	第182 図	SK02	(103)
第137 図	SK54	(75)	第183 図	SD01	(103)
第138 図	SK55	(76)	第184 図	SD01 出土遺物	(103)
第139 図	SK56	(76)	第185 図	4区遺構外出土遺物	(104)
第140 図	SK56 出土遺物	(76)	7区		
第141 図	SK57	(76)	第186 図	SI01	(104)
第142 図	SK57 出土遺物	(77)	第187 図	SK01・02	(105)
第143 図	SK58 出土遺物	(78)	第188 図	SK03	(105)
第144 図	SK60	(78)	第189 図	SK04・05	(105)
第145 図	SK60 出土遺物	(78)	第190 図	SK06	(105)
第146 図	SK61・62	(79)	第191 図	SK07	(105)
第147 図	SK61 出土遺物	(79)	第192 図	7区ビット出土遺物	(106)
第148 図	SK63	(80)	第193 図	7区遺構外出土遺物	(106)
第149 図	SK63 出土遺物	(80)	5区		
第150 図	SK64	(80)	第194 図	5区全体図	(107)
第151 図	SK64 出土遺物	(80)	第195 図	5区標準堆積土層	(107)
第152 図	SK65	(81)	第196 図	SI01 が	(107)
第153 図	SK65 出土遺物 (1)	(82)	第197 図	SI01	(108)
第154 図	SK65 出土遺物 (2)	(83)	第198 図	SI01 出土遺物	(108)

第199図	SI02	(108)	第231図	SK02	(121)
第200図	SI03	(109)	第232図	SK03・07	(122)
第201図	SI03 出土遺物	(109)	第233図	SK03 出土遺物	(122)
第202図	SI04	(110)	第234図	SK07 出土遺物	(122)
第203図	SB01・同出土遺物	(110)	第235図	SK03・07 出土遺物	(122)
第204図	SK01・同出土遺物	(111)	第236図	SK04	(123)
第205図	SK02・同出土遺物	(111)	第237図	SK04 出土遺物 (1)	(123)
第206図	SK03	(111)	第238図	SK04 出土遺物 (2)	(124)
第207図	SK04	(112)	第239図	SK04 出土遺物 (3)	(125)
第208図	SK05	(112)	第240図	SK05	(125)
第209図	SK06	(112)	第241図	SK05 出土遺物	(126)
第210図	SK06 出土遺物	(112)	第242図	SK06	(126)
第211図	SK07・同出土遺物	(113)	第243図	SK08	(126)
第212図	SK08	(113)	第244図	SK09	(126)
第213図	SK09	(113)	第245図	SK08・09 出土遺物	(127)
第214図	SK10	(113)	第246図	SK10	(127)
第215図	SK11	(113)	第247図	SK10 出土遺物	(127)
第216図	SK12・13	(114)	第248図	SK11	(128)
第217図	SK14	(114)	第249図	SK11 出土遺物	(128)
第218図	SK14 出土遺物	(114)	第250図	SF01	(128)
第219図	SF01	(115)	第251図	SF01 (1区との交差部分)	(129)
第220図	SF01 出土遺物	(116)	第252図	SF01 出土遺物 (1)	(129)
第221図	5区ビット出土遺物	(117)	第253図	SF01 出土遺物 (2)	(130)
6区			第254図	SD02	(130)
第222図	6区全体図	(117)	第255図	SD02 出土遺物	(131)
第223図	SD01	(117)	第256図	8区ビット出土遺物	(131)
第224図	6区遺構外出土遺物	(118)	第257図	台形土器集成図	(132)
8区			第258図	琥珀製大珠切断技法図	(137)
第225図	8区全体図	(119)	第259図	出土土偶集成図	(138)
第226図	8区標準堆積土層	(119)			
第227図	SI02	(119)			
第228図	SI02 出土遺物	(120)			
第229図	SK01	(120)			
第230図	SK01 出土遺物	(121)			

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	(4)	第11表	3区SD01 古代遺物観察表	(99)
第2表	1区ビット計測表	(28)	第12表	3区遺構外古代遺物観察表	(99)
第3表	1区遺構外古代遺物観察表	(29)	第13表	4区SI01 古代遺物観察表	(102)
第4表	2区SI01 古代遺物観察表 (1)	(31)	第14表	4区SD01 古代遺物観察表	(103)
第5表	2区SI01 古代遺物観察表 (2)	(32)	第15表	7区ビット計測表	(106)
第6表	3区SI01 古代遺物観察表	(37)	第16表	5区SI03・05 古代遺物観察表	(109)
第7表	3区SI02 古代遺物観察表	(39)	第17表	5区SB01 古代遺物観察表	(110)
第8表	3区SI03 古代遺物観察表	(42)	第18表	5区SK06 古代遺物観察表	(112)
第9表	3区SX01 古代遺物観察表	(96)	第19表	5区SF01 古代遺物観察表	(116)
第10表	3区ビット計測表	(97)	第20表	5区ビット計測表	(117)

第21表	6区遺構外古代遺物観察表	(118)
第22表	8区SI02古代遺物観察表	(120)
第23表	8区SF01古代遺物観察表	(130)
第24表	8区SF01中世遺物観察表	(130)
第25表	連弧文様式土器共伴関係一覧表(1)	(134)

第26表	連弧文様式土器共伴関係一覧表(2)	(135)
第27表	連弧文様式土器共伴関係一覧表(3)	(136)
第28表	連弧文様式土器共伴関係一覧表(4)	(137)
第29表	8区SK01出土貝組成表	(141)
第30表	8区SK01出土貝一覧表	(141)

## 写真図版目次

### 図版1(1区)

- 1 東側遺構確認1(東から)
- 2 東側遺構確認2(西から)

### 図版2(1区)

- 1 東側調査終了状況全景
- 2 中央部調査終了状況全景

### 図版3(1区)

- 1 標準堆積土層東側
- 2 標準堆積土層西側
- 3 SI01完掘全景
- 4 同 炉セクション
- 5 同 炉完掘

### 図版4(1区)

- 1 SI03完掘全景
- 2 SI04セクション

### 図版5(1区)

- 1 同 P01セクション
- 2 同 P02セクション
- 3 同 P03セクション
- 4 同 P04セクション
- 5 同 完掘全景

### 図版6(1区)

- 1 SI05完掘全景
- 2 同 炉セクション
- 3 SI06炉セクション
- 4 同 炉完掘
- 5 SI07内重複SK26遺物出土状況

### 図版7(1区)

- 1 SI07完掘全景
- 2 SI08完掘全景

### 図版8(1区)

- 1 SI08セクション
- 2 同 北側セクション
- 3 同 P1セクション
- 4 同 炉セクション
- 5 SI09完掘全景

### 図版9(1区)

- 1 SK01セクション
- 2 同 完掘
- 3 SK02セクション
- 4 同 完掘

### 5 SK03セクション

### 6 同 完掘

### 7 SK04セクション

### 8 同 完掘

### 図版10(1区)

### 1 SK05完掘

### 2 SK05・06完掘

### 3 SK06完掘

### 4 SK07・08セクション

### 5 SK07完掘

### 6 SK08完掘

### 7 SK09セクション

### 9 SK09完掘

### 図版11(1区)

### 1 SK10完掘

### 2 SK11遺物出土状況

### 3 同 近景

### 4 同 完掘

### 5 SK12セクション

### 6 同 完掘

### 7 SK13セクション

### 8 SK13完掘

### 図版12(1区)

### 1 SK14セクション

### 2 同 完掘

### 3 SK15完掘

### 4 SK16セクション

### 5 同 完掘

### 6 SK18セクション

### 7 SK19完掘

### 8 SK20ビットセクション

### 図版13(1区)

### 1 SK21セクション

### 2 同 完掘

### 3 SK22セクション

### 4 同 遺物出土状況

### 5 SK23完掘

### 6 SK24完掘

### 7 SK25セクション

### 8 同 遺物出土状況

図版 14 (1 区)

- 1 SK25 近景
- 2 同 完掘
- 3 SK26 遺物出土状況
- 4 同 完掘

図版 15 (1 区)

- 1 P01 セクション
- 2 P02 セクション
- 3 P03 セクション
- 4 P04 セクション
- 5 P05 セクション
- 6 P06 セクション
- 7 P07 セクション
- 8 P08 セクション
- 9 P09 セクション
- 10 P10 セクション
- 11 P11 セクション
- 12 P12 セクション

図版 16 (1 区)

- 1 P13 セクション
- 2 P14 セクション
- 3 P15 セクション
- 4 P16・17 セクション
- 5 P19 セクション
- 6 P20A セクション
- 7 P20B セクション
- 8 P20C セクション
- 9 P21A セクション
- 10 P21B セクション
- 11 P22A セクション
- 12 P22B セクション

図版 17 (1 区)

- 1 P23 セクション
- 2 P25 セクション
- 3 P26 セクション
- 4 P28 セクション
- 5 P29 セクション
- 6 P30 セクション
- 7 P32 セクション
- 8 SD01A セクション
- 9 SD01B セクション
- 10 SD01 完掘
- 11 SF01B セクション
- 12 同 C セクション

図版 18 (2 区)

- 1 表土除去状況
- 2 標準堆積土層
- 3 確認状況 1 (北から)
- 4 確認状況 2 (南から)

5 調査終了状況 (南から)

図版 19 (2 区)

- 1 SI01 全景
- 2 同 セクション
- 3 同 遺物出土状況全景
- 4 同 遺物出土状況 1
- 5 同 遺物出土状況 2

図版 20 (2 区)

- 1 SI01 P01 セクション
- 2 同 P02 セクション
- 3 SK01 遺物出土状況
- 4 同 完掘
- 5 SK02 セクション
- 6 同 完掘
- 7 SD01 セクション
- 8 同 完掘

図版 21 (3 区)

- 1 遺構確認状況 (東から)
- 2 標準堆積土層 (北から)
- 3 全景 1 (西から)
- 4 全景 2
- 5 東側端部全景

図版 22 (3 区)

- 1 調査終了状況全景 (東から)
- 2 遺構確認状況 (中央から東)

図版 23 (3 区)

- 1 調査終了状況全景 (西から)
- 2 完掘全景 (中央から東)

図版 24 (3 区)

- 1 SI01 完掘全景
- 2 同 遺物出土状況
- 3 同 炉セクション
- 4 同 完掘
- 5 同 P01 セクション

図版 25 (3 区)

- 1 SI02 完掘全景
- 2 同 東セクション
- 3 同 南北セクション
- 4 同 遺物出土状況
- 5 同 炉完掘

図版 26 (3 区)

- 1 SI02 遺物出土状況近景 1
- 2 同 遺物出土状況近景 2
- 3 同 遺物出土状況近景 3
- 4 同 遺物出土状況近景 4
- 5 SI03 完掘全景

図版 27 (3 区)

- 1 SI03 炉セクション (南から)
- 2 同 P05 セクション

- 3 SI04 全景
- 4 同 遺物出土状況近景
- 5 同 セクション

図版 28 (3区)

- 1 SI07 完掘全景 (西から)
- 2 同 セクション
- 3 同 遺物出土状況近景
- 4 同 炉 (西から)
- 5 同 炉 (南から)

図版 29 (3区)

- 1 SI05・06・17 完掘全景
- 2 SI10 完掘全景

図版 30 (3区)

- 1 SI10 セクション
- 2 同 完掘
- 3 SI12 完掘全景
- 4 同 炉 (北から)
- 5 SI13・15 セクション

図版 31 (3区)

- 1 SI13 完掘全景
- 2 SI14 完掘全景

図版 32 (3区)

- 1 SI16 完掘全景
- 2 SI14・15 セクション
- 3 SI17 炉 (東から)
- 4 同 遺物出土状況 1 (西から)
- 5 同 遺物出土状況 2 (北から)

図版 33 (3区)

- 1 SX01 完掘
- 2 同 セクション (北から)
- 3 同 セクション (西から)
- 4 SK01 セクション (北から)
- 5 SK02 セクション (北から)
- 6 SK03 完掘 (南から)
- 7 SK05 セクション完掘
- 8 SK05・57 完掘

図版 34 (3区)

- 1 SK06 遺物出土状況
- 2 同 遺物出土状況近景
- 3 SK07 セクション (南から)
- 4 同 完掘 (南から)
- 5 SK08 完掘 (南から)
- 6 SK10 完掘 (南から)
- 7 SK11 セクション
- 8 同 完掘 (南から)

図版 35 (3区)

- 1 SK12 完掘 (南から)
- 2 SK14 完掘 (南から)
- 3 同 遺物出土状況 (南から)

- 4 SK18・19 完掘 (南から)
- 5 SK18・79 完掘 (西から)
- 6 SK19 セクション (南から)
- 7 同 完掘 (南から)
- 8 SK21・22 完掘 (西から)

図版 36 (3区)

- 1 SK21 完掘 (南から)
- 2 SK23 セクション (東から)
- 3 SK24 完掘 (北から)
- 4 SK25 完掘 (東から)
- 5 SK26 セクション (北から)
- 6 同 完掘 (南から)
- 7 SK30 セクション (北から)
- 8 SK31 完掘 (東から)

図版 37 (3区)

- 1 SK34 完掘 (北から)
- 2 SK36 完掘 (南から)
- 3 SK37・79 完掘 (南から)
- 4 SK38 セクション・完掘 (北から)
- 5 SK39 完掘 (北から)
- 6 SK40・45 完掘 (北から)
- 7 SK40 遺物出土状況 (北から)
- 8 同 遺物出土状況近景 (北から)

図版 38 (3区)

- 1 SK41 完掘 (北から)
- 2 SK42 完掘 (西から)
- 3 SK44 セクション (南から)
- 4 同 完掘 (南から)
- 5 SK47 完掘 (北から)
- 6 SK48 セクション (西から)
- 7 同 遺物出土状況 (東から)
- 8 同 完掘 (西から)

図版 39 (3区)

- 1 SK50 セクション (北から)
- 2 同 完掘 (北から)
- 3 SK51 セクション (南から)
- 4 同 完掘 (西から)
- 5 SK53 セクション (北から)
- 6 SK54 セクション (南から)
- 7 同 完掘 (北から)
- 8 SK55 セクション (北から)

図版 40 (3区)

- 1 SK55 完掘 (南から)
- 2 SK57 完掘 (南から)
- 3 SK58 完掘 (西から)
- 4 同 完掘 (南から)
- 5 SK60 セクション (北から)
- 6 同 完掘 (東から)
- 7 SK61 セクション (北から)

8 同 完掘 (西から)

図版 41 (3区)

- 1 SK62 セクション (西から)
- 2 同 完掘 (南から)
- 3 SK63 セクション (南から)
- 4 同 完掘 (東から)
- 5 SK64 セクション (南から)
- 6 SK65 完掘 (南から)
- 7 SK66 遺物出土状況 (東から)
- 8 同 完掘 (南から)

図版 42 (3区)

- 1 SK67 セクション (北から)
- 2 同 完掘 (西から)
- 3 SK68 遺物出土状況 (北から)
- 4 同 完掘 (西から)
- 5 同 遺物近景 1 (北から)
- 6 同 遺物近景 2 (北から)
- 7 SK69 完掘 (北から)
- 8 SK70 完掘 (北から)

図版 43 (3区)

- 1 SK71 完掘 (西から)
- 2 SK73 セクション・完掘 (北から)
- 3 SK74 完掘 (西から)
- 4 SK75 完掘 (北から)
- 5 SK77 完掘 (西から)
- 6 SK78 セクション (北から)
- 7 同 遺物出土状況 (北から)
- 8 同 遺物出土状況近景 (北から)

図版 44 (3区)

- 1 SK78 完掘 (南から)
- 2 SK80・81 完掘 (西から)
- 3 SK81 遺物出土状況 (北から)
- 4 SK84 完掘 (西から)
- 5 SK85 完掘 (東から)
- 6 SK87 完掘 (東から)
- 7 SK76・S110 セクション・完掘 (南から)
- 8 SD01A セクション (西から)

図版 45 (3区)

- 1 SD01B セクション (東から)
- 2 同 完掘 (北から)
- 3 A4・B4 グリッド柱穴群 1 (東から)
- 4 同 グリッド柱穴群 2 (東から)
- 5 P01K 完掘 (南から)
- 6 P13 遺物出土状況 (北から)
- 7 表土掘削状況 1
- 8 表土掘削状況 2

図版 46 (4区)

- 1 確認全景 1 (西から)
- 2 確認全景 2 (東から)

3 標準堆積土層

4 SI01 セクション (北から)

5 同 完掘全景 (西から)

図版 47 (4区)

- 1 SI01 セクション (西から)
- 2 同 炉セクション (南から)
- 3 同 完掘 (西から)
- 4 SK01 完掘
- 5 SK02 セクション・完掘 (北から)
- 6 SD01 セクション 1 (東から)
- 7 同 セクション 2 (東から)
- 8 同 セクション 3 (西から)

図版 48 (4区)

- 1 調査終了状況全景 1 (西から)
- 2 調査終了状況全景 2 (東から)

図版 49 (5区)

- 1 遺構確認状況 1 (東から)
- 2 遺構確認状況 2 (西から)

図版 50 (5区)

- 1 SI01 完掘全景 (北から)
- 2 同 炉
- 3 同 炉完掘
- 4 SI03 セクション (東から)
- 5 同 確認状況 (東から)

図版 51 (5区)

- 1 SI02 完掘全景 (東から)
- 2 SI03 完掘全景 (東から)

図版 52 (5区)

- 1 SI03・05 遺物出土状況 (東から)
- 2 SI04 セクション (東から)
- 3 同 完掘全景
- 4 SK03 (井戸) 骸骨出土状況 (西から)
- 5 同 完掘 (東から)

図版 53 (5区)

- 1 SK03 下層セクション (東から)
- 2 SK04 セクション (西から)
- 3 同 遺物出土状況
- 4 SK05 セクション (東から)
- 5 SK06 セクション (東から)
- 6 SK08 セクション (東から)
- 7 SK09 セクション (西から)
- 8 SK10 セクション (西から)

図版 54 (5区)

- 1 SF01 硬化面確認状況 (西から)
- 2 同 セクション 1 (東から)
- 3 同 セクション 2 (東から)
- 4 同 セクション 3 (北から)
- 5 同 遺物出土状況

- 図版 55 (5区)  
1 SF01 硬化面確認状況 (東から)  
2 同 完掘状況 (西から)

- 図版 56 (5区)  
1 SF01 掘り方完掘状況 (西から)  
2 同 セクション

- 図版 57 (5区)  
1 P01 完掘  
2 P02 完掘  
3 P03 完掘  
4 P05 完掘  
5 P06 セクション (東から)  
6 P07・08 完掘  
7 P09 完掘  
8 P10 完掘  
9 P11・12 完掘  
10 P13 完掘

- 図版 58 (5区)  
1 P14 完掘  
2 P15 完掘  
3 P16 完掘  
4 P17 完掘  
5 P18 完掘  
6 P19 完掘  
7 P20 完掘  
8 P21 完掘  
9 P22 完掘  
10 P23 完掘  
11 P24 完掘  
12 標準堆積土層

- 図版 59 (5区)  
1 完掘全景1 (東から)  
2 同 完掘全景2 (西から)

- 図版 60 (6区)  
1 確認状況全景 (東から)  
2 標準堆積土層

- 図版 61 (6区)  
1 調査終了状況全景 (東から)  
2 SD01 完掘 (東から)  
3 同 セクション1 (北から)  
4 同 セクション2 (南から)  
5 表土掘削状況 (西から)

- 図版 62 (7区)  
1 確認状況全景1 (西から)  
2 確認状況全景2 (東から)

- 図版 63 (7区)  
1 確認状況全景3 (北から)  
2 確認状況全景4 (南から)  
3 SI01 完掘全景 (西から)

- 4 同 セクション1 (東から)  
5 同 セクション2 (北から)

図版 64 (7区)

- 1 SK01 完掘 (南から)  
2 同 セクション  
3 SK02 完掘 (南から)  
4 SK03 完掘 (南から)  
5 P04 完掘 (東から)  
6 P05 完掘 (東から)  
7 P24 完掘 (北から)  
8 P27・28 完掘 (東から)  
9 P29 完掘 (東から)  
10 P30 完掘 (東から)

図版 65 (7区)

- 1 P35・36 完掘 (東から)  
2 P37B 完掘 (東から)  
3 P37 完掘 (東から)  
4 P38 完掘 (南から)  
5 P39 完掘 (南から)  
6 P40 完掘 (南から)  
7 P40B 完掘 (南から)  
8 P41 完掘 (北から)  
9 調査状況

図版 66 (8区)

- 1 確認状況全景1 (北から)  
2 確認状況全景2 (南から)

図版 67 (8区)

- 1 完掘状況十字部分1 (西から)  
2 完掘状況十字部分2 (南から)  
3 完掘状況十字部分3 (北から)  
4 完掘状況十字部分4 (南から)  
5 標準堆積土層

図版 68 (8区)

- 1 SI02 完掘全景 (南から)  
2 同 セクション (東から)  
3 同 炉  
4 SK01 確認状況 (西から)  
5 同 遺物出土状況 (南から)

図版 69 (8区)

- 1 SK01 完掘 (西から)  
2 SK02 セクション (北から)  
3 同 完掘 (西から)  
4 SK03 セクション (南から)  
5 SK03・07 完掘  
6 SK04 セクション (南から)  
7 同 遺物出土状況近景  
8 同 完掘

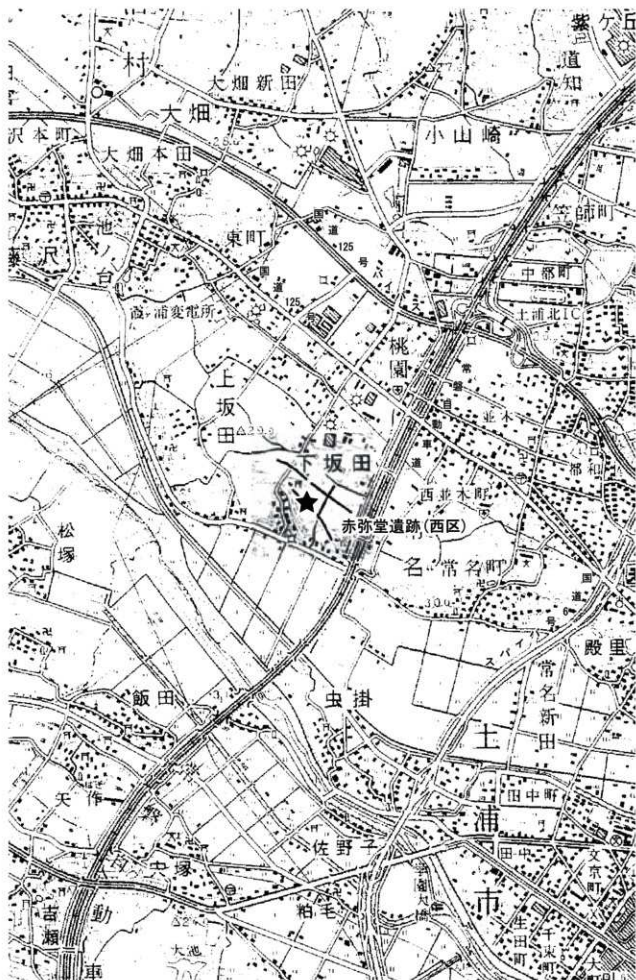
図版 70 (8区)

- 1 SK05 セクション (南から)

2 同 完掘 (南から)	SK20 出土遺物
3 SK06・P06 セクション (北から)	SK21 出土遺物
4 同 完掘 (南から)	図版 77 (1区)
5 SK07 完掘 (東から)	SK22 出土遺物
6 SK08 セクション (東から)	SK25 出土遺物
7 同 完掘 (東から)	SK26 出土遺物 (1)
8 SK09 セクション (西から)	図版 78 (1区)
図版 71 (8区)	SK26 出土遺物 (2)
1 SK09 完掘 (東から)	1区ピットおよび遺構外出土遺物
2 SK10 遺物出土状況 (東から)	図版 79 (2区)
3 同 全景	SI01 出土遺物
4 SK11 完掘 (西から)	SK01 出土遺物 (1)
5 P01 完掘 (東から)	図版 80 (2・3区)
6 P02 完掘 (東から)	SK01 出土遺物 (2)
7 P03 完掘 (東から)	2区遺構外出土遺物
8 P08・09 完掘 (北から)	SI01 出土遺物
9 P11 完掘 (東から)	図版 81 (3区)
10 P12 完掘 (東から)	SI02 出土遺物
図版 72 (8区)	SI03 出土遺物 (1)
1 P13 完掘 (西から)	図版 82 (3区)
2 P14 完掘 (南から)	SI03 出土遺物 (2)
3 SD02 セクション1 (西から)	SI04 出土遺物
4 同 セクション2 (東から)	SI05 出土遺物
5 同 完掘全景 (南から)	図版 83 (3区)
図版 73 (8区)	SI07 出土遺物
1 SF01 完掘全景 (東から)	SI10 出土遺物
2 同 セクション1 (南から)	SI12 出土遺物
3 同 セクション2 (北から)	SI14 出土遺物
4 同 硬化面 (南から)	SI15 出土遺物
5 同 完掘 (南から)	図版 84 (3区)
図版 74 (1区)	SI16 出土遺物
SI01 出土遺物	SI17 出土遺物
SI02 出土遺物	図版 85 (3区)
SI04 出土遺物	SK02 出土遺物
SI05 出土遺物	SK03 出土遺物
SI07 出土遺物	SK06 出土遺物
図版 75 (1区)	SK07 出土遺物
SI08 出土遺物	SK11 出土遺物
SK03 出土遺物	SK12 出土遺物
SK04 出土遺物	SK14 出土遺物
SK05 出土遺物	図版 86 (3区)
SK06 出土遺物	SK17 出土遺物
SK09 出土遺物	SK18 出土遺物
SK10 出土遺物	SK19 出土遺物
SK11 出土遺物	SK24 出土遺物
図版 76 (1区)	SK26 出土遺物 (1)
SK12 出土遺物	図版 87 (3区)
SK13 出土遺物	SK26 出土遺物 (2)
SK15 出土遺物	SK31 出土遺物



- SK34・76 出土遺物 (1)  
図版 88 (3区)  
SK34・76 出土遺物 (2)  
図版 89 (3区)  
SK34・76 出土遺物 (3)  
SK35 出土遺物  
SK37・79 出土遺物  
SK39 出土遺物  
図版 90 (3区)  
SK40 出土遺物  
SK44 出土遺物  
SK45 出土遺物  
SK47 出土遺物  
SK48 出土遺物 (1)  
図版 91 (3区)  
SK48 出土遺物 (2)  
SK50 出土遺物  
SK56 出土遺物  
SK57 出土遺物  
図版 92 (3区)  
SK58 出土遺物  
SK60 出土遺物  
SK61 出土遺物  
SK63 出土遺物  
SK64 出土遺物  
SK65 出土遺物 (1)  
図版 93 (3区)  
SK65 出土遺物 (2)  
図版 94 (3区)  
SK66 出土遺物  
図版 95 (3区)  
SK68 出土遺物  
SK69・70 出土遺物 (1)  
図版 96 (3区)  
SK69・70 出土遺物 (2)  
SK74 出土遺物  
SK76 出土遺物  
図版 97 (3区)  
SK78 出土遺物  
図版 98 (3区)  
SK80 出土遺物  
SK82 出土遺物  
SK85 出土遺物  
SK86 出土遺物  
SX01 出土遺物 (1)  
図版 99 (3区)  
SX01 出土遺物 (2)  
3区ピット出土遺物  
SD01 出土遺物
- 3区遺構外出土遺物 (1)  
図版 100 (3区・4区)  
3区遺構外出土遺物 (2)  
SI01 出土遺物  
SD01 出土遺物  
4区遺構外出土遺物  
図版 101 (5区)  
SI01 出土遺物  
SI03 出土遺物  
SK01 出土遺物  
SK02 出土遺物  
SK06 出土遺物  
SK07 出土遺物  
SK14 出土遺物  
SB01 出土遺物  
5区ピット出土遺物  
SF01 出土遺物  
図版 102 (6・7・8区)  
SK01 出土遺物  
SK03 出土遺物  
7区ピット出土遺物  
7区遺構外出土遺物  
SI02 出土遺物  
SK01 出土遺物  
図版 103 (8区)  
SK03 出土遺物  
SK04 出土遺物 (1)  
図版 104 (8区)  
SK04 出土遺物 (2)  
SK05 出土遺物  
SK07 出土遺物  
SK07・03 出土遺物  
図版 105 (8区)  
SK08・09 出土遺物  
SK10 出土遺物  
SK11 出土遺物  
8区ピット出土遺物  
SD02 出土遺物  
SF01 出土遺物  
8区遺構外出土遺物  
図版 106 (8区)  
SK01 出土具



第1図 遺跡周辺地図 (S=12500分の1)

# 第1章 調査に至る経緯と調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

1995(平成7)年2月、新治村(当時)教育長宛に茨城県土浦土地改良事務所(現在の茨城県県南農林事務所)から、坂田地区において県営畑地帯総合土地改良事業を計画しており、その予定地内の埋蔵文化財の有無について照会が提出された。現地踏査を行ったところ、包蔵地、貝塚、古墳群の存在が確認され、試掘確認調査が必要である旨を回答した。2002(平成14)年8月、茨城県土浦土地改良事務所から、埋蔵文化財の有無と遺跡が存在した場合の取扱いについての照会が提出された。それを受け、同年11月に赤弥堂遺跡の北側について試掘・確認調査を行なった。結果、埋蔵文化財は確認されなかった。

2006(平成18)年、土浦市との合併後に計画が具体化し、6月に現地踏査、2007(平成19)年2月に赤弥堂遺跡の東側について、遺跡の範囲や密度、性格を把握するための確認調査を行った。翌2008(平成20)年3月には、赤弥堂遺跡の西側から事業区域西端の坂田峯の台古墳群にかけて試掘確認調査を行った。

試掘・確認調査の結果をもとに、茨城県土浦土地改良事務所、土浦市産業部耕地課と協議を行い、道路となる箇所について、記録保存のための発掘調査を行うことで合意した。

2008(平成20)年3月25日、茨城県知事と土浦市長とで覚書を締結し、同年7月、茨城県知事と土浦市長で協定書を締結した。

文化財保護法関連では、2008(平成20)年6月17日付けで茨城県土浦土地改良事務所長より遺跡の発掘届(文化財保護法第94条)が市教育委員会に提出され、6月27日付けで茨城県教育長宛に進達した。発掘調査は有限会社勾玉工房 Mogi が実施することとなり、埋蔵文化財発掘調査の届出(文保法第92条)を、2009(平成21)年9月8日付けで茨城県教育長宛に進達した。

## 第2節 調査の経緯

### 1 発掘調査

赤弥堂遺跡西地区は、農免道路建設予定地が対象地となっているため、狭長となり、さらに枝分かれした形状となる。調査の工程上、便宜的に1～8区の8区に分割設定し、1区東側から順次調査を進めることにした。

平成22年9月29日 器材搬入、テント・トイレの設置を行う。

10月5日 1区の表土掘削を開始。縄文時代・古墳時代の遺構を確認。

10月8日 調査開始。

10月19日 2・3区調査開始。表土掘削を行い、2区は古墳時代の竪穴住居跡、3区は縄文時代を主体とした遺構を検出し掘り下げを行う。

10月30日 1区調査終了。

10月31日 4区調査開始。古墳時代の竪穴住居跡と溝を主体とした遺構を検出し掘り下げを行う。

11月6日 2区調査終了。

11月10日 4区調査終了。

12月4日 6区調査開始。溝を検出する。

12月8日 5区調査開始。古墳時代の竪穴住居跡、中世の道路状遺構を主体とした遺構を検出し掘り下げを行う。3・6区調査終了。

12月22日 7区調査開始。表土排土を行い、土坑・ピットを主体とする遺構を検出し掘り下げを行う。

12月28日 5区調査終了。

- 平成23年 1月 7日 8区調査開始。表土排土を行い、土坑・ピットを主体とする遺構を検出し掘り下げを行う。
- 1月 22日 7・8区調査終了。
- 1月 31日 発掘器材・施設を撤収し、現地におけるすべての作業を終了する。

## 2 整理作業

- 平成22年 11月 1日 水洗い作業を開始する。平行して図面の整理、写真の整理を開始する。
- 11月 12日 水洗いが終了した遺物より、注記作業に取りかかる。
- 貝の洗浄を開始し、貝の洗浄が終了した分より任意サンプルを抽出し遺構別貝の計測作業にとりかかる。
- 12月 1日 出土遺物の分類作業を開始する。遺物の選別と平行し、台帳を作成する。
- 12月 13日 遺物接合・実測・探拓を開始する。遺物分類に平行して、遺物原稿の執筆を開始する。
- 平成23年 1月 4日 遺構図面修正を開始する。平行して遺物のデジタルトレースを開始する。
- 2月 22日 報告書の編集を完了し、入稿する。
- 2月 26日 初稿原稿の校正を実施する。
- 3月 1日 2稿原稿校正を行う。
- 3月 10日 報告書刊行。教育委員会に納品する。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境（第1図）

赤弥堂遺跡は、土浦市下坂田 1,173 外に所在する。これらの遺跡の所在する土浦市は茨城県南地区のほぼ中央に位置し、北部には筑波山塊から南東に伸びる新治台地、中央部は古鬼怒川により形成された板川低地（現在の板川流域）、東部には霞ヶ浦の土浦入り、南部は筑波稲敷台地から成り立っている。周辺市町村としては市域の北部は石岡市と接し、北部から東部にかけてかすみがうら市と接する。西部はつくば市、南部は牛久市や稲敷郡阿見町と接している。

今回調査が実施された赤弥堂遺跡は、板川北岸の標高 26～29 m の新治台地上の縁辺に位置している。これらの遺跡がある坂田地区は、およそ常磐自動車道の西側で国道 125 号の南側に広がる地域であり、市内でも有数な畑作地帯で、特に梨の栽培や花弁栽培が盛んに行われている。細かく見れば坂田地区の東側が下坂田、西側が上坂田となる。下坂田の集落は台地下に集まり、上坂田の集落はおよそ台地上にまとまっている。

### 第2節 歴史的環境

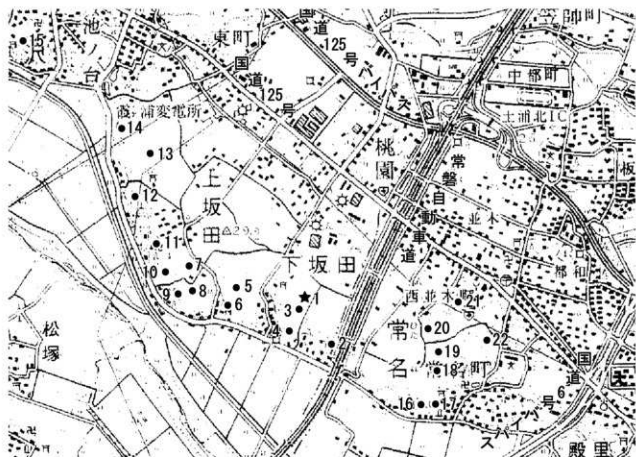
以下は、赤弥堂遺跡の周辺の遺跡で、試掘確認調査を含め調査された遺跡を中心に取り上げ、時代順にその概要を述べてみたい。

旧石器時代 この時代の遺構が明確な遺跡は、山川古墳群（18）の第2次調査や神明遺跡（19）の第4次調査を除いて今のところない。特に前者では層位の異なる石器集中地点を3ヶ所確認した。これらの内、最も下層の石器集中地点からは台形様石器や楔形石器が出土し、周囲からは炉跡も確認された。同炉跡出土炭化物の年代測定を実施したところ、今から約3万2千年前のものであると測定された。市内でも最も古い石器集中地点の一例といえ、炉跡の確認と関連して興味深い事例といえる。

縄文時代 この時代の遺跡としては、赤弥堂遺跡（1）、馬場先貝塚（3）、中台遺跡・中台貝塚（5）、下坂田壙台遺跡（9）、上坂田寺裏貝塚（11）、上坂田貝塚（14）、神明遺跡（19）がある。中台遺跡・中台貝塚や上坂田貝塚は、筑波大学により踏査や確認調査等が実施された。前者では地点貝塚が環状に巡る様子が指摘され、ヤマトシジミを主体とする後期（加曽利B式期）の貝層が確認された。後者ではハイガイを主体とする前期（関山式期）の住居跡内貝層が調査された。神明遺跡では数次にわたる調査で、中期（加曽利E式期）の集落跡の存在が明らかになっている。同遺跡では中期（加曽利E式期）の土坑からサルボウやハマグリを主体とする地点貝塚が確認された。馬場先貝塚、上坂田寺裏貝塚についても、ハイガイを主体とする前期（関山式期）の地点貝塚とされ、坂田地区の台地上に前期の地点貝塚が広く点在する様子が理解できる。このほか、坂田地区における集落遺跡の展開状況について、本事業に伴う平成18・19年度の試掘確認調査や平成20年度の赤弥堂遺跡東・中央地区の発掘調査によりその輪郭が明らかにされつつある。それは、前期の地点貝塚の点在以外に、中期の集落跡が濃密に広く展開することが指摘できる。また、中台遺跡・中台貝塚では中期から後・晩期に及ぶ地点貝塚を伴う集落跡が広く展開するといえる。

弥生時代 この時代の遺跡としては、山川古墳群（18）の第3次調査で住居跡2軒調査されている。本事業の試掘確認調査の結果では、赤弥堂遺跡（1）の西側や下坂田壙台遺跡（9）で僅かながら弥生土器片が採集されているのみである。

古墳時代 この時代の遺跡は多く、特に古墳や古墳群の存在が特徴的であり、現状でも台地の縁辺に墳丘の残る古墳が比較的残り、古墳群を形成している。坂田地区には、石橋古墳（2）、釈迦久保古墳群（4）、坂田台山古墳群（6）、武者塚古墳群（7）、坂田壙台古墳群（9）、坂田立野古墳群（12）、塚原古墳群（13）があり、常名地区には常名天神山古墳（17）、過去に灌漑した瓢箪塚古墳（16）、山川古墳群（18）、北西原古墳群（20）が存在する。石橋古墳



第2図 周辺の遺跡 (S=12500分の1)

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時代						備考
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	
1	赤弥堂遺跡 (西地区)		○		○		○	H14・18・19年度試掘確認調査、本報告書
2	石橋古墳				○			
3	馬場先貝塚		○					H18年度試掘確認調査、旧下坂田鹿島前貝塚
4	釈迦久保古墳群				○			
5	中台遺跡・中台貝塚		○				○	H2年調査、H19年度試掘確認調査、旧下坂田貝塚
6	坂田台山古墳群				○			H19年度試掘確認調査
7	武者塚古墳群				○			S58年調査、市指定史跡
8	下坂田塙台遺跡				○	○		H19年度試掘確認調査
9	坂田塙台古墳群				○			H19年度試掘確認調査
10	峯台館跡						○	
11	上坂田寺裏貝塚		○					
12	坂田立野古墳群				○			
13	塚原古墳群				○			
14	上坂田貝塚		○					S56～57年調査、旧上坂田北部貝塚
15	藤沢城跡						○	
16	瓢箪塚古墳				○			埋滅
17	常名天神山古墳				○			H2年測量調査、市指定史跡
18	山川古墳群	○			○		○	H7・15年調査
19	神明遺跡	○	○				○	H9・13～15年調査
20	北西原遺跡・北西原古墳群				○			H5～7・14年調査
21	西谷津遺跡				○	○		H14年調査
22	弁才天遺跡				○	○		H8年調査、埋滅

に近接する今回の赤赤堂遺跡東地区の調査でも墳丘の削平された古墳が検出され、本来は古墳群として存在するものといえる。坂田台古墳群は3基の古墳からなり、第1号墳は昭和39年に國學院大學と土浦第二高等学校により発掘調査が実施された。武者塚古墳群は2基の古墳からなり、この内の武者塚古墳は昭和58年に筑波大学によって発掘調査が実施され、特異な形態の石室を持つ終末期の古墳であることが判明した。出土品には銀製帯状金具や飾太刀、そしてみづらも発見され、現在県指定考古資料となっている。坂田台古墳群は合計13基の古墳で構成され、第2号墳は通称「武具八幡古墳」とも呼ばれ、安政元年に武具類が出土し、その遺物と状況を記した古文書が現在も地元に残されている。第11号墳は本古墳群内最大のもので、全長およそ30mを測る前方後円墳であり、平成20年に筑波大学によって測量調査がなされた。このほかにも、本事業に伴う試掘確認調査で墳丘が削平された古墳が多数確認されている。常名地区の常名天神山古墳は全長90mの前方後円墳で、5世紀前後の古墳と想定され、現在市指定史跡となる。その北側に広がる山川古墳群では3次にわたる調査で、33基もの古墳が確認され、前期から終末期の古墳が検出された。その中でも20基を超す大小様々な前期の方墳群の存在は特筆される。そして、同一台地上のより北側には北西原古墳群が存在し、終末期の方墳4基で構成される。

この時代の集落跡としては、赤赤堂遺跡(1)、中台遺跡(5)、神明遺跡(19)、北西原遺跡(20)、西谷津遺跡(21)、弁才天遺跡(22)で確認されている。特に北西原遺跡を中心にその周辺の神明遺跡では数次にわたる調査で、100軒以上もの前期の竪穴住居跡が検出された。西谷津遺跡や弁才天遺跡でも同時代の集落跡が検出され、前期や後期の竪穴住居跡が目立って確認されている。

奈良・平安時代 この時代の遺跡としては、赤赤堂遺跡(1)、下坂田墳台遺跡(9)、西谷津遺跡(21)、弁才天遺跡(22)で集落跡が確認されている。弁才天遺跡は8世紀前半から9世紀後半までの竪穴住居跡60軒以上で構成される集落跡であることが確認され、掘立柱建物跡もまとまって検出された。出土遺物としては、銅製品として皇朝十二銭の一つである和同開珎、杏葉、帯飾りなどがあり、鉄製品としては匙や鍋先などが見られる。緑釉陶器や灰釉陶器も出土し、「億万」などと書かれた墨書土器も出土している。

中世 この時代の遺跡としては、赤赤堂遺跡(1)、中台遺跡(5)、峯台館跡(10)、藤沢城跡(15)、山川古墳群(18)、神明遺跡(19)がある。赤赤堂遺跡や中台遺跡の試掘確認調査では性格不明の溝跡や大形の掘り込みが確認され、内耳土器などが出土している。峯台館跡は台地縁辺部を区切るように土塁が明瞭に巡り、その中に存在する坂田台古墳群第11号墳も土塁の一部として利用されている様子が窺える。坂田地区の台地北西端と谷を挟んだ対岸には藤沢城跡がある。その範囲は明瞭ではないが、現在の藤沢集落の多くを含むものと思われ、その中には一部土塁や堀跡が残る。常名地区では山川古墳群の第2・3次調査や神明遺跡の第1・3・4次調査の成果で、東西長125mで南北長103mの方形の溝で囲まれた方形館跡と考えられる遺構が確認されている。方形の区画溝内には掘立柱建物跡、柱穴群、井戸跡、竪穴状遺構などが検出され、遺物は少ないものの鎌倉時代の土師質土器小皿や甕系窯系青磁の面花文碗や常滑産陶器片、銭貨が出土している。

#### 【参考文献】

- 増田精一 編 1981『筑波古代地域史の研究—昭和54～56年度文部省特定研究費による調査研究概要—』筑波大学  
新治村教育委員会 1986『図説 新治村史』  
新治村教育委員会 1986『武者塚古墳』  
前田 南 編 1991『古渡・浦清』沿岸貝塚の研究—昭和63年度～平成2年度文部省特定研究経費による調査研究概要—』筑波大学  
土浦市教育委員会 1998『神明遺跡(第1次・第2次調査)—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集—』  
茨城県教育委員会 2001『茨城県遺跡地区』  
土浦市教育委員会 2002『常名台遺跡群確認調査 神明遺跡(第5次調査)—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集—』  
土浦市教育委員会 2003『山川古墳群確認調査 西谷津遺跡 北西原遺跡(第6次調査) 神明遺跡(第4次調査)—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集—』  
土浦市教育委員会 2004『山川古墳群(第2次調査)—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集—』  
土浦市教育委員会 2007『山川古墳群(第3次調査)—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集—』  
土浦市教育委員会 2006『弁才天遺跡 北西原遺跡(第5次調査)—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集—』  
大賀 健ほか 2009『赤赤堂遺跡(東地区)』土浦市教育委員会・株式会社勾玉工房Mog I  
大賀 健ほか 2010『赤赤堂遺跡(中央地区)』土浦市教育委員会・株式会社勾玉工房Mog I

## 第3章 調査の方法と標準堆積土層

### 第1節 調査の方法

本遺跡は赤弥堂遺跡の西側部分に当たるために、赤弥堂遺跡(西地区)と呼称した。平成20年より赤弥堂(東地区)・赤弥堂(中央地区)の発掘調査が行われ、その報告書は平成22年3月に刊行が完了している。平成21年度の発掘調査は平成21年度の調査とは年度が替わり、新規事業として実施したものである。しかしながら、遺跡は21年度まで実施した遺跡の継続であり、同一遺跡として判断される。

西地区の調査は農道の路線に沿った範囲の調査であるために、幅4m～6mで、長さの総延長は580mとなる。調査区は概ねH字形に広がるもので工事の進捗に合わせて調査を進めた。従って、調査区の呼称は第4・5図のように規則性のあるものとはなっていない。

グリッドの設定は、調査区毎に中央部分に基準杭を幅5mのピッチで設定し、後に第IX系世界測地の座標で取り込んだ。従って、調査区全体1区～8区ではグリッドの呼称は統一されていない。区毎にグリッドを設定している。

1区は東西に分けている。中央部分に杉の森が挟まる形で二分され、西側調査区は東西方向に伸びるものでやや西端でS字に湾曲する。全長は110.571mを計る。1区東側はスギ林を挟んで東側60.7m、北西から南東方向にほぼ直線状になる。2区は1区東側の東端部で直角に北方向に折れる北東方向から南西方向にほぼ直線で33.65mの範囲である。3区は1区とほぼ平行する南側の調査区で北西から南東にかけて121.76mの範囲で、T字の交叉部分から東側は5区になる。北西から南東に伸びるもので、北西端部付近で「く」の字に折れる。全長は87.97mを計る。また同じくこの交叉部分から北側が8区になる。H字の中軸部分で北北東から南南西に向かいほぼ直線で、全長は68.43mを計る。4区と7区は北西から南東に連続する直線の区間である。2つの境目に電柱が存在し、工事の関係から2つの区に分割した。4区は47.2mの直線区間。7区は49.31mの同じく直線の区間である。6区は1区西側の北側150mに位置し、全幅7.5m、長さ約12mである。

総延長は凡そ592mを計る。

調査区域は世界座標IX系のX=11600、Y=30700～X=12000、Y=31000の範囲に収まる。

掘り下げは重機(バックホー)により表土除去を行い、鋤にて遺構確認作業を行った。遺構の確認面はソフトローム層の上面で標準堆積土層については、各調査区において記録をとっている。

写真による記録は35mmの白黒およびカラーズライドによって実施し、補足的にデジタルカメラ700万画素を使用し随時実施した。地区別に脚立で撮影を行った。航空撮影は調査区の進捗に合わせた日程が組めず実施していない。

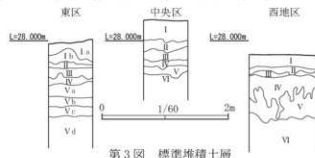
### 第2節 標準堆積土層

本遺跡の標準堆積土層の観察は各地区でテストピットを設け実施している。本報告書はこの赤弥堂遺跡の最終報告書として作成したもので、21・22年度に実施した赤弥堂東地区、中央地区、22年度に実施した西地区を全体を図示して対比する。全体の地形はほぼ平坦であるが西側に向かいやや標高が高くなっている。

基本的な層序は全城にわたりほぼ同様で、表土層の下に旧耕作土層が確認され、その直下に第III層ローム漸移層が確認されこの土層が遺構確認面となっている。

第IV層のソフトローム層までの厚さはおおよそ20cmを測る。以下V層ハードローム層は締まりの状況および色調からV・VIの2層に分層される。

古墳時代・中世の確認面はII層上面であるが、縄文時代の確認面はIII層中層～下層である。



第3図 標準堆積土層



## 第4章 調査の成果

### 第1節 遺跡の概要

検出された遺構は赤弥堂遺跡の西端部に位置するもので、東地区・中央地区とは様相が異なる部分と、同様の部分の双方が見られた。

縄文時代では、前期の遺構で明確な遺構は検出されていない。東・中央地区で見られたハイガイを主体とする前期前～中葉の貝塚も検出されていない。一方で、西地区8区SK01および中央地区4区SK07検出の中期に伴うサルボウを主体とする貝塚が僅かに1基ずつ検出されており、いずれも中期中葉の遺構であることに齟齬はない。

今回の遺跡調査における結果は縄文時代中期の集落および遺物、古墳時代中期後葉の集落、中世の道路状遺構が中心となっている。

縄文時代中期では、中央地区から東地区にかけて阿玉台式末葉～加曽利E式の古い段階に中心があったが、今回の調査ではこれらと共に加曽利EⅢ式期の集落が多く確認されている。このことは西に行くにつれ、阿玉台式土器が薄くなり、加曽利EⅢ式土器の増加が指摘できる。さらに、この加曽利EⅢ式に供伴して連弧文様式の土器の出土は特筆される。

特殊な遺物としては阿玉台式期の土偶2点、加曽利E式期の琥珀大珠1点、台形土器等があげられる。

古墳時代では、住居跡は部分的調査のみで全体を捉えた住居はなかったが、概ね5世紀中葉～後葉カマド導入前の集落である。一部東海以西の古式な須恵器の出土も見られる。

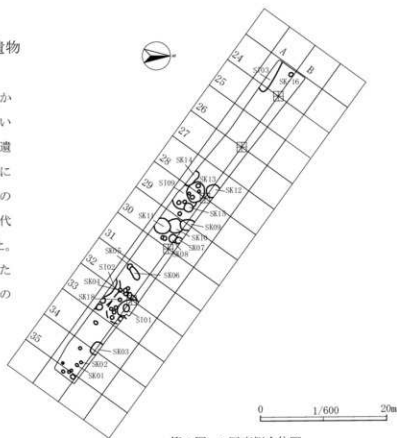
奈良・平安時代の遺物は少量出土しているものの、遺構は検出されていない。

中世はSF01とした1条の道である。5・8・1区東側で検出されている。遺物では、中世土器・古瀬戸・青磁碗等が出土しており、近隣に中世の遺構が存在する可能性が高い。

### 第2節 検出された遺構と遺物

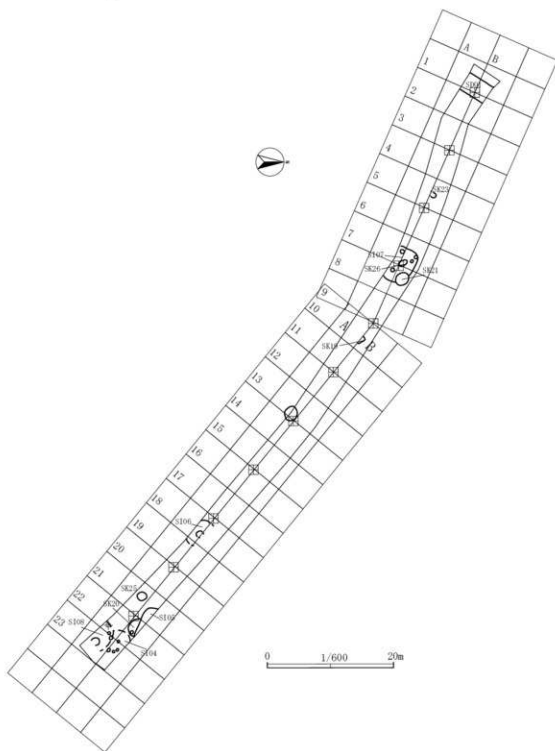
地区別に検出された遺構を遺物から判断すると以下の通りになる。いずれの遺構も重複が激しく、出土遺物が混在する傾向がある。明らかに縄文中期の完形品を出土する遺構の上層に土師器の混入が見られ、時代を特定するには困難な状況であった。

遺構・遺物は遺跡の性格を表すために出来る限り掲載を試みた。その総点数はおよそ800点を数える。

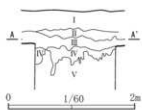


第6図 1区東側全体図

+



第7図 1区西側全体図



- I層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm多量。しまりあり。耕作土。
- II層 10YR 2/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~15mm多量。しまりあり。田耕作土。
- III層 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロックφ1~3mm極多量。しまりあり。ソフトローム層位。
- IV層 10YR 4/4 褐色土 ロームブロックφ1~10mm極多量。しまりあり。ソフトローム。
- V層 10YR 4/4 褐色土 しまり強い。ハードローム。

第8図 1区西側標準堆積土層

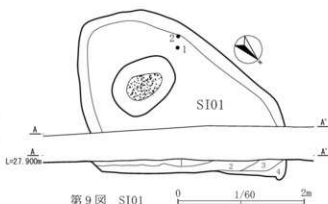
## 第1項 1区

## 1 住居跡 (SI)

## SI01(第9図、図版3・74)

本遺構はA・B-32・33グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸不明、短軸2.02mを計る。確認面下の掘り込みの深さは19cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。柱穴は検出されていない。炉は住居の南側に位置し浅い皿状の地床炉である。長軸93cm、短軸69cmを計る。遺物は主に炉の西側から出土が見られたが数量的には少ない。

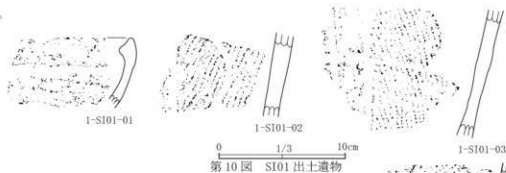
遺物は3点掲載した。01は深鉢口縁部内湾するもので口唇端部は平坦で中央がややくぼむ。無文で、外面に僅かな沈線状の段を有する。02・03は同一個体と考えられる。胴部の破片で地文にRLの縄文を全面に施文した後、磨消懸垂文、蛇行沈線が施文される。加曾利E I～II式である。



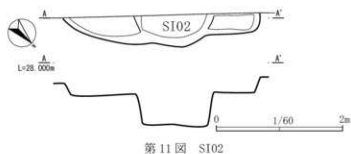
第9図 SI01

SI01

- 1層 10層 2/1 黄粘土 コームブロック型2～10mm多量。  
 2層 10層 1.7/3 黄粘土 コームブロック型2～10mm多量、瓦土ブロック型2～10mm少量。  
 3層 10層 2/2 暗褐色土 コームブロック型2～10mm少量、瓦土ブロック型2～10mm多量。  
 4層 10層 2/1 黄粘土 コームブロック型2～10mm多量、瓦土ブロック型2～10mm少量。



第10図 SI01出土遺物



第11図 SI02

## SI02(第11・12図、図版4)

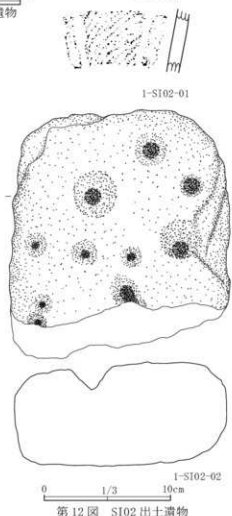
本遺構はA-32・33グリッドにおいて検出された。円形土坑の重複の可能性がある。

遺物は2点掲載した。01は深鉢胴部の細片である。縦方向にRLの縄文が回転施文された後、磨消懸垂文が施される。加曾利E II式の遺物であろう。02は砂岩製の多孔石である。長方形の厚みのある板状の石で、上面に大小10箇所の逆円錐状の孔が穿たれている。

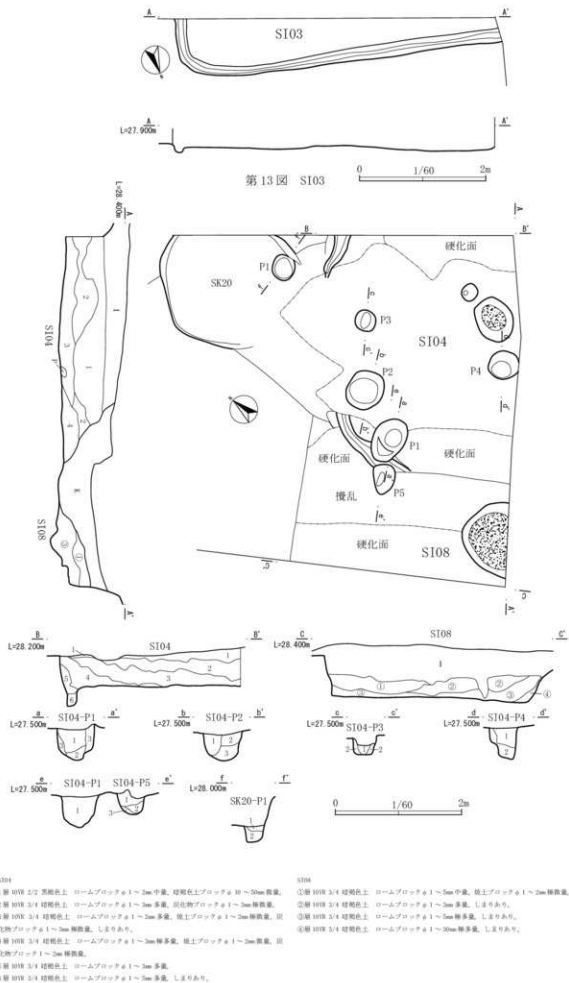
## SI03(第13図、図版4・74)

本遺構は1区東側A-24・25グリッドにおいて検出された。大半が調査区域外となるために明瞭ではないが、方形を呈するものと判断される。壁際には周溝が全周する。柱穴は確認されていない。

遺物の出土もなく、古墳時代以降の住居跡であろう。



第12図 SI02出土遺物



第14図 SI04・08・SK20

## S104(第14～16図、図版4・5・74)

本遺構はA・B・22・23グリッドにおいて検出された。平面形状は不明。規模不明。確認面下の掘り込みの深さは52.6cm。覆土は自然堆積で6層に分層される。柱穴は5本検出され、この内4本が円形に配列され、主柱穴となる。炉は住居の中央付近に位置し浅い皿状の地床炉である。長軸72cm、短軸56cmを計る。床面は炉を中心に全面に硬化が見られる。

遺物は主に炉の周辺から出土が見られ、数量的にまとまった資料が得られている。

01・02は深鉢口縁の破片である。隆帯による円形の枠状区画を設け内部には単筋RLの縄文が施文される。渦巻は退化している。03・04は01・02の胴部下半から底部付近の破片である。磨消懸垂文が施文される。地文はLRの縄文を縦方向に施文している。

05・06は連弧文を描く一群である。2本1単位とするやや太い平行沈線によって頸部に区画の線を巡らせた後、胴部上半に弧状の文様が描かれる。所謂連弧文様式の土器である。

07～09は同一と判断される深鉢の口縁部から胴部上半部の破片である。07では口縁部は丸棒状になっている直下に太い沈線による区画部を設け、内部に2列の円形押捺文が充填される。08・09では胴部の施文が観察され、地文には縦方向の条線が密に施文される。また、沈線による磨消懸垂文が施文される。

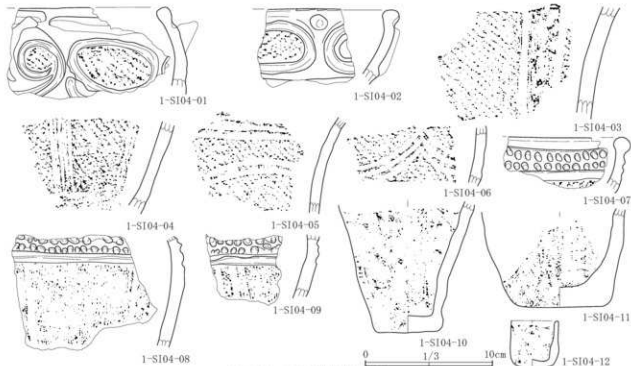
10・11・12はミニチュア土器である。深鉢形の土器で10・11では胴上半から口縁部にかけて欠損する。11は僅かながら懸垂文が観察され、小形の深鉢の可能性もある。12ではやや丸みを帯びた手握ね風の作りである。10・12は無文である。

13・14は土器片鏝である。13には縦方向の燃糸文が施文され、加曾利EⅠ式段階の深鉢胴部破片を用いている。重量は18.8g、14は沈線による文様が描かれる。重量は18.8g。

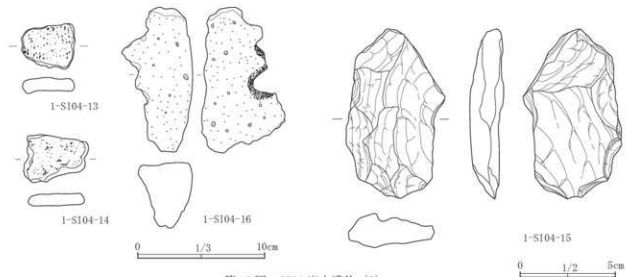
15は二次加工剥片である。端部に使用痕などの微細剥離は観察されず、槍状に形状を整えている。

16は多孔質安山岩製の石皿の破片であろう。上面には平坦面が観察され、側面は丸みを帯びる。裏面には孔が2箇所確認される。石皿側面部の破損資料と想定される。

01～06の遺物から判断して本遺構の時期は加曾利EⅡ～Ⅲ式に比定されるもので、連弧文の沈線が多段化しないこと、地文に燃糸を有する土器片鏝などから判断しても加曾利EⅡ式に近い加曾利EⅢ式と判断される。また、07～09の円形押捺文が施文される土器群もこの連弧文様式の遺物の範疇で捉えられるものであろう。一見すると交互刺突文が崩れた文様にも観察されるものであるが、加曾利EⅢ式段階に平行するものとされる資料である。



第15図 S104出土遺物(1)



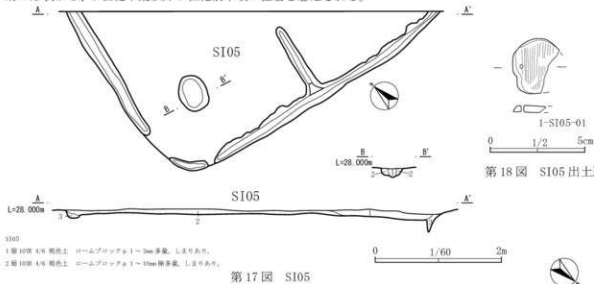
第16図 SI04出土遺物(2)

## SI05(第17・18図、図版6・74)

B-21・22グリッドにおいて検出された。方形を呈するものであろう。南西側コーナー部分を確認したに過ぎない。したがって規模は不明。床面は平坦で硬化面が広がる。柱穴および炉は検出されていない。南壁側に間仕切り溝が1本確認されている。また、南西コーナー寄りには楕円形の掘り込みが確認されており、貯蔵穴の可能性がある。壁溝は全周するものであろう。

出土遺物もほとんど出土しておらず、掲載遺物は滑石製の有孔円板1点のみである。

01は滑石製模造品の有孔円板である。右側は孔を含め欠損している。全体に研磨は粗雑。住居跡からの出土遺物は本資料のみで、他は形状を明確にできる遺物の出土は無かった。土器器の破片のみである。本資料並びに住居跡の形状から、5世紀中葉以降6世紀前半頃の住居と想定される。



第18図 SI05出土遺物

第17図 SI05

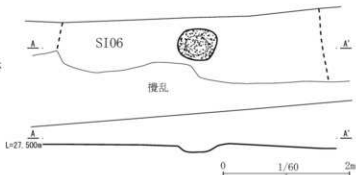
SI05

1層 10m 4N 褐色土 ロームブロックが1~3cm多量、しまりあり。  
2層 10m 4N 褐色土 ロームブロックが1~10cm多量、しまりあり。

## SI06(第19図、図版6)

本遺構はA・B-18・19グリッドにおいて検出された。炉は中央に検出されている。

遺物は検出されていない。

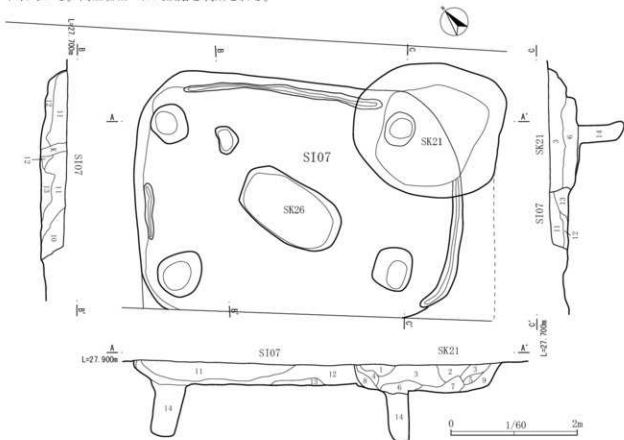


第19図 SI06

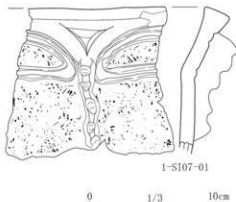
## SI07(第20・21図、図版6・7・74)

本遺構はA・B-7・8グリッドにおいて検出された。平面形状は隅丸方形を呈し、長軸5.23m、短軸3.68mを計る。確認面下の掘り込みの深さは33.8cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。第1層～9層はSK21の覆土であり、本遺構を切っている。柱穴は5本検出され、この内4本が対角線上に配列され、主柱穴となる。

遺物は全体に散漫な出土である。01は深鉢形土器の口縁部破片である。窓枠状の隆帯によって区画された内部に平行沈線が沿う。枠状区画の交点はX字状となり、刻みを有する棒状の隆帯が垂下する。地文には条線による波状の文様が縦方向に密に施文される。眼鏡状区画の中も同様な条線が観察され、条線施文後に隆帯の貼り付けが行われている。阿玉台Ⅲ～Ⅳ式段階と判断される。



第20図 SI07



第21図 SI07出土遺物

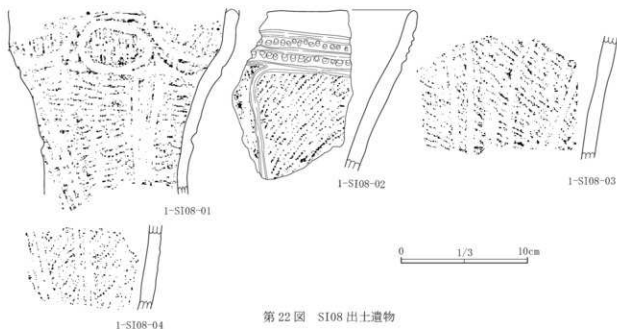
- SK21
- 1層 10IX 3/4 埴輪土 ロームブロック 1～2層中量。
  - 2層 10IX 3/4 埴輪土 ロームブロック 1～2層中量。
  - 3層 10IX 3/4 埴輪土 ロームブロック 1～2層中量、灰化ブロック 3～5層中量。
  - 4層 10IX 3/4 埴輪土 ロームブロック 1～15層中量。
  - 5層 10IX 3/4 埴輪土 ロームブロック 1～2層中量。
  - 6層 10IX 3/4 埴輪土 ロームブロック 1～2層中量。
  - 7層 10IX 3/4 埴輪土 ロームブロック 1～6層中量、しりりあり。
  - 8層 10IX 3/4 埴輪土 ロームブロック 1～15層中量、しりりあり。
  - 9層 10IX 3/4 埴輪土 ロームブロック 1～2層中量。
- SI07
- 10層 10IX 3/4 埴輪土 ロームブロック 1～15層中量、しりりあり。
  - 11層 10IX 3/4 埴輪土 ロームブロック 1～15層中量、灰化ブロック 1～2層中量。
  - 12層 10IX 3/4 埴輪土 ロームブロック 1～2層中量、灰化ブロック 1～2層中量、しりりあり。
  - 13層 10IX 3/4 埴輪土 ロームブロック 1～2層中量、灰化ブロック 2～2層中量。
  - 14層 10IX 3/4 埴輪土 ロームブロック 1～2層中量、灰化ブロック 2～2層中量。

## SI08(第14・22図、図版7・8・75)

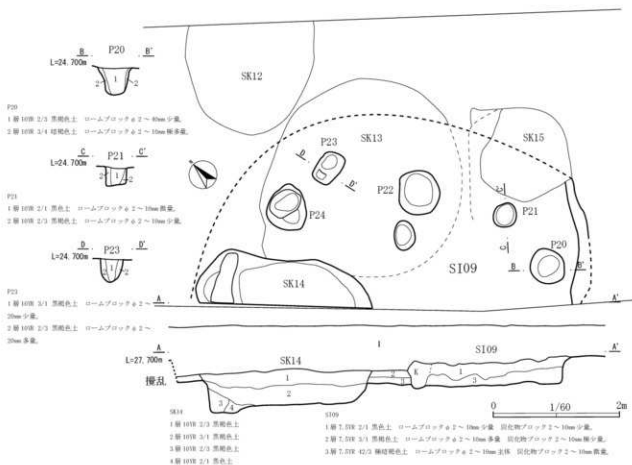
本遺構はA-22・23グリッドにおいて検出された。平面形状は不明である。SI04と重複している。確認面下の掘り込みの深さは30.9cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。柱穴は検出されていない。炉は住居の南東調査区壁際に位置し、浅い皿状の地床炉である。南東壁際で1.26mを計る。床面は部分的に硬化が見られる。

遺物は若干量出土している。01は深鉢形土器上半部の資料である。低い隆帯によって円形の区画帯を設け内部に太い沈線が沿う。区画内には縦方向の条線が充填される。胴部には単筋LRの縄文が斜方向45°に回転施文され、横方向の縄文が観察される。また太い沈線3条が垂下する。加曾利EⅢ式である。02は深鉢口縁部の破片である。口縁直下には沈線と円形押捺文が交互に配される。胴部には単筋RLの縄文が縦方向に施文され、幅広の磨消懸垂文が垂下する。連弧文様式の土器と判断される。03・04は深鉢胴部下半の破片である。不揃いの単筋RLの縄文が縦方に施文され、幅の狭い磨消懸垂文が垂下する。

遺物から加曾利EⅢ式期の遺構と判断される。



第22図 SI08出土遺物



第23図 SI09・SK14



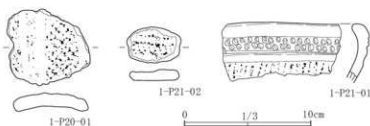
## SI09(第23・24図、図版8・78)

本遺構はA-28・29グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈するものと判断される。遺構は、覆土がほとんど削平されており、柱穴P20～P24がほぼ円形に配列されることより、住居跡と判断した。長軸5.94m前後と推測される。確認面下の掘り込みの深さは37cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。柱穴は6本検出され、この内5本が円形に配列され、主柱穴となる。SK14と重複関係にあり、土坑が本住居跡を切っている。

遺物は、P20およびP21から僅かながら出土している。

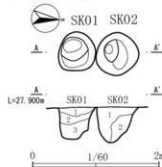
P20-01・P21-02は土器片鏝である。いずれも加曾利EⅢ式深鉢の胴部破片を用いている。

P21-01は深鉢口縁部の破片である。口縁部に円形の刺突列を有し、胴部には縦方向の燃糸文が施文される。所謂速弧文様式土器である。したがって本住居跡は加曾利EⅢ式の遺構と判断される。



第24図 SI09出土遺物

## 2 土坑 (SK)



SK01

- 1層 101R 3/3 黒褐色土 ロームブロック中量。
- 2層 101R 2/3 黒褐色土 ロームブロック多量。
- 3層 101R 3/4 暗褐色土 ロームブロック、2～30mm 碎多量。

SK02

- 1層 101R 2/4 黒色土 ロームブロック2～10mm 少量、しまり・粘性あり。
- 2層 101R 4/4 褐色土 ロームブロック2～30mm 碎多量、しまり・粘性あり。

第25図 SK01・02

## SK01(第25図、図版9)

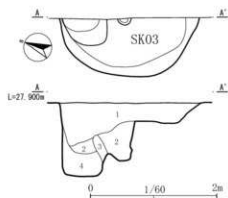
本土坑はA-35グリッドにおいて検出されている。平面形は円形を呈するが、断面の形状は階段状を呈す。長軸62.3cm、短軸58cm、確認面からの深さは49cmを測る。覆土は自然堆積を示し3層に分層される。

遺物は検出されていない。

## SK02(第25図、図版9)

本土坑はA-35グリッドにおいて検出されている。平面形は円形を呈するが、断面の形状はU字状を呈す。長軸68cm、短軸64cm、確認面からの深さは58cmを測る。覆土は自然堆積を示し、2層に分層される。柱穴状を呈する土坑である。

遺物は検出されていない。



SK03

- 1層 101R 2/1 黒色土 ロームブロック2～30mm 少量、しまり・粘性あり。
- 2層 101R 2/3 黒褐色土 ロームブロック2～30mm 多量、しまり・粘性あり。
- 3層 101R 4/4 褐色土 ロームブロック。
- 4層 101R 2/1 黒色土 ロームブロック2～30mm 碎多量、しまり・粘性あり。

第26図 SK03

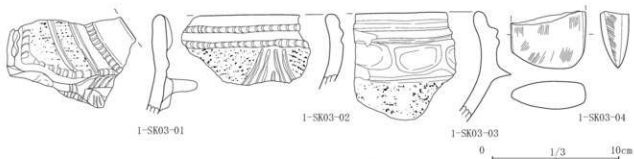
## SK03(第26・27図、図版9・75)

本土坑はA・B-34・35グリッドにおいて検出されている。平面形は円形を呈するものであろうが、東側は調査区外のため不明。断面の形状は北壁寄りおよび中央部にピットが存在し、掘り方は階段状になっている。東側壁際の長さには2.34mを測る。

遺物は少量ながら出土している。01は大波状把手部分の破片である。三角形に尖る把手部分には隆帯が中心部分から垂下し、隆帯上には刻みを有する。三角形の区画内には角押列が沿い、内部には波条線が充填された後に、沈線が2条ひかれている。阿玉台Ⅲ式と判断される。02は口縁部の破片である。平縁で口縁に平行して2列の角押文が描かれる。またその下位には単節縄文LRが施文され、弧状の沈線が曲線を描くように描かれる。速弧文様式の加曾利EⅡ～Ⅲ式段階の資料と判断される。03は口縁部の破片である。断面の三角形の低い隆帯によって窓枠状の区画帯が設けられる。胴部には単節RLの縄文が施文される。加曾利EⅡ式カ。04は磨製石斧の刃部破片である。基部側は折損する。

断面形は側面がやや平坦になり、定角式を呈する。材質は緑色岩類である。

これらの遺物から判断して本遺構は加曾利 E II～III 式と想定される。



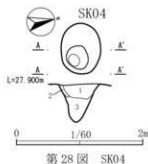
第 27 図 SK03 出土遺物

#### SK04 (第 28・29 図、図版 9・75)

本土坑は A-32・33 グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は U 字を呈す。長軸 81 cm、短軸 63 cm、確認面からの深さは 59.3 cm を測る。覆土は 3 層に分層され自然堆積を示している。

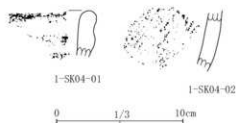
遺物は覆土中から少量ながら出土している。

01 は丸棒状の口縁部の破片で口縁直下に緩やかな隆帯が巡る。無文である。加曾利 E III 式段階の口縁部破片であろう。02 は胴部の破片である。下半部の破片であろう。単節 RL の縄文が縦方向に回転施文される。やや蛇行する沈線が懸垂する。磨消懸垂文の末端部であろう。加曾利 E II～III 式。



第 28 図 SK04

SK04  
 1 層 10層 2/1 黒色土、ロームブロックあり  
 ～10cm 厚。しきりあり。  
 2 層 10層 3/1 黒色土、ロームブロック  
 あり～20cm 厚。しきりあり。  
 3 層 10層 2/1 黒色土、ロームブロック  
 無し。しきりあり。

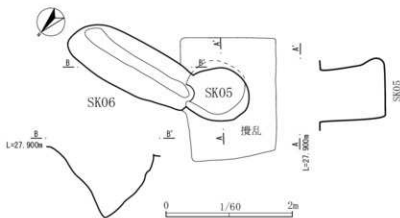


第 29 図 SK04 出土遺物

#### SK05 (第 30・31 図、図版 10・75)

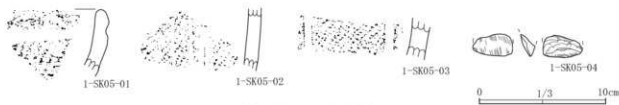
本土坑は A-32 グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈する。断面の形状は鍋底状を呈するが南西側は僅かに袋状となっている。長軸 1.05 m、短軸 0.92 m を測る。覆土は自然堆積を示している。

遺物は覆土中からまとまって出土している。01 は内湾する口縁部の破片である。口唇部直下には平行する太い沈線が巡り以下は単節 LR の縄文が施文される。加曾利 E III 式。02・03 は胴部の破片である。02 ではやや幅の狭い磨消懸垂文が施文される。地文は単節 LR。沈線は細く 3 本引かれて内 2 本の内部を磨消している。加曾利 E III 式。



第 30 図 SK05・06

と判断される。03は太い沈線による磨消懸垂文が施文され地文は単節LR。磨消の幅は不明だが、01に比べ懸垂文の沈線が太く鮮明であることからやや古くなる可能性がある。04は磨製石斧の刃部の破片である。刃部再生の為に意識的に打ち欠かれた可能性がある。材質は緑色岩類である。



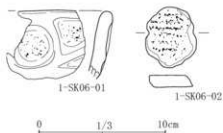
第31図 SK05 出土遺物

#### SK06( 第30・32図、図版10・75)

本土坑はA-32グリッドにおいて検出されている。SK05と重複関係にあるが、新旧関係は不明。出土遺物から見ても時間差はない。

平面形は長楕円形、断面の形状はV字状を呈する。所謂落とし穴状の形状であるが、掘り込みも浅く、底部の形状も通常の落とし穴とは異なる。長軸2.09m、短軸0.87m、確認面からの深さは117cmを測る。

遺物は覆土中から僅かに出土している。01は深鉢口縁部の破片である。太い隆帯によって円形や三角形の区画を設け内部に単節RLの縄文を充填させている。加曽利EⅢ式。02は土器片鏝である。磨消懸垂文の胴部破片を用いるもので、重量は10.5g。

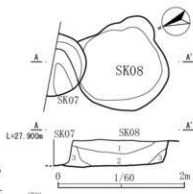


第32図 SK06 出土遺物

#### SK07( 第33図、図版10)

本土坑はB-30グリッドにおいて検出されている。平面形は円形を呈するものであろう。北側が調査区域外になる。また、南側でSK08と重複するが、本遺構のほうが新しい。断面の形状は鍋底状を呈す。壁際の長さは99.4cm、確認面からの深さは39cmを測る。

遺物は検出されていない。



第33図 SK07・08

#### SK08( 第33図、図版10)

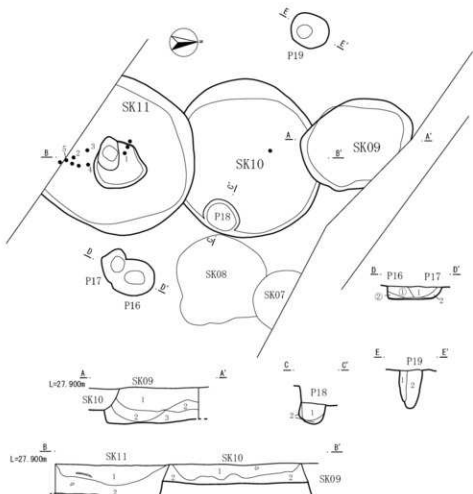
本土坑はA-30グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は鍋底状を呈す。長軸1.52m、短軸1.36m、確認面からの深さは39cmを測り、重複するSK07と同じである。覆土は自然堆積を示し3層に分層される。SK07によって北側を切られており、本遺構の方が古い。

遺物は検出されていない。

#### SK09( 第34・35図、図版10・75)

土坑はA・B-29・30グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な楕円形を呈するが、断面の形状は鍋底状を呈す。長軸1.82m、短軸1.26m、確認面からの深さは55cmを測る。覆土は3層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は4点掲載しているがいずれも土器片鏝である。01・02は磨消懸垂文の胴部破片、03・04は無文部の破片を用いている。重量は01が18.1g、02が8.8g、03が13.9g、04が6.2gを計る。加曽利EⅢ式の破片を用いているようである。



第34図 SK09・10・11

SK09

1層 10層 2/1 黒色土 ロームブロックより20mm少量、灰化物粒

2層 黒炭、しまり・粘性あり。

2層 10層 2/3 暗褐色土 ロームブロックより20mm稍多量。

3層 10層 2/1 黒褐色土 ロームブロック中量。

SK10

1層 10層 2/2 黒褐色土 ロームブロックより10mm少量、焼土ブロックより

20mm 稍多量、灰化物ブロックより10mm稍多量、しまり・粘性あり。

2層 10層 2/3 暗褐色土 ロームブロックより20mm中量、焼土ブロックより2mm

稍多量、しまり・粘性あり。

SK11

1層 10層 2/1 黒褐色土 ロームブロックより10mm少量、焼土ブロック稍量、

灰化物ブロック稍量、しまり・粘性あり。

2層 10層 2/3 暗褐色土 ロームブロック中量、焼土ブロック稍量、灰化

物ブロック稍量、しまり・粘性あり。

P16

1層 10層 2/1 黒色土 ロームブロック中量。

2層 10層 2/3 黒褐色土 ロームブロック少量。

P17

1層 10層 2/1 黒色土 ロームブロックより2mm

稍多量。

2層 10層 2/1 黒褐色土 ロームブロックより

20mm中量。

P18

1層 7.00層 2/1 黒色土 ロームブロックより2mm

稍多量。

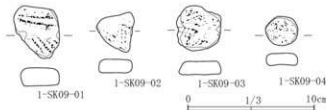
2層 7.00層 2/3 黒褐色土 ロームブロックより10mm中量。

P19

1層 10層 2/1 黒褐色土 ロームブロックより10mm少量、焼土ブ

ロックより20mm稍多量。

2層 10層 2/3 暗褐色土 ロームブロックより10mm少量。



第35図 SK09 出土遺物

SK10(第34・36図、図版11・75)

本土坑はA-30グリッドにおいて検出されている。平面形は円形を呈し、断面の形状は鍋底状を呈す。床面は平坦で、底部はほぼ円形を呈する。SK09・11によって切られる。東西軸は2.48m、確認面からの深さは29cmを測る。覆土は2層に分層され自然堆積である。

土坑内には少量の縄文土器が出土している。

01は眼鏡状の把手部分の破片である。隆帯上には単節RLの縄文が施文される。隆帯により区画される楕円形区画の内部には平行短線が描かれるようである。阿玉台IV式土器である。02は断面三角形の隆帯による逆U字形の文様の交点付近の破片である。隆帯に沿って角押文が1列配される。他は無文である。阿玉台1b式である。03は屈曲する口縁部の細片である。口縁部にまで単節縄文が施文され口唇直下には隆帯により区画帯が設けられる。

阿玉台Ⅳ式段階と判断される。04は内湾してキャリバー形になる深鉢の口縁部破片である。貼り付けによる隆線により枠状の区画が設けられている。枠内には単節LRの縄文が施文される。加曽利EⅠ式新段階であろう。

これらの遺物から判断して本遺構の所属時期は阿玉台末から加曽利EⅠ式初頭段階の時期が想定される。



第36図 SK10 出土遺物

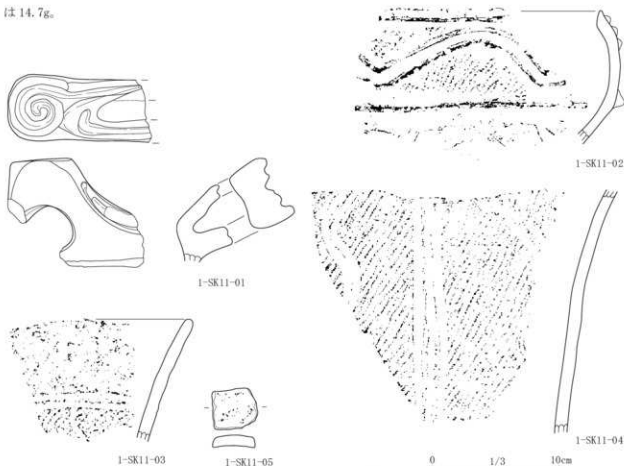
#### SK11(第34・37図、図版11・75)

本土坑はA-30 グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は鍋底状を呈する。床面は平坦で、底部は槽円形を呈する。短軸は2.32 m、確認面下の深さは52 cmを測る。SK10を切っている。

覆土は2層に分層され、自然堆積である。

遺物は土坑の中央部床面を中心に集中して出土している。01は把手部分の破片である。上端が平坦になり渦巻が描かれる。側面には孔が穿たれ盲孔が横方向に貫通する。加曽利EⅠ式段階であろう。02は大きく内湾するキャリバー形土器の口縁部資料である。口縁部文様帯には隆線の貼り付けによる横帯の区画を設け内部に二重隆線による波状文様を描かれる。地文は単節LRの縄文。頸部は無文帯となる。加曽利EⅠ式古段階と判断される。03は直線的に開く口縁部の破片である。バケツ状の器形であろう。口縁部は幅広の無文帯となり胴部との境に沈線が2条巡る。胴部には蛇行沈線が垂下する。地文は単節LRカ。04は胴部下半の資料である。単節RLの縄文を縦方向に施文した後、3本の沈線による懸垂文および2本を1単位とする沈線による蛇行懸垂文が垂下する。加曽利Ⅰ式であろう。

遺物から判断して本遺構は加曽利EⅠ式の所産と判断される。05は胴部破片を利用する土器片鏝である。重量は14.7g。



第37図 SK11 出土遺物

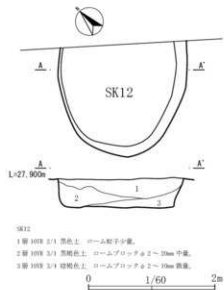
## SK12(第38・39図、図版11・76)

本土坑はA・B-28グリッドにおいて検出されている。平面形は楕円形を呈するものと思われるが、北東側が調査区域外になり不明である。断面の形状は鍋底状を呈す。横軸で2.05m、確認面からの深さは44cmを測る。覆土は3層に分層され自然堆積を示している。

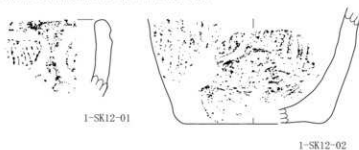
遺物は比較的多くまとまった資料が得られている。01は内湾気味に立つ口縁部の破片である。口縁直下に太い沈線により円形の区画が設けられ内部に無節Rの縄文が充填される加曾利EⅢ式。

02は胴部下半より底部に掛かる破片である。下端部分では無文となっているが、下端付近にまで単節LRの縄文が施文された後、縦方向の太い磨懸垂文が施文されている。加曾利EⅢ式カ。

03は口縁部直下の内湾する深鉢の破片である。貼り付けの隆帯により渦巻文が描かれる。加曾利EⅢ式カ。



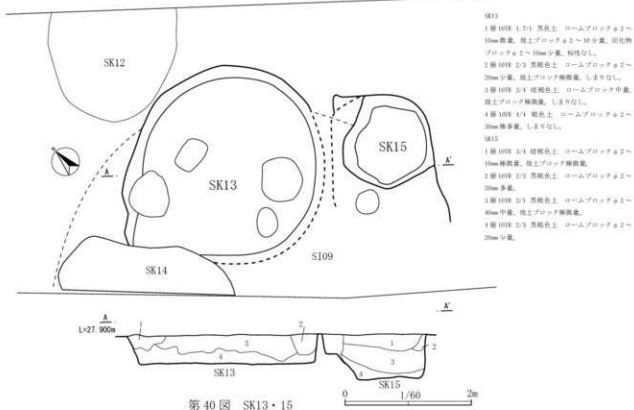
第38図 SK12



第39図 SK12出土遺物

## SK13(第40・41図、図版11・76)

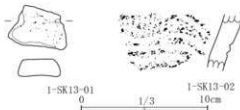
本土坑はA・28・29グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は鍋底状を呈す。長軸3.6m、短軸3.14m、確認面からの深さは47cmを測る。覆土は4層に分層され、自然堆積を示し



第40図 SK13・15

ている。

01は粗雑な作りの土器片鏢である。重量は19.6gを計る。阿玉台式土器の破片を用いている。02は口縁部直下より頸部のキャリパー形土器の破片であろう。二重隆線により区画が施され、地文には縦方向の燃糸文が施文される。加曾利EⅠ式古段階カ。



第41図 SK13出土遺物

#### SK14 (SK24) (第23図、図版12)

本土坑はA-28グリッドにおいて検出されている。SI09およびSK13と重複関係にあり、住居よりも新しい。平面形は南西側が調査区域外となり不明、断面の形状は鍋底状を呈す。壁際の最大幅は2.59m、確認面からの深さは52cmを測る。覆土は4層に分層され自然堆積を示している。尚、SK24と同一遺構であるためSK24は欠番とした。

遺物は少量検出されているが掲載資料はない。

#### SK15(第40・42図、図版12・76)

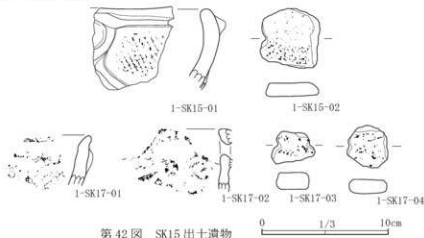
土坑はA-29グリッドにおいて検出されている。SI09と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は鍋底状を呈す。長軸2.37m、短軸2.14m、確認面からの深さは44cmを測る。覆土は4層に分層され自然堆積を示している。

尚、調査段階でのナンバーリングミスか、SK17と重複した可能性があるため、双方の遺物をまとめて掲載した。

遺物は少量で、01は口縁部の破片である。隆帯により円形および長方形の区画を設け内部に単節縄の縄文を施文している加曾利EⅢ式。02は土器片鏢である。磨消懸垂文の胴部片を用いている。施文される縄文はLRLの複節の可能性ある。加曾利EⅢ式であろう。重量は29.9gを計る。

SK17-01はやや直線的に開く口縁部の破片である。隆帯による区画帯が設けられ内部には単節縄文が施文される。加曾利EⅡ～Ⅲ式か。02は波状口縁の波頂部の資料である。頂部から橋状の小把手が付されていたものであろうが、剥落して欠損している。把手の裏側には盲孔が施され、これを挟み込むように沈線による渦巻文様が描かれる。薄手の土器で胎土も他の土器とは異なり精緻である。大木8b式か。

03・04は土器片鏢である。無文の胴部破片を用いている小形で粗雑な作りである。03の重量は10.6g、04の重量は11.5gを計る。

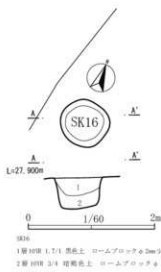


第42図 SK15出土遺物

#### SK16(第43図、図版12)

本土坑はA-24グリッドにおいて検出されている。平面形は円形を呈し、断面の形状は鍋底状を呈す。長軸55cm、短軸49cm、確認面からの深さは32cmを測る。覆土は2層に分層され自然堆積を示している。

遺物は検出されていない。

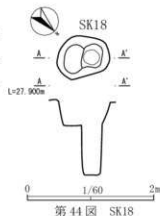


第43図 SK16

#### SK17 欠番である。

## SK18(第44図、図版12)

本土坑はA-33グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は2段の掘込みとなっており2基のピットの重複の可能性もある。長軸85.9cm、短軸65.2cm、確認面からの深さは南側で44cm、北側で118cmを測る。遺物は少量検出されているが掲載資料はない。



第44図 SK18

## SK19(第45図、図版12)

本土坑はB-10グリッドにおいて検出されている。平面形は方形を呈し、断面の形状はやや凹凸のある皿状を呈す。長軸1.28m、短軸は不明、確認面からの深さは19cmを測る。遺物は少量検出されているが掲載資料はない。



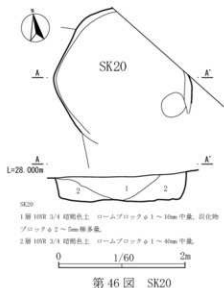
第45図 SK19

## SK20(第46・47図、図版12・76)

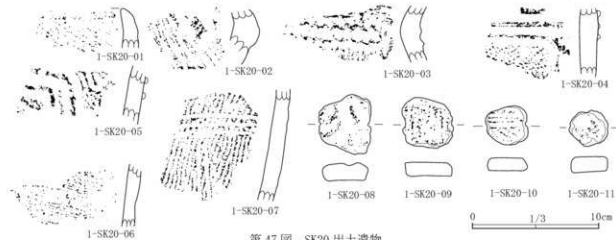
本土坑はB-22グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は鍋底状を呈す。長軸不明、短軸2.18m、確認面からの深さは40cmを測る。覆土は2層に分層され、自然堆積を示す。

遺物は覆土中からまともに出土している。

01は内屈する口縁部の破片である。口唇直下に無文部を有した後、胴部にかけて単筋RLの縄文が施文される。加曾利EⅢ式カ。02は太い沈線が斜方向に施文される屈曲部の破片である。03は屈曲部分に連続刺突を施すもので、胴下半には燃糸文が施文されている。加曾利EⅢ式平行の連弧文様式土器の可能性ある。04・05は同一個体であろう。深鉢口縁部文様帯部分の破片である。太い隆帯およびそれに沿った沈線によって区画が行われ、内部にRLの単筋縄文が縦方向に施文される。06は平行沈線による肋骨文様が描かれる。地文は無い。胎土中に繊維の混入は見られず、前期浮島I式の可能性がある。形式不明。07は胴部の破片である。0段多条のRLがやや45°方向に施文され縦方向の節となる。沈線3本が横位に描かれ2本の沈線が垂下する。連弧文様式の土器の可能性ある。加曾利EⅢ式カ。08～11は土器片鏟である。08では口縁部の渦巻部分の破片、09では縄文施文の胴部、10では磨消懸垂文部分の胴部片、11では無文部分の破片が用いられている。全体に周縁の整形は丁寧に行われている。重量は08が25.4g、09は20.8g、10は10.9g、11は9.7gを計る。



第46図 SK20



第47図 SK20 出土遺物

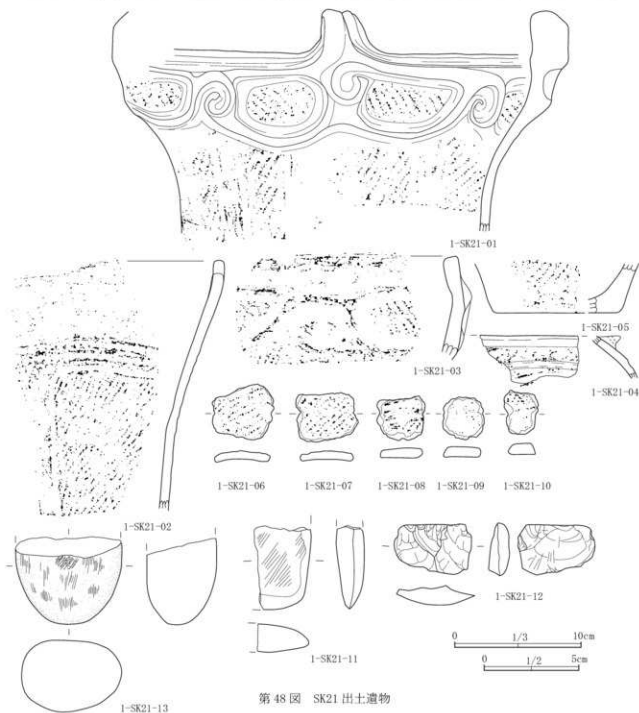


## SK21( 第20・48図、図版13・76)

本土坑はB-8グリッドにおいて検出されている。SI07と重複関係にあり、本土坑がSI07を切っている。平面形はやや不正な円形を、底部は隅丸多角形を呈す。断面の形状は鍋底状。長軸2.34m、短軸2.12m、確認面からの深さは47cmを測る。覆土は2層に分けられ自然堆積を示している。

遺物は比較的まとまって出土している。

01は深鉢形土器の上半部資料である。胴部下半～底部にかけては欠損する。4単位の突起が付され口縁部文様帯は太い隆帯とそれに沿う沈線により楕円形区画を設ける。渦巻は退化している。胴部および楕円形区画内には単節RLの単節縄文が充填される。胴部には沈線によるやや幅の狭い磨消懸垂文が垂下する。加曾利EⅢ式古段階。02は波状を呈する深鉢でバケツ形を呈するものである。口唇直下に幅広の無文帯を有する。胴部との境部分には円形押捺文が2列施文され以下は沈線が方形の区画を作り磨消懸垂文を構成する。地文は単節LRの縄文。所謂連弧文様式の土器で、加曾利EⅢ式平行と判断される。03はやや内傾する口縁部の破片である。口縁部直下はやや幅広の無文帯となり、以下隆帯により渦巻が描かれ、渦巻から連結する横帯の区画が設けられる。区画内には単節RL



第48図 SK21出土遺物

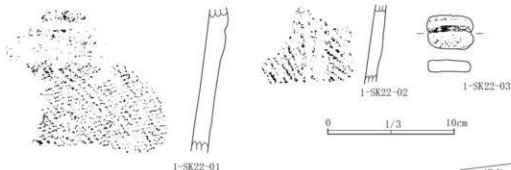
の縄文が施文される。加曾利EⅢ式古段階。04は内傾する薄手の胴部破片。上部部には鐮状の凸帯が巡る。胴部地文は無文で弧状の沈線が描かれる。鐮部分に孔は確認できないが有孔鐮付土器と判断した。赤彩は認められない。曾利式の影響下の遺物と判断される。05は底部の資料である。下端付近まで単節LRの縄文を地文に、磨消懸垂文が施文される。他の資料から想定して加曾利EⅢ式段階と判断される。06～10は土器片鏟である。06・07では縄文施文の胴部、08では平行沈線、09では擦痕、10では磨消懸垂文の破片がそれぞれ用いられる。重量は06が19.3g、07は18.6g、08は14.2g、09は11.0g、10は11.6gを計る。

11は磨製石斧の刃部片である。やや扁平な作りで断面形は楕円形となる。研磨は全体に粗い。素材は緑色岩類である。12はチャートの剥片である。横長の剥片で二次的な加工は観察されない。13は磨石・回石である。全面に粗く擦痕が観察され、中心付近から折損している。中央部折損部分付近に僅かな凹が観察される。素材は凝灰岩である。

#### SK22(第49図、図版13・77)

本土坑は調査段階で重複した番号を付した可能性があり、平面図、断面図ともに不明。遺物のみが取り上げられている。

01は深鉢胴上半、頸部に掛かる破片である。頸部は無文で、沈線が1条巡る。胴部は単節RLの縄文が密に施文される。加曾利EⅡ式カ。02は胴部中位から下半の破片。やや幅の狭い磨消懸垂文が施文される。地文は単節LRを縦方向に施文している。加曾利EⅡ式カ。03は土器片鏟である。口縁部直下の隆帯部分を用いている。重量は11.3g。



第49図 SK22出土遺物

#### SK23(第50図、図版13)

本土坑はB-5グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は浅いすり鉢状を呈す。長軸97.5cm、短軸不明、確認面からの深さは27cmを測る。覆土は2層に分層され自然堆積を示している。

遺物は少量検出されているが掲載資料はない。

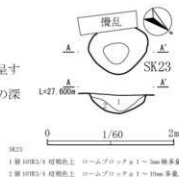
SK24 本土坑はSK14と同一土坑として処理した。したがって欠番である。

#### SK25(第51～53図、図版13・14・77)

本土坑はA-21グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は僅かながら袋状を呈す。上部部の長軸は2.32m、短軸1.94m、確認面からの深さは60cmを測る。覆土は自然堆積で4層に分層される。

遺物は比較的まとまった出土が見られた。

01は内湾する口縁の深鉢形土器上半部の資料である。渦巻を起点に方形、楕円形の区画を低い隆帯で描く。区画の内部および胴部には単節RLの縄文が施文されている。胴部には3条1単位の沈線による懸垂文が垂下する。加曾利EⅢ式古段階。02は01同様の遺物でやや小ぶりになる。胴部の懸垂文は2条の沈線によるもので方形の区画を形成している。加曾利EⅢ式古段階である。03は口縁直下で緩やかに内湾する深鉢口縁～胴部上半の破片である。口縁部直下には沈線と交互刺突文が横走し、胴部には単節RLの縄文が施文される。胴部上半には4条の沈線による連弧文が描かれる。連弧文よりも下位の胴部は無文となる。加曾利EⅢ式古段階平行の連弧文様式の土器



第50図 SK23

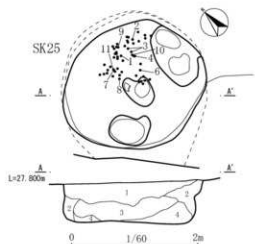
である。04は口縁直下で緩やかに内湾する深鉢口縁へ胸部上半の破片である。地文には粗い単節LRが施文される。05は03同様の連弧文様式土器であるが、口縁部の刺突列は巡らない。胸部の弧線下位にまで複節の可能性がある縄文が全体に施文される。下端の胸部屈曲部分に沈線が巡る。沈線部分からの破損で本数は不明。

06は有孔鏝付土器の口縁へ鏝部分の資料である。破片であるために孔の数は確認することは出来ないが、間隔は広い可能性が高い。加曾利EⅢ式平行で曾利式の影響を感じさせる。

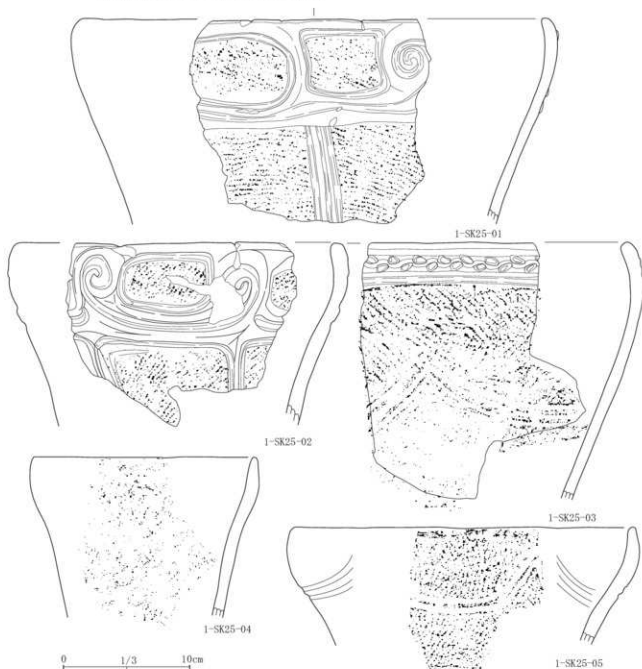
07～12は土器片錘である。重量は07は43.6g、08は34.7g、09は33.2g、10は20.9g、11は22.4g、12は19.8gを計る。

(図3)

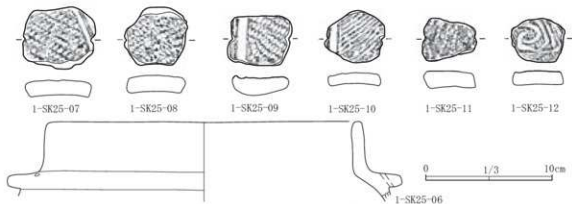
- 1 器 10器 2/4 黄褐色土 ロームブロック径2～5cm程度施。粘土ブロック程度施。しまり・和性あり。
- 2 器 10器 2/4 黄褐色土 ロームブロック径2～5cm少量。粘土ブロック程度。
- 3 器 10器 2/4 黄褐色土 ロームブロック径2～10cm少量。しまりあり。
- 4 器 10器 2/4 黄褐色土 ロームブロック径2～10cm程度。しまり・和性あり。



第51図 SK25



第52図 SK25出土遺物(1)



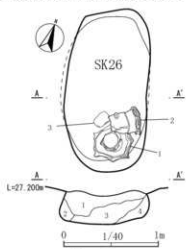
第53図 SK25 出土遺物 (2)

SK26( 第54・56図、図版14・78・79)

本土坑はA・B-7・8グリッドにおいて検出されている。平面形は南北に長い隅丸方形を呈するが、断面の形状は袋状を呈する土坑である。SI07と重複するが遺物の組成から判断して本遺構のほうが新しいものと判断される。長軸2.58m、短軸1.37mを計る。確認面下の掘り込みの深さは49cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。

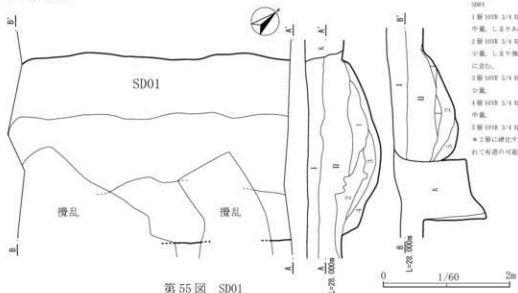
遺物は土坑南側底部付近より3個体まとまって出土している。

01は4単位の大波状を呈する深鉢である。底部は欠損している。突起部は口縁部文様帯から連携する隆帯状の区画で三角形を構成し、頂部直下に円形の隆帯が貼り付けられる。隆帯上には単節RLの縄文が施文される。三角形の窓枠状区画の内部はRLの縄文が充填される。頸部は無文。胴下半との境界部分には爪状の刺突列が隆帯に沿って施文され、隆帯は蛇行して垂下する。隆帯上には単節RLの縄文が施文される。また胴部下半も全体に同じ縄文が縦方向の回転を意識して施文される。阿玉台IV式である。02は深鉢形土器の資料である。胴部は口縁部に向かいほぼ直線的に僅かながら開いて立つ。口縁部は平縁で、窓枠状の楕円形区画が隆帯によって設けられる。交差部分はX字状に連結され、連結部は橋状の把手となる。楕円の区画は破損の為明確ではないが5単位と想定される。頸部はRLの縄文が縦方向を意識して全面に施文される。胴部と頸部の境には隆帯が1条巡り、この隆帯から垂下する隆帯の端部は横S字状になる。隆帯上には単節RLの縄文が施文される。また、胴部も同様のRL縄文が全面に施文される。広義の中鉢式としてとらえられる。03は浅鉢である。大形の浅鉢で無文。平縁である。口縁部には屈曲が見られ内外に段を有す。阿玉台IV式と判断される。



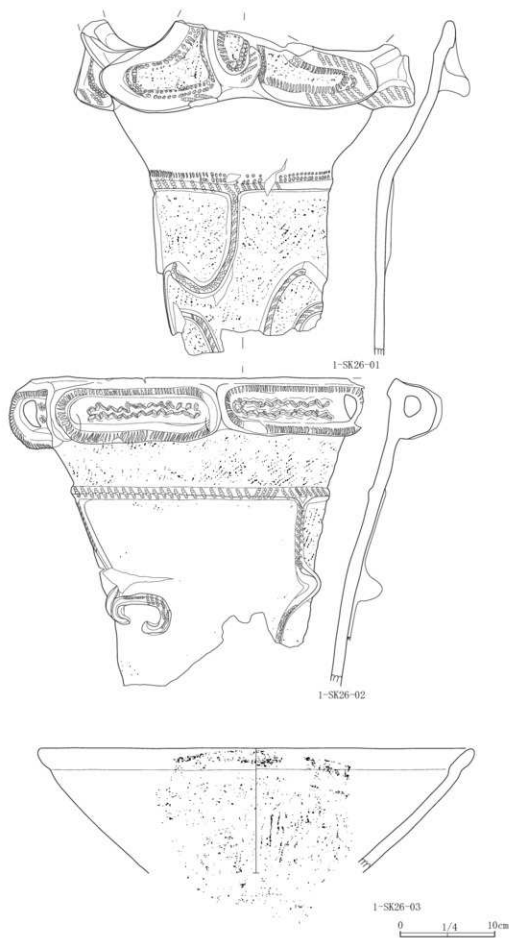
第54図 SK26

## 3 溝(SD)



第55図 SD01

- SD01
- 1層 1019 3/4 堆積色土 ロームブロックφ1~3cm 中量、しまりあり。
  - 2層 1019 3/4 堆積色土 ロームブロックφ1~2cm 少量、しまり強。φ2~5cmの黒褐色土層を0.1m以下含む。
  - 3層 1019 3/4 堆積色土 ロームブロックφ1~10cm 少量。
  - 4層 1019 3/4 堆積色土 ロームブロックφ1~3cm 中量。
  - 5層 1019 3/4 堆積色土 ロームブロックφ1~4cm
- ★2層に東北から黒褐色土層のラミナ状構造物が確認されており有層の可能性もある。



第56图 SK26出土遺物

## SD01(第55図、図版17)

調査区西端部、A・B-1・2グリッドに位置する。東側部のほとんどが攪乱に破壊されており、東側壁面及び上端については一部遺存するのみである。主軸方向はN-32°-Eとなり、ほぼ南西から北東に走向する。規模は遺存部分で上端幅約2.9m、下端幅約1.2m、確認面からの深さは最大で56cmを測る。断面形は概ねU字状である。覆土は暗褐色土が主体であり、レンズ状堆積を呈し5層に分層された。底面はほぼ平坦である。第2層中に硬化する黒褐色土と暗褐色土が互層を成すラミナ状堆積が厚く確認されており、第5層堆積後に道として使用されていた可能性もある。

遺物は出土していない。

## 4 ビットおよび遺構外出土遺物 (第57図、第2・3表、図版15～17・78)

本地区からは26基のビットが検出されている。これらのビットは掘り込みが深く住居跡の柱穴と判断されるものも多く、1区全体に削平が進んでいることが伺える。P20～P24は円形に配置されることから住居跡(SI09)と判断した。

ビットは遺構の集中する地域に偏在する傾向があり、遺構とは離れて存在する一群では1区東側調査区のA-35グリッド付近に集中する一群がある。

遺物が出土したビットの計測値および位置についてのみ、以下の第2表にまとめた。

第2表 1区ビット計測表

遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物
P12	A-33	70	—	90	01
P31	B-24・25	52	50	20	01

遺構確認時にいずれの遺構に伴うものか判断出来なかった遺物並びに、ビット状の遺構から出土した遺物も遺構外出土遺物として取り扱った。

1-P12-01は土器片鏝である。阿玉台式土器の胴部破片を用いている。重量は45.9gを計る。1-P31-01は降帯による口縁部文様帯が構成されるもので円形の区画を設ける。区画内には単筋Rの縄文が充填される。加曾利EⅢ式古段階。

1-A06-01は深鉢口縁部の細片である。口辺に対して斜方向に太い隆帯状の貼り付けを行い、内面には段状の隆帯が巡っている。所謂焼町形土器の可能性のある資料で、本遺跡で初めて確認された資料である。

1-B12-01は降帯による口縁部文様帯が構成されるもので円形の区画を設ける。区画内には縦方向の沈線が充填される。加曾利EⅢ式古段階。

SI22-01は口縁部の破片である。折り返して短く「く」の字に開く。地文はない。02も同様であるが、口縁直下には縄文施文の後、横位の沈線が描かれる。03は櫛歯状の工具による条線が垂下する。阿玉台IV式であろう。SI22出土遺物は取り上げ遺物の中でラベルに誤記されたものと判断される。遺構としてSI22は1区に存在していない。また、SK22の可能性は時期が異なるために、本遺構の遺物は遺構外遺物として取り扱った。

1-A13-01～1-B12-19は土器片鏝である。いずれも口縁下半から胴部の破片を用いるもので、加曾利EⅡ～Ⅲ式段階の遺物を使用するものが多い。重量は1-A13-01は30.2g、1-A13-02は46.3g、1-B12-02は33.7g、1-B12-03は42.5g、1-B12-04は39.8g、1-B12-05は39.9g、1-B12-06は31.9g、1-B12-07は28.4g、1-B12-08は31.4g、1-B12-09は34.7g、1-B12-10は29.7g、1-B12-11は38.2g、1-B12-12は26.0g、1-B12-13は27.8g、1-B12-14は27.1g、1-B12-15は25.4g、1-B12-16は20.2g、1-B12-17は21.7g、1-B12-18は20.7g、1-B12-19は15.7gを計る。1-遺構外-01は安行I式の口縁部破片である。本遺跡において検出された後期後半の唯一の資料である。

1-一括-01は土師器裏の胴部下半の資料である。ヘラケズリにより全体が整形され、胴部がやや大きく張ることから、古墳時代中期から後期の資料と判断される。



第57図 1区ピットおよび遺構外出土遺物

第3表 1区遺構外古代遺物観察表

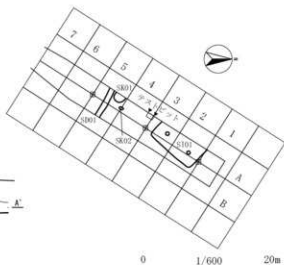
遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	構成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSH-11K-イックツ	土師器	甕	—	(6.7)	(4.4)	54.9	底部は僅かに上底気味の平底で、胴部下端は直線的に開く。	外面底部は一方向のヘラケズリ、胴部下端はヘラケズリ、内面はナズ。	良好	内外面 7.5YR7/6	スコリアや砂目立つ。黒色粒子・茶色・白色粒子混入。	胴部下端～底部 1/4	

## 第2項 2区

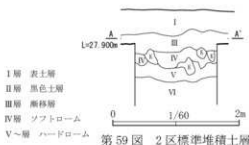
本区は1区東端部から北方向に延びる調査区である。グリッドではA・B-1～7までおよそ33mの範囲である。

検出された遺構は住居跡1軒と土坑1基、溝1条であり、他の区に比べて遺構の密度は低い。

遺構の確認面は第IV層上面である。



第58図 2区全体図



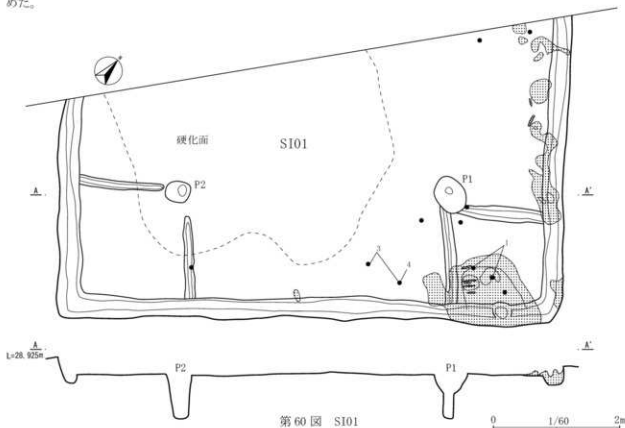
第59図 2区標準堆積土層

## 1 住居跡 (SI)

SI01 (第60・61図、第4・5表、図版19・20・79)

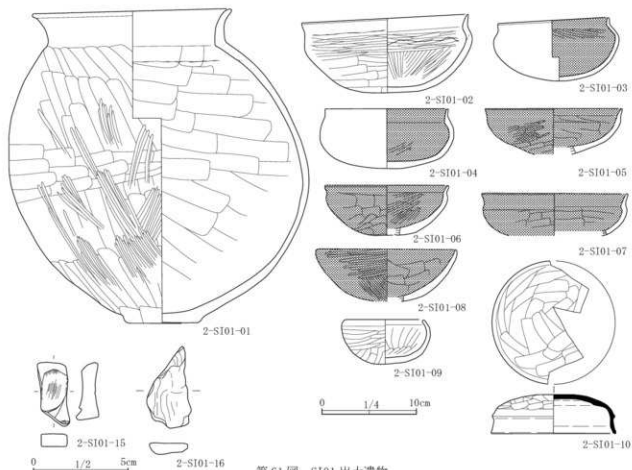
本区で検出された住居は本跡のみである。A・B-2・3グリッドにおいて検出された。方形を呈するものであろう。西側は凡そ2/3が調査区域外となっており、カマド・炉とも確認されていない。柱穴は対角線上に配されるものであろうかコーナー寄りに2本が検出されている。南北方向の長さは8.29mを計る。確認面下の深さは29cm、自然堆積を示している。北東壁際には焼土の堆積が見られ、本住居が火災にあったものと思われる。周溝が全周している。柱穴P1およびP2を起点に壁より間仕切りの溝が4本検出されている。床面は中央からやや西側にかけて硬化面が広がる。

出土の遺物は甕1点、土師器坏8点、須恵器蓋1点、凝灰岩製の砥石1点、滑石の破片である。滑石に加工痕は見られない。出土遺物の特徴から本遺構は5世紀中葉から後半と判断される。遺物の詳細については観察表にまとめた。



第60図 SI01





第61図 S101出土遺物

第4表 2区S101古代遺物観察表(1)

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	断面の特徴	焼成	色調	粘土	残存	備考
1	ASSW-21C-S1-1・ASSW-21C-S1-1-2・ASSW-21C-S1-1-15	土師器	甕	29.8	7.0	32.1	2520.0	胴部は鉢形を呈し、底部はやや円盤状に突出する。口縁は胴部でくゞの字に屈曲した後直立し縁やかに外反する。	口縁内外面共に横ナゲ。外面胴部はナゲ後部分のみガキ。底部は多方向のヘラクズリ。内面はナゲ。	良好 二次焼成 77	内面10YR4/3 にぶい黄褐色 外面10YR7/4 にぶい黄褐色	白色粒子・黒色粒子・雲母少量、スコリア微量。	胴部1/2 欠損	No.7,15 含む
2	ASSW-21C-S1-1	土師器	杯	17.4	丸底	7.7	301.9	大振りである。体部は縁やかに内湾し内側に鋭い稜を有した後口縁は短く外反する。碗形を呈する。	口縁内外面共に横ナゲ。体部外面はナゲ後ミガキ。内面はミガキ。	良好 二次焼成 77	内面10YR6/4 にぶい黄褐色 外面10YR3/4 暗褐色	黒色粒子・雲母やや多い、白色粒子少量。	体部1/3 欠損	
3	ASSW-21C-S1-1・ASSW-21C-S1-1-2・ASSW-21C-S1-1-3	土師器	杯	11.6	丸底	6.3	187.7	体部は縁やかに内湾した後窄まり。口縁は短く直立する。碗形を呈する。	口縁内外面共に横ナゲ。体部は割落しているものの内面上位にくゞが観察される。	良好 二次焼成 77	内面10YR5/4 にぶい黄褐色 外面2.5YR5/4 黄褐色	雲母多い、白色粒子・小～中粒やや多い。	体部1/3 欠損	内面赤彩 No.2,3 含む
4	ASSW-21C-S1-3	土師器	杯	12.9	丸底	6.1	134.3	体部は縁やかに内湾した後窄まり。口縁は短く外反する。碗形を呈する。	内外面共に器面割落。	良好 二次焼成 77	内面10YR5/6 明赤褐色 外面2.5YR4/3 モロシ一ツ艶	雲母多い、小～中粒・白色粒子やや多い。	底面～ 体部1/4	内面赤彩 No.3
5	ASSW-21C-S1-1	土師器	杯	(14.3)	—	(4.9)	61.4	体部は縁やかに内湾し開き。口辺内体部は縁やかに内湾し開き。口辺内側に鋭い稜を有した後、口縁で短く外反する。鉢状。	口縁内外面共に横ナゲ。体部はミガキ。1層でヘラクズリ。内面はナゲ。	良好 二次焼成 77	内外面2.5YR5/6明赤褐色	雲母多い、白色粒子やや多い。	体部1/3	内外面共赤彩
6	ASSW-21C-S1-1	土師器	杯	13.0	—	5.3	89.0	体部は縁やかに内湾し開き。口辺内側に稜を有した後、口縁で短く外反する。	口縁内外面共に横ナゲ。体部外面はヘラクズリ。内面はミガキ。	良好	内外面2.5YR5/6明赤褐色	雲母・白色粒子・黒色粒子少量。	口縁～ 体部下 手1/4	内外面共赤彩
7	ASSW-21C-S1-1	土師器	杯	15.2	—	(4.5)	69.4	体部は縁やかに内湾し開き。口辺内側に稜を有した後、口縁で外反する。	口縁内外面共に横ナゲ。体部内外面共にナゲ。	良好	内外面2.5YR5/6明赤褐色	雲母・白色粒子少量。	口縁～ 体部下 手1/4	内外面共赤彩

第5表 2区S101古代遺物観察表(2)

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
8	ASSP-21C-S1-1-X	土師器	杯	(14.6)	—	<5.5	89.0	底部は丸底。体部は緩やかに内湾して開く。口縁で僅かに立つ。	口縁内外面に横ナズ。体部外面はミダギ、内面はナズ。	良好 二次焼成 71	内面5YR6/6 外面5YR5/4 にぶい赤褐色	雲母多い、小～中粒・白色粒子・黑色粒子少量	体部1/4	内外面共赤胎
9	ASSP-21C-S1-1-X	土師器	杯	8.2	丸底	4.7	113.3	小形である。体部は内湾し口縁でさらに内縮する。傾斜を呈する。	口縁内外面に横ナズ。体部外面はヘラケズリ痕ミダギ。内面はナズ。	良好	内外面10YR2/4 にぶい黄褐色	白色粒子・雲母やや多い、黑色粒子少量、スロリリ質量。	口縁部1/4欠損	
10	ASSP-21C-S1-1	須恵器	蓋	13.0	—	4.1	97.3	天弁は比較的に扁平である。中位に有する襷は短く鋭い。口縁は「ハ」の字に外反し、腹部は平面を成している。器高の1/2を襷以下が占める。	ロケロ型形。天弁外面は丁寧な不整方向のヘラナズが観察される。	良好 無胎	内面10YR6/1 灰 外面7.5YR5/1 灰	白色粒子少量、小～中粒・数分の増出し数量。	2/3	東南系
15	ASSP-21C-S1-1	石製品	砥石	縦6.7	横3.5	厚さ1.4	56.8	楕円状。上下面及び両側面・下面に使用痕が観察される。						
16	ASSP-21C-S1-1	石製品	滑石 珪素品	縦4.3	横2.75	厚さ0.7	7.4	彫削り設備。研磨は行われていない。						滑石

## 2 土坑 (SK)

## SK01 (第62・63図、図版20・79・80)

平面形状は楕円形を呈し西側半分が調査区域の外になっている。上端は短軸側で87cmを計り、やや大振りの土坑である。底部の最大径は2.27mを計る。確認面下の掘り込みの深さは93cm、覆土は自然堆積を示している。上層が削平されているが形状より袋状土坑である。

遺物は覆土中および底部付近より大量に出土している。

01はキャリパー形の深鉢胴上半から口縁にかけての資料である。口縁は短く屈曲して立つ。三角形に張り出す突起部を有する。突起部には渦巻が描かれる。隆線によって区画された口縁部文様帯には、無節Rの縄文を施文した後に、二重隆線により渦巻が大きく描かれる。頸部には隆線が1条巡り隆線の直下には僅かに無文帯が広がる。以下は単節LRの縄文が施文されている。加曾利E I式新段階。

02は01同様キャリパー形の深鉢胴上半から口縁にかけての資料である。口縁は短く屈曲して立つ。口縁部文様帯には隆線により渦巻が貼り付けられる。頸部との境には二重隆帯が巡り胴部はRLの単節縄文が施文された後3条の沈線と蛇行する1条の沈線による懸垂文が垂下する。

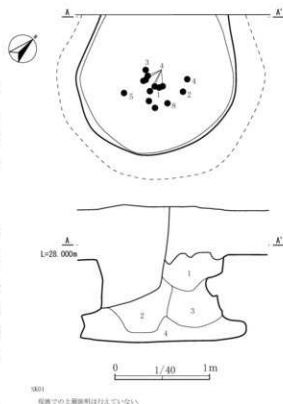
03は深鉢胴下半から底部の資料である。02と同様に縄文地に懸垂文が垂下するが、地文が0段多条のLRで別個体である。加曾利E I式新段階であろう。

04は胴部から底部にかけての資料である。口頸部は欠損する。全体に無節のRの縄文が施文されるが懸垂文は描かれない。加曾利E I式の範疇でとらえている。

05は壺形の口縁部破片である。口縁～頸部にかけて無文で口縁部は大きく外反して開く。頸部下半に隆帯状の貼り付けによる文様が見られるが詳細は不明。勝坂式の影響を受けるものか。

06は浅鉢の口縁部の破片である。内面に段を有するもので大波状の口縁となる。波頂部には渦巻が双方から対称形に描かれ文様部を構成している。加曾利E I式または阿玉台式終末段階と判断した。

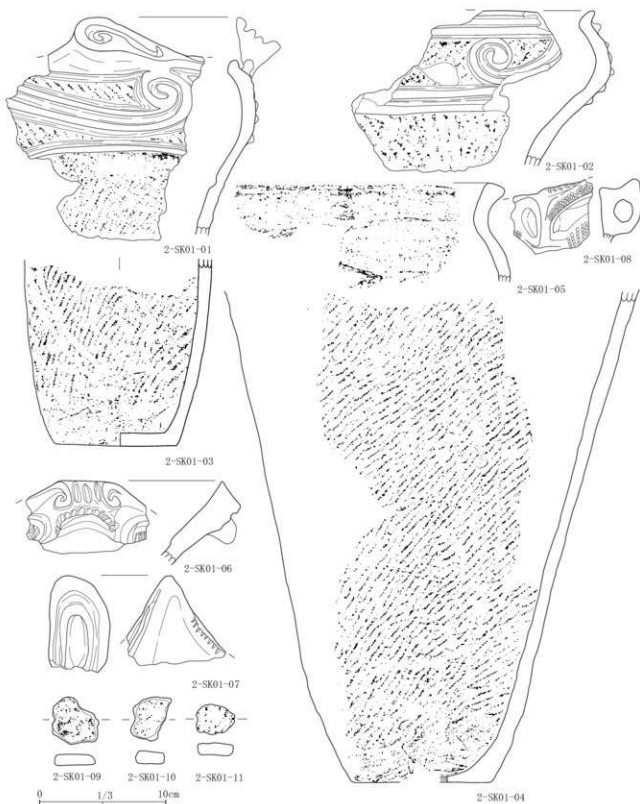
07は三角形に尖る突起部分の資料である。加曾利E I式の範疇であろう。



第62図 SK01

08は口縁部の眼鏡状の把手部分の破片である。隆帯により構成されるものであるが隆帯上には単節RLの縄文が施文される。阿玉台IV式または広義の中峠式の可能性がある。

09～11は土器片鏝である。いずれも胴部片を用いている。重量は09が14.5g、10が12.6g、11は9.0gを計る。



第63図 SK01出土遺物

## SK02 (第64図、図版20)

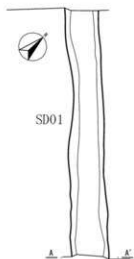
本遺構はA・4・5グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸66cm、短軸48cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは22cmを計る。断面形状は逆台形を呈する。

本遺構からは遺物は出土していない。



第64図 SK02

## 3 溝 (SD)



第65図 SD01

## SD01 (第65図、図版20)

本遺構はA・B-5グリッドにおいて調査区を東西に横断する状態で検出された。切り合う遺構はなく、調査を行った長さは5.16m、幅は最大で80cmを計る。断面は浅い箱型を呈し、確認面下の深さは30cmを計る。覆土は2層に分層され、人為堆積の様相を呈する。

遺構外出土遺物に示す縄文土器 (SD001-01) は検出されているが本遺構に伴うものではない。

## SD01

1層 2-S101、7/3 黒色土 粘性強 しまり中 ロームブロック径2～10cm・ローム粒子中、団化物  
 2～10cm・団化粒子少  
 2層 2-S102/3 黒褐色土 粘性強 しまり強 ロームブロック径2～10cm・ローム粒子多量。

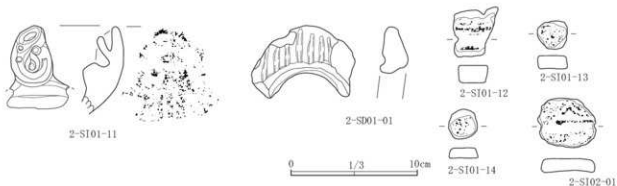
## 4 遺構外出土遺物 (第66図、図版80)

明確な共存関係が捉えられなかった遺物並びに、極端に遺構との時期差がある遺物について、遺構外出土遺物とした。

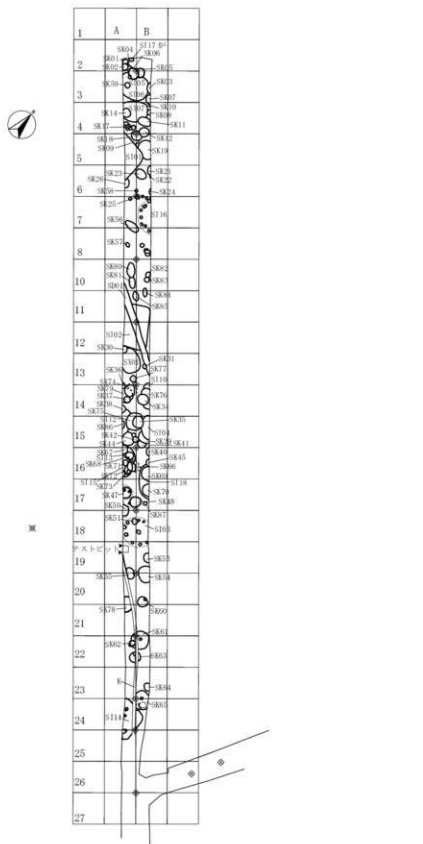
2-S101-11は堀之内2新式の突起部分の破片である。勾玉状の曲線と刺突により文様が構成される。外面には沈線による文様が描かれる。

2-SD01-01は環状を呈する把手部分の破片である。把手外面には縦方向の刻み目が施される。

2-S101-12～14、2-S102-01は土器片鏝である。重量は2-S101-12は23.6g、13は6.3g、14は4.9g、2-S102-01は22.3gを計る。



第66図 2区遺構外出土遺物



第 67 图 3 区全体图

## 第3項 3区

本区は1区の南側に位置し、北西から南東にかけてA・B-1～27グリッド、およそ85mの調査区である。南端部で5区および8区と連結している。

尚、調査区の呼称は工事着工順に命名したため番号が飛んでいる。

本遺跡中最も遺構が密集する地域である。幅およそ6mの調査範囲の中に、複雑に多くの遺構が重複しており調査は難航を極めた。

遺構の確認面は2区とほぼ同様であるため、標準堆積土層についてはA-19グリッドにおいて設けたテストピットにて行った。

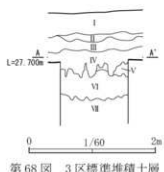
- |                     |                |                         |                  |
|---------------------|----------------|-------------------------|------------------|
| 1層 10YR 3/4 暗褐色土    | ロームブロックφ1～10cm | IV層 10YR 4/6 褐色土        | ロームブロックφ1～10cm   |
| 多量、耕作土。             |                | 多量、ソフトローム層、立川ローム層。      |                  |
| II層 10YR 2/3 黒褐色土   | ロームブロックφ1～5cm  | V層 10YR 4/6 褐色土         | ロームブロックφ1～3cm    |
| 多量。                 |                | 多量、しまり強、ハードローム層、立川ローム層。 |                  |
| III層 10YR 3/4 暗褐色土  | ロームブロックφ1～30cm | VI層 10YR 4/4 褐色土        | ロームブロックφ1～10cm   |
| 多量、暗褐色土ブロックφ30～80cm | 多量、ソフトローム転移層。  | 多量、しまり強、立川ローム層。         |                  |
|                     |                | VII層 10YR 4/4 褐色土       | ロームブロックφ1～10cm   |
|                     |                | 多量、黄褐色土ブロックφ1～2cm       | 後遺量、しまり強、立川ローム層。 |

## 1 住居跡 (SI)

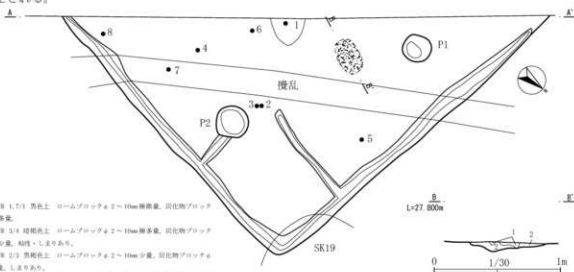
## SI01 (第69・70図、第6表、図版24・80)

本遺構はA・B-5・6グリッドにおいて検出された。南側が調査区域外になるが平面形状は方形を呈するものであろう。長軸、短軸ともに不明である。確認面下の掘り込みの深さは58cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。柱穴は2本検出され、本来対角線上に4本配されているものであろう。P1の南東側に楕円形の焼土が分布する部分が見られ、炉である。長軸58cm、短軸36cmを計る。床面は全面に硬化が見られる。全体に壁溝が巡るもので、P2を起点に2本の間仕切り溝が延びる。

本遺構は古墳時代中期の遺構である。遺物は土師器甕1点、埴1点、坏5点、高坏1点について提示した。詳細は観察表にまとめた。埴形土器の頸部が細くすぼまり、坏には小形の平底の底部を有している。5世紀中葉の遺構と想定される。



第68図 3区標準堆積土層

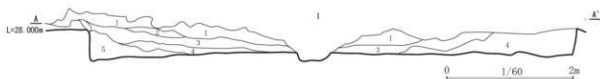


SI01

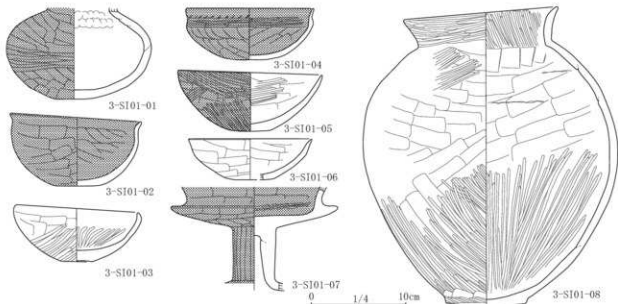
- 1層 10YR 1/1 黒色土
- ロームブロックφ2～10cm
- 後遺物ブロックφ2cm
- 多量。
- 2層 10YR 3/4 暗褐色土
- ロームブロックφ2～10cm
- 後遺物ブロックφ2cm
- 少量、粘り・しまりあり。
- 3層 10YR 2/3 黒褐色土
- ロームブロックφ2～10cm
- 少量、同化物ブロックφ2cm
- 多量、しまりあり。
- 4層 10YR 3/4 暗褐色土
- ロームブロックφ2～10cm
- 後遺物ブロックφ2cm
- 少量、しまり強。
- 5層 10YR 2/1 黒色土
- ロームブロックφ2～10cm
- 中量、同化物ブロックφ2cm
- 後遺物ブロックφ2cm
- 少量、粘りあり。

SI01-2'

- 1層 10YR 2/1 黒色土
- ロームブロックφ2～5cm
- 多量、焼土粒子φ2～5mm
- 少量、同化物ブロックφ2～5mm
- 多量。
- 2層 10YR 2/1 黒色土
- ロームブロックφ2～5cm
- 少量、焼土粒子φ2～5mm
- 多量、同化物ブロックφ2～5mm
- 少量、しまりあり、粘性なし。



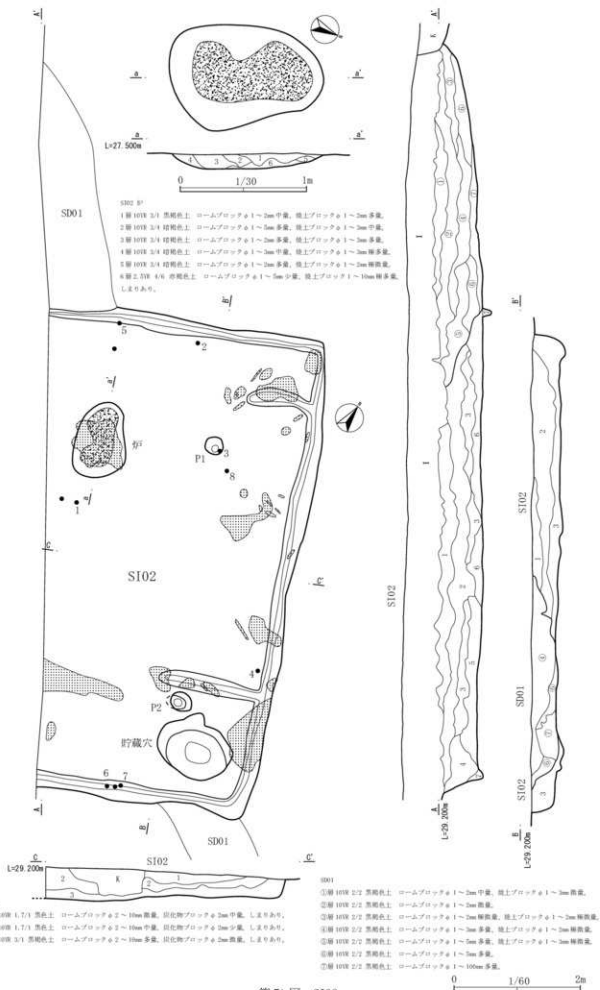
第69図 SI01



第70図 S101出土遺物

第6表 3区S101古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASS-3K-S1-1-7	土器部	埴	—	4.0	(9.6)	611.0	底部は平底で小形、胴部は潰れた球形を呈する。	中位に層付けが行われている事より、外面胴部ヘラナダで中位に縦方向のミガキが観察される。底部はナダ。内面に割差しているものは頸部直下に指張位置が確認出来る。	良好	内面10198/3 内面2.5195/6 明赤焼	白色胎子・雲母や多量、黒色胎子少量。	胴部	
2	ASS-3K-S1-1-1	土器部	杯	13.7	5.2	7.2	331.7	底部は平底。胴部は内湾して立ち口縁は短く外縁する。残形を呈し深さがある。	口縁は内外面共に横ナダ、外面底部～底部はヘラナダ。内面はナダ。	良好 二次焼成 7F	内外面2.5195/6 緑	長石・石英等小確や多量、雲母少量。	口縁欠損	内外面赤彩
3	ASS-3K-S1-1-2	土器部	杯	12.7	3.3	6.7	241.9	底部は小形でやや上げ底気味の平底。体部は縁や小かに内湾して開口縁は短く内縁する。鉢形を呈し、器脚は多い。	口縁は内外面共に横ナダ、外面底部はヘラナダ後ミガキ。底面はナダ。内面放射状味支有り。	良好	内外面3195/8 明赤焼	白色胎子・雲母や多量、黒色胎子・スコリア・白色針状物質微量。	1/2	
4	ASS-3K-S1-1-3	土器部	杯	13.3	丸底	5.4	204.9	底部は丸底。体部は縁や小かに内湾し内側に倒し縁を有した短く外縁する。	口縁は内外面共に横ナダ、体部外面はヘラナダ。上位ミガキが狭く短り。口縁直下には爪痕の圧痕が認め、内面はナダ。稜直下にミガキが軟く磨る。	良好	内外面2.5195/6 明赤焼	長石・石英や多量、雲母少量。	口縁1/4欠損	内外面赤彩
5	ASS-3K-S1-1-6	土器部	杯	15.1	3.6	6.2	261.8	底部は小形でやや上げ底気味の平底。体部は縁や小かに内湾して開く。鉢形を呈する。	内外面共にヘラナダ後ミガキ。	良好 二次焼成 7F	内面10195/4 内面10196/4 外内面10196/4 内面10197/4 内面10198/4 内面10199/4 に多い黄緑	長石・石英・雲母や多量、小確や多量、雲母少量。	胴部1/4欠損	外面赤彩
6	ASS-3K-S1-1-9	土器部	杯	(12.9)	(4.5)	4.3	55.6	底部は丸底気味の平底。体部は縁や小かに内湾して開く。口縁で更に短く外縁する。	口縁は内外面共に横ナダ、体部外面はヘラナダ。内面はナダ。	良好	内面10197/4 内面10198/4 内面10199/4 に多い黄緑	長石・石英等小確や多量、雲母少量。	胴部1/4欠損	
7	ASS-3K-S1-1-3	土器部	裝飾高杯	—	—	(10.4)	446.2	脚柱はほぼ円柱状に立つ。脚柱突起は大きく突出している。上縁見込みは平底である。	上縁外面はナダ、脚柱はミガキ。上縁内面はナダ。見込みはミガキ。脚柱内面はナダ製形。	良好	脚内面7.5195/6 脚外内面2.5195/6 明赤焼	雲母多量、長石・石英等小確や多量。	上縁口縁・胴部欠損	北極系 外面・上縁内面赤彩
8	ASS-3K-S1-1-4	土器部	甕	16.1	8.4	30.1	2384.3	底部はやや丸みを帯び円盤状に突出している。胴部はほぼ球形を呈する。口縁は「く」の字に屈曲した後縁底気味に外縁する。	口縁は内外面共にミガキ、胴部外面はナダ後部分のみミガキ。底部はヘラナダより後ミガキ。内面はナダ。下縁はミガキ。	良好	内面5195/6 明赤焼 外面7.5195/6 緑	白色胎子多い、小～中確や多量、雲母・白色針状物質微量。	胴部一部欠損	

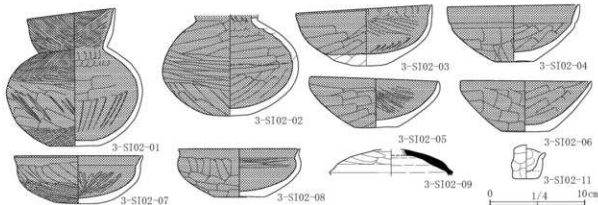


第71図 S102



## S102 (第71・72図、第7表、図版25・26・81)

本遺構はA・B-11・12グリッドにおいて検出された。SD01によって上層を切られている。北西側が調査区域外となるが、平面形状は方形を呈するものと思われる。南北軸は7.55mを計り、東西軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは38.8cm、覆土は自然堆積で7層に分層される。この内、1～4層はSD01の覆土の可能性がある。柱穴は2本検出され、本来対角線状に4本が配されるものと思われる。住居跡の東壁側を中心に焼土の分布が見られ、住居跡は火災にあったものと想定される。炉は住居中央やや北側に位置し浅い皿状の地床炉である。長軸1.24m、短軸85.8cmを計る。壁際には壁溝が全周し、東壁より2本の間仕切り溝が伸びている。床面は炉を中心に全面に硬化が見られる。住居の南東コーナー部分に貯蔵穴が1基検出されている。長軸1.19m、短軸85cm、床面からの



第72図 S102 出土遺物

第7表 3区S102古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	粘土	残存	備考
1	ASS-31C-S1-2-2	土器器	埴	9.2	5.5	13.5	612.2	底面は平底。胴部は濃れた鉢形を呈する。口縁は胴部に「く」の字に屈曲し、腹心の内底気味にならぶ。口縁は比較的浅い。胴部中位を砥石として転用。	口縁は内外面共にヒゲナズ。胴部はヒゲナズ。胴部外面はヒゲナズの横下位ヒゲナズが行われている。胴部内面はヒゲナズ。胴部底下に指間圧痕が観察出来る。	良好	白色粘土・黒色粘土や多い。雲母・白色針状物質少量。	内外面2.5105/6 明赤褐色	口縁一部欠損	胴部転用内外面赤褐色
2	ASS-31C-S1-2-3	土器器	埴	—	4.0	<10.5>	517.2	底面は平底。胴部は濃れた鉢形を呈する。	中位に彫行が打われている事より、外面胴部ヒゲナズ後中位に縦方向のヒゲナズが観察される。底面はヒゲナズ。胴部底下に指間圧痕が観察出来る。	良好 二次焼成	長石・石英・雲母や多い	内外面2.5106/6	胴部	内外面赤褐色
3	ASS-31C-S1-2-6	土器器	埴	14.3	3.9	5.9	228.7	底面は丸底気味の平底。体部は内湾し、口縁に弱い稜を有した後短く外反する。鉢形を呈する。	外面口縁は横ナズ。体部～底面はヒゲナズ。内面口縁は凹曲に近する圧痕有り。体部はヒゲナズ及びヒゲナズ彫。	良好	黒色粘土・雲母少量、白色針状物質微量。	内面2.5104/4 外面2.5104/4	2/3	内外面赤褐色 (外面体部下端面欠損)
4	ASS-31C-S1-2-8	土器器	埴	13.8	4.1	5.7	279.9	底面は僅かに上底気味の平底。体部は緩やかに内湾して開口口縁に至る。外面口縁直下に弱い凹曲が認められる。鉢形を呈する。	口縁は内外面共横ナズ。外面体部～底面はヒゲナズ。内面はヒゲナズ。	良好	白色粘土・雲母少量、白色針状物質微量。	内外面2.5105/6 明赤褐色	口縁一部欠損	内外面赤褐色
5	ASS-31C-S1-2-4	土器器	埴	13.5	4.3	5.0	208.3	底面は平底で小形。体部は緩やかに内湾して開口口縁は短く立つ。鉢形を呈する。	口縁は内外面共横ナズ。外面体部～底面はヒゲナズ。内面はヒゲナズ。	良好	雲母や多い、小へ中層、コロロコ。	内外面2.5105/4 に濃い黄褐色	3/4	内外面赤褐色
6	ASS-31C-S1-2-10	土器器	埴	13.7	5.2	5.3	240.0	底面は丸底気味の平底。体部は内湾して開口口縁に短く内湾する。	口縁は内外面共横ナズ。外面体部～底面はヒゲナズ及び内面はヒゲナズ。	良好 二次焼成	雲母多い、白色粘土少量、コロロコ、少量雲母。	内面2.5104/4 に濃い黄褐色 外面2.5105/6	底面1/2	内外面赤褐色
7	ASS-31C-S1-2-11	土器器	埴	13.4	4.7	4.9	239.3	底面は丸底気味の平底。体部は内湾し、口縁に弱い稜を有した後外反する。	口縁は内外面共横ナズ。外面体部～底面はヒゲナズ及び内面はヒゲナズ。	良好 二次焼成	黒色粘土や多い、雲母少量、白色針状物質微量。	内面3104/4	口縁一部欠損	内外面赤褐色
8	ASS-31C-S1-2-7	土器器	埴	(12.6)	5.3	5	120.7	底面は丸底気味の平底。体部は内湾し、口縁に弱い稜を有した後短く外反する。	口縁は内外面共横ナズ。外面体部～底面はヒゲナズ。内面は凹曲しているものの、上位にはヒゲナズが観察される。	良好 二次焼成	雲母多い、白色粘土・黒色粘土少量。	内外面2.5105/6 明赤褐色	口縁一部欠損	内外面赤褐色
9	ASS-31C-S1-2	煎豆器	蓋	—	—	<2.8>	22.7	天井～体部は緩やかに内湾する。縁は縁口に欠ける。	口縁は凹曲。天井外面は不整方向の手持ちヘラケズ。	良好	白色粘土少量。	内面10105/4 に濃い黄褐色 外面10105/4 に濃い黄褐色	1/8	東海系
11	ASS-31C-S1-2	土製品	手づね	2.2	4.4	3.5	33.1	指状を呈するもので、片側が夕口状になっている。	手・指による整形。	良好	白色粘土少量。	内面10105/4 に濃い黄褐色 外面10105/4 黄褐色	ほぼ完全	注11 泥形

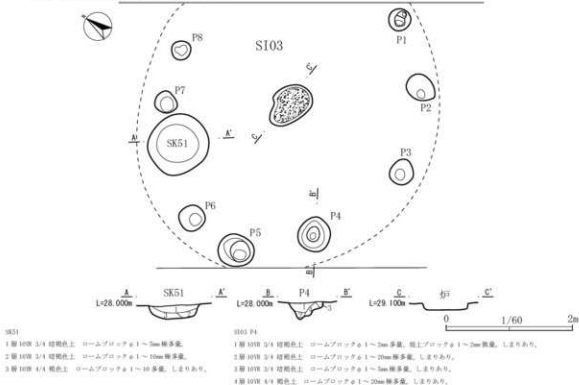
深さは70cmを計る。

遺物は炉および貯蔵穴周辺から出土している。本遺構出土遺物として掲載した遺物は埴2点、坏6点、須恵器蓋1点、手捏土器1点である。遺物の詳細な観察は第7表にまとめた。遺物は、SI01の構成とほぼ同様な器形で、09の須恵器坏蓋の出土から5世紀中葉の遺構と判断される。

#### SI03（第73～75図、第8表、図版26・27・81・82）

本遺構はA・B-18・19グリッドにおいて、P1～P8まで円形に配される柱穴群として検出された。平面形状は円形を呈するものと思われる。長軸、短軸ともに不明である。確認面がほぼ床面である。炉は住居のほぼ中央に位置し浅い皿状の地床炉である。長軸76cm、短軸53cmを計る。

本遺構出土遺物は50点を掲載した。

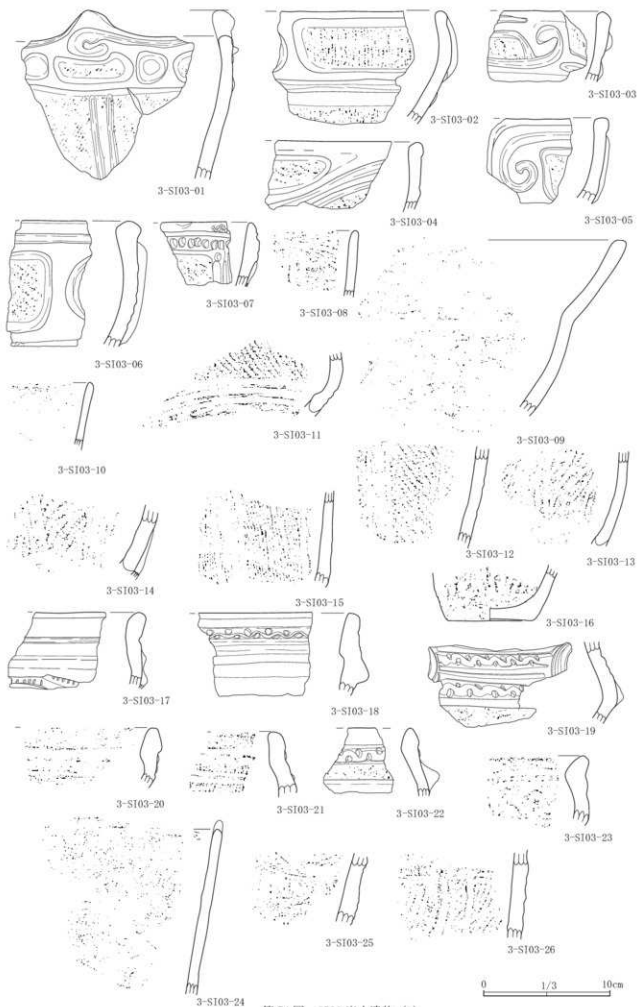


第73図 SI03

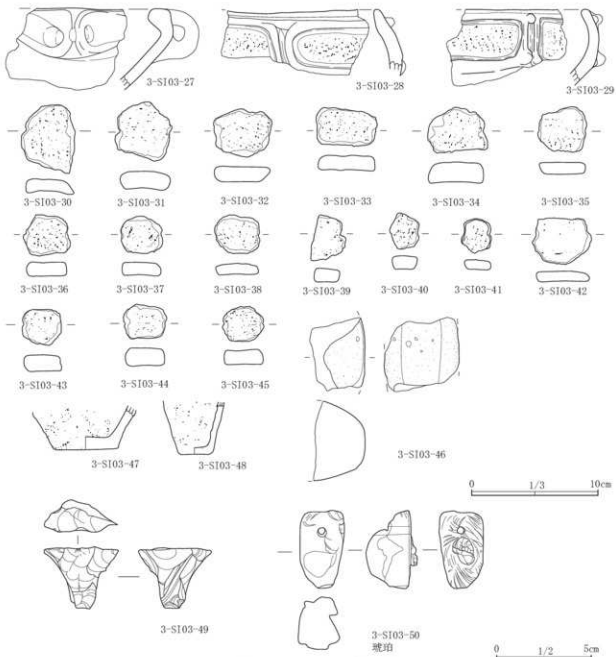
#### 土器・土製品

01～10は深鉢口縁部の資料である。01は波状口縁を呈し、円形および楕円形の区画が口縁部文様帯に隆帯により描かれる。また2本の懸垂文が垂下する。02は長方形の窓枠状の区画の中に条線を充填させる。胴部との境部には太い隆帯が巡り胴部にも条線が施文される。連弧文様式の土器である。03は渦巻が退化した隆帯により区画が設けられ、内部に太い短沈線が縦方向に施文される。04は二重隆帯による区画の内部にRLの単節縄文が充填される。05は渦巻を有する口縁部の破片で、長方形の区画内部には単節LRの縄文が施文される。06は05と同様であるが充填縄文はRLである。07は直線的に立つ口縁部の破片で、口唇直下に無文帯が回り、以下に円管の刺突列が連続施文される。胴部には懸垂文が見られRLの縄文が施文される。連弧文様式土器の可能性が高い。08は単節縄文を地文に太い沈線が縦方向に描かれた後口辺に沿って斜方向の沈線が加わる。09は大形の深鉢である。平縁の口縁であろう。胴部で屈曲して口縁は大きく開く。10は無文の口縁部破片である。直立気味に立つ。11はキャリパー形土器の頸部括れ部分の破片である。頸部と胴部の境には二重隆帯が巡る。口縁部文様帯は隆帯が描かれるものか、地文には複節RLRの縄文が施文される。12～16は深鉢形土器の胴下半部～底部の破片である。いずれも縦の懸垂文が垂下する。地文はRLの縦施文が大半であるが、15のみ条線が地文となっている。加曾利EⅢ式古段階と加曾利EⅡ～Ⅲ式段階が混在する。また、これらの土器に伴うものであろう少量の連弧文様式の土器が出土している。

17～23は屈曲する口縁部の資料で、18・19・21～23では口縁部の無文帯直下に交互刺突文が施文される。勝



第74图 SI03出土遺物(1)



第75図 S103出土遺物(2)

第8表 3区S103古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
47	ASB 3IX- SI-3	土師器	小型壺 (底部)	—	5.0	(3.3)	73.0	底部は平底で小形。胴部下端は点状的に開く。	底部は丁字ノズ及び口唇を有する。胴部下端には部分的なノズが観察される。	良好	内面103R5/4 に白い黄褐色 外面7.53/1 オリーブ色	雲母多い、白色 粒子少量。	底部	古墳時代 中期
48	ASB 3IX- SI-3	土製品	手づ くね	5.1	2.7	3.9	31.4	バケツ形を呈する。底部は平底。	手・指による調整と共に、外面には指状工具の上による整形が認められる。	良好	内面103R5/3 に白い黄褐色 外面103R6/2 灰黄褐色	白色粒子少量、 雲母微量。	口縁 1/2 欠損	

坂式の影響を受ける広義の中鉢式と判断される。24～27も勝坂式の土器であろう。

28・29はキャリバー形土器で、二重縁線による貼り付け文が口縁部に区画帯を設ける。地文には28でRL、29ではLR縄文が施文される。加曽利E I式段階であろう。

30～45は土器片鏝である。30は30.4g、31は30.1g、32は23.4g、33は23.2g、34は24.3g、35は16.8g、36は17.4g、37は11.7g、38は10.4g、39は10.1g、40は7.7g、41は6.2g、42は18.4g、43は14.3g、44は15.2g、45は11.6gを計る。

47・48はミニチュア土器である。口縁部はいずれも欠損する。無文。土師器手づくね土器の可能性のある為、古代遺物観察表第8表に掲載した。

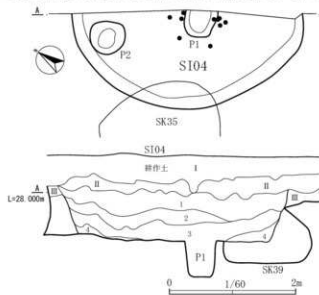
## 石器・石製品

46は磨石である。側面および上下両端ともに欠損する。右側面は擦られて平坦になる。材質は安山岩である。

49は石核である。チャート製で打面を平坦に折りこつた後、複数の剥片を剥がしている。

50は琥珀の大珠である。上部端に穿孔が施されている。穿孔は円筒状を呈し1方向から行われる。本来本琥珀玉は楕円形を呈するものであったと思われる、擦切り技法によって分割が行われている。最終的な切断時に中心部が臍状に残されている。加曽利E III式期に伴うものと判断される。重量は13.2gを計る。

本遺構から検出された遺物は加曽利E I式段階、勝坂式段階、中峠式段階と加曽利E III式段階および加曽利E III式段階平行と考えられる2群の遺物が確認されている。遺構の重複があったものと判断される。



第76図 S104

S104 (第76・77図、図版27・82)

本遺構はB-15グリッドにおいて検出された。SK35・39を切っている。北東側が調査区外になるために、平面形状は明確ではないが円形を呈するものと思われる。壁側の長さは3.73mを計る。確認面下の掘り込みの深さは78cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。柱穴は2本検出されている。炉は検出されていない。

本遺構出土遺物では18点を提示した。

S104

- 1層 10層 3/4 緑褐色土 コームブロッコッポ1〜2m多量、焼土ブロッコッポ1〜2m少量、しりりあり。
- 2層 10層 3/4 緑褐色土 コームブロッコッポ1〜2m中量、焼土ブロッコッポ1〜2m少量、しりりあり。
- 3層 10層 3/4 緑褐色土 コームブロッコッポ1〜10m少量、しりりあり。
- 4層 10層 3/4 緑褐色土 コームブロッコッポ1〜20m少量、しりりあり。

## 土器・土製品

01は4単位の突起を有するキャリバー形の土器である。胴下半から底部を欠損する。口縁部の突起は4単位の大型把手と、その間を埋める小波状の突起が付される。口縁部文様帯は口縁部の沈線から連繋する渦巻により円形もしくは三角形の区画が設けられ内部には単節LRの縄文が充填される。頸部の無文帯は明瞭でなくS字の沈線が胴部との境に巡る。胴部はLRの縄文が全面に施文された後直線状に垂下する3本の懸垂文と蛇行する2本の懸垂文が交互に描かれる。加曽利E II式新段階と判断される。02は胴部の資料である。底部および口縁部は欠損している。沈線による懸垂文が3本1単位で施文され、沈線間の磨消は明瞭ではない。やはり加曽利E II式新段階の範疇で収まるものと判断される。

03〜05は二重隆線が口縁部文様帯に曲線を描く資料である。地文はいずれも単節RLである。加曽利E I式新段階〜E II式古段階の資料であろう。06〜08は直線的に開く深鉢の口縁部資料で、沈線による文様が描かれる。口縁部は無文帯を有す。地文には単節縄文が施文される。

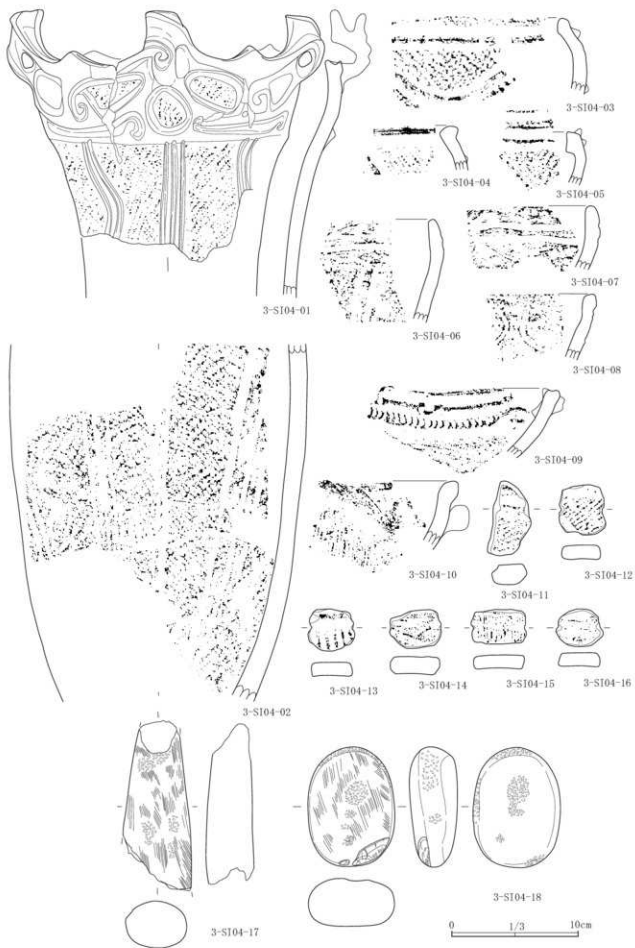
09は浅鉢口縁部の破片である。口縁部に沿って隆線が巡り、隆線には交互刺突によるクランク文が等間隔に刻まれる。折り返し部分には刻みが施される。胴部は無文で、勝坂式土器と判断される。10は内湾する深鉢口縁で、Y字状の貼付文が口縁直下に付される。阿玉台IV式の可能性がある。

11〜16は土器片鏝である。11は24.4g、12は16.3g、13は18.4g、14は20.5g、15は19.5g、16は15.7gを計る。

## 石器

17は断面形状が丸みを帯びる、乳棒状の磨製石斧である。緑色岩類を素材にするもので基部および刃部は欠損している。全体に研磨は粗く、敲打痕が残る。重量は404.6g。

18は凹石・磨石である。上下両面に窪みが穿たれるが、浅い。側面および上下両面はよく擦られている。材質は安山岩。重量は364.3gを計る。

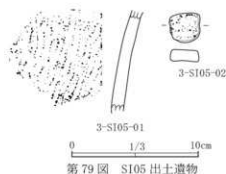


第77图 S104出土遺物



## SI05 (第78・79図、図版29・82)

本遺構はA・B-3グリッドにおいて検出された。SI06・07・SK03・05・07と重複しており、さらに中央部分に送水管による攪乱がこれらの遺構を切っており、新旧関係は複雑な様相を呈している。平面形状は円形と想定される。長軸は不明、短軸2.47mを計る。確認面下の掘り込みの深さは49cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。柱穴は北壁寄りに4本検出されるが明瞭ではない。炉は検出されていない。床面は全面に硬化が見られる。



第79図 SI05出土遺物

本遺構から出土した遺物は僅かで、掲載資料は2点である。SI05-01は深鉢胴部破片である。単節RLを地文にし、蛇行懸垂文が垂下する。上半部に頸部無文帯が観察されることより、加曾利EⅡ式古段階カ。02は土器片鏝である。7.8gを計る。小形の土器片鏝で、全体に丁寧に削られている。

## SI06 (第78図、図版29)

本遺構はA・B-3グリッドにおいて検出された。本遺構はSI05・07・17・SK04・06・59と重複しており、SK06に切られるものの、SI07・SK59を切っている。また、SI17は本遺構の上層にかぶっている。平面形状は不整形円形を呈し、長軸は不明、短軸2.27mを計る。確認面下の掘り込みの深さは64cm、覆土は自然堆積で2層に分層される。柱穴は3本検出されているものの配置は不明瞭である。炉は検出されていない。

本遺構に伴う遺物として掲載資料はない。

## SI07 (第78・80図、図版28・29・83)

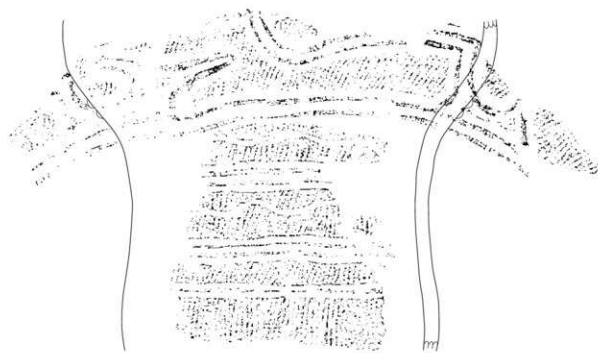
本遺構はA・B-3・4グリッドにおいて検出された。SI05・06・SK07・08・10・12・14と重複しているが、新旧関係は不明瞭である。平面形状は楕円形を呈し、長軸3.93mを計り、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは19cm、覆土は自然堆積で2層に分層される。柱穴は9本検出され、概ね楕円形に配列される。炉は住居の中央やや西寄りに位置し浅い皿状の地床炉である。長軸72cmを計り、短軸は不明。床面は炉を中心に全面に硬化が見られる。

本遺構から出土した遺物は完形に近い深鉢2点と、胴部から頸部の破片資料1点、土器片鏝1点、石鏝1点である。01はキャリパー形の深鉢口縁部文様帯から胴部にかけての資料である。口唇部および胴下半から底部は欠損している。頸部で緩やかにくびれた後胴部は下半に向かいやや下膨れとなる。口縁部文様帯には二重隆線によって頸部との区画がなされ、同じ二重隆線により剣先文、S字文様が描かれる。頸部には無文帯は有さず、横走する平行沈線によって多段に区分けされた内部に波状の沈線が描かれる。地文は単節LRの縄文がやや45°の方向に施文させ、縦方向の縄文を構成している。加曾利EⅠ式最古段階東京駒野遺跡例に酷似する。02は4単位の緩やかな波状を呈する深鉢の口縁から胴部上半の資料である。二重隆線により胴部と頸部は区画され、口縁部文様帯には同じ二重隆線によってS字の文様が描かれる。地文には0段多条のRLが縦方向に回転施文される。加曾利EⅠ式最古段階～古段階の資料と判断される。03は01・02と同様の頸部から胴部上半の破片である。頸部と胴部の境には、隆帯が1条走る。地文は無節Rの縄文が口縁部では横方向に、胴部には縦方向に回転施文されている。加曾利EⅠ式古段階と判断される。04は土器片鏝である。小形の土鏝で、周縁はよく削り込まれている。重量は9.3gを計る。05は石鏝である。先端部を僅かに欠損する。外側が内湾する回基三角鏝である。材質はチャートである。

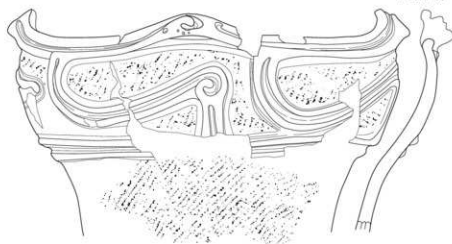
P19-01～03は本住居内において検出されたピット出土遺物である。したがって、本遺構に伴う遺物と判断されるが、遺物の説明はピットの項で行った。

## SI08・09 土坑と判断されたため、欠番である。





3-S107-01



3-S107-02



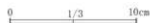
3-S107-03



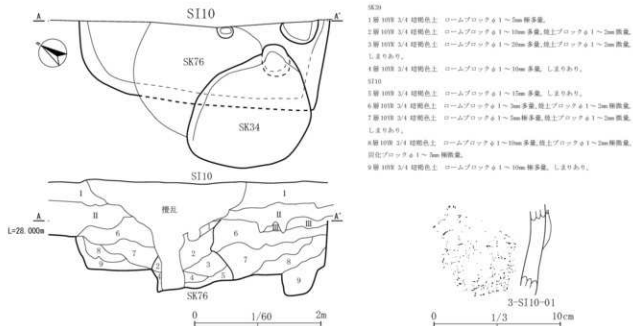
3-S107-04



3-S107-05



第80圖 S107出土遺物



SK34

- 1層 10層 3/4 埴明色土 ロームブロックが1〜5mm程度多量。
- 2層 10層 3/4 埴明色土 ロームブロックが1〜10mm程度、焼土ブロックが1〜2mm程度。
- 3層 10層 3/4 埴明色土 ロームブロックが1〜20mm程度、焼土ブロックが1〜2mm程度、しまりあり。
- 4層 10層 3/4 埴明色土 ロームブロックが1〜10mm程度、しまりあり。
- 5層 10層 3/4 埴明色土 ロームブロックが1〜15mm程度、しまりあり。
- 6層 10層 3/4 埴明色土 ロームブロックが1〜2mm程度、焼土ブロックが1〜2mm程度。
- 7層 10層 3/4 埴明色土 ロームブロックが1〜5mm程度多量、焼土ブロックが1〜2mm程度、しまりあり。
- 8層 10層 3/4 埴明色土 ロームブロックが1〜10mm程度、焼土ブロックが1〜2mm程度、焼土ブロックが1〜2mm程度。
- 9層 10層 3/4 埴明色土 ロームブロックが1〜10mm程度多量、しまりあり。

## SI10 (第81図、図版29・30・83)

本遺構はB-14グリッドにおいて検出された。SK34およびSK76によって切られている。平面形状は不明、東側調査区壁では3.96mを計る。確認面下の掘り込みの深さは50.2cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。柱穴は1本検出されている。炉は検出されていない。

本遺から出土した遺物は僅かである。時期が判別できる資料として土器片1点を掲げた。

01は口縁直下から頸部付近の資料である。胴部には単節LRの縄文が施文される。口縁部は太い隆帯の貼付による渦巻文が描かれるものであろう。加曾利EⅢ式と判断される。

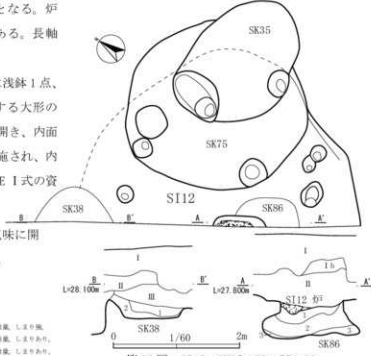
## SI11 欠番である。

## SI12 (第82・83図、図版30・83)

本遺構はA-14・15グリッドにおいて検出された。平面形状は西側が調査区域の外となり、さらにSK35・38・75に切られており、SK86を切る。円形を呈するものと判断される。長軸不明、短軸4.44m前後と推定される。柱穴は7本検出され、弧状に配列され、主柱穴となる。炉は住居の中央に位置し浅い皿状の地床炉である。長軸85.2cm、短軸は調査区外のため不明。

本遺構から出土した遺物で掲載した資料は浅鉢1点、深鉢底部1点の2点である。01は波状を呈する大形の浅鉢で4単位の波状を呈する。口縁は大きく開き、内面に段を有する。口唇部および内面には赤彩が施され、内面はよく磨かれている。阿玉台Ⅳ式〜加曾利EⅠ式の資料と判断される。

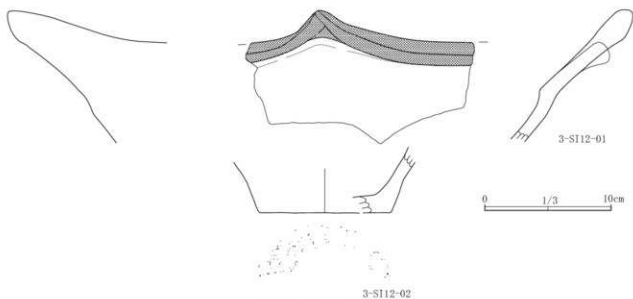
02は深鉢底部の資料である。胴部は反外気味に開く。底部には木葉痕が残る。胴下半部は無文。



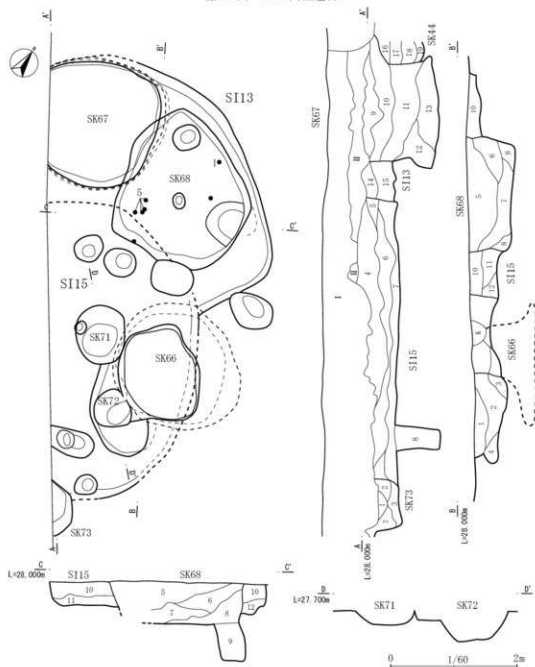
第82図 SI12・SK35・38・75・86

SK38

- 1層 10層 3/4 埴明色土 ロームブロックが1〜40mm程度、しまりあり。
- 2層 10層 3/4 埴明色土 ロームブロックが1〜2mm程度多量。
- 3層 10層 3/4 埴明色土 ロームブロックが2〜10mm程度、炭化物ブロックが2mm程度、しまりあり。
- 4層 10層 3/4 埴明色土 ロームブロックが2〜10mm程度、炭化物ブロックが2mm程度、しまりあり。
- 5層 10層 1/3 埴明色土 ロームブロックが2〜10mm程度、炭化物ブロックが2mm程度、しまりあり。



第83図 SI12出土遺物



第84図 SI13・15・SK66・67・68・71・72・73

S112・15・SK64・66・67・68・72

- 1層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～2cm 中量。  
 2層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～5cm 多量、焼土ブロック層1～2cm 少量。  
 3層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～5cm 多量、しりとりあり。  
 4層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～2cm 多量、焼土ブロック層1～2cm 少量、反応物ブロック層1～2cm 少量。  
 5層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～2cm 中量。  
 6層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～2cm 多量、焼土ブロック層1～5cm 少量、反応物ブロック層少量。  
 7層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～20cm 多量、反応物ブロック層1～5cm 少量、しりとりあり。  
 8層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～5cm 多量。  
 9層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～2cm 多量、焼土ブロック層1～2cm 少量。

- 10層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～2cm 多量、焼土ブロック層1～2cm 少量。  
 11層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～10cm 多量、焼土ブロック層1～2cm 少量、反応物ブロック層1～2cm 少量。  
 12層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～20cm 多量。  
 13層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～100cm 多量、焼土ブロック層1～2cm 少量。  
 14層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～2cm 中量。  
 15層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～2cm 中量、焼土ブロック層1～2cm 少量、反応物ブロック層1～2cm 少量。  
 16層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～5cm 多量、焼土ブロック層1～10cm 少量。  
 17層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～2cm 多量、反応物ブロック層1～2cm 少量。  
 18層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～5cm 多量、しりとりあり。  
 19層 10Ⅸ 3/4 埴明土 ロームブロック層1～10cm 多量、反応物ブロック層1～2cm 少量、しりとりあり。

## S113 (第84図、図版30・31)

本遺構はA-15・16グリッドにおいて検出された。本遺構はS115・SK67・68によって切られており、平面形状は不整形を呈すると思われるが詳細不明である。長軸は不明、短軸4.57mを計る。確認面下の掘り込みの深さは47cm、覆土は自然堆積で2層に分層される。柱穴および炉は検出されていない。

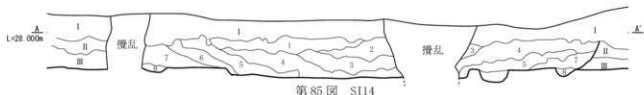
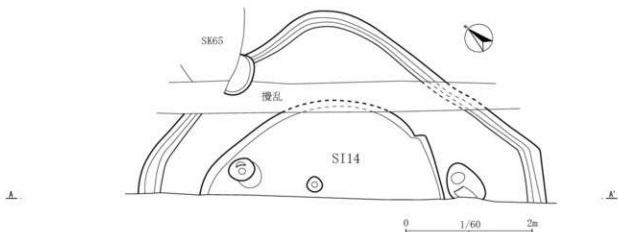
本遺構に伴う掲載遺物はない。

## S114 (第85・86図、図版31・83)

本遺構はA・B-24・25グリッドにおいて検出された。平面形状は隅丸方形を呈し、住居跡中央部分に1段低い床面を持つ。長軸は不明、短軸は4.06mを計る。確認面下の掘り込みの深さは57cm、覆土は自然堆積で8層に分層される。柱穴は3本検出されている。炉は検出されていない。外面壁際には壁溝が全周している。

本遺構から出土した遺物で、時期が判別できる資料は2点のみであった。いずれも深鉢の資料で01は口縁部、02は口縁直下の文様部下半の資料である。いずれも隆帯に沿って角押文が施文されている。阿玉台式土器と判断される。

住居跡の構造が2段に掘り込まれる類型は、阿玉台式期において通有に見られるものである。



第86図 S114出土遺物

## SI15 (第84・87図、図版30・32・83)

本遺構はA-16グリッドにおいて検出された。SI13・SK66・68・71・72・73と重複しており、SI13が最も古くSI15が次に新しい。土坑はすべて住居跡を切っている。平面形状は円形を呈するものと思われる。長軸4.74m、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは42cm、覆土は自然堆積で8層に分層される。柱穴は4本検出されている。炉は検出されていない。

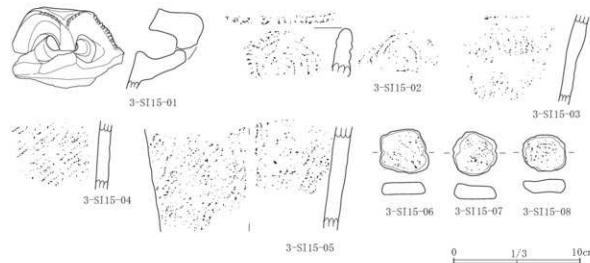
本遺構から出土した遺物で、掲載した遺物は土器資料5点、土製品の土器片鏝3点である。

01・02は把手部分の資料である。01では隆帯による眼鏡状の把手で、端部に刻みが施されている。02は円形の扇状把手で、内外面に沈線による渦巻文様が描かれる。また円形の縁部には刻みが施される。

03～05は深鉢胴部の破片である。03では縦方向を意識した単節縄文が施文される。04では単節RLの縄文が縦方向に回転施文され、蛇行沈線が垂下する。05ではやはりRLの縄文が縦方向に回転されるもので、2本の沈線による懸垂文が垂下する。

これらの資料は加曽利E I式段階に比定されるものであろう。

06～08は土器片鏝である。06は15.1g、07は14.5g、08は11.2gを計る。いずれも側面の調整が粗い。



第87図 SI15出土遺物

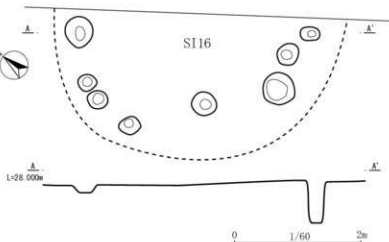
## SI16 (第88・89図、図版32・84)

本遺構はB-7・8グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈し、直径4.68mを計る。本遺構は遺構確認面において弧状に並ぶ柱穴8本をもって住居跡とした。炉は検出されていない。

本遺構から出土した遺物は、総重量20668.9gと大量に出土している。このうち土器・土製品7点について掲載した。

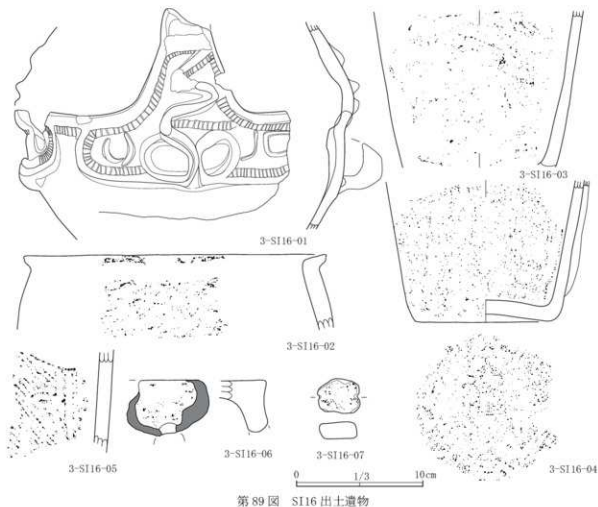
01は大波状の4単位把手を有する深鉢口縁部から胴上半部の資料である。把手

はやや内湾気味に立ち隆帯に沿ってキャタピラ状の角押文が施文される。隆帯により窓枠状の区画が設けられ、内部には沈線が充填される。また、突起の直下には波頂部から蛇行する隆帯と連結して眼鏡状の突起が付される。胴部は無文。阿玉台Ⅲ式であろう。02は内傾する口縁部で口唇部は直角に屈曲して開く。胴部は無文。勝坂式系か。03・04は胴下半部～底部にかけての資料である。03では無文で胴下半は筒状を呈する。04は同様にあまり開かない胴部～底部の資料であるが、胴部には隆帯が垂下し、隆帯に沿って角押文が施文される。底部には網状の圧痕



第88図 SI16

が施されている。阿玉台Ⅱ～Ⅲ式と判断される。05は深鉢胴部の破片である。直線的に立つ部分で、胴下半であろう。無節の縄文しが縦方向に回転施文され、沈線によりトの字文が施文される。加曾利EⅠ式古段階であろう。06は台形土器である。台部から脚部へと屈曲する部分の細片である。台部は平坦で平滑に仕上げられる。脚部はほぼ垂直に垂下し、下端に円孔が穿たれている。破片の為に径・高さ共に不明である。07は土器片鏝である。無文部の破片を用いている。重量は13.0gを計る。



第89図 SI16出土遺物

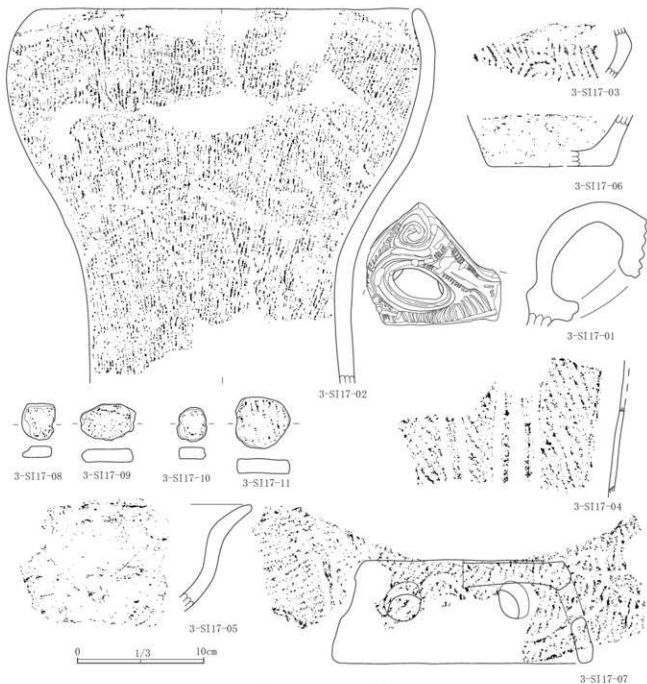
#### SI17 (第78・90図、図版32・83)

本遺構はA・B-2・3グリッドにおいて検出された。本遺構はSI05・06・SK01・02・03・05・06と重複している。この内SK06は本住居跡よりも古く、その他は新しい。平面形状は不明。柱穴は6本、弧状に配されている。炉は住居の西側に位置し浅い皿状の地床炉である。長軸は不明、短軸55cmを計る。

本遺構からは遺物が9743g出土している。第78図に掲載した遺構の中でSK06上層に出土した遺物は、本遺構に伴うものと判断した。このうち時期形状の判る遺物11点について掲載した。

01は円環状の把手部分である。単位数は不明であるが、外傾して土器の口縁に付されている。頂部に渦巻を配し、端部には刻みを施し、隙間には太い沈線が縦方向に充填される。広義の中鉢式に含まれるものであろう。02は深鉢形土器の口縁から胴下半にかけての資料である。口縁部から頸部にかけて大きく内湾する。胴部は下方に向かいやや外反気味に開く。口縁直下に僅かながら無文部があるが、後は全面に縦方向の条線を意識する撚糸が施文される勝坂式土器(井戸尻式3段階)であろう。下半部は欠損するが底部はそろばん玉状に張る可能性がある。03は内湾する頸部の破片である。口縁部は無文帯となり、以下は沈線による文様が描かれる。勝坂式と判断される。04は磨消懸垂文が施文される胴部の破片である。加曾利EⅡ式。混入資料であろう。05は浅鉢口縁部の破片である。口縁は大きく外反して開く。内外面共に無文である。形状から判断できないが出土遺物のセットから勝坂式と判断される。

06は深鉢底部。無文で時期形式は不明。07は台形土器である。台部はやや中央がくぼみ、平滑に成形されている。脚部は直線的にやや開き気味になる。端部は丸みを帯びる。側面には全面に単筋LRの縄文が施文された後、2本の沈線により波状の文様が全体に巡る。その後、脚部には6個の円孔が等間隔に穿たれている。内面の整形は比較的粗い。08～11は土器片鏝である。胴部の破片を用いるもので、形はあまり整っていない。重量は08は7.3g、09は14.8g、10は7.6g、11は22.0gを計る。



第90図 SI17出土遺物

S118 (第157図)

本遺構はB-16・17グリッドにおいて検出されている。SK69・70と重複しており、いずれの土坑からも切られている。したがって、本遺構の形状・規模については不明である。さらに、本遺構に伴う遺物も確認されていない。

遺構図面はSK69・70と併記した。

## 2 土坑 (SK)

## SK01 (図版 33)

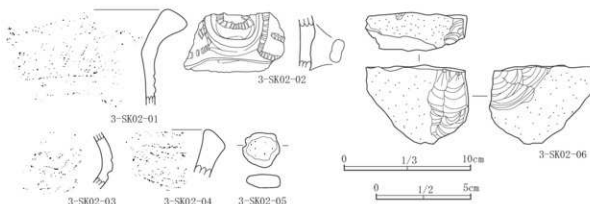
本遺構はA-2グリッドにおいて検出されたものであるが、遺物の出土もなく、割愛した。

## SK02 (第78・91図、図版33・85)

本遺構はA-2グリッドにおいて検出された。平面形状は不明。確認面下の掘り込みの深さは36cmを計る。

本遺構から出土した遺物は土器・土製品5点、石器1点について掲載した。全体に明確な資料が少なく、時期の判別できる資料のみ提示した。

01は胴部から口縁部にかけての破片である。胴部は直立気味で、口縁部は屈曲し、くの字に外反する。口縁部は三角形に肥厚し平坦に面取られる。口縁部は無文。頸部は単節RLの縦回転施文。胴部との境には竹管による平行沈線が2条巡る。勝坂式と判断される。02は円環状の突起を有する口縁部文様帯の破片である。隆帯により区画された内部には、角押文が1条描かれる。阿玉台式後半と判断される。03は口縁部直下の破片で、口縁直下に無文部を有す。太い沈線により渦巻文が描かれる。渦巻により残された隆起部分には単節RLの縄文が施文される。阿玉台IV式。04は01同様の断面三角形の口縁部の破片である。隆帯状の突起直下には、キャタピラ状の角押文が施文される。勝坂式。05は土器片錘である。重量は10.7gを計る。06はチャートの石核である。板状を呈する原石を用いるもので、端部に打撃を加えて打面を形成した後、縦長の剥片を2枚削がしている。



第91図 SK02出土遺物

## SK03 (第78・92図、図版33・85)

本遺構はB-3グリッドにおいて検出された。北側にSI17の柱穴が重複し、本遺構を切っている。平面形状は東側が調査区外となるため不明。長軸2.25mを計り、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは30cm、覆土は自然堆積で7層に分層される。

本遺構で出土した遺物で器形・時期が判別できる6点の資料を提示した。

01は深鉢口縁から胴上半部の資料である。外反気味に開く胴部は口縁で緩やかに内湾する。口唇端部はやや平坦に面取りされる。口縁部の文様帯には降線により退化した渦巻文が描かれる。胴部は、やや幅の狭い磨消懸垂文が垂下する。02～04は01同様の渦巻部分の破片で、いずれも口縁部直下に配されている。加曾利EⅢ式古段階である。

05は深鉢胴部下半の破片である。単節RLの縄文を縦方向に回転施文し、3本の沈線による懸垂文が垂下する。加曾利EⅡ式段階であろう。

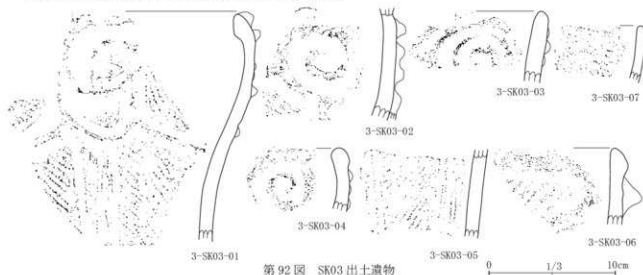
06は隆帯により窓枠状の区画が設けられる口縁部の破片である。口縁部はやや三角形に尖り、内面に平坦な面



取りが行われる。区画内にはしの無節縄文が充填される。加曾利E式であろう。

07はやや内湾気味に立つ口縁部の破片である。外面には複節の縄文が無作為に施文するものである。口縁内面に沈線は見られない。掘之内式土器の可能性はある。

本遺構は出土遺物から加曾利EⅢ式古段階と判断される。



第92図 SK03 出土遺物

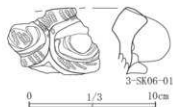
#### SK04・05 (図版33)

本遺構はA-2・3グリッドにおいて検出されたものであるが、遺物の出土もなく、割愛した。

#### SK06 (第78・93図、図版34・85)

本遺構はA-2・3グリッドにおいて検出された。SI05・06・17・SK05と重複している。これらの中で最も古いものと思われる。平面形状は不明、長軸は不明、短軸1.96mを計る。確認面下の掘り込みの深さは40.5cmを計る。

本遺構からは僅か150g程度の遺物が出土している。このうち深鉢突起部分の破片01の1点のみ提示した。隆帯により眼鏡状の隆帯を作り、隆帯上には単節RLの縄文が施文される。阿玉台IV式段階であろう。



第93図 SK06 出土遺物

#### SK07 (第78・94図、図版34・85)

本遺構はB-3グリッドにおいて検出された。SI07・SK10と重複するが、新旧関係は不明である。平面形状は円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.84mを計る。確認面下の掘り込みの深さは59cmを計る。

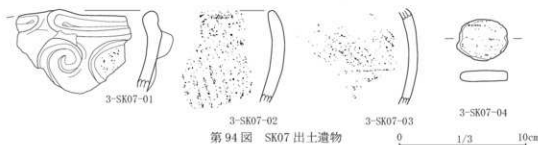
本遺構から出土した遺物は、2591gである。この内4点について掲載した。

01は深鉢口縁部の破片である。緩やかな波状を呈する。口縁部は緩やかに内湾し、口唇部で短く屈曲してくの字に内屈する。口縁部文様帯には渦巻状の隆帯を貼り付けを行う。隆帯による窓枠状の区画の内部には僅かながら縄文が観察される。加曾利EⅢ式新段階。

02は内湾する口縁部の破片。口唇直下より全面に縦方向の条線が施文される。加曾利E式であろう。

03は大きく内湾する胴部下の資料である。磨消懸垂文が垂下し、単節LRの縄文が施文されている。加曾利EⅢ式新段階と判断した。

04は土器片鏝である。胴部の懸垂文の部分であろう。重量は15.1gを計る。



第94図 SK07 出土遺物

## SK08 (第78図、図版34)

本遺構はB-4グリッドにおいて検出された。SI07と重複する。新旧関係は不明。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。長軸は不明、短軸1.51mを計る。確認の掘り込みの深さは58cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。本遺構の掲載遺物はない。

## SK09 (第102図)

本遺構はA・B-5グリッドにおいて検出された。SI01・SK18と重複する。平面形状は不明。確認の掘り込みの深さは44cmを計る。本遺構の掲載遺物はない。

## SK10 (第78図、図版34)

本遺構はB-4グリッドにおいて検出された。SK07・08と重複しており、SK08に切られている。平面形状・長軸・短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは64cmを計る。

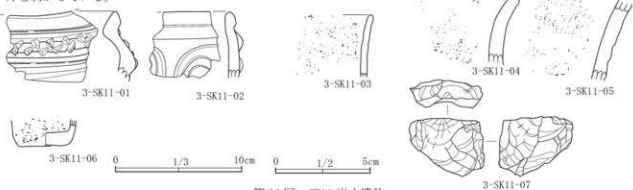
本遺構から遺物は出土していない。

## SK11 (第95・96図、図版34・85)

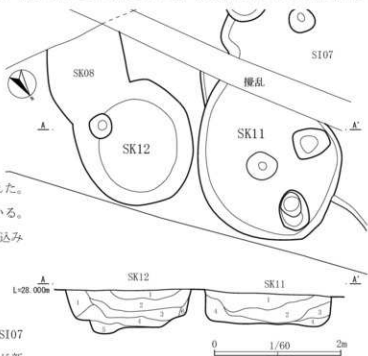
本遺構はB-4グリッドにおいて検出された。SI07と重複する。SI07を切っており、本遺構の方が新しい。平面形状は楕円形を呈し、長軸不明、短軸1.43mを計る。確認面下の掘り込みの深さは29cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

01は口縁部の破片である。頸部で緩やかに内湾した後口縁部はくの字に屈曲して開く。口縁部文様帯は口唇部に無文部を有し、直下に隆線で囲まれる

内部に交互刺突文が配される。広義の中鉢式。02は直立気味に立つ口縁。外面には太い隆線による貼り付けが行われ円形の区画文が描かれる。勝板式カ。03は外反気味に開く口縁部の破片である。口唇部の折り返しは無い。口唇部に僅かながら無文帯を有した後、縦方向の条線が平行沈線を用いて描かれる。阿玉台IV式カ。04は外反する口縁部の破片である。口縁直下にやや幅広の無文帯を有し、以下に単筋LRの縄文を施文する。勝板式系カ。05は04と同一個体か、外反する頸部下半の土器である。04同様の縄文が縦方向を意識して回転施文されている。頸部には太い沈線が3条巡って、胴部と画している。06は小形の深鉢底部である。3条の懸垂文が胴部下端にまで施文される。加曾利EⅡ式のミニチュア土器カ。07はチャートの石核である。折面を打点にして縦方向に複数の剥片を剥がしている。



第96図 SK11出土遺物



第95図 SK11・12

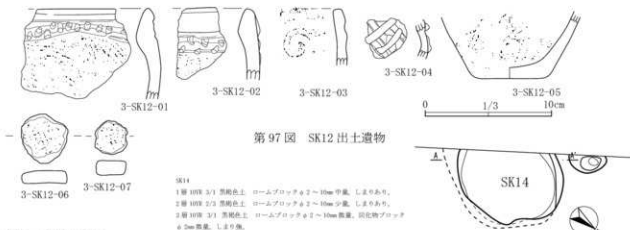
- SK11
- 1層 H10E 2/1 黒褐色土 コームブロッコエ $\approx$ 20cm中量。反応物ブロッコエ2cm少量。しりりあり。
  - 2層 H10E 1.7/1 黒褐色土 コームブロッコエ $\approx$ 20cm少量。反応物ブロッコエ2cm少量。しりりあり。
  - 3層 H10E 2/1 黒褐色土 反応物ブロッコエ2cm少量。
  - 4層 H10E 1.7/1 黒褐色土 コームブロッコエ $\approx$ 20cm中量。反応物ブロッコエ2cm少量。しりりあり。
- SK12
- 1層 H10E 2/1 黒褐色土 コームブロッコエ $\approx$ 20cm少量。反応物ブロッコエ2cm少量。しりりあり。
  - 2層 H10E 2/1 黒褐色土 コームブロッコエ $\approx$ 20cm中量。反応物ブロッコエ2cm少量。しりりあり。
  - 3層 H10E 2/1 黒褐色土 コームブロッコエ $\approx$ 20cm少量。反応物ブロッコエ2cm少量。しりりあり。
  - 4層 H10E 2/1 黒褐色土 コームブロッコエ $\approx$ 20cm中量。反応物ブロッコエ2cm少量。しりりあり。
  - 5層 H10E 1.7/1 黒褐色土 コームブロッコエ $\approx$ 20cm中量。反応物ブロッコエ2cm少量。しりりあり。
  - 6層 H10E 2/1 黒褐色土 コームブロッコエ $\approx$ 10cm少量。反応物ブロッコエ2cm少量。しりりあり。

## SK12 (第95・97図、図版35・85)

本遺構はB-4・5グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸1.22m、短軸1.11mを計る。確認面下の掘り込みの深さは50.3cm、覆土は自然堆積で6層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。南壁寄りに小ピットが1基穿たれている。

本遺構から出土した遺物は3975gである。この内269.7g、7点について提示した。

01・02は深鉢口縁部の破片である。いずれも直立気味の口縁で、内面に僅かに段を有する。01では口縁直下の無文帯はほとんどなく、02ではやや幅広の無文帯の下に、それぞれ1列の交互刺突列が横方向に施文される。地文は01で無節のL、02では単節縄文が施文されている。加曾利EⅢ式平行の連弧文様式土器に見られる手法である。03は口縁部の渦巻文である。太い沈線によりシャープに描かれている。加曾利EⅡ式新段階であろう。04は粘土紐を格子目状に貼り付ける、口縁直下の資料である。曾利Ⅱ式の影響を感じさせる。05はやや開き気味に立つ底部から胴部下半の資料である。胴部最下端にまで磨消懸垂文が描かれている。加曾利EⅢ式であろう。06・07は土器片鏝である。いずれも上面に縄目が残る。重量は06は16.3g、07は9.1gを計る。

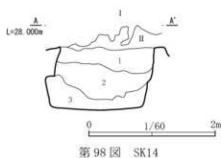


SK13 欠番である。

## SK14 (第98・99図、図版35・85)

本遺構はA-4グリッドにおいて検出された。平面形状は不整形形を呈し、長軸不明、短軸1.66mを計る。確認面下の掘り込みの深さは96cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。

本遺構からは1391gの遺物の出土があった。この内01の遺物は1308gを計り、本遺物の他には細片が僅かに出土したのみである。



第99図 SK14出土遺物

01はキャリバリ形の深鉢である。口縁は平縁で、口縁部文様帯には単節LRの縄文を施文した後に、二重隆線により横S字と剣先文同士が剣先で合体した文様が描かれる。口縁部並びに、頸部との境にも同様の隆帯が貼付される。頸部は無文帯となる。頸部と胴部の境にはやはり同じ二重隆線が巡る。突起部の剥落は確認できない。形状、文様構成から加曽利EⅠ式古段階の資料と判断される。

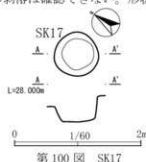
SK15・16 欠番である。

#### SK17 (第100・101図、図版86)

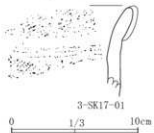
本遺構はA-4グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈し、直径72cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは36cm、断面形状は鍋底状を呈する。

本遺構から出土した遺物の総量は183.7gと僅かである。この内1点(65.5g)のみ掲載した。

01は直立する胴部で、口縁は内面に段を有し緩やかに屈曲して開く。口縁部は折り返し隆帯状になる。外面胴部には沈線が2条巡り、口縁部および沈線の下は単節LRの縄文が施文される。阿玉台Ⅳ式段階であろう。



第100図 SK17



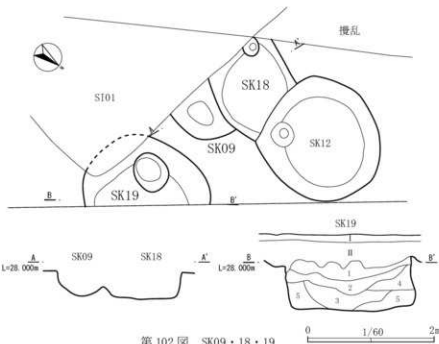
第101図 SK17出土遺物

#### SK18 (第102・103図、図版35・86)

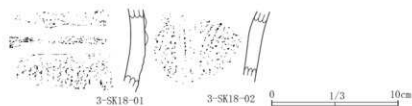
本遺構はA・B-4・5グリッドにおいて検出された。SI01およびSK09・12と重複する。SK09よりも新しく、SI01・SK12よりも古い。平面形状は不整形円形を呈し、長軸不明、短軸1.38mを計る。確認面下の掘り込みの深さは44cmを計る。

本遺構からは852gの遺物が出土している。この内時期が明瞭な破片2点について示した。

01は口縁部直下の区画帯の破片である。太い沈線によって長方形に区画され内部には単節LRが充填される。加曽利EⅡ式新段階。02は胴部上半の資料である。大きく外反して開く。LRの縄文が施文された後、縦方向の3本線による磨消懸垂文が施文される。加曽利EⅡ式段階であろう。



第102図 SK09・18・19



第103図 SK18出土遺物

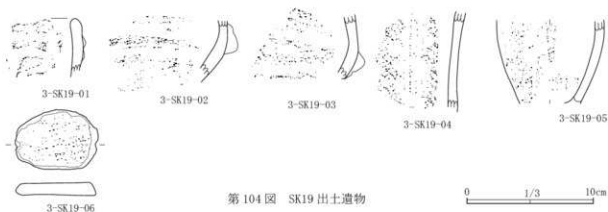
- SK19
- 1層 10TE 3/1 黒褐色土 ロームブロックを1~10mm少量、白化物質ブロックを2mm散見、しまり焼。
  - 2層 10TE 2/1 黒褐色土 ロームブロックを2~20mm散見、白化物質ブロックを2mm少量、しまり焼。
  - 3層 10TE 3/4 暗褐色土 ロームブロックを2~10mm中量、しまり焼。
  - 4層 10TE 2/1 暗褐色土 ロームブロックを1~2mm少量、しまり焼。
  - 5層 10TE 2/3 黒褐色土 ローム粒子を2~10mm中量散見、しまり焼。

## SK19 (第102・104図、図版35・86)

本遺構はB-5グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸は不明、短軸2.13mを計る。確認面下の掘り込みの深さは63cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。断面形状はやや袋状を呈する。

本遺構から出土した遺物は、3665.9gと比較的多量の遺物が出土している。大半が細片で時期・器形が判別できる資料は提示した6点である。

01は直立気味に立つ深鉢口縁部の破片である。やや太い隆帯の貼付により区画帯が設けられ渦巻が描かれる。加曾利EⅡ式であろう。02は頸部の破片である。口縁部文様帯と頸部の境には太い隆帯が貼り付けられる。頸部は無文。加曾利EⅡ式カ。03は口縁部文様帯の下半部の破片であろう。隆帯により文様が描かれ、隆帯上にはRLの縄文が施文される。阿玉台Ⅳ式カ。04は外反気味に立つ胴部の破片である。縦方向に2本の沈線による懸垂文が垂下し、懸垂文の間には縦回転の縄文LRが充填される。加曾利EⅡ式であろう。05はミニチュア土器の深鉢胴部下半の破片である。地文に単節LRの縄文を施文した後に、2本の沈線による磨消懸垂文が垂下する。加曾利EⅡ～Ⅲ式であろう。06は楕円形を呈する土器片鏝である。胴部の破片を用いるもので、器面には単節縄文が僅かに残る。重量は37.4gを計る。



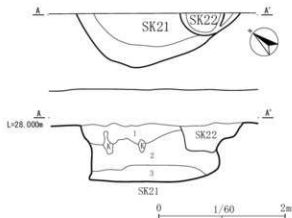
第104図 SK19出土遺物

SK20 欠番である。

## SK21 (第105図、図版35・36)

本遺構はB-6グリッドにおいて検出された。SK21・22は重複関係にあり、SK22が21を切る。平面形状は不明、長軸は2.6mを計り、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは94cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。断面形状はやや袋状を呈する。

本遺構の掲載遺物はない。



第105図 SK21・22

SK21

1層 10層 2/3 黒褐色土、コームブロッコ、2～10mm粒多量、炭化物ブロッコ粒多量、しまり塊。

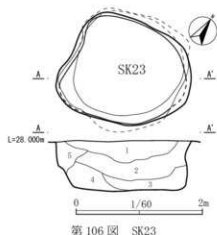
2層 10層 2/4 暗褐色土、コームブロッコ、2～10mm粒多量、しまり塊。

3層 10層 1/7 黒色土、コームブロッコ、2～20mm少量、炭化物ブロッコ粒多量、しまり塊。

## SK22 (第105図、図版35)

本遺構はB-6グリッドにおいて検出された。SK21・22は重複関係にあり、SK22が21を切る。平面形状は不明、長軸は1.01mを計り、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは39cmを計る。

本遺構の掲載遺物はない。



第106図 SK23

## SK23 (第106図、図版36)

本遺構はB-6グリッドにおいて検出された。平面形状は不整楕円形、長軸は1.99m、短軸は1.57mを計る。確認面下の掘り込みの深さは75cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。断面形状はやや袋状を呈する。

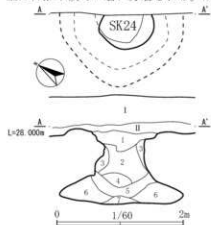
本遺構の掲載遺物はない。

## SK23

- 1層 10R 2/1 黒褐色土 ロームブロック多〜10mm少量、同化物ブロック多〜10mm少量
- 2層 10R 3/1 黒褐色土 ロームブロック多〜10mm少量、同化物ブロック多〜10mm少量
- 3層 10R 1.7/1 黒色土 ロームブロック多〜10mm少量、同化物ブロック多〜10mm少量
- 4層 10R 2/3 黒褐色土 ロームブロック多〜10mm少量、同化物ブロック多〜10mm少量、しまりあり
- 5層 10R 3/4 暗褐色土 ロームブロック多〜10mm少量、しまりあり

## SK24 (第107・108図、図版36・86)

本遺構はB-6グリッドにおいて検出された。東側は調査区外となっている。平面形状は円形を呈するものと思われる。上端の長軸は87cmであるが、下端は195cmを計る。短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは111cm、覆土は自然堆積で7層に分層される。断面形状はいわゆる袋状を呈する。



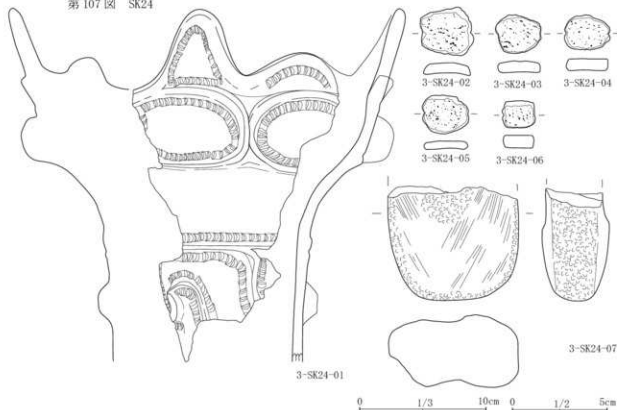
第107図 SK24

本遺構からは1768gの遺物が出土している。この内7点について提示した。

01は4単位波状の深鉢口縁から胴中部までの資料である。三角形に突出する大形の把手が4単位配され、その間に半円形の小突起が埋めら

## SK24

- 1層 10R 2/4 暗褐色土 ロームブロック多〜2mm少量、同化物ブロック多〜2mm少量、しまりあり
- 2層 10R 5/4 暗褐色土 ロームブロック多〜2mm少量、同化物ブロック多〜2mm少量、同化物ブロック多〜2mm少量、しまりあり
- 3層 10R 3/4 暗褐色土 ロームブロック多〜2mm少量
- 4層 10R 1/4 暗褐色土 ロームブロック多〜2mm少量
- 5層 10R 2/3 黒褐色土 ロームブロック多〜2mm少量、同化物ブロック多〜2mm少量
- 6層 10R 2/2 黒褐色土 ロームブロック多〜2mm少量、しまりあり
- 7層 10R 2/3 黒褐色土 ロームブロック多〜2mm少量、しまりあり



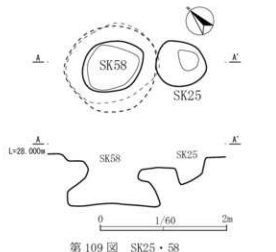
第108図 SK24 出土遺物

れる。口縁部文様帯は隆帯により楕円形の窓枠状の区画を設ける。三角形および円形の突起、楕円区画の内面に沿って幅広の角押文が施文される。頸部は無文。胴部には断面蒲葺状の隆帯が1条巡り隆帯から同様の隆帯による懸垂文が垂下する。隆帯の両側面には口縁部同様の角押文が施文される。阿玉台Ⅲ式である。

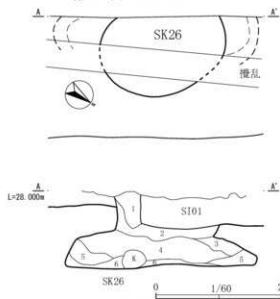
02～06は土器片鏝である。02は18.4g、03は11.6g、04は11.7g、05は8.1g、06は7.7gを計る。全体に小ぶりで外面の整形は粗雑である。

07は磨石・凹石である。ほぼ半分に欠損している。上下両面の中央付近に窪みが施され、研磨されている。側面は全面に敲打痕が残る。重量は231.5g、材質は安山岩。

本遺構は阿玉台Ⅲ式期の遺構と判断される。



第109図 SK25・58



第110図 SK26

口縁部文様帯は渦巻を中心にこれをとり囲むように台形の区画が同様の隆帯の貼り付けで描かれ、やはり幅広の角押文がこれに沿って施文される。頸部は無文。胴部文様帯には同様の隆帯による重三角文状の区画文が描かれ、口縁部文様帯同様の隆帯と角押文により構成されている。勝坂式扉内3段階的な要素が強い。

02は4単位波状の深鉢でやはり底部は欠損している。波頂部分には円形の区画を設け、口縁部文様帯は、重三角文様の区画帯が隆帯によって描かれ内部には太い短沈線が円形区画の内部で横方向に、三角形区画内には縦方向に施文される。また、一部ではあるが隆帯に沿ってペン先状の角押文が充填され、文様構成は統一されていない。頸部は無文で胴部は隆帯による重三角文を意識する区画が設けられ内部には横方向の太い沈線が充填される部分と、ペン先状の角押文がこれに沿う部分の双方に分けられる。阿玉台Ⅱ～Ⅲ式の範疇でとらえられるものであろうが、勝坂式の影響を強く感じさせる。

#### SK25 (第109図、図版36)

本遺構はA・B・6・7グリッドにおいて検出された。SK58と近接する。平面形状は不整形円形を呈し、長軸77cm、短軸72cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは49cm、底面は北側に向かって大きく傾斜する。断面形状はV字形を呈する。

本遺構の掲載遺物はない。

#### SK26 (第110・112図、図版36・86・87)

本遺構はA-6グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、上端部の長軸1.93m、短軸1.47mを計る。確認面下の掘り込みの深さは97.5cm、覆土は自然堆積で6層に分層される。断面形状はいわゆる袋状を呈する。

本遺構からは纏まった資料が出土している。検出された遺物の総重量は17770.9gを計る。この内11点について掲載した。

01は4単位波状の深鉢形土器である。胴部下半部から底部にかけては欠損している。口縁部は大形の波状把手が4単位直立する。波頂部の装飾は1箇所のみ異なり逆渦巻状の文様が付加される。把手部分には渦巻状の文様が隆帯の貼り付けにより描かれる。隆帯に沿ってキャタピラ状の幅広の刺突列が加わる。

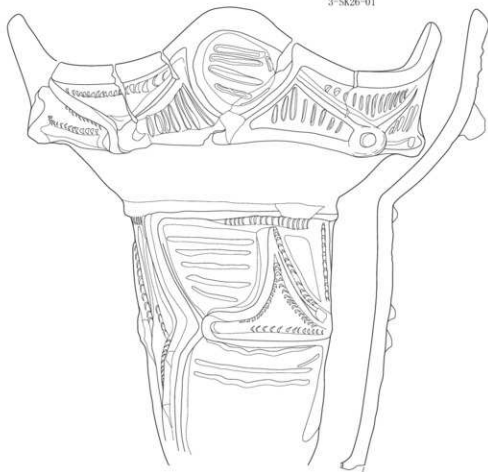
#### SK26

- 1層 01層 3/4 暗褐色土、ロームブロックφ1～2cm多数、瓦土ブロックφ1～3cm多数、しまり強。
- 2層 01層 3/4 暗褐色土、ロームブロックφ1～30cm多数。
- 3層 01層 2/2 赤褐色土、ロームブロックφ1～3cm多数。
- 4層 01層 2/2 赤褐色土、ロームブロックφ1～3cm多数、しまりなし。
- 5層 01層 2/2 赤褐色土、ロームブロックφ1～10cm多数、しまりなし。
- 6層 01層 3/4 暗褐色土、ロームブロックφ1～3cm多数。

03は深鉢形土器のほぼ完形である。口縁は平縁で口縁部の文様帯は01・02に比べて狭く、断面方形の隆帯によって窓枠状の長方形の区画が設けられる。この区画隆帯に沿って内側には1条の角押文が施文される。頸部は2条の有節沈線を意識する波状の沈線が巡る。胴部は屈曲部分に隆帯が巡り突起部分から隆帯は懸垂状に垂下する。懸垂



3-SK26-01



3-SK26-02

0 1/3 10cm

第111図 SK26 出土遺物(1)

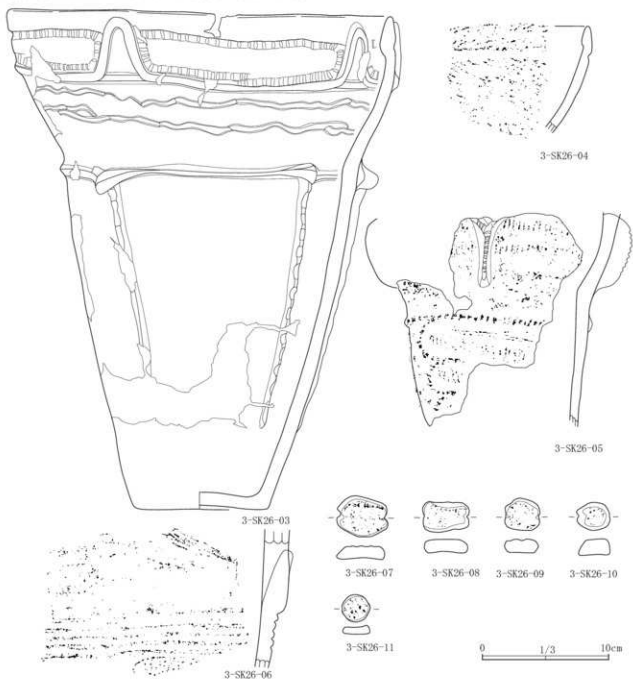


する隆帯上には指で押したような緩やかな刻みが施される。地文はない。口縁部の文様帯は阿玉台I b 式的な様相であるが、頸部に描かれる2条の有節沈線から阿玉台II 式と判断した。

04は口縁部の破片である。大きく内湾する口縁で平縁。口縁は折り返すものであろうか、口唇直下に1条の沈線が巡る。内面にも段を有している。口縁部および胴部にかけて無節Iの縄文が、口縁部では横方向に、胴部では縦方向に回転施文されている。形式は不明。比較的大形の破片で本土坑に伴わない遺物として除去できなかったために掲載した。

05は頸部の屈曲部から胴部の資料である。頸部、胴部共に隆帯によるY字状の懸垂文が垂下する。また鋸歯状の文様が描かれる。頸部の括れ部分には刻みを有する隆帯が1条巡り、形骸化された鬚状文が爪状の工具によって剥突される。阿玉台I b 式新段階～II 式と判断した。

06は波状口縁の口縁部破片である。かなり大形の波状になるものと推測される。口縁部直下は幅広の無文帯が広がる。以下、単筋縄文を施文後に太い沈線が5条巡る。口縁部の幅広無文帯は勝坂式的ではあるが、器形では異なる。縄文施文より阿玉台式とも異なる。形式不明。

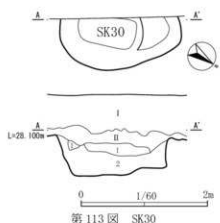


第112図 SK26 出土遺物 (2)

07～11は土器片鏝である。比較的小形のもが主体で周縁の整形も荒い。重量は07は14.9g、08は11.6g、09は9.3g、10は7.0g、11は3.5gを計る。

本住居跡は阿玉台Ⅱ式段階と藤内3段階が共存する良好な資料といえる。

SK27～29 欠番である。



第113図 SK30

SK30 (第113図、図版36)

本遺構はA-12グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、北東側が調査区域外にあたる。長軸1.95mを計り、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは49cm、底部は北側の方が1段深くなる。覆土は自然堆積で2層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

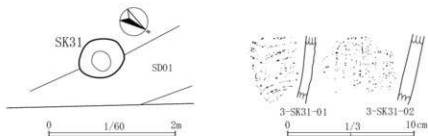
本遺構の掲載遺物はない。

SK30  
1層 100R 3/4 黄褐色土、灰化物ブロックφ2～5mm少量、しまり強。  
2層 100R 2/3 黄褐色土、灰化物ブロックφ2mm少量。

SK31 (第114図、図版36・87)

本遺構はB-13グリッドにおいて検出された。SD01に上部を切られている。平面形状は円形を呈し、長軸67cm、短軸57cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは35cmを計る。

本遺構から出土した遺物は少ないが、出土した全資料2点(61.9g)について提示した。01・02はいずれも胴部の破片である。地文に縦方向の条線または縞糸が施文される。01では太い沈線3本以上の単位で連文が描かれている。所謂連弧文様式土器で、加曾利EⅡ新～Ⅲ式段階の遺物と判断した。



第114図 SK31・同出土遺物

SK32・33 欠番である。

SK34・76 (第115～117図、図版37・44・87～89)

本遺構はB-14グリッドにおいて検出された。SK34・76いずれもSI10を切っている。平面形状はSK34は不整形、76は円形を呈す。SK34は開口部の長軸が1.78m、袋状の底部最大径が2.69mを計る。断面形状はいわゆる袋状を呈する。確認面下の掘り込みの深さは1.12mを計る。SK76は長軸2.24mを計り、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは97.8cmを計る。SK76が新しい。

本遺構から出土した遺物は、20799.1gと膨大な量に上る。土坑は2基の重複で、厳密に遺物の区分けは行っていない。この内提示した資料は42点である。

01は大きく内湾し口縁部に隆帯が巡る口縁部の破片である。隆帯直下には刺突が施される。内面に段を有するもので、深鉢であろう。外面は無文である。阿玉台式と判断される。02は直立気味の口縁部破片で、太い沈線による渦巻状の文様が描かれる。口縁部、沈線以外はRLの縄文が全面に施文される。阿玉台Ⅳ式であろう。03は屈曲して開く口縁部の破片である。口縁部は無文帯が巡り以下に重三角文を意識した隆帯が貼り付けられ隆帯に沿って幅広のキャタピラ文が施文される。勝坂式と判断される。04は内湾気味に立つ口縁部で口唇直下で僅かに

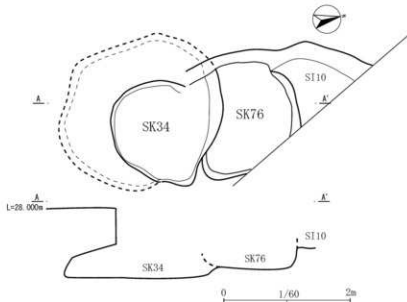
外反する。波状を呈するもので波頂部は欠損する。波頂部から隆帯がS字状に垂下し、隆帯上には刻みが施される。勝板式カ。05は三角形の区画帯を突起とする口縁部の破片である。隆帯上には刻みが施される。勝板式カ。06は胴部の大破片である。胴部下半の境には隆帯が巡り、隆帯の交点には眼鏡状の突起が付される。この交点から隆帯により三角形の区画帯が設けられる。隆帯に沿って幅広のキャタピラ文が連続刺突される勝板式。07は屈曲する胴部上半から口縁の破片。口縁は折り返し、外反して立つ。無文で勝板式であろう。08は浅鉢の口縁部から胴上半の破片である。口縁は棒状にやや膨れ、内面に沈線が巡る。勝板式カ。09は浅鉢口縁部の破片である外反気味に大きく開く。口縁内面には平坦部が設けられたい沈線が二重に巡る。また、内面全面に赤漆による赤彩が施されている。10は波状口縁の波底部の破片である。隆帯による円形の滑車状の貼り付けが施される。隆帯の縁辺に沿って刻みが施される。勝板式であろう。11は波状を呈する口縁突起部の破片である。斜め上方に向かって開いて付されるもので、上端は平坦面を有す。この平坦面から渦巻状の沈線が口縁へと連続して描かれる。加曾利E I式カ。

12-01・02は同一個体の破片であるが接合しない。キャリバー形の深鉢口縁部で隆帯による区画帯の内部に口縁から頭部に連結される二重隆線によるS字状の文様が描かれる。頭部には幅の狭い無文帯が僅かに巡る。地文は0段多条のRL縄文が施文されている。また13・14も12と同一の可能性ある。口縁直下に幅の狭い無文帯が巡るもので胴部上半には隆帯が2本巡った後同様の隆帯が波状に貼り付けられ胴部に巡る。地文は0段多条のRL縄文が施文されている。加曾利E I式古段階であろう。

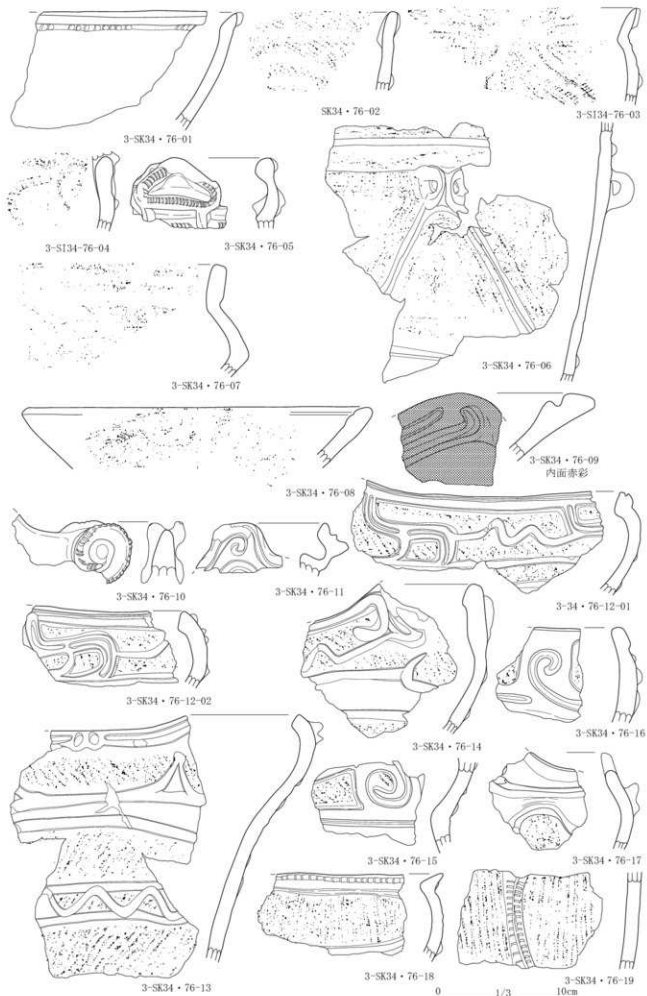
15は口縁直下の破片で、16は口縁部の破片である。同様にたい沈線による渦巻が描かれ隆帯により窓枠状の区画が設けられる。地文には単節RLの縄文が施文される。加曾利E III式古段階カ。17は波状を呈する深鉢口縁部の破片である。隆帯により円形の区画帯が設けられ内部に縄文が充填される。加曾利E III式古段階カ。18は窓枠状の区画帯の中に縦方向の摺糸文を充填する。口唇部には角押文が1列巡る。阿玉台IV式から加曾利E I段階カ。19は隆帯状に刻みを有する二重線により区画が設けられ、内部に沈線が充填される。加曾利E III式平行連弧文様式カ。20・21は台形土器である。20では平坦な上部に垂直な脚部が付される。脚側面には円孔が穿たれる。21では上部がやや丸みを帯びる椀状を呈するもので、脚端部は比較的細い。台付鉢の可能性もある。脚側面には円孔が穿たれる。

22～35は土器片鏝である。重量は22は16.0g、23は11.5g、24は13.6g、25は12.5g、26は12.8g、27は14.3g、28は15.4g、29は10.2g、30は12.4g、31は8.7g、32は9.2g、33は11.9g、34は8.1g、35は12.4gを計る。36は円形に側面が研磨され重量は12.4gを計る。紐かけの切り目はなく、土製円盤と判断した。

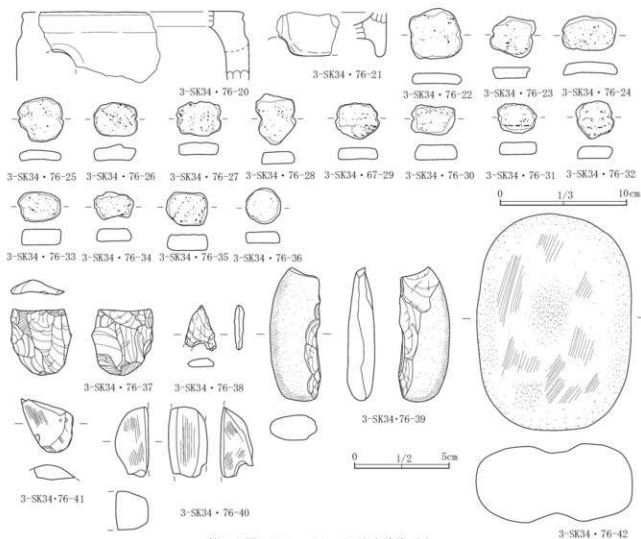
37～42は石器である。42は剥片または残核である。使用痕はない。38は石鏃で凹基三角鏃である。左脚部の



第115図 SK34・76



第116图 SI10·SK34·76出土遗物(1)



第 117 図 SI10・SK34・76 出土遺物 (2)

先端を僅かに欠損する。材質は黒色緻密安山岩である。

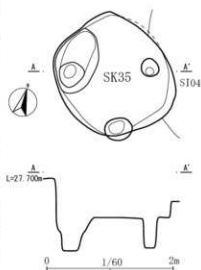
遺物より判断すれば概ね 3 期に区分することができる。一方で遺構の重複関係では SI10 が SK76 によって切られている。したがって、SK34 が最も古く勝坂式・阿玉台式期、SI10 が加曾利 E I 式古段階、SK76 が加曾利 E III 式と推察することが可能である。

#### SK35 (第 118・119 図、図版 89)

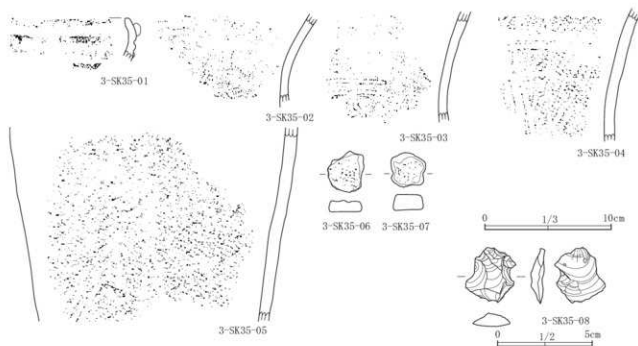
本遺構は A・B-15 グリッドにおいて検出された。SI04 と重複しており、本遺構の方が古い。平面形状は円形を呈し、長軸 2.06 m、短軸 1.79 m を計る。断面形状は部分的袋状を呈する鍋底状である。確認面下の掘り込みの深さは 77 cm を計る。

遺物は 7 点提示した。

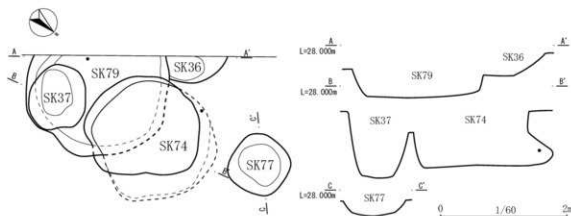
01 は深鉢口縁部隆帯により区画帯が描かれ区画内に角押文が施文される。阿玉台 III 式カ。02・03 は外反して開く胴部の破片。縦方向に櫛描波状文が垂下する。03 では平行沈線が描かれる。阿玉台 III~IV 式。04 はキャリバー形土器の胴部破片である。LR の縄文が整然と施文された後沈線により横位の 2 本、それより懸垂する 3 本の沈線が描かれる。加曾利 E I 式。05 は胴部の破片全面に 0 段多条の LR 縄文が全面施文。06・07 は土器片鏝である。重量は 06 が 10.1g、07 は 11.6g である。08 はチャートの剥片である。ややポイントブレード状で打点は尖った端部となる。



第 118 図 SK35



第119図 SK35出土遺物



第120図 SK36・37・74・77・79

## SK36・37・74・77・79 (第120・121図、図版37・43・89)

SK36・37・74・77・79は重複関係が明瞭でなかったため、一括して掘り下げを行った。したがって、切り合い関係は明確ではない。

SK36はA-13・14グリッドにおいて検出された。平面形状、長軸、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは36cmを計る。断面形状は皿状を呈する。

SK37はA-14グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸1.08m、短軸0.95mを計る。確認面下の掘り込みの深さは111cmを計る。断面形状はU字を呈する。

SK74はA-14グリッドにおいて検出された。平面形状は不整形を呈し、上端長軸1.78m、短軸1.77m、袋状底部の最大径は1.86mを計る。確認面下の掘り込みの深さは78cmを計る。断面形状は袋状を呈する。

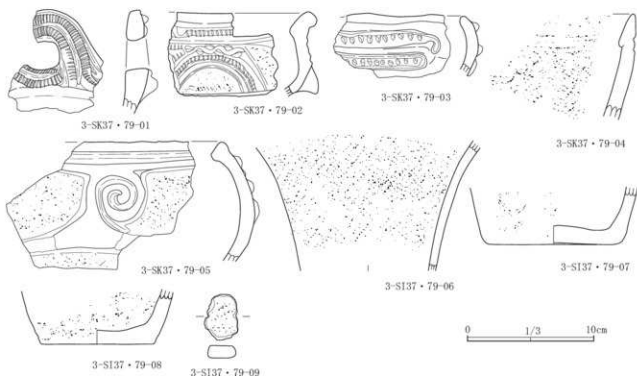
SK77はA-13グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸1.0m、短軸0.99mを計る。確認面下の掘り込みの深さは29cmを計る。断面形状は浅い皿状を呈する。

SK79はA-14グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈し、長軸2.36m、短軸2.13mを計る。確認面下の掘り込みの深さは46cmを計る。断面形状は鍋底状を呈する。

SK37 出土遺物はSK79と重複していたため、SK37・SK79として掲載した。遺物は9点掲載した。

01は環状の把手部分である隆帯に沿って刻みが施される。02は深鉢胴部の破片で内面に段を有し逆U字状の隆帯が貼り付けられ口縁部の隆帯間には交互刺突文が施され、区画内部には斜方向の条線が充填される。03は内湾する口縁部の破片で、3条の隆帯による区画帯が設けられる。隆帯間には刺突列が加わる。04は内面に折り返した様な段を有し、口唇部は三角形に尖る。口唇部は狭い無文帯となり平行沈線の下にはLRの縄文が施文される。05は大きく上半部が膨らむキャリバー形土器の口縁部である。隆帯により渦巻が描かれ頸部の隆帯と連結する。地文はRLの縄文。06は外反気味に開く。地文は単節LR。07・08は底部の資料で無文である。07は胴部は直立気味に立ち、徐々に上方に開く。08は内湾気味に立つ。09は土器片鏝である。やや縦長の形状で周辺の整形は粗雑。重量は10.3g。

出土遺物より本遺構は加曽利EⅠ式古段階と判断される。



第121図 SK37・79 出土遺物

### SK38 (第82図、図版37)

本遺構はA-14グリッドにおいて検出された。西側が調査区域外となるため、平面形状は不明、東西軸は不明、南北軸は1.23mを計る。確認面下の掘り込みの深さは26cm、覆土は自然堆積で2層に分層される。断面形状は皿状を呈する。

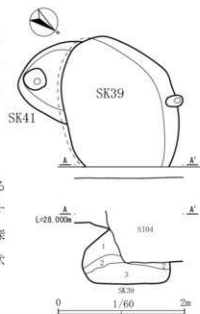
本遺構の出土遺物はない。

### SK39 (第122・123図、図版37・89)

本遺構はB-15グリッドにおいて検出された。SI04およびSK41と重複するもので、SI04によって切られ、SK41を切っている。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。長軸不明、短軸1.78mを計る。確認面下の掘り込みの深さは81.5cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。断面形状はいわゆる袋状を呈する。

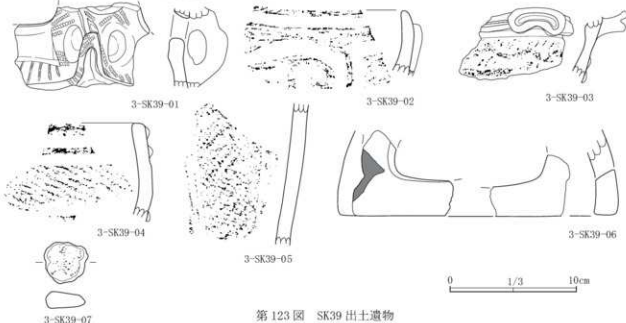
SK30

- 1層 100% 3/4 埴輪色土 コームプロック0.1~50mm 多量、しまりあり。
- 2層 100% 3/4 埴輪色土 コームプロック0.1~5mm 少量、炭化物プロック0.1~5mm 少量。
- 3層 100% 3/4 埴輪色土 コームプロック0.1~10mm 多量。



第122図 SK39・41

遺物は7点提示した。01は眼鏡状の把手部分の破片である。隆帯上にはRL縄文が施文され区画内には沈線が充填される。阿玉台IV式。02は口縁部の破片で隆帯により渦巻が描かれる。加曾利EⅡ式新段階。03は口縁直下には楕円形の貼り付け、胴部には縄文を地文にし蛇行する隆線が貼り付けられる。大木8a式カ。04は太い隆帯による窓枠状の区画を有する口縁部の破片で、内部にはRLの縄文が充填される。05は胴部下半の資料で幅の狭い磨消懸垂文が見られ、縄文は縦回転文。05・06は加曾利EⅡ式であろう。06は台形土器である。2点出土して同一個体と判断されるが接合しない。脚はやや内湾気味になり楕円形と思われる透かし孔が穿たれている。台部は欠損している。07は土器片鏝である。重量は13.0g

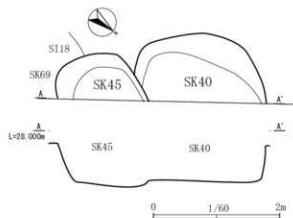


第123図 SK39出土遺物

#### SK40 (第124・125図、図版37・90)

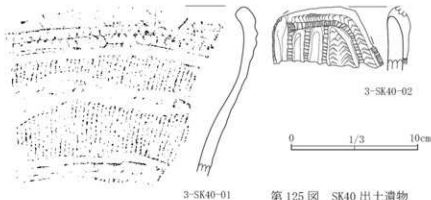
本遺構はB-16グリッドにおいて検出された。平面形状は不明、長軸、短軸ともに不明。確認面下の掘り込みの深さは58.5cmを計る。断面形状は鍋底状を呈する。

出土遺物は2点を掲載した。01は内湾するキャリバー形土器の上半部の資料である。口縁部直下に円形の刺突列が施され、以下、2本の平行沈線が波状に巡る。地文には縦方向の懸垂文が施文される。括れ部には平行沈線が巡る。連弧文様式土器と判断される。02は板状の把手部分の破片である。隆帯に沿って角押文が巡る。阿玉台Ⅱ式土器であろう。



第124図 SK40・45

01の大形資料の出土から判断して連弧文様式土器の時期、加曾利EⅢ式平行と判断される。



第125図 SK40出土遺物



## SK41 (第122図、図版38)

本遺構はB-15グリッドにおいて検出された。SK39によって切られている。平面形状、長軸、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは41cmを計る。床面にピット1基がある。

本遺構の出土遺物はない。

## SK42 (第126図、図版38)

本遺構はA・B-15グリッドにおいて検出された。SI04と近接しているが新旧関係は不明。平面形状は不整形円形を呈し、長軸48cm、短軸41cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは49cmを計り、ピット状を呈す。

本遺構の出土遺物はない。

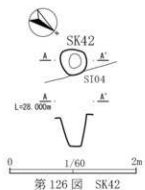
## SK43 欠番である。

## SK44 (第127・128図、図版38・90)

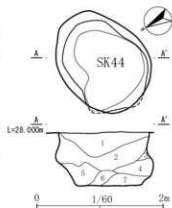
本遺構はA-15グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸1.66m、短軸1.39mを計る。確認面下の掘り込みの深さは83cm、覆土は自然堆積で7層に分層される。断面形状はいわゆる袋状を呈する。

遺物は6点について掲載した。

01はキャリバー形土器上半部の資料である。横S字状の隆帯が口縁部に貼り付けられ、隆帯上には縄文が施文される。内面の段は見られない。大木式の影響を



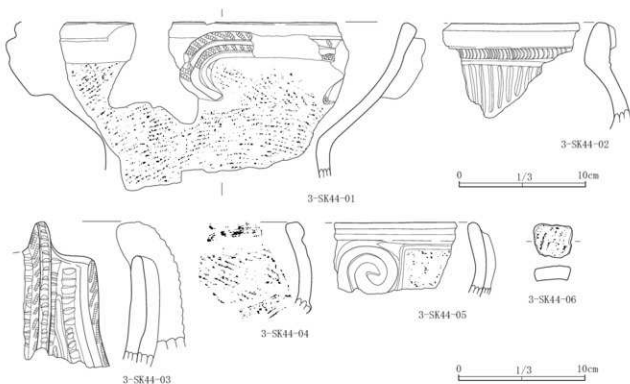
第126図 SK42



第127図 SK44

SK44

- 1層 10層 2・4 粘質黄土 ロームブロックあり～5cm多量、瓦上ブロックあり～2cm程度量。
- 2層 10層 2・4 粘質黄土 ロームブロックあり～10cm程度多量、瓦上ブロックあり～3cm程度量。
- 3層 10層 2・4 粘質黄土 ロームブロックあり～10cm程度多量。
- 4層 10層 2・4 粘質黄土 ロームブロックあり～10cm程度多量、しりとりあり。
- 5層 10層 2・5 実質粘土 ロームブロックあり～5cm中量、次亜砂ブロックあり～3cm程度量。
- 6層 10層 2・5 実質粘土 ロームブロックあり～3cm中量、瓦片砂ブロックあり～5cm程度量。
- 7層 10層 4・6 褐色土 ロームブロックあり～3cm程度多量。



第128図 SK44 出土遺物

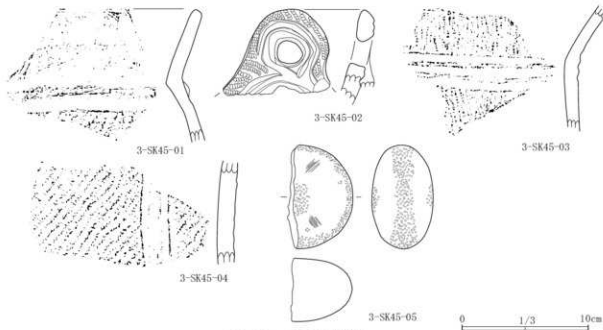
受ける加曽利E I式と判断される。02は屈曲した口縁部の資料で口唇直下に角押文、以下は縦方向の集合沈線が描かれる。阿玉台III式または勝飯式の影響を受けるものであろう。03は波状口縁の波頂部の資料である。とさか状の隆帯が中央に垂下し、両脇に角押文が沿う。阿玉台IV式であろう。04はキャリバー形土器の口縁部である。隆帯により窓枠状の区画が施され、区画内には無節Rが充填される。05はキャリバー形土器の口縁部で、太い隆帯により渦巻文が描かれる。区画内には単節RLが充填される。06は土器片鏝である。深鉢胴部破片を利用している。器面にはLRの縄文が施文されている。重量は11.5g。

#### SK45 (第124・129図、図版37・90)

本遺構はB-16グリッドにおいて検出された。平面形状は不明、東西軸は不明、南北軸1.36mを計る。確認面下の掘り込みの深さは68cmを計る。

遺物は5点を提示した。01は屈曲する深鉢頸部から口縁の破片である。屈曲部には隆帯が1条巡る。口縁部は幅広の無文帯、胴部以下は単節LR。02は環状を呈する把手部分の資料である。把手部分全面に単節RLの縄文が施文される。03は胴部屈曲部の破片である。屈曲部には3条の沈線が巡る。地文は縦方向の摺糸文。04は磨消懸垂文が縦に施される。地文は単節LR。05は磨石・敲石である。側面および上下両面の中央部に敲打痕が残る。材質は安山岩。

検出された遺物は02で阿玉台IV式と判断されるが、他は加曽利E III式およびそれに平行する連弧文様式土器が出土している。該期の遺構と判断される。



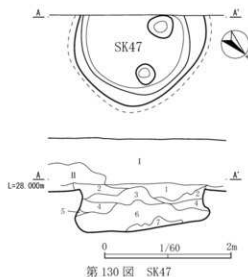
第129図 SK45出土遺物

SK46 欠番である。

#### SK47 (第130・131図、図版38・90)

本遺構はA-17グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸2.10m、短軸1.81mを計る。確認面下の掘り込みの深さは78cm、覆土は自然堆積で7層に分層される。断面形状はいわゆる袋状を呈する。

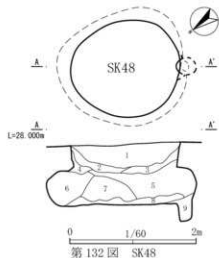
出土遺物は2点を掲載した。01は内湾するキャリバー形土器の上半部の資料である。口縁部直下に断面三角形の隆帯が窓枠状に貼付され、隆帯の内側に沿って角押文が描かれる。02は01の胴部破片であろう。同様の隆帯がY字に貼付される。阿玉台I b式の資料である。遺物から判断して阿玉台I b式期の遺構と判断される。



第130図 SK47

SK48 (第132・133図、図版38・90・91)

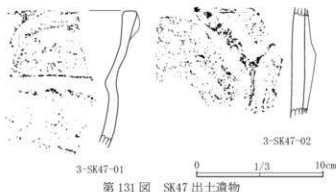
本遺構はA・B-17グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈し、長軸1.76m、短軸1.46mを計る。確認面下の掘り込みの深さは88cm、覆土は自然堆積で9層に分類される。断面形状はいわゆる袋状を呈する。床面南西部にピット状の掘り込みがある。



第132図 SK48

SK48

- 1層 10層 3/4 埴轮土 ロームブロックが1〜3cm多量、灰土ブロックが1〜2cm多量、灰化物ブロック中量。
- 2層 10層 3/4 埴轮土 ロームブロックが1〜3cm多量、灰化物1〜3cm少量。
- 3層 10層 3/4 埴轮土 ロームブロックが1〜15cm多量、灰土ブロックが1〜10cm多量、灰化物1〜2cm少量。
- 4層 10層 3/5 埴轮土 ロームブロックが1〜3cm多量。
- 5層 10層 4/6 埴轮土 ロームブロックが1〜3cm多量、灰土ブロックが1〜3cm多量、灰化物上ブロックが1〜10cm少量。
- 6層 10層 4/6 埴轮土 ロームブロックが1〜20cm多量、灰化物上ブロックが1〜5cm。
- 7層 10層 4/6 埴轮土 ロームブロックが1〜100cm多量。
- 8層 10層 3/5 埴轮土 ロームブロックが1〜30cm多量、しまりあり。



第131図 SK47 出土遺物

SK47

- 1層 10層 3/4 埴轮土 ロームブロックが1〜3cm中量。
- 2層 10層 3/4 埴轮土 ロームブロックが1〜3cm多量。
- 3層 10層 3/4 埴轮土 ロームブロックが1〜10cm多量。
- 4層 10層 3/4 埴轮土 ロームブロックが1〜5cm多量。
- 5層 10層 3/4 埴轮土 ロームブロックが5〜30cm多量、灰化物ブロックが2〜3cm多量、しまりあり。
- 6層 10層 3/4 埴轮土 ロームブロックが1〜3cm多量、しまりあり。
- 7層 10層 4/6 埴轮土 ロームブロックが1〜20cm多量、しまりあり。

出土遺物は17点について掲載した。

01はキャリパー形を呈する深鉢である。底部は欠損している。胴上半部は緩やかに内湾し、口縁部で折り返す。器面は無文で文様の施文はない。02は羽子板状の大形把手を4単位有する深鉢。把手の中央部には刻みを有する隆帯が縦に垂下し、胴部上半で意杖状の区画帯を作る。区画内部には隆帯に沿って角押文が2列描かれ、中央部分には鋸歯状の文様が充填される。03は羽子板状の大形把手部分の資料である。先端部分は孔を有する双頭の突起が付される。把手の中央部分には円形の孔が穿たれている。またU字形の刻みを有する隆帯が垂下し、隆帯に沿って角押文が2列配される。02と同一個体の可能性がある。04は屈曲して開く胴上半から口縁部にかけての破片である。口縁部は折り返し隆帯になり、折り返し隆帯からY字の隆帯が垂下する。05は内湾する口縁部の破片で隆帯が1条巡り、隆帯に沿って角押文が1条描かれる。地文には単節RLが施文され、下半には沈線による波状の文様が描かれる。06は折り返し口縁の直下に角押文が1条巡る。胴部は無文。07は屈曲部の破片胴上部に隆帯が1条巡り、隆帯上には刻みが施される。08は蛇行する刻みを有する隆帯が垂下し、隆帯に沿って幅広の角押文が施文される。09は隆帯によって楕円形の縦方向の区画を設け、内部に鋸歯文が充填される。胴部は縦方向の条線。10は大きく外反して開く浅鉢口縁。波状口縁で、口唇端部から内面にかけて赤彩が施される。11〜17は土器片鏝である。阿玉台式土器の胴部破片を用いている。11は15.7g、12は16.0g、13は17.2g、14は9.8g、15は8.1g、16は7.2g、17は7.0gを計る。

出土遺物から本遺構は阿玉台Ⅱ〜Ⅲ式で勝坂式土器を僅かながら混入する時期である。

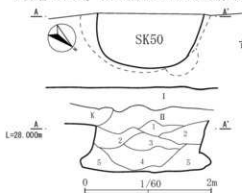


第133图 SK48出土遺物

SK49 欠番である。

SK50 (第134・135図、図版39・91)

本遺構はA-17・18グリッドにおいて検出された。平面形状は西側は調査区域外となるため、明瞭ではないが円形を呈するものと思われる。南北軸は1.76mを計る。確認面下の掘り込みの深さは71cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。断面形状はいわゆる袋状を呈する。



第134図 SK50

出土遺物は1点を掲載した。01は鋸歯状の文様が胴部に描かれる阿玉台Ⅱ式土器であろう。

- SK50
- 1層 101R 3/4 埴間色土 コームブロックφ1~10cm 多量、しまりあり。
  - 2層 101R 3/4 埴間色土 コームブロックφ1~10cm 多量、しまりあり。
  - 3層 101R 3/4 埴間色土 コームブロックφ1~10cm 多量、しまりあり。
  - 4層 101R 3/4 埴間色土 コームブロックφ1~10cm 多量、しまりあり。
  - 5層 101R 4/6 褐色土 コームブロックφ1~5cm 多量、しまりあり。



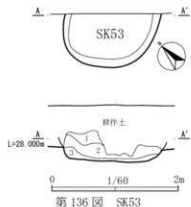
第135図 SK50 出土遺物

SK51 (第73図、図版39)

本遺構はA・B-18グリッドにおいて検出された。位置関係よりS103と重複することになるが、S103の掘り込みがなく、新旧関係は不明である。平面形状は不整形円形を呈し、長軸99cm、短軸90cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは21cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。断面形状は浅い皿状を呈する。

本遺構の掲載遺物はない。

SK52 欠番である。



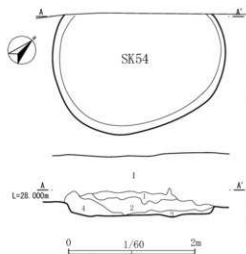
第136図 SK53

SK53 (第136図、図版39)

本遺構はB-19グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形カ、長軸不明、短軸1.39mを計る。確認面下の掘り込みの深さは46cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。断面形状は浅い皿状を呈する。

本遺構の掲載遺物はない。

- SK53
- 1層 101R 3/4 埴間色土 コームブロックφ1~5cm 多量。
  - 2層 101R 3/4 埴間色土 コームブロックφ1~10cm 多量。
  - 3層 101R 4/4 褐色土 コームブロックφ1~20cm 多量、しまりあり。



第137図 SK54

SK54 (第137図、図版39)

本遺構はB-19・20グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸2.73mを計り、短軸不明。確認面下の掘り込みの深さは38cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。断面形状は浅い皿状を呈する。

本遺構の出土遺物はない。

- SK54
- 1層 101R 3/4 埴間色土 コームブロックφ1~10cm 多量。
  - 2層 101R 3/4 埴間色土 コームブロックφ1~20cm 多量。
  - 3層 101R 3/4 埴間色土 コームブロックφ1~50cm 多量、しまりあり。
  - 4層 101R 4/6 褐色土 コームブロックφ1~30cm 多量。

## SK55 (第138図、図版39・40)

本遺構はA・19・20グリッドにおいて検出された。南側を覆乱により破壊されている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸1.79m、短軸1.13mを計る。確認面下の掘り込みの深さは29cm、覆土は自然堆積で2層に分層される。断面形状は血状を呈する。

本遺構の出土遺物はない。

## SK56 (第139・140図、図版91)

本遺構はA・B・7・8グリッドにおいて検出された。平面形状は長楕円形を呈し、長軸2.34m、短軸0.98mを計る。確認面下の掘り込みの深さは39cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。鍋底状を呈する。また、中央北側壁寄りに円形のピットが1基検出されている。直径26cmで小規模であるが深さは112cmと深い。セクションから判断して本遺構に伴うピットと判断される。

出土遺物は4点を掲載した。01は深鉢口縁部細片である。口辺部に無文帯を有し、胴部との境には微隆帯が巡る。以下胴部には単筋LRの縄文が施文される。02・03は胴部の接合資料である。やや幅の狭い磨消懸垂文が垂下する。地文は単筋LRの縦回転施文による充填縄文。04・05は土器片鏝である。04は15.8g、05は5.5gを計る。

出土遺物より、本遺構は加曾利EⅢ式と判断される。



第139図 SK56

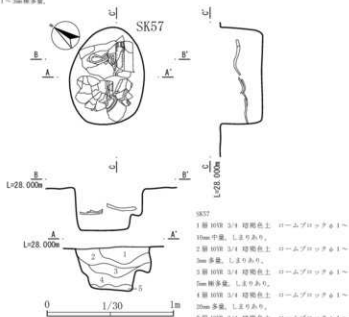
第140図 SK56 出土遺物

## SK57 (第141・142図、図版40・91)

本遺構はA・8グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸76.5cm、短軸58.5cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは32.3cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。断面形状は南側にテラスを有す。鍋底状を呈する。

出土遺物は2点を掲載した。いずれも上層から2個体並んで横位に出土している。

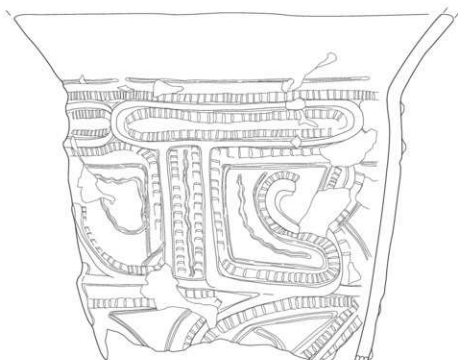
01はバケツ形の胴部で口縁部は大きく屈曲して開く。口縁部は無文でキャタピラ状の角押文により横帯の区画が設けられ、内部に有筋沈線が波



第141図 SK57

状に充填される。勝坂式である。

02 はやや丸みを有する胴部で頸部に隆帯が1条巡り胴部と口縁部文様帯を画している。口縁部は折り返して棒状になりLRの縄文が施文される。頸部には縦方向の集合短沈線が描かれる。口唇および胴部以下は0段多条LRが全面に施文される。



3-SK57-01



3-SK57-02

0 1/3 10cm

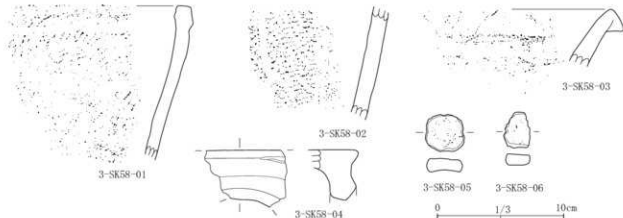
第142図 SK57出土遺物

## SK58 (第109・143図、図版40・92)

本遺構はA-B-6グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、上端の長軸1.72m、短軸0.83mを計る。確認面下の掘り込みの深さは80cm、断面形状はいわゆる袋状を呈するもので、底部の最大径は長軸で1.47m、短軸で1.36mを計る。

出土遺物は4点を掲載した。01はやや内湾し口縁部で折り返す深鉢胴上半部。器面には無筋Lが口縁部まで施文されている。02は胴下半部の破片である。磨消懸垂文が描かれ、区画内にLRの縄文が縦方向に回転施文される。03は大きく開く口縁部の破片で、口唇部は折り返して三角形に尖る。器面は横方向の擦痕。04は台形土器の破片である。台部は水平で脚部はやや外反する。脚部には円形の透かし孔が穿たれている。05・06は土器片鏝である。いずれも深鉢胴部破片を用いている。重量は05は9.7g、06は5.6g。

出土遺物より、加曾利EⅢ式前後と判断される。



第143図 SK58 出土遺物

## SK59

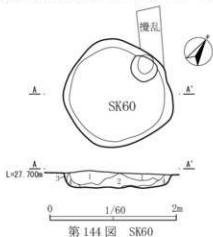
本遺構はA-20・21グリッドにおいて検出されたものであるが、SK78と重複するものと当初考えていたものが、同一遺構と判断されたためにSK59を欠番とし、SK78とした。ただし、遺物に記した注記番号はSK59になっている。遺構および遺物の説明はSK78において行っている。

## SK60 (第144・145図、図版40・92)

本遺構はB-20・21グリッドにおいて検出された。平面形状はほぼ円形を呈し、直径1.7mを計る。確認面下の掘り込みの深さは29cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。断面形状は浅い皿状を呈する。床面南側壁寄りにピットが1基検出されている。

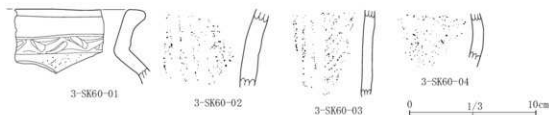
出土遺物は4点を掲載した。01は深鉢口縁部の破片。口唇直下に鋸歯状の刺突列が1条巡り、胴部は単筋LR。02～04は深鉢胴部の破片である。太い沈線により懸垂文が描かれる02・03、波状の平行線が描かれる04。地文は02・04は単筋LR、03は単筋RL。

これらの遺物から、加曾利EⅡ式と判断される。



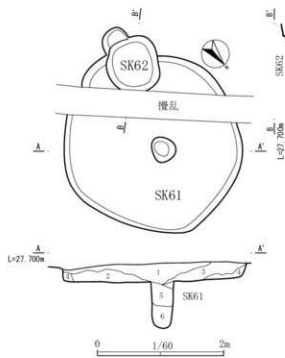
第144図 SK60

- SK60
- 1層 NTR 3/4 埴輪粘土 ロームブロックが1～2cm多量。灰化物ブロックが1～2cm散在量。
  - 2層 NTR 3/4 埴輪粘土 ロームブロックが1～30cm多量。
  - 3層 NTR 3/4 埴輪粘土 ロームブロックが1～30cm多量。しまりあり。
  - 4層 NTR 3/4 埴輪粘土 ロームブロックが1～20cm多量。



第145図 SK60 出土遺物

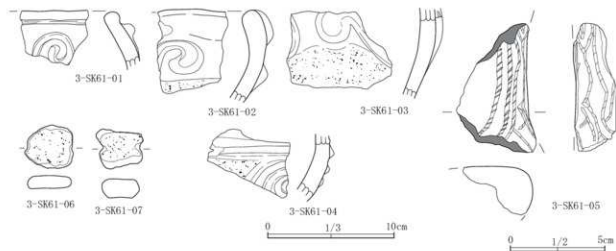




第146図 SK61・62

- 981  
 1層 10層 3/4 埴輪土 ロームブロック層1～10mm 雑多量。  
 2層 10層 3/4 埴輪土 ロームブロック層1～5mm 雑多量。粘土ブロック層1～3mm 雑多量。  
 3層 10層 3/4 埴輪土 ロームブロック層1～20mm 雑多量。しまりあり。  
 4層 10層 3/4 埴輪土 ロームブロック層1～30mm 雑多量。しまりあり。  
 5層 10層 3/4 埴輪土 ロームブロック層1～10mm 雑多量。  
 6層 10層 3/4 埴輪土 ロームブロック層1～20mm 雑多量。

- 982  
 1層 10層 3/4 埴輪土 ロームブロック層1～10mm 多量。粘土ブロック層1～3mm 雑多量。  
 2層 10層 3/4 埴輪土 ロームブロック層1～3mm 多量。  
 3層 10層 3/4 埴輪土 ロームブロック層1～5mm 多量。粘土ブロック層1～5mm 雑多量。  
 4層 10層 3/4 埴輪土 ロームブロック層1～20mm 多量。



第147図 SK61 出土遺物

01は深鉢口縁部破片、太い隆帯により渦巻文が描かれる。02は01と同様であるが、渦巻はやや簡略化されている。また、胴部には磨消懸垂文が垂下する。03は02同様簡略化された渦巻文で、胴部は幅広い磨消懸垂文が垂下する。01～03は加曾利EⅢ式古段階であろう。04は地文に単筋RLを施した後、隆帯による渦巻文を貼り付けている。加曾利EⅠ式段階であろう。05は土偶の胴～腰部にかけての破片である。上面および右側面には有筋沈線による文様が描かれる。断面形状はやや厚手の板状を呈する。阿玉台式に伴う土偶と判断される。06-07は土器片鏝である。深鉢胴部破片を用いている。06は15.2g、07は16.6gを計る。いずれも阿玉台式土器の破片を用いている。

本遺構出土遺物は加曾利EⅢ式・加曾利EⅠ式・阿玉台式の各遺物が出土しているものの、最も新しい加曾利EⅢ式をもって本遺構の時期と考える。

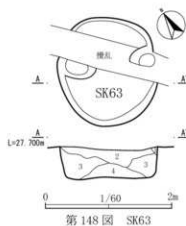
## SK61・62 (第146・147図、図版40・41・92)

本遺構はA・B-21・22グリッドにおいて検出された。SK61はSK62に切られている。SK61の南側の一部、SK62の北側は攪乱により破壊されている。

SK61の平面形状は円形を呈し、長軸3.05m、短軸2.75mを計る。確認面下の掘り込みの深さは39cm、覆土は自然堆積で6層に分層される。断面形状は浅い皿状を呈する。遺構の床面ほぼ中央からビット1基が検出された。

SK62の平面形状は不整形を呈し、長軸92cm、短軸83cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは49cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。本遺構の出土遺物はない。

SK61の出土遺物のうち7点を掲載した。



第148図 SK63

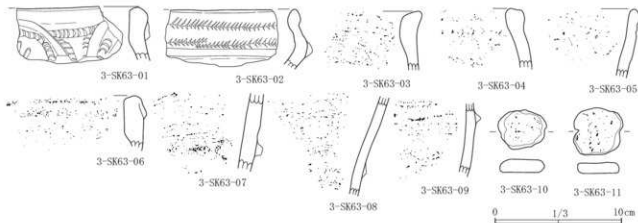
## SK63 (第148・149図、図版41・92)

本遺構はA・B-22グリッドにおいて検出された。遺構の中央やや北寄りに攪乱によって破壊されている。平面形状はほぼ円形を呈し、長軸1.69m、短軸1.65mを計る。確認面下の掘り込みの深さは43cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。土坑の短軸側壁寄りに2基対峙してピットが検出されている。本土坑に伴うものと判断した。

本遺構の出土遺物のうち11点を掲載した。

SK63

- 1層 10TE 3:4 埴輪色土 コームブロッコティ1~2mm 多数。
- 2層 10TE 3:4 埴輪色土 コームブロッコティ1~2mm 多数。局在的ブロッコティ1~2mm 散在。
- 3層 10TE 3:4 埴輪色土 コームブロッコティ1~2mm 多数。
- 4層 10TE 3:4 埴輪色土 コームブロッコティ1~2mm 多数。



第149図 SK63 出土遺物

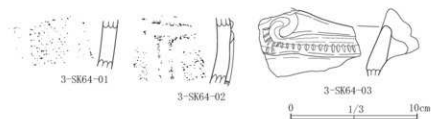
01は深鉢口縁部の破片である。隆帯による窓枠状の区画が設けられ、隆帯に沿って角押文が施文される。02は内湾する口縁部破片で口辺と頭部の境に隆帯が1条巡る。口辺部にはペン先状の工具による押し引き文様が2列描かれる。03は2列の角押文により区画帯を設け、内部に鋸歯文を充填する。04は角押文による区画を設ける。05はハの字に開く工具を用い、角押文を描く。下位は沈線による波状文が描かれる。06は折り返し口縁で、内面に段を有す。無文。07は05と同一個体であろうか。同様の沈線および角押文が描かれる。08は胴部下端に隆帯が1条巡る。上半には連弧文が平行沈線で描かれる。09はハの字に開く工具を用いた角押文で波状の文様を描いている。10・11は土器片鏟である。深鉢胴部の破片を用いるものであるが、10は無文、11はLの原体圧痕が施文されている。10は13.4g、11は17.1g。

以上の遺物より、本遺構は阿玉台Ⅱ~Ⅲ式と判断される。

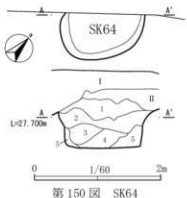
## SK64 (第150・151図、図版41・92)

本遺構はB-23グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形、長軸は不明、短軸は80cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは31cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

遺物は3点掲載した。



第151図 SK64 出土遺物



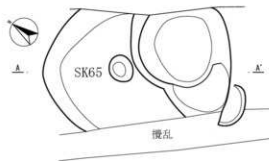
第150図 SK64

SK64

- 1層 10TE 3:4 埴輪色土 コームブロッコティ1~2mm 中量。
- 2層 10TE 3:4 埴輪色土 コームブロッコティ1~2mm 多数。
- 3層 10TE 3:4 埴輪色土 コームブロッコティ1~2mm 散在。
- 4層 10TE 3:4 埴輪色土 コームブロッコティ1~2mm 多数。
- 5層 10TE 3:4 埴輪色土 コームブロッコティ1~2mm 少量。
- 6層 10TE 3:4 埴輪色土 コームブロッコティ1~2mm 多数。L土あり。

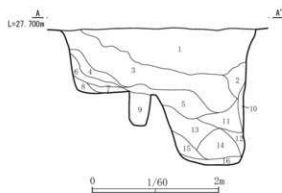
01は深鉢胴部の破片で、磨消懸垂文が垂下する。区画内には単節RLの縄文が充填される。02はキャリバー形土器の口縁直下の資料であろう。二重隆線によりT字状の文様が描かれる。03は小波状を呈する深鉢口縁の突起部である。渦巻文が描かれ、渦巻に沿って刺突列が施される。

遺物より、加曾利E I式新段階と判断される。



#### SK65 (第152～154図、国版41・92・93)

本遺構はB-23・24グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈すものと思われる。南北軸は2.98mを計る。床面の北西側に小ピット1基、東側に円形の掘り込みが見られる。底部は2段の掘り込みになっており、テラス部分で1.21m、最深部で2.29mを計る。覆土は自然堆積で16層に分層される。



第152図 SK65

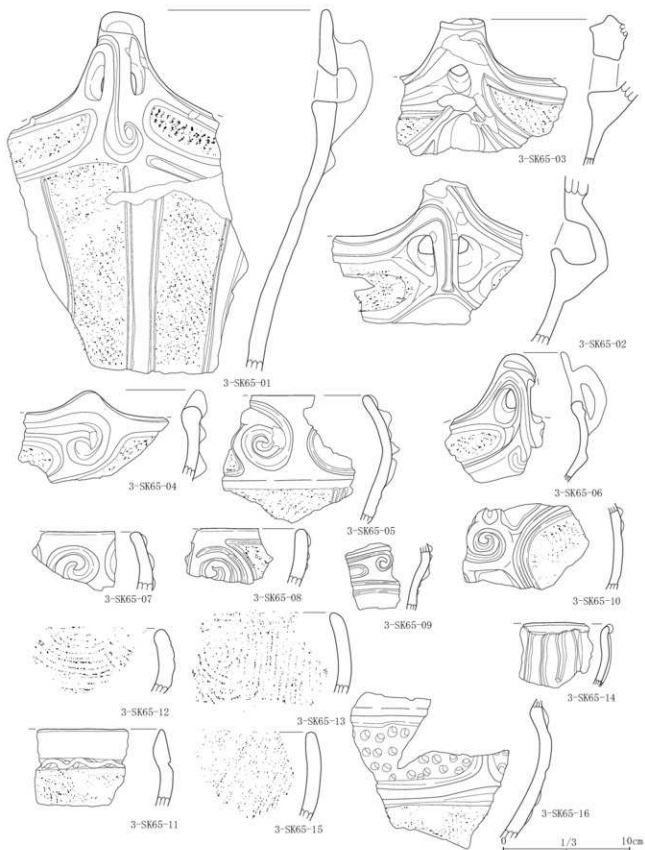
層	土質	内容
1層	1/4 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~5cm多量、団化物ブロック $\phi$ 1~5cm散見、しりりあり。
2層	1/4 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~10cm多量、団化物ブロック $\phi$ 1~5cm散見。
3層	1/4 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~10cm多量。
4層	1/4 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~5cm多量、団化物ブロック $\phi$ 1~3cm散見。
5層	1/4 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~20cm多量、団化物ブロック $\phi$ 1~10cm散見。
6層	2/3 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~5cm多量。
7層	1/4 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~5cm多量、粘性土。
8層	1/4 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~10cm多量。
9層	1/4 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~3cm多量。
10層	4/5 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~20cm多量。
11層	1/4 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~10cm多量。
12層	2/3 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~5cm多量。
13層	1/4 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~3cm多量、団化物ブロック $\phi$ 1~2cm散見。
14層	1/4 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~3cm多量。
15層	1/4 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~5cm多量、粘性土、団化物ブロック $\phi$ 1~10cm多量、しりりあり。
16層	1/4 埋積土	ロームブロック $\phi$ 1~10cm多量、しりりあり、粘性土。

01は4単位の大波状突起を有する深鉢である。突起部分は渦巻文から頂上に向かってS字の文様が描かれ、孔が貫通している。口縁部文様帯は、窓枠状の横区画を設け、左側の区画にはLRの縄文を、右側の区画には刺突を充填させる。胴部はやや幅の狭い磨消懸垂文が垂下する。地文はRLである。02は波状口縁の波頂部付近の破片である。橋状の把手が附され、盲孔が穿たれている。区画帯の中にはLRの縄文が充填される。03は02同様の盲孔が穿たれる把手部の資料である。口縁部文様帯にはRLの縄文が充填される。04は小波状口縁の突起部分の破片である。突起の直下に渦巻文を配し、区画内にはLRの縄文が充填される。05は内湾する深鉢口縁の破片である。太い隆帯により渦巻文が施文され、以下は磨消懸垂文が垂下する。地文にはLRの縄文が施文される。06は01と同一個体であろうか。S字の沈線が垂下する突起部分には盲孔が穿たれる。区画内は単節RLの縄文。07は05同様の破片で渦巻文が描かれる。08は平縁の深鉢口縁で沈線による渦巻文が描かれる。区画内は無節の縄文か。09は渦巻文が描かれる口縁部破片。頸部、区画内は無文。10は壺形の土器胴部であろうか、隆帯による弧状の線が対峙しそれを連結する部分には渦巻文が配される。弧状の区画帯内部は単節LRの縄文が充填施文される。11は口縁部が直立気味に立ち三角形に尖る。口辺は無文で胴部との境には交互刺突文が施文される。胴部は単節RL。12は内湾する口縁部の破片で沈線により弧状の文様が連続して描かれる。13は平行沈線により渦巻・縦方向の集合沈線が描かれる。14は口縁部の破片で細い隆線が縦方向に等間隔に貼り付けられる。15は内湾する口縁部の破片斜方向に3本1単位の条線が全面に描かれる。16は口縁直下文様帯の大破片。隆帯による区画の内部に円形の刺突文を充填させる。17は双耳壺形の土器であろうか、橋状の把手は欠落しているのか観察できない。口縁部はやや外反気味に内傾し、無文帯となる。屈曲部分には円管の刺突列が巡り、胴部は懸垂文が変化した逆U字形の文様が描かれ内部に縦回転のRL縄文が施文される。18は条線を地文にし屈曲部分に磨消手法によるT字状の文様を描く。19は磨消懸垂文が垂下し、縦方向の擦糸文を地文にしている。20~35は土器片鏝である。無文部、懸垂文、など様々な胴部破片が用いられる。重量は20は30.9g、21は31.8g、22は18.4g、23は19.7g、24は16.3g、25は18.4g、26は18.9g、27は20.4g、28は13.9g、29は17.9g、30は12.0g、31は11.5g、32は11.7g、33は10.8g、34は8.0g、

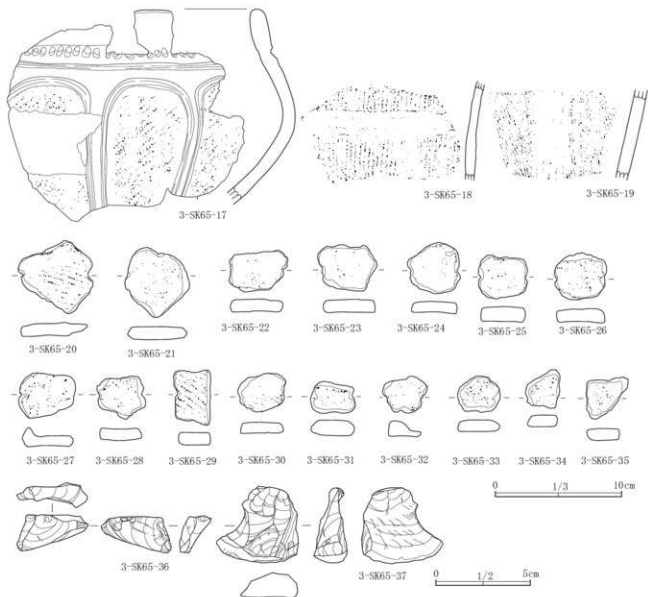
35は11.8gを計る。

36はチャートの石核である。プラットホームを平坦に成形したのち最終剥離を行うもので小形で横長の剥片をはがしている。37は方形の剥片である。二次的な加工は認められない。材質はチャート。

出土遺物は01～10が加曽利EⅢ式、12～14は曾利Ⅱ～Ⅲ式、11・15～19は連弧文様式土器の特徴を兼ね備えた加曽利EⅢ式期と判断される。



第153図 SK65出土遺物(1)



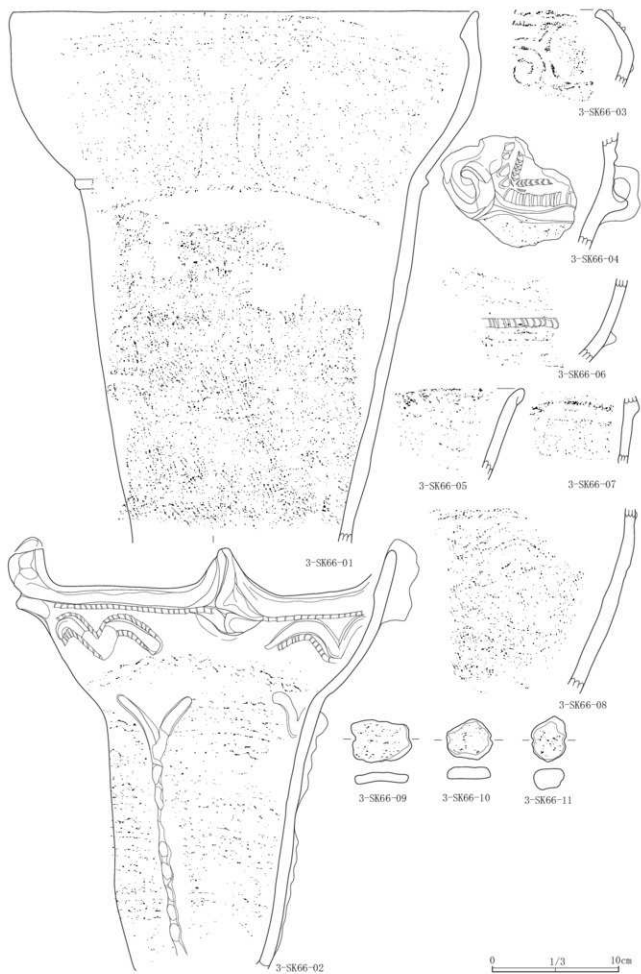
第154図 SK65 出土遺物 (2)

## SK66 (第84・155図、図版41・94)

本遺構はA-16 グリッドにおいて検出された。SI13・15・SK71・72と重複する。上部部は長軸1.59m、短軸1.30mの不整形円形を呈するが、下端は大きく広がって長軸2.16m、短軸1.91mのほぼ楕円形になっている。確認面下の掘り込みの深さは99.3cm、断面形状はいわゆる袋状を呈する。

遺物はまとめて良好な資料が出土している。

01は底部を欠損する深鉢で、胴下半より口縁までほぼ完形である。胴部は直線的に立ち上がり、上半で屈曲した後大きく内湾する。屈曲部には刻みを有する隆帯が1条巡る。全面に無節の縄文を施した後、口縁部直下に沈線により窓枠状の区画を描いている。口唇部内面に段を有する。02は4単位の突起を有する深鉢である。底部は欠損するがほぼ完形である。胴部は直線的に立ち上がり、上半で屈曲した後大きく内湾する。口縁直下には角押文が1列巡り、以下m字状の貼り付け文が等間隔に施される。胴部は5列の横位角押文によって区画され、内部に波状沈線が充填される。また、Y字の貼り付け文が垂下する。地文はない。01・02は形状および文様の特徴から、阿玉台Ⅲ～Ⅳ式であろう。03はキャリパー形土器の口縁部破片である。二重隆線の貼り付けにより渦巻文から剣先文様が描かれるものであろう。地文は無節LR。加曾利EⅠ式。04は屈曲部の破片である。渦巻状の突起が貼り付けられ、渦巻より連繋する隆帯に沿って角押文が配される。阿玉台Ⅳ式。05は直線的に大きく開く口縁部破片で、口縁は折り返す。無文。06は内湾する屈曲部から口辺部下半の破片である。屈曲部には隆帯が1条巡り、隆帯に沿って角押文が巡る。地文は無文。07は屈曲部から胴部にかけての破片である。屈曲部には隆帯が1条巡り、胴部は



第155図 SK66出土遺物

縦方向の条線が施文される。08は屈曲部から胴部にかけての破片である。屈曲部には隆帯が1条巡り、胴部には沈線による菱形の文様が入れ子状に描かれる。地文は縦方向の燃糸文が隆帯上にまで施文される。加曾利EⅠ式。09～11は土器片鏝である。09は15.2g、10は11.6g、11は14.8gを計る。

本遺構は袋状を呈する遺構で、出土遺物から判断される時期は阿玉台式の最終末～加曾利E式初頭段階と判断される。

#### SK67 (第84図、図版42)

本遺構はA-15・16グリッドにおいて検出された。SI13・15・SK68・44と重複する。上端部は長軸2.19m、短軸2.02mの不整形形を呈するが、下端は僅かに広がって長軸2.19m、短軸2.16mのほぼ円形になっている。確認面下の掘り込みの深さは1.01m、断面形状はいわゆる袋状を呈する。

本遺構の出土遺物はない。

#### SK68 (第84図、図版42・95)

本遺構はA-16グリッドにおいて検出された。SI13・15・SK67と重複し、SI13・15を切っている。長軸2.56m、短軸1.94mの不整形形を呈する。確認面下の掘り込みの深さは70cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

遺物は床面から出土している。01は深鉢で口縁部を欠損するものの、口辺から底部まで残存している。口辺は無文で、屈曲部に眼鏡状の把手を退化させた文様が隆帯によって4単位描かれる。以下、胴部上半には2条の沈線により区画され、内部に窓枠状の区画が描かれる。地文は縦方向のRLで、隆帯上にまで施文される。02は屈曲部から口辺部にかけての破片である。口辺部には渦巻文から連繋する隆帯が巡り、窓枠状の区画を設けている。隆帯に沿って幅広の角押文が施文される。屈曲部には3条の沈線が巡り、胴部および頸部には縦および横方向の櫛歯状工具による格子目状の文様が描かれる。03は口縁部の破片である。口縁はくの字に屈曲して開く。口縁部は無文で、口辺に隆帯による区画帯を設け、渦巻文、交互刺突文を充填させる。04も03と同様の破片で交互刺突文が施文されている。05は浅鉢である。底部は平底で胴部は内湾する。鉢形に近い形状を示す。内面に2段の段を有するもので、阿玉台式の特徴を備えている。06・07は土器片鏝である。06は10.6g、07は9.0gを計る。

01～04は文様の特徴を細かに観察すれば、勝坂式的要素、阿玉台式の要素の双方が見られ、いわゆる広義の中峠式段階と判断される。

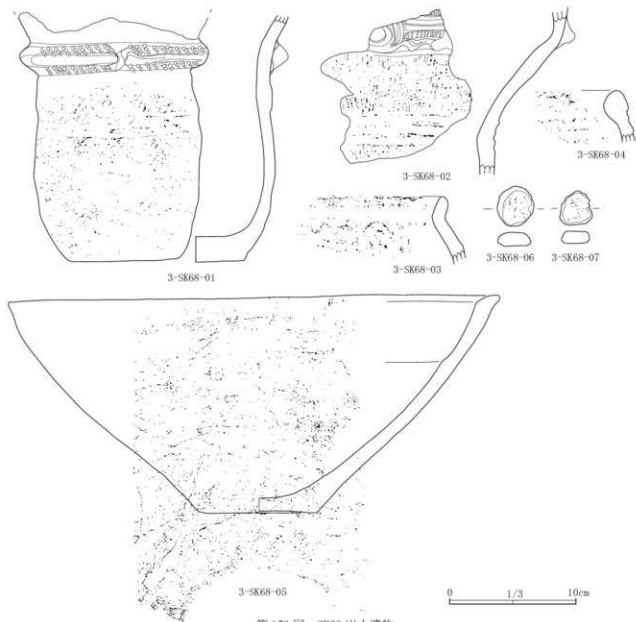
#### SK69・70 (第157・158図、図版42・95・96)

SK69はB-16・17グリッドにおいて検出された。SI18・SK45・70と重複するもので、本遺構が最も新しい。北東側が調査区域外となるが、平面形状はほぼ楕円形を呈するものと思われる。長軸不明、短軸1.61mを計る。確認面下の掘り込みの深さは86cm、覆土はやや不自然であるが、概ね自然堆積で5層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

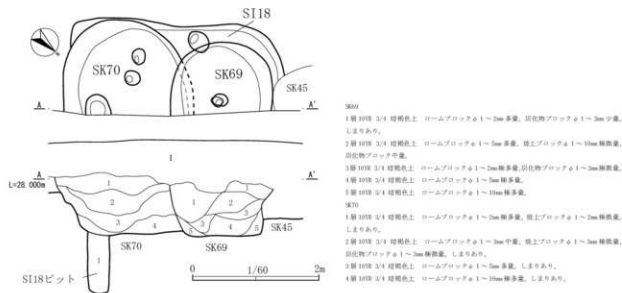
SK70はB-17グリッドにおいて検出された。SI18・SK69と重複し、SI18を切り、SK69に切られている。北東側が調査区域外となるが、平面形状はほぼ楕円形を呈するものと思われる。長軸不明、短軸2.1mを計る。確認面下の掘り込みの深さは97.5cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。本遺構の北東壁際にピットが1基検出されており、ピットの深さは89.9cmを計る。

遺物は両遺構から多量に出土しているが、調査時に2つの土坑の新旧関係を明確にできず、SK69・70として双方の遺物を一括して取り上げている。

01は深鉢土器の底部を欠損する資料である。平縁の口縁で文様帯には渦巻を中心に隆帯が延び、三角形や菱形の区画を構成する。区画内には縦方向の条線が充填される。胴部は3本の太い沈線が垂下し、地文には不完全な燃



第156図 SK68 出土遺物



第157図 SI18・SK69・70

SK69

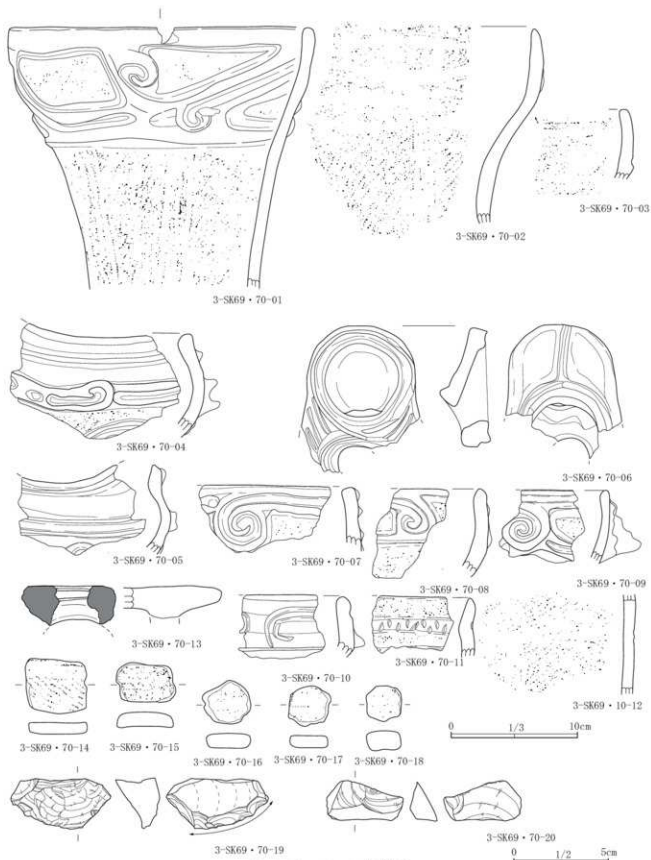
1層 101B 3/4 埴明色土 ロームブロック $\phi$ 1~2cm多量、団化物ブロック $\phi$ 1~2cm少量、しまりあり。2層 101B 3/4 埴明色土 ロームブロック $\phi$ 1~2cm多量、団上ブロック $\phi$ 1~10cm粒数多、団化物ブロック中量。3層 101B 3/4 埴明色土 ロームブロック $\phi$ 1~2cm粒多量、団化物ブロック $\phi$ 1~2cm粒数多。4層 101B 3/4 埴明色土 ロームブロック $\phi$ 1~5cm粒多量。5層 101B 3/4 埴明色土 ロームブロック $\phi$ 1~10cm粒多量。

SK70

1層 101B 3/4 埴明色土 ロームブロック $\phi$ 1~2cm粒多量、団上ブロック $\phi$ 1~2cm粒数多、しまりあり。2層 101B 3/4 埴明色土 ロームブロック $\phi$ 1~2cm中量、団上ブロック $\phi$ 1~2cm粒数多、団化物ブロック $\phi$ 1~2cm粒数多、しまりあり。3層 101B 3/4 埴明色土 ロームブロック $\phi$ 1~2cm多量、しまりあり。4層 101B 3/4 埴明色土 ロームブロック $\phi$ 1~10cm粒多量、しまりあり。



り戻しによる縄文が全面に施文される。02は太い隆帯により窓枠状の区画が設けられ、内部にLR縄文が充填される。胴部は太い沈線3条による磨消懸垂文が垂下する。地文はLR。03は02と同様の破片である。同一個体の可能性がある。04はキャリバー形土器の口縁部破片。波状を呈す。二重隆線によって文様が描かれている。地文はLR。05は04と同一個体か。キャリバー形土器の口縁部破片。波状を呈す。06は環状の把手部分である。沈線による文様が描かれている。07は平縁の深鉢口縁部破片である。口縁から連繋する隆帯が渦巻文を構成する。区画内にはLR



第158図 SK69・70 出土遺物

の縄文が充填される。08 は 07 と同様、平縁の深鉢口縁部破片である。口縁から連繫する隆帯が渦巻文を構成する。区画内および胴部には LR の縄文が施文され、頸部の無文帯は見られない。09 も 07・08 と同様。10 はやや内傾する深鉢口縁部。口辺部に 2 本の沈線による S 字文様が描かれる。頸部との境には隆帯が 1 条巡る。11 はややくの字に外反して開く口縁部。頸部との境に交互刺突文が 1 条巡る。地文は口辺部まで LR。12 は深鉢胴部の破片である。括れ部には沈線が 1 条巡り、上位に波状の沈線が沿う。地文は RL 縄文を縦方向に回転施文を行う。13 は鐙付形の台形土器である。受面は大きく張り出し鐙状となる。脚部は中位より欠損しているが円形の透かし孔が確認できる。14～18 は土器片鏝である。14 は 28.4g、15 は 22.9g、16 は 16.6g、17 は 13.2g、18 は 14.3g を計る。

19 はスクレーパーである。縦長剥片の基部を除去し周縁に剝離を加え、刃部としている。材質は黒色緻密ガラス質安山岩。20 は石核である。剥片を利用するもので、小形の剥片を 2 枚刺しが取っている。材質はチャート。

出土遺物は 01～03・11・13 は加曽利 E III 式古段階。この内 11 は連弧文様式の土器で、加曽利 E III 式平行である。04～06 は加曽利 E I 式新段階。07～09・12 は加曽利 E II 式である。出土遺物から判断して、加曽利 E III 式が最も新しく SK69、次に SK70 が加曽利 E II 式、最も古い遺物は SI18 と想定できる。

#### SK71 (第 84 図、図版 43)

SK71 は A-16 グリッドにおいて検出された。SI13・15・SK66 と重複するが、新旧関係は不明である。平面形状は楕円形を呈する。長軸 93cm、短軸 77 cm を計る。確認面下の掘り込みの深さは 25 cm、断面形状は逆台形を呈する。

本遺構の出土遺物はない。

#### SK72 (第 84 図)

SK72 は A-16 グリッドにおいて検出された。SI13・15・SK66 と重複するが、新旧関係は不明である。平面形状は不整形を呈する。長軸 64cm、短軸 60 cm を計る。確認面下の掘り込みの深さは 46 cm、断面形状は皿状を呈する。

本遺構の出土遺物はない。

#### SK73 (第 84 図、図版 43)

SK73 は A-16 グリッドにおいて検出された。SI13・15・SK66 と重複するが、新旧関係は不明である。平面形状・長軸・短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは 33 cm、断面形状は鍋底状を呈する。

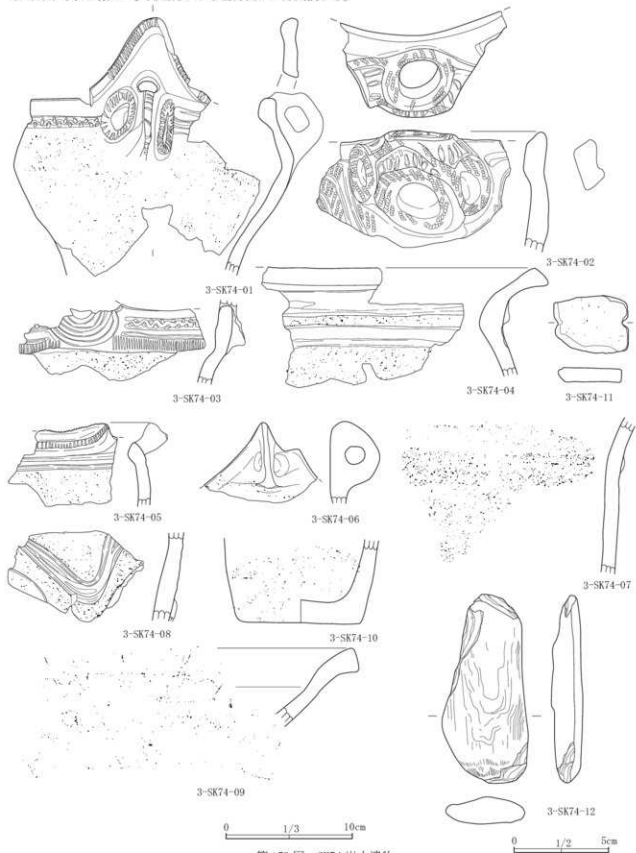
本遺構の出土遺物はない。

#### SK74 (第 120・159 図、図版 43・96)

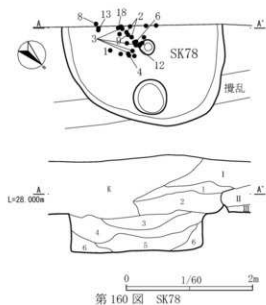
本遺構の詳細については SK37 と併記した。本遺構の出土遺物のうち、12 点を掲載した。

01 は底部がそろばん玉状になる勝坂式のキャリパー形土器であろうか、胴部下半より底部にかけては欠損している。口縁は平縁で三角形の大形の把手が 1 箇所が付される。突起の周囲には刻みが施される。また、把手部分の直下には眼鏡状の把手が付され、盲孔が穿たれている。口縁部は屈曲して直立するもので、無文帯となる。屈曲部には交互刺突列が 1 条巡る。器面には単節 RL が粗雑に施文される。勝坂式の要素を多く持つ土器である。02 は環状の隆帯を組合せ内部が空洞になる袋状の把手である。盲孔を有す。隆帯上には単節 RL の縄文が施文される。胴部には沈線により文様が描かれる。地文は RL。阿玉台 IV 式から加曽利 E I 式段階の遺物であろう。03 は口縁部文様帯が底状に突出するもので、文様帯部分に渦巻文による突起部が付され、交互刺突文が 1 条、縦方向の刻みが下端に施される。胴部には単節 LR の縄文が施文される。04 は外反して開く口縁部の資料である。口縁直下には太い沈線が 2 条巡り、沈線間に残された隆起部分には RL の縄文が、地文には単節 LR の縄文が施文される。05 は深鉢口縁部の破片で、隆帯による片切状の突起が付される。突起の周辺には刻みが施され、以下に沈線が 2 条巡る。胴部は単節 RL。06 は三角形の突起部分の資料である。眼鏡状の把手が付される。浅鉢の可能性もある。07 は深鉢

胴部の破片である。胴部中位に低い隆帯が巡り、上下を区分けている。上部は無文で下半はRL 網文を縦方向に施文するもので、Z字状の結節文が垂下する。08は胴部上半の破片でU字状の隆帯が貼り付けられる。隆帯は端部で二重隆線になる。地文は単節RL。09は浅鉢口縁部の大破片である。口縁は内部にやや緩やかな段を有し大きく開く。口唇端部は平坦になる。10は深鉢同部の下半から底部の資料である。下端は無文であるが上端部に僅かながらRLの網文が観察される。11は土器片鏝である。重量は38.7gである。12は磨製石斧である。材質が絹雲母片岩であり摩耗が激しい。先端部および基部側は一部欠損する。



第159図 SK74 出土遺物



## SK78 (第160～162図、図版43・44・97)

本遺構はA・20・21グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。長軸不明、短軸2.4mを計る。確認面下の掘り込みの深さは58.5cm、覆土は自然堆積で6層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

調査時にSK78出土遺物をSK59と誤記したために、遺物に記した注記番号はSK59になっている。

SK78

1層 10V 3/4 埴粉土 コームブロックより1～10cm中量、瓦上ブロックより2cm薄敷量。

2層 10V 3/4 埴粉土 コームブロックより1～2cm中量、瓦上ブロックより1～2cm薄敷量。

3層 10V 3/4 埴粉土 コームブロックより1～2cm中量、瓦上ブロックより1～2cm薄敷量。

4層 10V 3/4 埴粉土 コームブロックより1～10cm中量、瓦上ブロックより1～2cm薄敷量。

5層 10V 4年粉土 コームブロックより1～20cm中量、瓦上ブロックより1～2cm薄敷量。

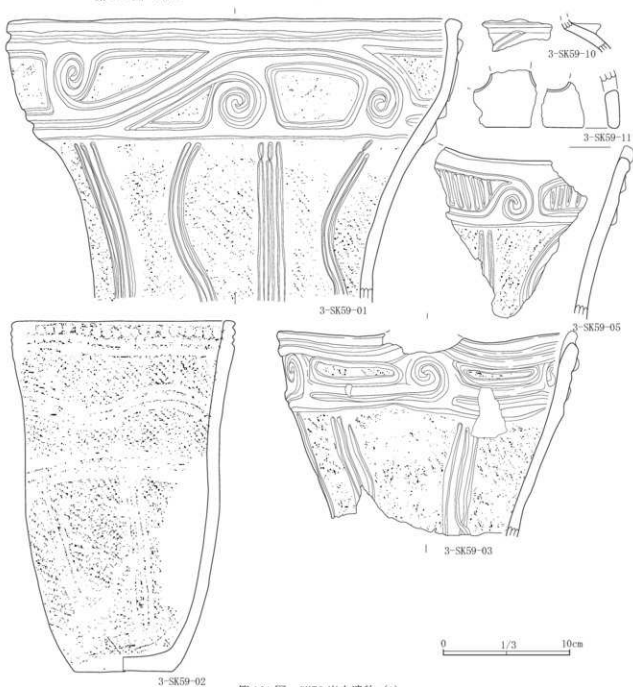
6層 10V 4年粉土 コームブロックより1～2cm中量、瓦上ブロックより1～2cm薄敷量。

しきりあり。

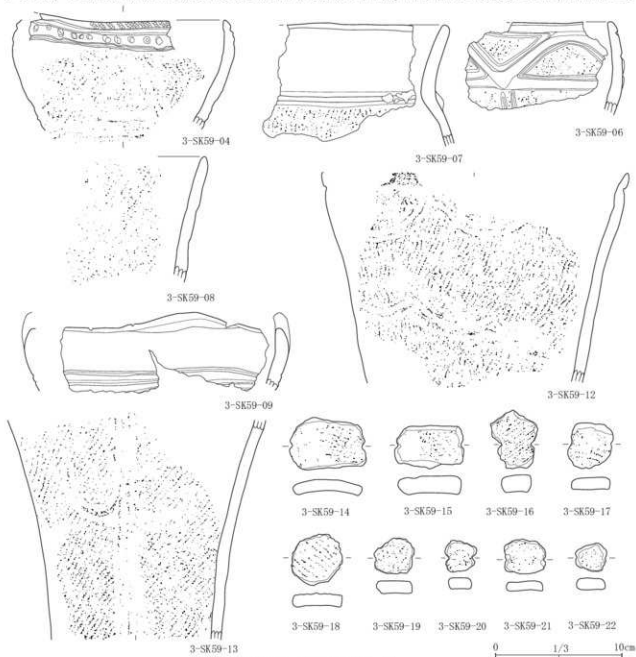
しきりあり。

しきりあり。

しきりあり。



01はキャリバリ形の深鉢上半部の資料である。胴下半より底部にかけては欠損している。口縁部文様帯には二重隆線の貼り付けにより、渦巻文が描かれ、渦巻間を同様の隆線で連結する。頸部に文様帯はなく胴部には3本1単位のやや太い沈線により懸垂文、蛇行懸垂文が交互に描かれる。区内および胴部には単節LRの縄文が施文される。02は円筒状の器形を呈する。口縁は平縁で、口縁直下には円形の刺突列が2列巡る。交互刺突にはならない。胴括れ部より上半には3本1単位の沈線により緩やかな波状の文様が描かれる。胴部の括れ部分には3条の沈線が巡り、以下同じ沈線による懸垂文が等間隔で垂下する。03は4単位波状の口縁深鉢である。把手部分は欠損している。波頂部の直下に渦巻文が施文され胴下半には3本1単位の懸垂文が垂下する。01と同様の文様構成を用いている。地文には無節Rの縄文が施文される。04は内湾する深鉢の口縁部資料。胴部以下は欠損する。口唇部はやや三角形に尖り、RLの縄文が施文される。口唇直下には2本の沈線により区画された内部に円形の刺突列が1条巡る。胴上半部には太い沈線により2本1単位の連弧文が描かれる。胴部括れ部には沈線が2条巡る。05は波状口縁の口縁部破片である。渦巻を中心に窓枠状の区画帯が設けられ、内部に縦方向の沈線が充填されている。胴部はLRの縄文を地文に懸垂文が垂下する。06は口縁部の破片である。口縁部文様帯部分には低い隆帯による三角形の区画文が描かれ、内部にLRの縄文が充填される。胴部は沈線による懸垂文が垂下するが地文は無文のようである。07は口縁部が幅広い無文帯で大きく屈曲して開く深鉢口縁。両耳壺形の土器であろうか、屈曲部には



第162図 SK78 出土遺物(2)

隆帯が1条巡り、胴部は単筋RLの縄文が縦方向に施文される。08は直線に開く深鉢口縁部の破片で口縁部に文様帯は無い。全面に単筋LRの縄文が施文されている。09は緩やかな3単位の波状口縁である。口縁部は幅広の無文帯となり、胴部との境に2条の沈線が巡る。10は有孔鏝付土器の胴部破片である。器厚は薄く、鏝状の突起部分に貫通孔は確認できない。鏝部より隆帯が斜方向に伸びている。11は大形土器の脚部片である。2点出土しているが、同一個体と判断した。脚部中央付近に円形の透かし孔が連続して穿たれている。外面は黒色に処理されている。12は深鉢口縁から胴部にかけての大資料である。口縁は折り返され、胴部には2本1単位の連弧文が2段に渡ってやや斜め方向に描かれる。13は深鉢胴部下半の資料である。緩やかに外反して立ち上がる。底部は欠損している。沈線による3本の懸垂文が垂下し、懸垂文の途中から、弧状の沈線が2本対峙して描かれる。14～22は土器片鏝である。重量は14は28.1g、15は32.7g、16は23.6g、17は16.4g、18は18.8g、19は10.6g、20は6.7g、21は8.8g、22は6.0gを計る。

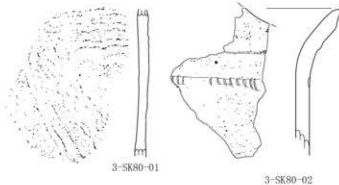
本遺構出土遺物は加曾利EⅡ式新段階が中心となるものであるが、連弧文様式土器が完形で共伴しており、本地域に連弧文様式土器の出現時期が従来よりも古くなる可能性を示している。

#### SK80 (第163・164図、図版44・98)

本遺構はA-10グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈する。長軸2.07m、短軸1.27mを計る。確認面下の掘り込みの深さは68cm、断面形状は逆台形を呈する。南東隅にピットが1基検出されている。直径42cm、底面からの深さは76.5cmを計る。

本遺構の出土遺物の内、5点を掲載した。

01は胴部の破片である。隆帯に沿って有筋沈線が2条描かれる。02は外反する深鉢口縁である。口縁は折り返しの跡がみられる。胴上半部に浅い角押文が施文される。03は浅鉢口縁部の破片である。口唇部は三角形に尖る。器面は無文。04・05は土器片鏝である。04は角押文が施文され、05では縄文が施文される。重量は04で19.0g、05は12.5gを計る。

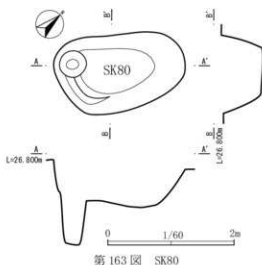


第164図 SK80 出土遺物

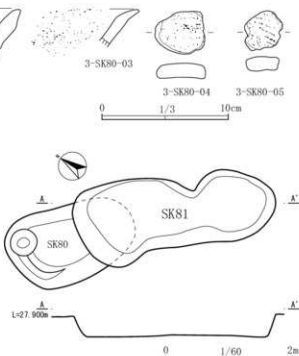
#### SK81 (第165図、図版44)

本遺構はA-10グリッドにおいて検出された。西側でSK80と重複しているが新旧関係は不明。平面形状は瓢形を呈する。長軸3.16m、短軸1.14mを計る。確認面下の掘り込みの深さは36cm、断面形状は浅い鍋底状を呈する。

本遺構の出土遺物はない。



第163図 SK80



第165図 SK81

## SK82・83 (第166・167図、図版98)

SK82・83はB-10グリッドにおいて検出された。重複して検出されているが新旧関係は不明である。

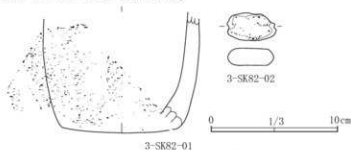
SK82は平面形状は不整槽円形を呈する。長軸不明、短軸1.22mを計る。確認面下の掘り込みの深さは39cm、断面形状は鍋底状を呈する。

SK83は平面形状は槽円形を呈する。長軸1.38m、短軸1.08mを計る。確認面下の掘り込みの深さは49cm、断面形状は鍋底状を呈する。

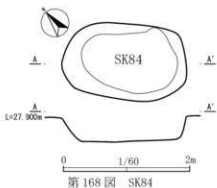
SK82の出土遺物の内2点を掲載した。

01は深鉢胴部下半〜底部の破片である。やや丸みを有する胴部である。器面には細い磨消懸垂文が垂下する。地文は縦回転施文のRL。02は土器片鏟である。無文の深鉢胴部破片を用いる。重量は11.9g。

出土遺物より判断して、加曾利E II式と判断される。



第167図 SK82 出土遺物



第168図 SK84

## SK84 (第168図、図版44)

本遺構はB-10・11グリッドにおいて検出された。平面形状は槽円形を呈する。長軸2.05m、短軸1.19mを計る。確認面下の掘り込みの深さは39cm、断面形状は鍋底状を呈する。

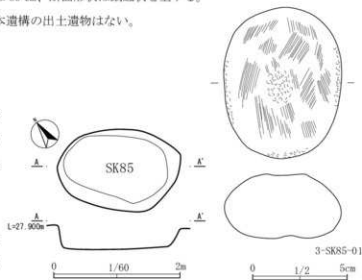
本遺構の出土遺物はない。

## SK85 (第169図、図版44・98)

本遺構はA・B-11グリッドにおいて検出された。平面形状は槽円形を呈する。長軸1.87m、短軸1.33mを計る。確認面下の掘り込みの深さは39cm、断面形状は鍋底状を呈する。

本遺構の出土遺物の内1点を掲載した。

01は磨石・凹石である。全面に磨り面および上下両面の中央部分には、敲打によるくぼみが観察される。材質は安山岩である。



第169図 SK85・同出土遺物

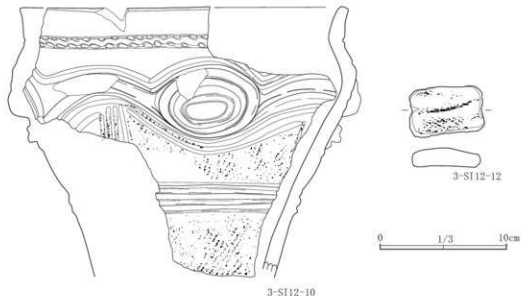
## SK86 (第82・170図、図版98)

本遺構はA-15グリッドにおいて検出された。SI12と重複するものであるが、覆土上層においてSI12の炉が検出されており、本土坑の方が古いことが分かる。平面形状は不明。上端部の長軸97.5cmを計り、短軸は不明。いわ

ゆる袋状を呈する土坑で、底部の直径は1.56 mを計る。確認面下の掘り込みの深さは39 cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。

本遺構の遺物は2点掲載した。

10は深鉢形土器の口縁～胴下半部にかけての資料である。口縁部はく字に屈曲して開き、屈曲部に交互刺突文が1条巡る。口縁部文様帯には隆帯による円形の貼り付け文が等間隔に配され、隆帯がその間を繋いでいる。胴部中位には3条の隆帯が巡る。地文は縦回転のRL縄文が施文される。本遺物はその特徴から広義の中峠式と判断される。12は土器片鏝である。重量は34.5gを計る。



第170図 SK86出土遺物

### SK87 (第171図、図版44)

本遺構はB-17グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈する。直径62 cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは68.2 cmを計る。断面形状はビット状を呈する。

本遺構の出土遺物はない。



第171図 SK87

## 3 性格不明遺構 (SX)

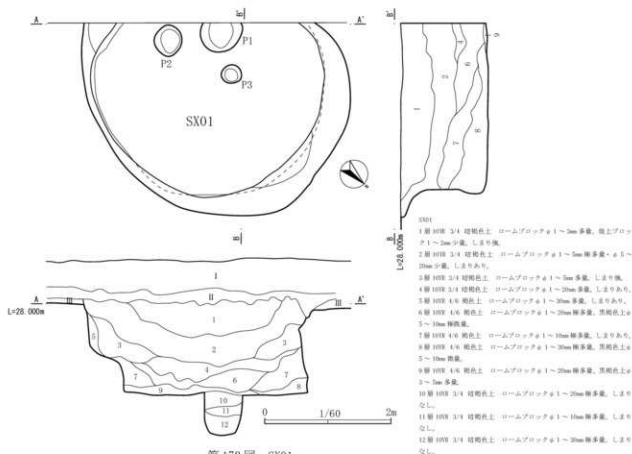
### SX01 (第172・173図、第9表、図版33・98・99)

本遺構はA・B-12・13グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。長軸4.38 m、短軸3.75 mと他の土坑に比べて規模が大きく、所謂小堅穴と呼ばれるものであろう。本遺跡においては性格不明遺構SXとして取り扱った。確認面下の掘り込みの深さは1.40 m、覆土は自然堆積で12層に分層される。壁は北側でやや袋状を呈するもので、その他はほぼ垂直に立ち上がる。北側に僅かながら段を有する。断面形状は鍋底状を呈し、床面中央南壁寄りに3基のビットが検出されている。ほぼ中央に位置するP1は長軸69 cm、深さ65 cmを計る。

本遺構の出土遺物の内、11点を掲載した。

01は口縁がく字に開く鉢形の土器である。口縁部は幅広く大きく開き、屈曲部に隆帯が1条巡る。胴部には2本の太い沈線で、緩やかな波状文様が平行に描かれる。地文は単節LR。02は01同様の鉢形土器である。口縁部の文様帯を有する加曽利EⅢ式で、渦巻による文様を起点に窓枠状の区画が設けられ区画内には縦方向の短沈線が充填される。胴部には縄文が施文されている。03は深鉢形土器の底部を欠損するほぼ完形の資料である。口縁部は平縁で口縁部文様帯は渦巻を中心に隆帯により区画が設けられる。胴部には隆帯が1条走り3木1単位の懸垂文が





垂下している。区画帯内部および胴部には縦方向の燃糸文が施文される。04は胎土中に繊維を混入する土器で器面に横方向の条痕が施文される。口唇部には刻みが施されるもので、広義の茅山式土器であるが、子母口式の可能性がある。05はやや内湾する口縁部の破片で口縁直下に円形刺突列が1条走る。口唇部および胴部にRLの縄文が施文され、3本の太い沈線による懸垂文が垂下する。06は03同様の隆帯による区画帯を設け区画内に燃糸文が充填される。07は三角形の把手部分の破片である。中央部分に刻みを有する隆帯が垂下する。08は浅鉢口縁部の破片である。三角形に尖り、内外面ともに無文である。09は口縁部文様帯に隆帯による区画帯を設け内部に単節LRの縄文を充填させている。

01から09は縄文時代中期加曾利EⅢ式古段階の遺物と判断され、連弧文様式土器01・03・05がこれに共伴している。

10・11は遺構の確認面から出土していた古墳時代中期後半の遺物であるが本遺構の時期とは明らかに時期の異なる遺物である。詳細については第9表に記載した。

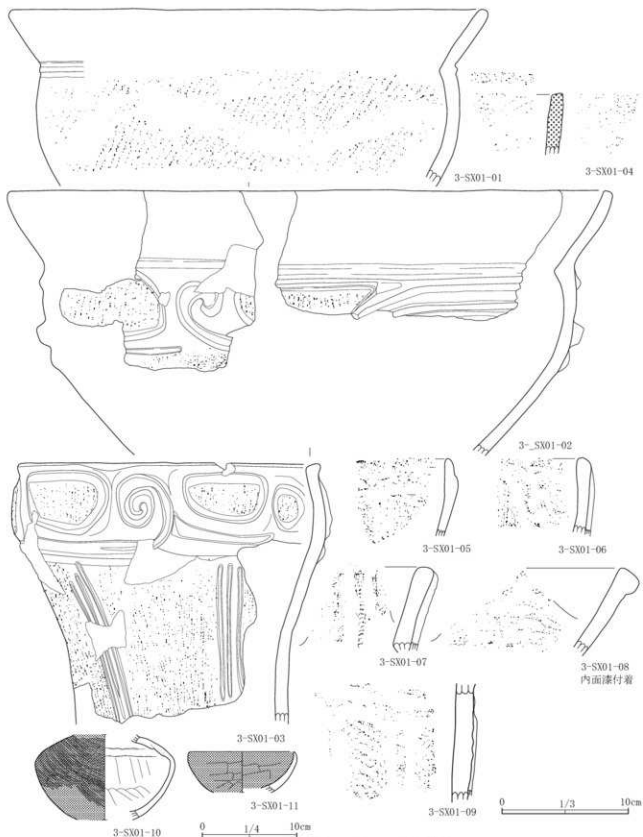
#### 4 ビット (第173・174図、第9・10表、図版99)

3区から検出されたビットについては、遺構が重複する部分が多く、単独でビット状の遺構と判断できたものは少ない。全体図にこれらのビットについて位置を示したが、詳細については割愛する。尚、遺物を出土したビットについてのみ位置と計測値を第10表において示した。

P11-01は鏝付土器であろう。孔は観察されない。鏝の上部に短沈線による爪状の文様が描かれる。02は、くの字に外反する口縁部の破片である。浅鉢の可能性がある。器面は無文である。内面に段を有することから阿玉台式土器と判断される。

P13-01は、3単位波状の深鉢である。ほぼ完形で、口唇部には沈線が走り、波頂部には渦巻文が配される。胴部は全面に単節LRの縄文が施文される。大木8b式中葉段階の遺物である。

P14-01は渦巻状の貼り付け部分が剥落したものである。加曾利EⅡ式段階であろう。02は土器片鏝である。重



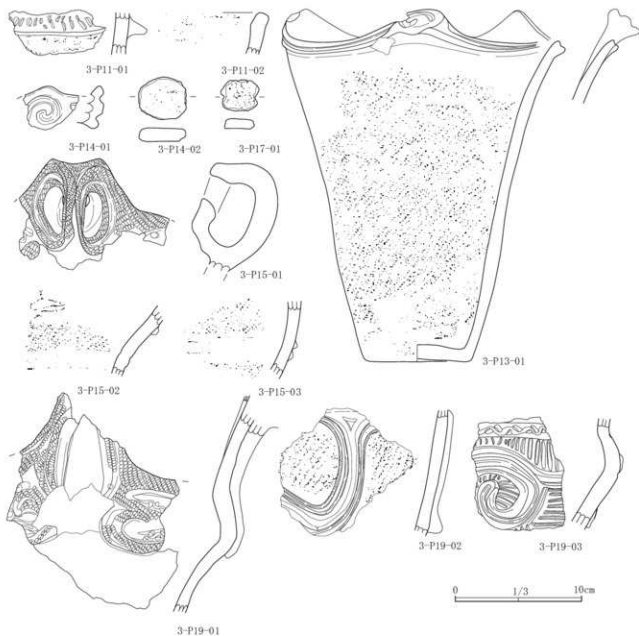
第173図 SX01出土遺物

第9表 3区SX01古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
10	ASSW-31C-SX-1	土製器	埴	—	—	9.0	124.9	乳底と思われ、胴中央部で強く屈曲する。	外面はヒタギ。内面はナダ。頸部付近に輪状痕を残す。	良好	内面 白4/2 緑灰黄 外面 2.03R4/6 赤褐	白色粒子多量に混入。	胴部 1/5	古墳時代中期 赤褐色。胴上半部は褐色に上り赤影が失われている。
11	ASSW-31C-SX-1	土製器	埴	10.9	—	43.6	43.0	体面は緑やかに内湾して口唇部に至る。	外面はヘラケズリの痕。ナダ。内面はナダ。	良好	内外面 2.03R5/6 明赤褐	白色粒子・雲母多量。	1/5	古墳時代中期 内外面赤影

第10表 3区ビット計測表

遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考
P11	A-11	32	28	90	SK56 を切る
P13	A-4	—	44	44	P14 に切られる
P14	A-4	—	52	41	P13 を切る
P15	A-4	44	40	47	
P17	B-4	48	36	48	
P19	A-4	60	—	65	



第174図 3区ビット出土遺物

量は17.0gを計る。胴部の破片を用いるものであるが、無文である。

P15-01は、波頂部に付される眼鏡状の把手である。隆帯によって構成され、全面に単節RLの縄文が施文される阿玉台最終末～加曾利EⅠ式古段階の資料であろう。02・03は同一個体の破片であろう。口縁部直下から頸部の破片で二重隆帯による文様が構成される。胴部および区画内には単節LRの縄文が施文される。01と同時期と判断される。

P19はS107と重複する遺構である。同住居跡の南西壁寄りで確認されている。01は隆帯により大形の把手を有

するもので、隆帯上には単節RLの縄文が密に施文されている。阿玉台最終末～加曾利EⅠ式古段階の資料であろう。02は口縁部文様帯に付された二重隆線による文様が描かれる。区画内の地文は単節LR。03は口縁直下から文様部にかけての破片である。口唇直下には交互刺突文が1条巡り、以下S字の隆帯が貼り付けられ、同様の隆帯で横方向に連結され、区画を設ける。区画内には太い集合短沈線が縦および横方向に充填される。01は阿玉台Ⅳ式段階、02は加曾利EⅠ式古段階、03は広義の中峠式と判断される。

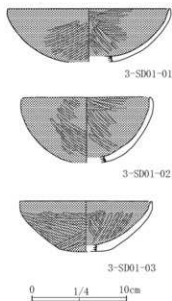
## 5 溝 (SD)

### SD01 (第175・176図、第11表、図版44・45・99)

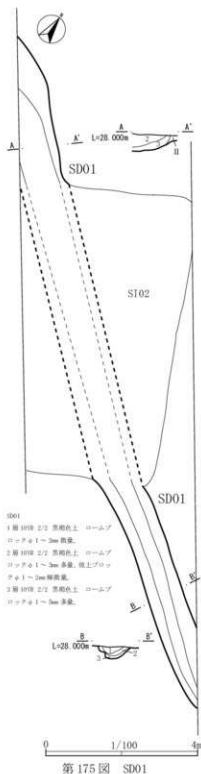
本遺構はA-10・11・12、B-12・13グリッドにおいて検出されている。調査区の南東から北西に向かい直線的に走行するもので、検出された全長は16.29m、最大幅は1.83m、確認面下の掘り込みの深さは43cmを計る。SI02と重複関係にあるもので、当初溝の方が古いと考え、調査を進めたが、断面図によって本遺構の方が新しいことが判明した。したがって、SI02部分の溝の図は作図できていない。

溝の覆土は3層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は赤彩が施された坏3点が出土している。形状より5世紀中葉～後半の遺物と判断されるが、SI02出土遺物と同様の遺物が出土している点から、SD01として取り上げたこれらの遺物3点は本来SI02の遺物であり、本溝に伴う遺物ではないと判断される。一方で、掲載しなかった未使用遺物の中に近世の瓦が出土しており、同遺物をもって判断するならば、遺構は近世に伴う可能性が高い。



第176図 SD01出土遺物



第175図 SD01

第11表 3区SD01 古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSB-31C-SP-1	土師器	杯	(17.1)	—	5.5	74.2	底面は丸底。体部は縦や斜めに内湾して開き、口縁で僅かに内縁する。	内外面共にびびり。	良好	内面 7.5黄/3 外側面 10黄/4赤陶	長石・石英等少～中程度目立つ。雲母が多い。	1/4	内外面赤彩
2	ASSB-31C-SP-1	土師器	杯	(13.2)	—	6.6	54.9	底面は丸底。体部は縦や斜めに内湾して開き、口縁で僅かに内縁する。	内外面共にびびり。	良好	内外面 2.5黄/6赤陶	長石・石英・雲母やや多い。	1/5	内外面赤彩
3	ASSB-31C-SP-1	土師器	杯	(13.9)	(5.2)	5.2	80.2	底面は僅かに丸みを帯びた平底。体部は直線的に開き口縁は短く直立する。	内外面共に口縁は横ナゲ、体部はびびり。	良好	内面 10黄/4赤陶 外面 10黄/3赤陶	長石・石英等少～中程度目立つ。雲母やや多い。白色粒状物質散在。	1/5	内外面赤彩

## 6 遺構外出土遺物 (第177図、第12表、図版99・100)

本区の表土掘削時に出土した遺物(表土)および遺構に伴わないグリッド出土遺物について、遺構外出土遺物としてまとめた。

表土-01は胎土中に繊維を混入する、早期末葉、広義の茅山式土器である。内外面にアナダラ族の腹縁による条痕が横方向に施文される。02は胴部は直線的に開き口縁に至る。全面に単節RLの縄文を縦方向に施文している。縄文の施文方向から判断して中期加曾利E式でも古い段階の可能性もある。03は深鉢形土器の上半部の資料である。口縁直下に3条の沈線が巡り、頸部には2本の沈線間を磨消たゆるやかな波状文が描かれる。胴部の括れ部には同様の磨消手法を用いた沈線が2条巡る。地文は単節LR。文様構成より、連弧文様式土器と判断され、加曾利EⅢ式前後に平行するものであろう。

表土-04は表土中より検出されたもので、3つに破損していたものが接合している。形状は受面はやや中央がくぼみ、鐙は無い。受面より屈曲して脚部に至る。脚部の孔は6箇所に入ったれ、5箇所で等間隔となるが、1箇所のみ狭く、室伏徹氏の分類における単孔2孔・単孔1孔のいずれの分類基準からも外れる。脚端部はいずれも折損しており、折損後破断面を磨滅させて二次利用(再生)を行っている。受面の内側に鋭く尖った工具により絵画が描かれている。渦巻・山形などの文様が組み合わされている。モチーフが何であるかは判断できない。内外面、特に内面に絵画が描かれる類例は福島県袋原遺跡・東京都玉川学園町遺跡などが知られているが、蛇体をモチーフとするものが従来知られており、本遺物も2匹の蛇体をデフォルメしたものとも想定できる。

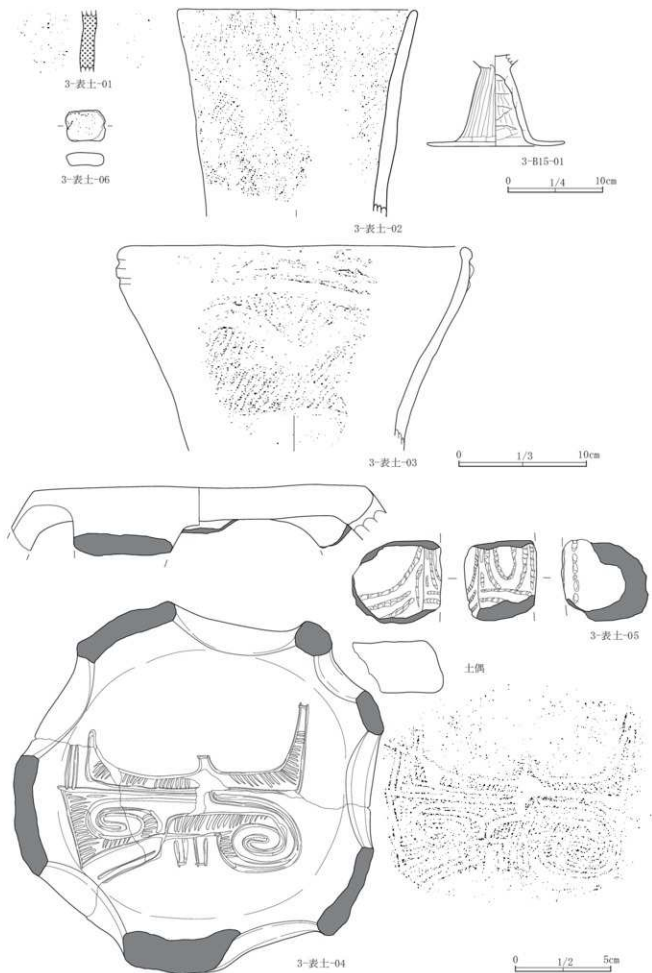
表土-05はやや厚手の板状を呈する土偶の腹部側面の断片である。上下および側面には有節沈線による文様が描かれる。施文方法および形状より阿玉台式に伴う土偶と判断される。

表土-06は土器片鏟である。重量は11.7gを計る。

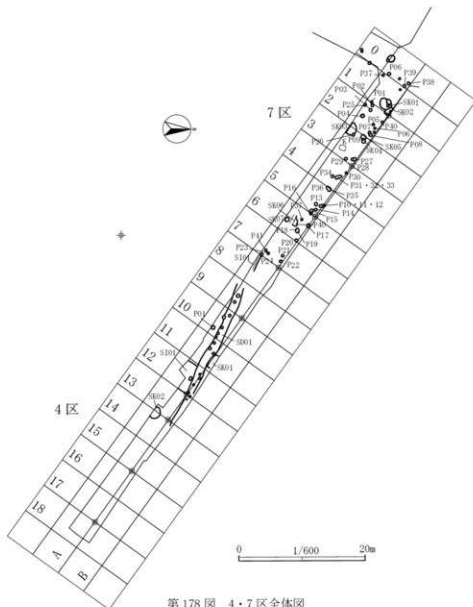
B15-01は土師器高環である。脚柱部はやや円筒状を呈し、裾部で直角に曲がって開く。上腕部は欠損している。5世紀中葉の遺物であろう。尚、詳細な観察については第12表にまとめた。

第12表 3区遺構外古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSB-31C-B-15	土師器	高環	—	(14.4)	(9.5)	226.4	脚柱は膨らみを有して開き、裾部ではほぼ水平に開く。	外面はヘラタビリ面をびびり、腹面は内外面共にナゲ。内面は輪襷模散在あり。	良好	内外面 10黄/4黄/3	長石・石英・雲母多量、スコリア少量。	脚部	



第177图 3区遗構外出土遺物



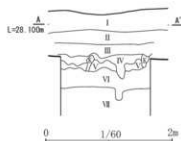
第178図 4・7区全体図

## 第4項 4区・7区

4・7区は1区の東側延長上に位置する。2区との交差部分よりも東側に当たる。A-8グリッド部分に電柱が設置されていたために、この電柱を境に西側を7区、東側を4区と呼称した。尚、前述したが、工事の都合上4区の調査を先行するようとの指示が出されたために、地区の呼称が4区になっている。また、7区の調査は6区の調査後に実施したために区番号の呼称が後になっている。したがって、グリッドの呼称については4・7区を一括しているものの区番号は離れる結果になっている。

遺構は4区東側端部に向かい疎になり、中央部分に近世と判断される溝が東西方向に走るのが目をひく程度で全体には遺構数は激減している。7区側はこれに比べ遺構は土坑・ピットを中心に増加傾向を示す。尚、4区と7区の境に位置するSI01については電柱により一部破壊されており、十分な調査は行っていない。

4区はA・B-9グリッドからA・B-18までの間になる。7区はA・B-0～A・B-8グリッド間となる。



第179図 4・7区標準堆積土層

- I層 表土層 耕作により攪拌された土層  
 II層 黒褐色土 ロームブロックが1～5mm多量。  
 III層 ローム層移層 褐色土層でやや粘性がある。  
 IV層 ソフトローム層 黄褐色を呈し、やや粘性がある。  
 本区における遺構確認面である。  
 V～VII層はハードローム層である。

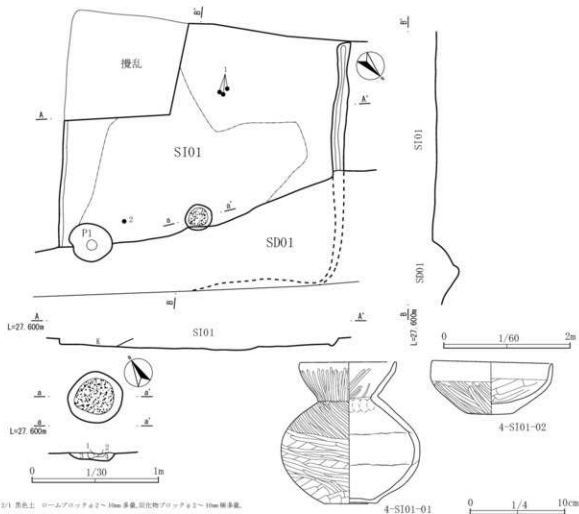
## [4区]

## 1 住居跡 (SI)

## SI01 (第180図、第13表、図版46・47・100)

本遺構はA-12グリッドにおいて検出された。SD01に北側を切られ、南側が調査区域外となるため全容はつかめていない。方形を呈するものと推定される。東西方向の長さは4.44mを計る。炉は床面中央やや北東側に位置するもので、楕円形を呈する。堀り込みは浅く、皿状を呈し4層に分層される。壁溝は北西壁に一部確認されているが南東壁では確認されていない。柱穴は東側コーナー付近に1基検出されている。

遺物は住居南側中央部分から埴形土器1点が破損した状態で、また、P1の西側において坏1点が出土している。出土遺物より判断して、5世紀中葉の住居と判断される。



SI01 跡

1 層 1019 2/1 黒褐色土 ロームブロックφ2〜10mm多量、炭化物ブロックφ2〜10mm多量。

2 層 赤褐色土 ロームブロックφ2〜10mm多量、炭化物ブロックφ2〜10mm多量、しまりあり。

和性なし。

3 層 1019 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2〜10mm中量、炭化物ブロックφ2〜10mm中量。

4 層 1019 3/2 暗褐色土 ロームブロックφ2〜10mm多量、炭化物ブロックφ2〜10mm多量、しまりあり。

第180図 SI01・同出土遺物

第13表 4区SI01古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	粘土	残存	備考
1	ASSW-4区-SF-3	土師器	埴	10.0	4.8	14.5	673.0	底面は僅かに上底反碗の平底。胴部は僅かに球形を呈する。胴部は強く窄まる。口縁は胴部で「く」の字に屈曲した後やや内側に傾く。口縁は胴部に比し、径も小さく浅い。	外面底面及び胴部下端はヘラケズリ。口縁〜胴部は口唇を斜きミガキ。胴部内面は輪指痕が確認出来るものの調整は不明。胴部直下に指頭圧痕。口縁は大きく横ナデの後軌いし房形。	良好	内面5YR6/8 暗 外面5YR5/8 明赤褐色	黒色粒子や中多い。藍色少量。白色粒子・白色針状物質微量。	完形	No. 2, 3
2	ASSW-4区-SI-1	土師器	坏	12.5	4.8	5.5	242.6	底面は僅かに丸みを帯びた平底。胴部は直線的に開き口縁は直立する。	口縁は内外面共に横ナデ。外面体部〜底面はケガキ。内面はナデ。	良好	内外面2.5YR5/6 明赤褐色	黒色粒子・黄粉やや多い。	口縁1/3欠損	内外面赤褐色

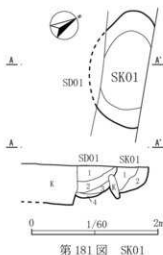


## 2 土坑 (SK)

## SK01 (第181図、図版47)

本遺構はA・B-11グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。南西側をSD01に切れ、北東側は調査区域外となっている。長軸1.80mを計る。確認面下の掘り込みの深さは58cm、断面形状は緩やかなU字形を呈する。

本遺構からは少量の縄文土器が出土しているが、掲載遺物はない。



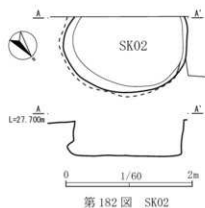
第181図 SK01

現場での土層観察は行っていない。

## SK02 (第182図、図版47)

本遺構はA-13・14グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈する。南側が調査区域外となっている。長軸1.91mを計る。確認面下の掘り込みの深さは55cm、断面形状は東側で僅かに袋状を呈する。

本遺構の出土遺物はない。



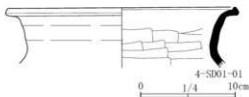
第182図 SK02

## 3 溝 (SD)

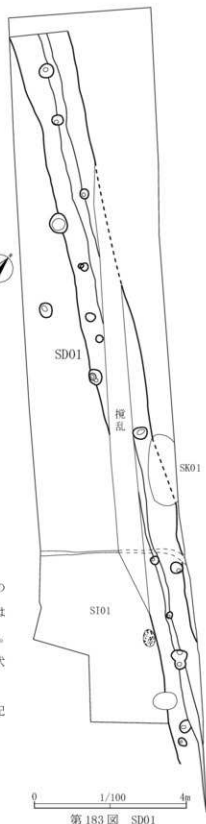
## SD01 (第180・183・184図、第14表、図版47・100)

SD01はA-9～12、B-12・13グリッドにおいて検出されている。調査区の南東から北西に向かいやや蛇行しながら走行するもので、検出された全長は24.27m、最大幅は0.99m、確認面下の掘り込みの深さは39.5cmを計る。SI01と重複関係にあるもので、本遺構の方が新しい。溝の底部にはビット状の掘り込みが多数見られる。これらビットの計測値については割愛した。

本遺構出土遺物の内、1点を掲載した。須恵器の甕口縁部の破片で9世紀に新治で生産された遺物であろう。



第184図 SD01出土遺物



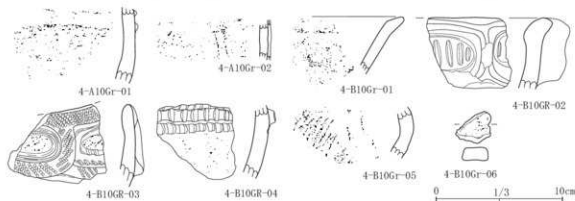
第183図 SD01

第14表 4区SD01古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	高さ	重量	器形の特徴	整形の特徴	地成	色調	粘土	残存	備考
1	ASS-4K-S01-14-7GR	須恵器	甕	(23.9)	—	(6.3)	69.1	口縁は「C」の字に外反し、肩部は積み上げられる。	ロケテ整形。(回転台使用?)	良好	内面2.5W/3 に黄 外面2.5S/2 褐色黄	長石・石英・雲母多量	口縁・肩部破片	新治産

## 4 遺構外出土遺物 (第185図、図版100)

遺構確認時にいずれの遺構に伴うかが判断出来なかつた遺物を遺構外出土遺物として取り扱った。



第185図 4区遺構外出土遺物

A10Gr-01は角押文が隆帯直下に巡り、以下に連弧文が描かれる。阿玉台I b式。02は隆帯に沿って角押文が描かれ、胴部には単節LRの縄文が僅かに施文される。阿玉台IV式。B10Gr-01は口縁はくの字に外反して開く。浅い鉢形の土器であろう。口唇部は折り返され、器面には条線が施文される。02は隆帯により窓枠状の区画を設け、内部に縦方向の太い沈線を充填する。加曾利E I式カ。03は波状を呈する深鉢口縁部。隆帯により窓枠状の区画を作る。隆帯上には単節RLの縄文が施文される。阿玉台IV～加曾利E I式。04は深鉢胴部破片。隆帯に沿って角押文が描かれる。阿玉台式。05は太い2本の沈線により弧状の文様が描かれる。地文は単節LR。加曾利E式。06は土器片鏝である。深鉢胴部片を用いるもので、無文。重量は6.7gを計る。

## [7区]

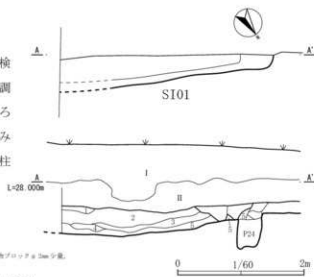
## 1 住居跡 (SI)

## SI01 (第186図、図版63)

本遺構は7区の調査区東端A-7・8グリッドにおいて検出された。前述の通り、電柱が存在したために十分な調査は行えていない。平面形状は方形を呈するものであろう。長軸、短軸ともに不明である。確認面下の掘り込みの深さは68 cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。柱穴、炉ともに確認されていない。

本遺構の出土遺物はない。

- SI01
- 1層 10IX 2.1 黒色土 ロームブロック2～10mm多量
  - 2層 10IX 1.71 黒色土 ロームブロック2～10mm少量、細粒化ブロック2mm少量
  - 3層 10IX 2.4 暗褐色土 ロームブロック2～10mm少量
  - 4層 10IX 2.4 暗褐色土 ロームブロック2～10mm多量、しまり、粘性あり
  - 5層 10IX 2.1 黒褐色土 ロームブロック2～10mm少量、しまり強、粘性あり



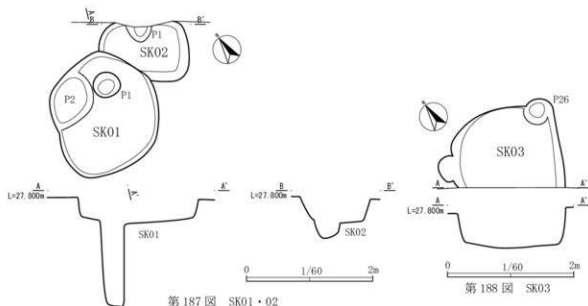
第186図 SI01

## 2 土坑 (SK)

## SK01・02 (第187図、図版64)

SK01はA-1グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈する。長軸1.99 m、短軸1.19 mを計る。確認面下の掘り込みの深さは35 cm、断面形状は鍋底状を呈する。底部には2基のピットが穿たれている。P1の深さは1.27 mと深い。

SK02はA-1グリッドにおいて検出された。平面形状は隅丸方形を呈する。長軸1.48 m、短軸0.97 mを計る。



第187図 SK01・02

第188図 SK03

確認面下の掘り込みの深さは36 cm、断面形状は逆台形を呈する。床面北側にP1が穿たれている。深さは20 cmを計る。

いずれの遺構も出土遺物はない。

#### SK03 (第188図、図版64)

本遺構はA-2・3グリッドにおいて検出された。平面形状は不明。長軸不明、短軸1.71 mを計る。確認面下の掘り込みの深さは52 cm、断面形状は鍋底状を呈する。

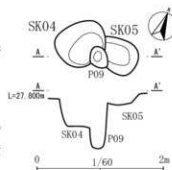
本遺構の出土遺物はない。

#### SK04・05 (第189図)

SK04はA-3グリッドにおいて検出された。SK05およびP09と重複しているが新旧関係は不明である。平面形状は楕円形を呈する。長軸76 cm、短軸70 cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは41 cm、断面形状は逆台形を呈する。

SK05はA-3グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈すると思われる。長軸不明、短軸54 cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは20 cm、断面形状は皿状を呈する。

いずれの遺構も出土遺物はない。

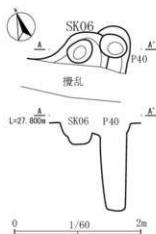


第189図 SK04・05

#### SK06 (第190図)

本遺構はA-6グリッドにおいて検出された。平面形状は不明。長軸、短軸ともに不明。北側壁寄りにピットが1基穿たれている。ピットの長軸36 cm、短軸33 cmを計る。確認面下の掘り込みの深さはピット最下部で36 cmを計る。

本遺構の掲載遺物はない。



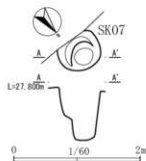
第190図 SK06

#### SK07 (第191図)

本遺構はA-6グリッドにおいて検出された。平面形状はほぼ円形を呈する。長軸69.6 cm、短軸

不明。掘り込みの中段にテラスを有する。確認面下最深部の掘り込みの深さは81 cmを計り、ピット状を呈する。

本遺構の掲載遺物はない。



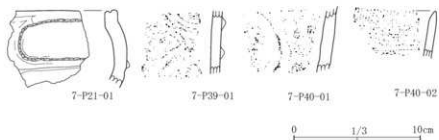
第191図 SK07

## 3 ビット (第192図、第15表、図版102)

本地区からは40基のビットが検出されている。これらのビットは掘り込みが深く住居跡の柱穴と判断されるものも多く、7区全体に削平が進んでいることが伺える。ビットは北東側に偏在する傾向がある。遺物の出土したビットの計測値および位置については以下の第15表にまとめた。

第15表 7区ビット計測表

遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物
P21	A-7	44	39	27	01
P39	A-0	30	30	24	01
P40	A・B-6	43	35	129	01・02

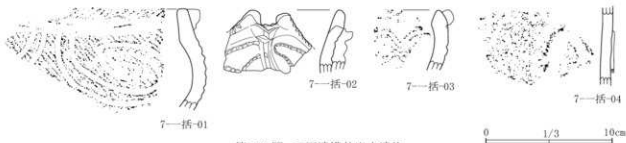


第192図 7区ビット出土遺物

P21-01は口縁部破片である。窓枠状の区画に沿ってやや細い角押文が描かれる。阿玉台I b式。P39-01は胴部破片で隆帯が瓢状に垂下し、それに沿って有節沈線が描かれる。阿玉台II式。P40-01は深鉢胴部破片である。断面三角形の隆帯が弧状に描かれ、胴部には襷状文が施される。阿玉台I b式。P40-02は直線的に開く深鉢口縁部の破片。口唇部には刻みが施され、胴上半部には幅広い変形爪形文が施文される。縄文前期浮島II式土器である。

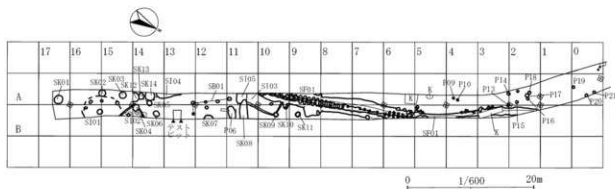
## 4 遺構外出土遺物 (第193図、図版102)

遺構確認時にいずれの遺構に伴うかが判断出来なかった遺物を遺構外出土遺物として取り扱った。



第193図 7区遺構外出土遺物

01は深鉢口縁部の破片である。口唇部は折り返して棒状となる。口唇直下に2本1単位の沈線により渦巻文が対照形に描かれる。地文は無節R。口唇部にはLRの縄文が施文されることより、阿玉台IV～加曾利E I式にかかる土器であろう。02は波状口縁波頂部の破片である。双頭の突起となり側面には刻みが施される。窓枠状の区画の中にはやや細い角押文が描かれる。阿玉台I b式。03は内湾する口縁部の破片である。内面に段を有す。口唇部は折り返され、棒状になる。胴上半部には角押文により弧状の線が瓢形に対峙して描かれる。阿玉台I b式。04は深鉢胴部破片。隆帯による逆U字形の文様が描かれ、上位には襷状文が僅かに観察される。地文はない。阿玉台I b式カ。



第194図 5区全体図

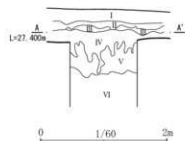
## 第5項 5区

本区は3区の南西側の延長部分になる。台地の縁辺部に近くっており、遺構の検出数が増加するものと予測されたが、3区に比べて遺構数はやや減少している。また、3区が縄文時代の遺構を中心に展開していたのに対して、古墳時代の遺構が増す傾向にある。

さらに、本区の南西から北東方向にSF01が大きく縦断しており、遺跡全体図を見る限りでは同遺構の存在が特徴的である。その他SK03は井戸状の遺構であり、馬の骨が上層より出土している。溝を含め中世から近世にかけての遺構の可能性がある。

5区との境を以て南側のA・B-0よりA・B-17までの間が本調査区域となる。全長はおよそ90mを計り緩やかに西方向に屈曲する。

遺構の確認面は3区とはほぼ同様であるが、テストピットA-A'で標準堆積土層の観察を行っている。土層の説明は第195図 5区標準堆積土層図中にて行っている。第III層および第IV層の上面が遺構確認面となる。



第195図 5区標準堆積土層

- I層 表土層 耕作により攪拌された土層
- II層 黒褐色土 ロームブロックを1~5cm多量
- III層 ローム腐移層 褐色土層でやや粘性がある。
- IV層 ソフトローム層 黄褐色を呈し、やや粘性がある。本区における遺構確認面である。
- V~VI層はハードローム層である。

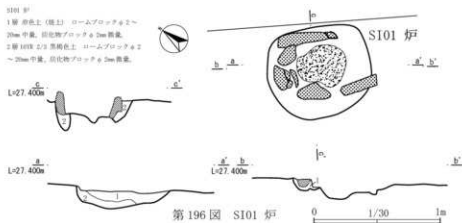
## 1 住居跡 (SI)

### SI01 (第196~198図、図版50・101)

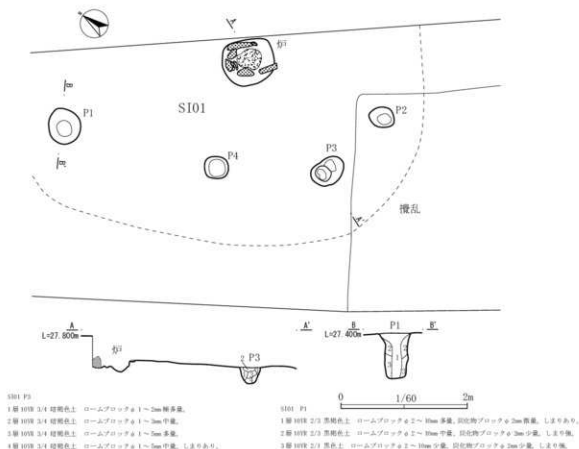
本遺構は調査区域の南端A・B-15・16グリッドにおいて検出されている。縄文時代の遺構で、確認面において4基のピットが弧状に配列され、中央に炉を有することから住居跡と判断されたものである。壁は完全に削平され、床面は明瞭ではない。北東側が調査区域の外となっているため、規模は不明瞭であるが、柱穴の配列から6m前後と想定される。

覆土は不明であるが、P1では柱痕が明瞭である。その他は柱の抜き取り痕も見られず、自然堆積を示している。

炉は調査区の東壁より検出されている。長方形に縦が取り囲む石囲炉である。南側の石は欠落している。石囲の内法は長軸71cm、短軸33cmを計る。掘方の平面形は不整形を示し、長軸85cm、短軸69cmを計る。床面からの掘り込みの深さは20cmを計る。



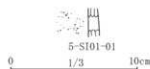
第196図 SI01 炉



第197図 SI01

遺物は柱穴内および確認面から僅かながら出土している。

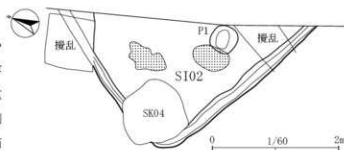
01は胴部の破片である。形骸化された嬰状文が施文されるもので、阿玉台Ⅱ～Ⅲ式。



第198図 SI01出土遺物

SI02 (第199図、図版50・51)

本住居跡はSI01の北側に近接して検出されている。南東コーナー側のみ調査が行えたもので、全容は不明である。コーナー付近においてはSK04が重複しているが本遺構のほうが新しい。また、北壁側は攪乱によって破壊されている。確認面はほぼ床面で、深さ8cm、最大幅33cmの壁溝が全周している。



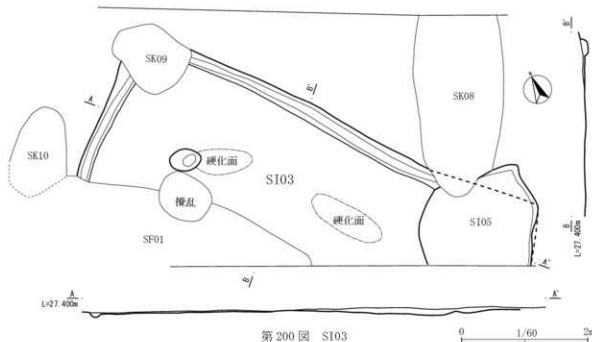
第199図 SI02

本遺構の遺物は土師器・縄文土器の細片が出土しているが、掲載遺物はない。土師器の出土より、古墳時代の遺構と判断される。

SI03 (第200・201図、第16表、図版50・52・101)

本住居跡はA・B・10・11グリッドにおいて検出された。SF01によって南西側を切られ、SI05・SK08・09・10を切っている。平面形は方形を呈するものであろう。東西軸は5.9mを計る。確認面下の掘り込みの深さは9.7cmを計る。全面に壁溝が巡る。柱穴は北側コーナー寄りに1基のみ検出されている。床面はやや凹凸があるものの、硬化面が部分的に観察される。

遺物は甕1点、坏1点、高坏1点を掲載した。いずれも刷毛による整形が行われ、古墳時代前期の資料である。尚、坏および高坏はSI05からの出土となっているが、SI05は縄文の遺構であるため、本遺構の遺物とした。

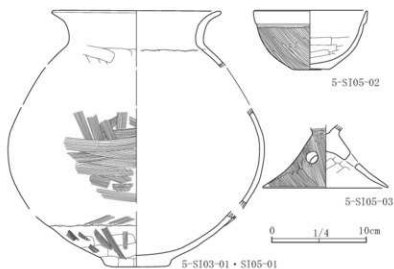


第200図 SI03

## SI04 (第202図、図版52)

本住居跡はA-13・14グリッドにおいて検出された。SK14を切っている。平面形は方形を呈するものであろう。東西軸は3.9mを計る。確認面下の掘り込みの深さは39cm、土層は8層に分層され自然堆積を示しているが、中層の第2層に焼土の堆積が見られることから、人為的な堆積の可能性もある。柱穴は検出されていない。床面はやや凹凸があるものの、硬化面が全面に観察される。

本遺構からの出土遺物としては土師器片・縄文土器片がある。遺構の形状から想定して古墳時代の住居跡と判断した。



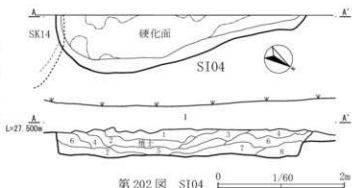
第201図 SI03 出土遺物

第16表 5区SI03・05古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	粘土	残存	備考
1	ASSI- SI-3	土師器	甕	(17.5)	6.8	(26.8)	354.3	底面は円盤状に突出する。胴部は最大径を中位に有する球面と推定される。口縁は胴部で「く」の字に屈曲し外反する。	底部下平には胎付が観察される。体部下端はヘラナダの後部分的なハケ調整。胴部～頸部は不整方向の屈がハケ。内面はナダ。口縁は内外面共に横ナダ。	良好	内面10YR7/4 に灰黄褐色 外面7.5YR7/4 に灰褐色	石英多量に含む。 長石や多い。 雲母少量。	口縁 ～ 底部 1/2	5KSI5-1 と接合
2	ASSI- SI-5 -2	土師器	埴	(11.8)	3.9	6.2	134.4	底面はやや上アゴ屈み味の平底。体部は内湾して立ち内側に強い稜を有した後口縁に至る。	口縁は内外面共に横ナダ。体部外面はヒラギ。口縁底下に沈線が1条走る。内面はナダ。	良好	内外面7.5YR6/6 明黄褐色	黒色粘土・雲母 やや多い。白色 粘土・少量。	口縁 ～ 底部 1/2	No.2
3	ASSI- SI-5 -4・ ASSI- SI-5 -7	土師器	高杯 (脚部 破片)	—	(13.1)	(13.1)	92.8	脚はラック状に大きく開く。接合部にソケット状の窪みが観察される。孔は等間隔に3単位上方向から下方に穿たれている。	外面は丁寧な縦方向のヒラギ。内面はヘラナダ。底面は横ナダ。	良好	内外面10YR6/6 明黄褐色 外面10YR7/6 明黄褐色	雲母多い。黒色 粘土・白色粘土 少量。	脚部 1/2	No.4,7

## SI04

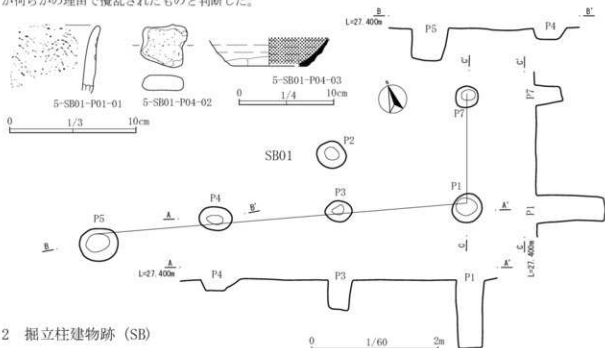
- 1層 10階 2/3 黒褐色土 コームブロックより30cm程度、柱土ブロックより30cm中層、しまり・粘性あり。  
 2層 10階 2/3 黒褐色土 コームブロックより30cm中層、柱土ブロックより100cm程度、しまり強、柱土ブロック層。  
 3層 10階 2/3 黒褐色土 コームブロックより10cm程度、柱土ブロックより30cm中層、炭化物ブロックより30cm程度。  
 4層 10階 2/3 黒褐色土 コームブロックより30cm中層、柱土ブロックより30cm程度。  
 5層 10階 2/3 黒褐色土 コームブロックより10cm程度、柱土ブロックより30cm程度。  
 6層 10階 2/3 黒褐色土 コームブロックより30cm中層、炭化物ブロック層あり、しまりあり。  
 7層 10階 2/3 黒褐色土 コームブロックより10cm程度。  
 8層 10階 2/3 黒褐色土 コームブロックより30cm程度。



## SI05 (第200・201図、図版52・101)

本住居跡はA-11グリッドにおいて検出された。SI03・SK08と重複している。平面形は不整形を呈するものである。南北軸は1.93m、東西軸は1.88mを計る。確認面下の掘り込みの深さは9.7cmを計る。

本遺構はSI03の南東において検出されたものであるが、出土した遺物は第201図 SI03出土遺物の02・03である。一方で、同01はSI05とSI03が接合している。したがって、両遺構は同時期のものと判断し、SI03の南東コーナーが何らかの理由で攪乱されたものと判断した。



## 2 掘立柱建物跡 (SB)

## SB01 (第203図、第17表、図版101)

第203図 SB01・同出土遺物

本遺構はA-11～13、B-12・13グリッドにおいて検出された。直線的に配列されるP1～P5および直角方向に位置するP7・P2の6基の柱跡として確認されたものである。柱間はP1～P3で2.06m、P3～P4で2m、P4～P5で2.03m、P1～P7で1.76m、P2～P3では1.05mを計る。東西軸では柱間はほぼ一定間隔を示しているが、南北方向は東西方向と異なった値になっている。P2～P3は東西軸のほぼ1/2で東柱の可能性もある。一方で、柱穴の掘方はP1で最も深く1.07m、P3が49cm、P4が29cmを計り、確認面がほぼ平坦であるにも関わらず、深さが一定しないことから、掘立柱建物跡として成立するものか疑問が残る。

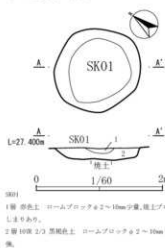
本遺構からはP1から阿玉台IV式の口縁部片1点、P4から16.5gの土器片鏝1点、須恵器杯1点が出土している。古代の遺物については下記の第17表にまとめた。

第17表 5区SB01古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	粘土	残存	備考
1	ASSP-SIC-P4	土器片	杯	—	(8.0)	(3.0)	11.0	体部下端で建令か内湾気味に開く。	口ロコ整紙、体部下端は手持ちヘラズリカ。	良好	内面2.574/1黄泥 外面1.016/3 に白・黄斑	スコリアや多い、雲母・白色粘土少量。	体部下端片	内面黄色粘質



## 3 土坑 (SK)

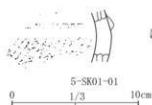


第204図 SK01・同出土遺物

## SK01 (第204図、図版101)

本遺構はA-17グリッドにおいて検出された。平面形状は不整形形を呈する。長軸1.40m、短軸1.35mを計る。確認面下の掘り込みの深さは19.5cm、覆土は自然堆積で2層に分層される。断面形状は皿状を呈する。

本遺構の出土遺物の内、1点を掲載した。



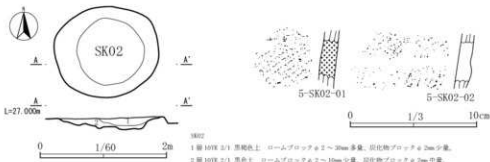
01は口縁直下の破片で隆帯による区画帯の中にLRの縄文を充填させる。加曽利EⅢ式。

## SK02 (第205図、図版101)

本遺構はA-15・16グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈する。長軸1.65m、短軸1.46mを計る。確認面下の掘り込みの深さは17.2cm、覆土は自然堆積で2層に分層される。断面形状は皿状を呈する。

本遺構の出土遺物の内、2点を掲載した。

01は胴部上半にクランク文が施文され、胎土中に繊維を多量に混入する深鉢胴部片である。地文は0段多条のLR、関山式土器。02は括れ部に太い沈線が1条入り、2本の沈線による懸垂文が垂下する。地文は単節LR。加曽利E式。



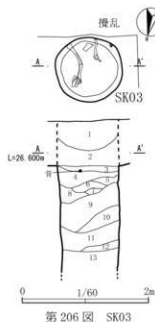
第205図 SK02・同出土遺物

## SK03 (SE) (第206図、図版52・53)

本遺構はA-15グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈する。直径1.07mを計る。確認面下の掘り込みの深さは2.50m以上、覆土は自然堆積で13層に分層される。安全のために底部までの調査は行えなかった。

当初、縄文時代の袋状土坑と想定し調査を進めたが、円筒形の掘り込みとなり、井戸跡であることが判明した。遺構番号は土坑番号のまま踏襲した。

本遺構から検出された遺物は、第3層の最下部に草食目の歯が出土しており、馬骨と考えられる。



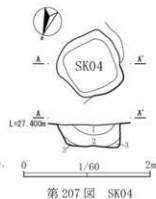
第206図 SK03

- 0803
- 1層 10YR 4/5 褐色細砂 コームブロックより1-5cm中量、黄褐色粘土ブロックより10mm無多量、しまりなし。
  - 2層 10YR 4/5 褐色細砂 コームブロックより1-10mm中量、黄褐色粘土ブロックより10mm少量、しまりなし。
  - 3層 10YR 4/5 褐色土 コームブロックより1-20mm少量。
  - 4層 10YR 4/5 褐色土 コームブロックより1-15mm少量、黒褐色土より1-5mm少量。
  - 5層 10YR 4/5 褐色土 コームブロックより1-20mm無多量、黒褐色土より1-5mm少量。
  - 6層 10YR 4/5 褐色土 コームブロックより1-5cm少量、黄褐色粘土ブロックより1-5mm少量。
  - 7層 10YR 4/5 褐色土 コームブロックより1-2cm中量、黒褐色土より1-5mm少量。
  - 8層 10YR 2/2 黒褐色土 コームブロックより1-2cm中量。
  - 9層 10YR 4/5 褐色土 コームブロックより1-10mm無多量、黄褐色粘土ブロックより10mm少量、褐色細砂少量。
  - 10層 10YR 2/2 黒褐色土 コームブロックより1-2cm無多量、黄褐色粘土ブロックより1-10mm中量。
  - 11層 10YR 4/5 褐色細砂 コームブロックより10mm少量、黄褐色粘土ブロックより1-10mm少量。
  - 12層 10YR 2/2 黒褐色土 コームブロックより10mm少量、黄褐色粘土ブロックより1-10mm少量。
  - 13層 10YR 4/5 褐色細砂 コームブロックより1-5cm無多量、黄褐色粘土ブロックより1-10mm少量。

## SK04 (第207図、図版53)

本遺構はB-14グリッドにおいて検出された。SI02と重複するが、本遺構の方が古い。平面形状は不整形円形を呈する。長軸1.14m、短軸1.09mを計る。確認面下の掘り込みの深さは36.6cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

本遺構の出土遺物の内、掲載遺物はない。



第207図 SK04

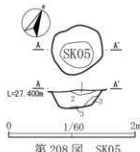
SK04

- 1層 10層 2/3 黒褐色土 コームブロックが2～10cm中量、炭化物ブロックが2m少量、しまりあり。  
2層 10層 2/1 黒色土 コームブロックが2～10cm少量、炭化物ブロックが2m少量。  
3層 10層 2/3 黒褐色土 コームブロックが2～10cm中量、炭化物ブロックが2m少量。

## SK05 (第208図、図版53)

本遺構はA・B-14グリッドにおいて検出された。平面形状は不整形円形を呈する。長軸83cm、短軸71cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは29cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。断面形状は逆台形を呈する。

本遺構の出土遺物はない。



第208図 SK05

SK05

- 1層 10層 2/1 黒色土 コームブロックが2m少量、炭化物ブロックが2m少量。  
2層 10層 2/3 黒褐色土 コームブロックが2～10cm少量、炭化物ブロックが2m少量。  
3層 10層 2/3 黒褐色土 コームブロックが2～20cm中量、炭化物ブロックが2m少量。

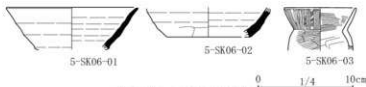
## SK06 (第209・210図、第18表、図版53・101)

本遺構はB-14グリッドにおいて検出された。平面形状は隅丸方形を呈する。長軸90cm、短軸84cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは29cm、覆土は自然堆積で2層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

本遺構からは縄文土器・土師器・須恵器など多量に出土している。近世の陶器も出土しており、耕作時に廃棄した可能性が高い。01は9世紀の須恵器坏、02は8世紀末の須恵器坏、03は古墳時代中期の埴形土器である。

SK06

- 1層 10層 2/3 黒褐色土 コームブロックが2～20cm中量、炭化物ブロックが2m少量。  
2層 10層 2/1 黒色土 コームブロックが2～20cm少量、炭化物ブロックが2m少量。



第210図 SK06 出土遺物

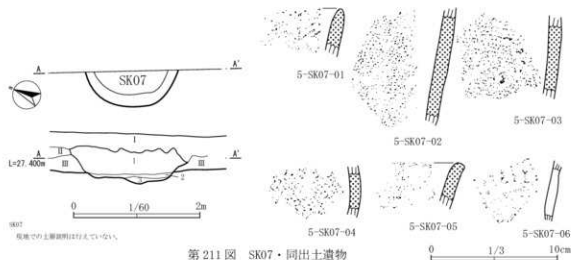
第18表 5区SK06 古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	使用状況	色調	新土	残存	備考
1	ASS-51C-SK-6	須恵器	坏	(13.8)	—	(4.4)	31.6	体部は直線的に閉き口縁で僅かに外反する。	口縁が整形。	還元不良	内面7.573/2 オリーブ黒 外面515/2 灰オリーブ	炭色多い、長石・赤茶や多い。	体部1/3	
2	ASS-51C-SK-6	須恵器	坏	—	(8.9)	(3.3)	11.7	緩やかに内湾して閉くもの。	口縁整形。体部下端は手持ちヘラケラ。	良好	内面517/2 灰白 外面1017/1 灰白	炭色・黒色粒子少量。	体部片	
3	ASS-51C-SK-6	土師器	埴	(7.4)	—	(4.5)	19.91	小型の埴である。胴部は裏りに弱く断面の括れもやや多い。口縁は良い。	外面は口縁は縦方向、胴部は横方向の1室な2室。内面は口縁は縦方向のハタ整形、胴部はナダ。	良好	内面7.0306/6 黒 外面10185/6 黒褐色	白色粒子や多い。雲目少量。	胴部上位～口縁1/4	

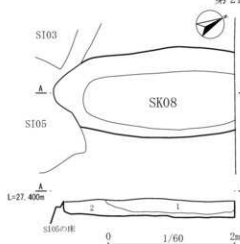
## SK07 (第211図、図版101)

本遺構はB-12グリッドにおいて検出された。平面形状は不明。東側調査区壁際で1.46mを計る。確認面下の掘り込みの深さは16cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。断面形状は凹凸のある皿状を呈する。

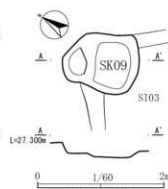
本遺構からは縄文土器が出土している。01～05は胎土中に繊維を混入する土器である。01は口縁部、無筋Iの縄文が施文される。黒浜式か。02～04はいずれも深鉢胴部破片で組紐が回転施文される。関山II式。05は外反する口縁部の破片で無文。黒浜式か。06は胎土中に繊維は混入せず、器面に装文が施文される。阿玉台II式。



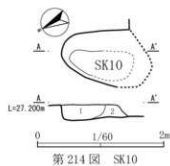
第211図 SK07・同出土遺物



第212図 SK08



第213図 SK09



第214図 SK10

SK08  
発掘での土層説明は行っていない。

SK09  
1層 10Y 1.7/1 黒色土、ロームブロックが2〜10cm少量、同出土物ブロックが2cm少量。  
2層 10Y 3/1 黒褐色土、ロームブロックが2〜10cm少量、同出土物ブロックが2cm少量。

## SK08 (第212図、図版53)

本遺構はA・B-11グリッドにおいて検出された。平面形状は長楕円形を呈する。長軸不明、短軸1.41mを計る。確認面下の掘り込みの深さは31cm、覆土は自然堆積で2層に分層される。断面形状は浅い鍋底状を呈する。

本遺構からは土師器・縄文土器が僅かに出土しているが、掲載遺物はない。

## SK09 (第213図、図版53)

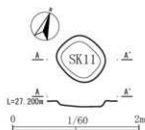
本遺構はB-10グリッドにおいて検出された。平面形状は不整形を呈する。長軸1.20m、短軸0.88mを計る。確認面下の掘り込みは2段に掘り込まれており、北側にテラスを有する。テラスの深さ20cm、最深部は29cmを計る。断面形状は段を有する浅い鍋底状を呈する。本遺構の出土遺物はない。

## SK10 (第214図、図版53)

本遺構はA・B-10グリッドにおいて検出された。遺構の南西側をSF01に切られている。平面形状は不整形円形を呈するものと思われる。長軸1.45m、短軸0.84mを計る。確認面下の掘り込みの深さは24.8cm、断面形状は段を有する浅い鍋底状を呈する。本遺構の出土遺物はない。

## SK11 (第215図)

本遺構はB-9グリッドにおいて検出された。平面形状は隅丸方形を呈する。長軸73cm、短軸68cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは11cmを計る。断面形状は浅い皿状を呈する。本遺構の出土遺物はない。



第215図 SK11

## SK12・13 (第216図)

本遺構はいずれもA-14グリッドにおいて検出された。SK12・13・14は重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

SK12は平面形状は円形を呈するものと思われる。長軸1.42mを計り、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは7.8cmを計る。断面形状は浅い皿状を呈する。

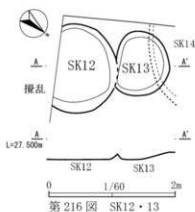
SK13は平面形状は不整形円形を呈するものと思われる。長軸99.4cm、短軸92.5cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは9.6cmを計る。断面は浅い皿状を呈する。

いずれの遺構からも遺物は検出されていない。

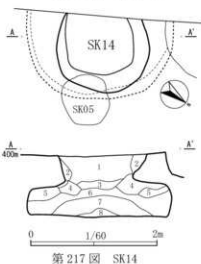
## SK14 (第217・218図、図版101)

本遺構はA-14グリッドにおいて検出された。SK05と重複するが新旧関係は不明である。平面形状は不整形円形を呈するものと思われる。いわゆる袋状土坑で、上端は長軸1.54m、短軸1.47mを計る。底部は東西軸で2.35mを計る。確認面下の掘り込みの深さは97.5cmを計る。

本遺構の出土遺物の内、以下に13点掲載した。



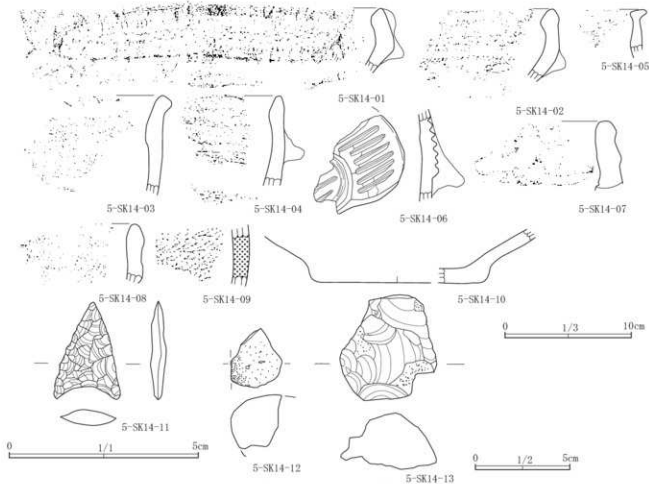
第216図 SK12・13



第217図 SK14

## SK14

- |   |                                  |
|---|----------------------------------|
| 1 第10層 2/2 黒褐色土 ロームブロック1~2cm多量、粘土ブロック1~2cm少量、炭化物ブロック1~2cm稀散量。 | 土ブロック1~2cm中量、炭化物ブロック1~2cm稀散量。    |
| 2 第10層 3/4 暗褐色土 ロームブロック1~20mm稀多量。                             | 5 第10層 2/2 黒褐色土 ロームブロック1~20mm多量。 |
| 3 第10層 2/2 黒褐色土 ロームブロック1~20mm稀多量、炭化物ブロック1~2cm少量。              | 6 第10層 2/2 黒褐色土 ロームブロック1~20mm多量。 |
| 4 第10層 3/4 暗褐色土 ロームブロック1~20mm稀多量、炭化物ブロック1~2cm少量。              | 7 第10層 3/4 暗褐色土 ロームブロック1~20mm多量。 |
|   | 8 第10層 3/4 暗褐色土 ロームブロック1~20mm多量。 |



第218図 SK14出土遺物

01・02は同様の資料で、隆帯による窓枠状の区画帯を設け、キャタピラ状の角押文を枠に沿って施し、中央部に波状沈線が描かれる。勝坂式の影響を受ける阿玉台Ⅳ式で、広義の中枠式と判断される。03は口縁部は折り返す。胴部には柳歯による波状文が斜方向に描かれる。内面に段を有す。阿玉台Ⅳ式。04は直立する口縁部破片で、口縁直下に鐫状の突起が附される。口縁部には横方向に角押文が複数描かれる。口縁および罫よりも下位では単節RLの縄文が施文される。阿玉台Ⅲ～Ⅳ式。05は口縁は断面がT字状になる。器面は無文。阿玉台式。06は扇状の把手部分の破片である。内面には太い沈線により条線が充填される。阿玉台Ⅳ式。07は波状口縁突起部の破片である。外面に太い沈線でS字の文様が垂下する。加曾利E式カ。08は口縁はほぼ直立し、口唇部には無文帯を有す。以下胴部は単節LRの縄文が施文される。加曾利E式カ。09は胎土中に繊維を多量に混入する深鉢胴部破片。器面には多段のループ文が施文される。関山Ⅱ式。10は平底の底部破片。胴部は大きく開き、浅鉢の可能性が有る。

11は石織である。回基三角織。側縁はやや内湾する。材質はチャート。12は磨石の破片である。側縁は使用により摩耗している。安山岩。13は石核である。多方向からの剥離を行っている。材質は黒曜石。

#### 4 道路状遺構 (SF)

SF01 (第219・220図、第19表、図版54～56・101)

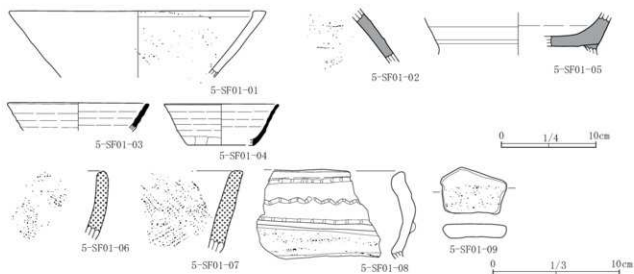
本遺構はB-2～6、A・B-7～10グリッドにおいて検出された。溝状を呈する。北から南に向かって緩やかなS字に蛇行している。確認された全長は40.3mを計る。断面の観察は4箇所で行った。いずれのセクションも同様の土層が観察されたため、A～Dまで土層説明は統一して行った。尚、本道路は調査区の北端で大きく東に湾曲し、8区の中央部分さらに1区東側端部にまで延長していることが判明している。

道の底部には、A-8～10グリッドおよびB-6グリッドを中心に道の走行方向に対し、直角方向の溝が連続して掘り込まれている。この形状については、古代の道路状遺構に見られる波状凹凸面に類似するもので、本遺構も出土資料から中世の遺構である可能性が高い。



出土遺物は01・02・05が中世の遺物、03・04は古代の須恵器である。また、06～09は縄文土器である。各時期の遺物が出土しているが、最も新しい中世の遺物をもって本遺構の所属時期と考えられる。01～05は以下の観察表第19表にまとめているが、01の播鉢は土師質土器で口縁の特徴は中世後半の様式を表している。02・05は焼き締め陶器である。02は常滑であろうか、05は不明。03・04は須恵器坏である。03は口径が比較的大きく、直線的に体部が立ち上がる。8世紀代の遺物であろう。04はやや小振りになるが箱形を呈し体部下端が手持ちヘラケズリされることより、03同様8世紀代の遺物と考えられる。

06は深鉢口縁部の破片である。片口土器の可能性もある。胎土中には繊維を多量に混入し、器面には平行沈線による鋸歯文・渦巻文などが組み合わされる。地文は組紐の回転施文である。関山Ⅱ式。07は胎土中に繊維を混入し、口唇直下にコンパス文が1条巡る。地文は直前段半捲りの縄文により羽状を構成する。関山Ⅱ式～黒浜式の初頭。08は隆帯により窓枠状の区画帯を設け、区画に沿って1条の角押文が巡る。中央には鋸歯状の角押文が描かれる。胴部は無文である。阿玉台Ⅰb式。09は土器片鏝である。深鉢胴部の破片を用いるもので、下半にはRLの縄文が施文されている。重量は28.3gを計る。



第220図 SF01出土遺物

第19表 5区SF01古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	地質	色調	胎土	残存	備考
1	ASSP-51K-SF-1-C-2	土師質土器	すり鉢	(27.0)	—	(7.0)	96.7	直線的に大きく開き口唇は面取りが行われている。	割落しているもの、底かに履方向の沈線が観察される。	良好	内面10YR3/4 埋濁 外面50Y2/1 無	炭目やや多い。	口縁部 破片	
2	ASSP-51K-SF-1-1	陶器	大甕	—	—	—	32.6	僅かに内湾している。	底の痕跡有り。	良好	内外面2.5YR5.3 に深い赤褐色	小磯・数分の噴出しやや多い。	胴部 片	
3	ASSP-51K-SF-1	須恵器	坏	(14.8)	—	(2.9)	9.3	体部は直線的に開く。	ロクロ整形。	良好	内面7.5Y5/2 外面10Y5/1 灰	炭目・白色粒子 少量。	口縁 部片	
4	ASSP-51K-SF-1-D-6	須恵器	坏	(11.9)	(7.9)	(4.3)	16.3	体部下端で緩やかに内湾した後底面に準反及縁に開く。窓帯は深い。	ロクロ整形。体部下端は手持ちヘラケズリ。窓帯の調整は不明。	良好	内外面5Y5/2 灰オリーブ		口縁 部片	
5	ASSP-51K-SF-1	陶器	甕	—	—	(4.5)	123.3	体部下端は見込で緩やかに内湾する。鋸付直出。	ロクロ整形。外面体部下端及び底面は回転ヘラケズリ。	良好	内面5YR5/6 赤赤褐色 外面2.5YR4/3 オリーブ褐色	小～中磯・白色 粒子・黒色粒子 少量。	底面 1/4	焼締の陶器か。 内面が滑らかな事より播鉢か磨鉢として仕込まれたもの。

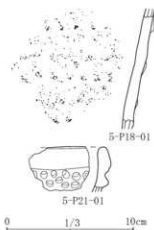
## 5 ビット (第221図、第20表、図版57・58・101)

本地区からは24基のビットが検出されている。これらのビットは掘り込みが深く住居跡の柱穴と判断されるものも多く、7区同様、全体に削平が進んでいることが伺える。ビットは北西側に偏在する傾向がある。遺物の出土したビットの計測値および位置については以下の第20表にまとめた。

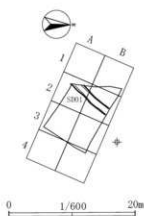
第20表 5区ビット計測表

遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物
P18	A-2	48	44	77	01
P21	A-0	40	36	87	01

P18-01は装文が3段にわたり意識的に描かれるもので、阿玉台I b式。  
P21-01は口縁部の破片で口縁直下に無文帯を有した後、円形の刺突列が2条巡る。いわゆる連弧文様式の土器と考えられるもので、加曾利E III式平行であろう。



第221図 5区ビット出土遺物



第222図 6区全体図

## 第6項 6区

本区は1区西側中央部分より北に150mほど離れた位置に存在する。今回の調査の一環として道路建設を目的に調査を実施した。

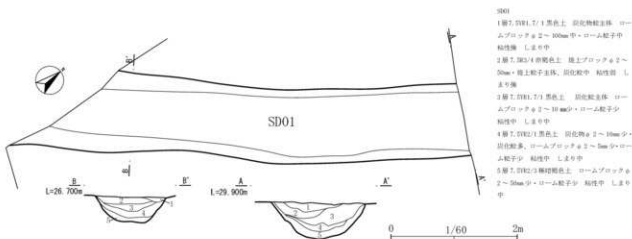
検出された遺構はSD01の溝状遺構1基である。

## 1 溝 (SD)

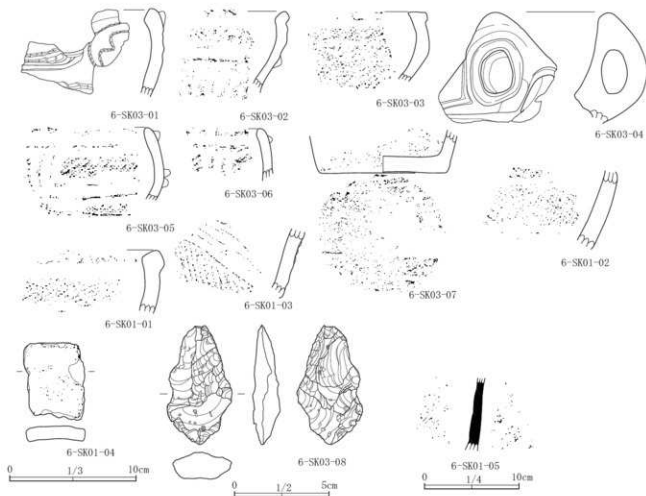
## SD01 (第223図、図版61)

本遺構は調査区の西端A・B-2グリッドにおいて検出されている。調査が行えた部分の全長は6.35m、西側端部の幅は1.17m、深さは38cm、北側端部は1.56m、深さは60cmを計る。土層は5層に分層され、自然堆積を示している。溝の断面形状は緩やかなU字形を呈す。

本遺構からの遺物は皆無であった。したがって時期は不明である。



第223図 SD01



第224図 6区遺構外出土遺物

## 2 遺構外出土遺物 (第224図、第21表、図版60・61・102)

ラベルに本区出土遺物と標記された中に SK01 および SK03 と表記された遺物が確認された。しかしながら同区には溝1条 (SD01) 以外の遺構の存在はなく、本区不明遺物として取り扱った。

SK03-01は深鉢口縁部の破片。把手が附される。有節沈線による文様が描かれる。阿玉台 I b 式。02は口縁部の破片。断面三角形の隆帯が貼り付けられ、区画内に角押文が描かれる。下位には鬚状文が巡る。阿玉台 I b 式。03は内湾する口縁部破片。口唇は折り返す。器面には LR 縄文が施文される。加曾利 E I 式。04は環状の把手である。加曾利 E I 式。05は二重隆線によるクランク文が描かれる。加曾利 E I 式。06は05同様。07は底部の資料である。網代痕が附されている。

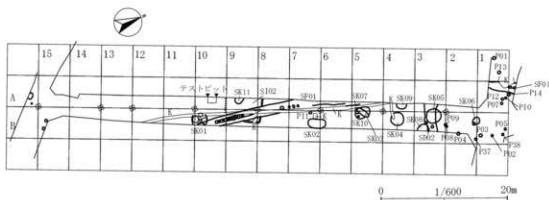
SK01-01は口縁は棒状となる。口唇直下に窓枠状の区画、内部に LR 縄文が充填される。02は沈線による区画帯内部に単節 RL 縄文が充填。03は4本の沈線によって弧状の文様が描かれる。区画された内部に懸垂文が施文される。いわゆる連弧文様式土器。04は土器片錘である。磨消懸垂文の銅部破片を用いている。重量は40.9gを計る。SK01-05は古代須恵器の破片である。詳細は下記表にまとめた。

SK03-08は黒曜石の槍先である。縦方向の棒状剥離が見られる。旧石器後半の資料であろうか。

第21表 6区遺構外古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	粘土	残存	備考
0	AS3F-4区-SK-1	須恵器	壺(胴部破片)	—	—	—	42.7	僅かに内湾している。	外面は平行押き、下半はヘラクニ式豆。内面は当具痕及び輪磨痕有り。	良好	内面5YR5/6 明赤褐色 外面2.5YR3/3 オリーブ色		胴部 下半片	





第225図 8区全体図

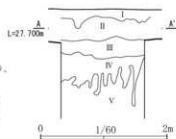
## 第7項 8区

本区は1・7区の交差部分から3・5区の交差部分までの15グリッドおよそ75mの間である。

検出された遺構は北側に集中する傾向があり、縄文時代の土坑、古墳時代の住居跡並びに中世の道状遺構が1条検出されている。中世の道状遺構は5区で検出されたSF01の延長に当たり、呼称も同じにした。

標準堆積土層はA-10グリッド西側のテストピットで実施した。

- I層 10YR 2/3 暗褐色土 耕作土、遺構確認。  
 II層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm多量、しまりあり、遺構確認。  
 III層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1~10mm多量、しまりあり。  
 IV層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1~40mm多量、しまりあり。  
 V層 10YR 4/6 褐色土 ハードローム、しまり強。

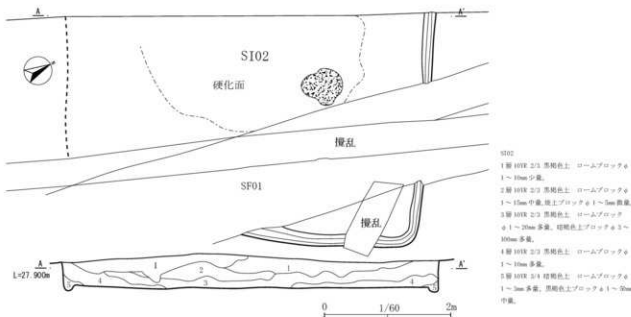


第226図 8区標準堆積土層

## 1 住居跡 (SI)

## SI01

調査区西側壁面A-13・14グリッド部に僅かながら住居跡と思われる断面が確認されたため、番号を付けて調査を行ったが、住居跡と認識することができなかったため欠番とした。

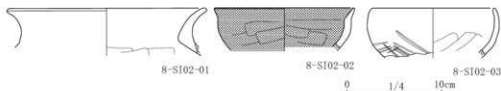


第227図 SI02

## SI02 (第227・228図、第22表、図版68・102)

本遺構はA・B・8・9グリッドにおいて検出されている。東側はSF01および攪乱によって破壊されている。南北方向は6.05mを計り、西側が調査区域外となるため東西方向は不明である。住居の平面形は方形を呈するものと思われる。住居の南側は大きく削平を受けており、立ち上がりは不明瞭であるが、調査区西側壁に住居の断面が残されており、これによって南北方向の規模が判明している。また、本住居には壁溝が全周することも判断できる。床面は中央部を中心に硬化が見られ、北壁寄りに炉が存在している。土層は5層に分層され、自然堆積を示している。

本遺構の出土遺物は少量であるが土師器甕1点、坏2点が出土しており、遺物の特徴から5世紀中葉から後半の遺構と考えられる。



第228図 SI02 出土遺物

第22表 8区SI02古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	部高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSP-8区-SI-2	土師器	甕	(20.5)	—	(4.83)	91.2	口縁のみが資料。口縁は「C」の字に外反する。器壁は厚い。	内外面共に横ナズ。	良好 二次焼成 行	内外面10R05/4にぶらぬ	長石・石英等小粒・雲母多し	口縁1/5	
2	ASSP-8区-SI-2	土師器	坏	(14.7)	—	(4.4)	28.4	体部は硬やかに内湾し。内側に鋭い稜を有した後外縁する。	口縁は内外面共に横ナズ。体部内外面共にナズ形。	良好	内外面2.5R5/6明赤焼	白色粘土・雲母・白色針状物質散在	口縁部 内外面赤彩	内外面
3	ASSP-8区-SI-2	土師器	坏	(12.8)	—	(3.15)	35.0	体部は硬やかに内湾し口縁に至る。体部外面硬石などで転用している。	口縁は内外面共に横ナズ。体部内面ナズ。外面は割離している。	良好 二次焼成 行	内外面2.5R0/6	白色粘土・雲母・粘子・少量、白色針状物質	口縁 ～ 体部1/5	転用硬石

## 2 土坑 (SK)

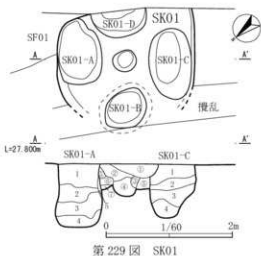
## SK01 (第229・230図、第29・30表、図版68・69・102・106)

本遺構はB-10・11グリッドにおいて検出されている。平面形状はほぼ円形を呈するものと思われる。南側は調査区域外、北側は攪乱によって部分的に破壊されている。土坑は当初1基の単体と考えていたが、調査の結果5基の土坑の集合であることが判明した。

SK01は南北軸で2.41m、東西軸で2.36mを計る。確認面下の掘り込みの深さは37cm、土層は7層に分層され自然堆積を示している。土坑中央に直径38cm、深さ19cmのピット1基が存在する。本遺構最上層の第①層からは貝の出土が見られ、地点貝塚と判断される。出土した貝の分類については第5章第6節にまとめた。出土品としてはサルボウが主体でカキ・ハマグリなどが混在している。魚骨等は検出されていない。第②層以下は自然堆積を示すものであろう。第①層を含め第⑦層に分層される。

SK01-AはSK01と重複しこれを切っている。平面形状は不整形円形を呈し、長軸1.03m、短軸0.65mを計る。覆土は自然堆積を示し、4層に分層される。第5層は壁の崩落土層である。

SK01-Bは最も南西に位置する。袋状を呈するもので上端部長



第229図 SK01

- SK01
- ①層 10R 3/1 黄褐色土 ロームブロック②～10cm散見。貝殻多量。しまりあり。
  - ②層 10R 2/3 黄褐色土 ロームブロック②～10cm散見。しまりあり。
  - ③層 10R 3/1 黄褐色土 ロームブロック②～10cm散見。しまり・粘性あり。
  - ④層 10R 3/4 橙褐色土 ロームブロック②～10cm散見。しまりあり。
  - ⑤層 10R 3/1 黄褐色土 ロームブロック②～10cm散見。しまりあり。
  - ⑥層 10R 3/1 黄褐色土 ロームブロック②～10cm散見。しまり強。粘性あり。
  - ⑦層 10R 3/1 黄褐色土 ロームブロック②～10cm散見。しまり強。
- SK01-A
- ①層 10R 2/3 黄褐色土 ロームブロック②～20cm中量。しまりあり。
  - ②層 10R 3/1 黄褐色土 ロームブロック②～20cm少量。しまりあり。
  - ③層 10R 2/1 赤土 ロームブロック②～20cm散見。しまりあり。
  - ④層 10R 3/1 黄褐色土 ロームブロック②～10cm散見。しまりあり。
- SK01-C
- ①層 10R 2/3 黄褐色土 ロームブロック②～10cm中量。しまりあり。
  - ②層 10R 3/1 黄褐色土 ロームブロック②～10cm少量。しまりあり。
  - ③層 10R 2/3 黄褐色土 ロームブロック②～20cm散見。しまりあり。
  - ④層 10R 2/3 赤土 しまりあり。

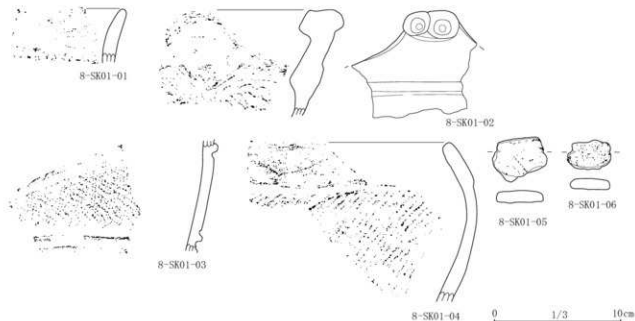
軸 83 cm、短軸 58 cm、下端は最大径 92 cm を計る。SK01 底部からの掘り込みの深さは 54 cm を計る。

SK01-C は南側に位置するもので、平面形状は楕円形を呈する。長軸 1.17 m、短軸 0.73 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 84 cm、覆土は自然堆積で 4 層に分層される。

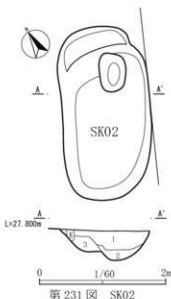
SK01-D は南東側に位置し、平面形状は南東側が調査区域外になるため明瞭ではないが、楕円形を呈するものであろう。調査区東壁での長さは 87 cm、SK01 底部からの掘り込みの深さは 1.1 m を計る。

本遺構は 5 基の土坑が切り合っていることが調査後に判明した。したがって、本土坑群より出土した遺物の帰属は明確ではない。

01 は外反して開く深鉢の口縁部破片である。口辺は無文で下端に小形の C 字爪形文が施文される。胎土中に繊維の混入は見られず、縄文前期末葉の資料と考えられる。02 は波状口縁の波頂部の破片である。外面は隆帯により縁取られ、楕円形の区画を構成する。区画内には沈線による鋸歯文が充填される。地文は単節 RL および LR の縄文が口縁部にまで施文される。内面波頂部には円形の貼り付け文が施される。阿玉台 IV 式。03 は二重隆線による文様帯が描かれる口縁部直下の破片。胴部との境には同様の隆線が巡る。地文は単節 RL。加曾利 E I 式。04 は大きく内湾する口縁部の破片。口縁直下はやや幅広の無文帯となり、以下、1 条の沈線が巡る。地文は単節 LR。加曾利 E III 式カ。05・06 は土器片鏝である。いずれも無文部の破片を用いる。重量は 05 が 13.80g、06 が 8.5g を計る。



第 230 図 SK01 出土遺物



第 231 図 SK02

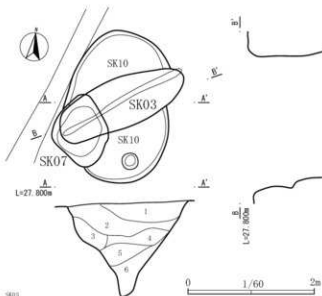
### SK02 (第 231 図、図版 69)

本遺構は B-6・7 グリッドにおいて検出された。平面形状は長楕円形を呈する。長軸 2.78 m、短軸 1.37 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 47 cm、覆土は自然堆積で 3 層に分層される。北側に 1 段テラス状の高まりを有し、テラス直下にピット 1 基が掘り込まれている。断面形状は 2 段のテラスを有する U 字形を呈する。

本遺構からは縄文土器が僅かに出土しているが、掲載遺物はない。

#### SK02

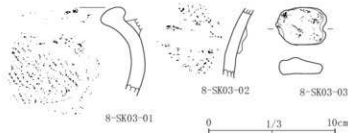
- 1 層 197E 2/1 黒粘土 ロームブロック径 2 ～ 10cm 未満、しまり強、粘性あり。
- 2 層 197E 2/2 黒褐色土 ロームブロック径 2 ～ 10cm 未満、しまり強、粘性あり。
- 3 層 197E 2/3 黒褐色土 ロームブロック径 2 ～ 10cm 未満、しまり強、粘性あり。



第 232 図 SK03・07

RL の縄文が充填される。02 は二重隆線による文様部の破片である。地文は単節 LR。03 は土器片鏝である。無文。重量は 11.9g。SK03 出土遺物は加曾利 E I 式を主体にしている。

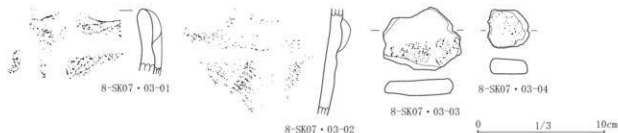
SK07-01 は外反して開く口縁部で、器面は無文である。02 はやや内傾する口縁で口唇部はくの字に屈曲して開く。胴上半部には太い隆線による窓枠状の区画が設けられ、RL の縄文が充填される。胴部は懸垂文が垂下する。03 は隆線により弧状の文様が描かれる。地文は単節 LR。04 は直線的に開く深鉢口縁部。口辺は無文帯となる。以下に



第 233 図 SK03 出土遺物



第 234 図 SK07 出土遺物



第 235 図 SK03・07 出土遺物

## SK03・07 (第 232 ~ 235 図、図版 69・70・103・104)

本遺構は A・B-5 グリッドにおいて検出された。

SK03 は平面形状が長楕円形を呈するもので、断面形が漏斗状となる、いわゆる落とし穴である。長軸 2.12 m、短軸 1.49 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 1.49 m、覆土は自然堆積で 6 層に分層される。

SK07 は SK03 の南西側で重複するものであるが調査を同時に進めたため、新旧関係は不明。平面形状は楕円形を呈し、長軸 1.2 m、短軸 0.95 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 63 cm。

本遺構の遺物は SK03・SK07 単独のもの、および SK03 と 07 が混じたものと 3 種類に分けて取り上げを行った。

SK03-01 は内湾する口縁部の破片で把手が附されていたものと思われる。隆帯による区画内には

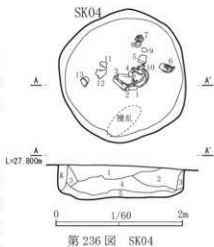
沈線が1条巡り胴部には単節LRの縄文が施文される。03は加曾利E式のやや古手と考えられるが、02・04は加曾利EⅢ式と判断される。

SK07-03-01は太い沈線により楕円形の区画が描かれ、内部にLRの縄文が施文される。02は深鉢胴部の破片である。隆帯により区画され、下位には磨消懸垂文が垂下する。区画内には単節RLの縄文が充填される。03・04は土器片錘である。03は磨消懸垂文の胴部破片を用いている。重量は03で39.4g、04で13.9gを計る。SK07・03の遺物は概ね加曾利EⅢ式と判断される。

#### SK04 (第236～239図、図版69・103・104)

本遺構はB-4グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈する。長軸2.13m、短軸2.08mを計る。確認面下の掘り込みの深さは53cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。断面形状は浅い鍋底状を呈する。出土遺物より想定して袋状土坑であった可能性が高い。

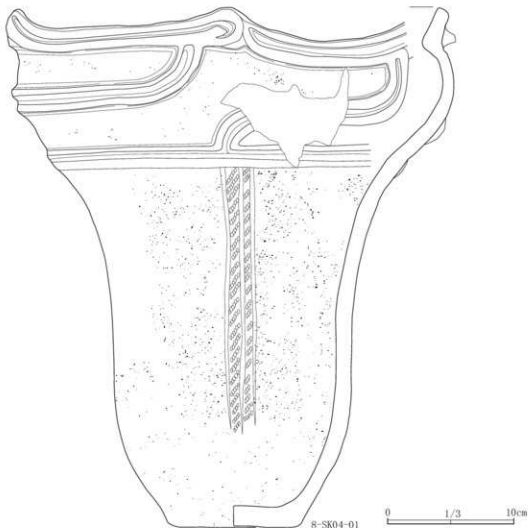
本遺構からは中央部分を中心に大量の遺物が出土している。01はキャリパー形土器の完形品である。口縁部は4単位の小波状となり、波頂部にはS字の沈線が巡る。波頂部よりクランク状の二重隆線が垂下し、頸部下端には同様の隆線が胴部との間を区画する。胴部には3本1単位の沈線による直線的な懸垂文および蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文は単節RLの縦回転施文である。



第236図 SK04

3004

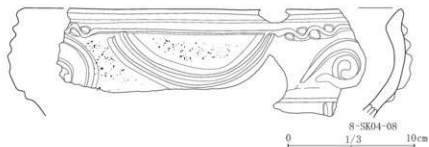
- 1層 10YR 2/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～2mm 多数、柱土ブロックφ1～2mm 散在、凹凸ブロックφ1～2mm 中量。
- 2層 10YR 2/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～2mm 多数、凹凸ブロックφ1～2mm 散在。
- 3層 10YR 2/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～2mm 多数。
- 4層 10YR 2/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～2mm 多数、柱土ブロックφ1～2mm 中量。
- 5層 10YR 2/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～4mm 多数、凹凸ブロックφ1～2mm 散在。



第237図 SK04 出土遺物 (1)

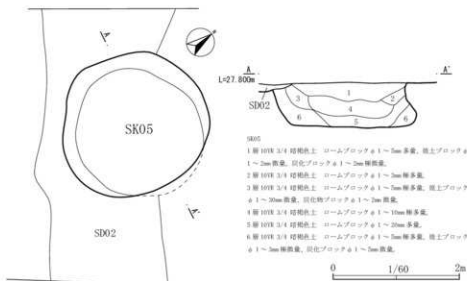


第238图 SK04 出土遗物(2)



第239図 SK04出土遺物(3)

加曾利 E I 式新段階。02 はキャリバー形土器の上半部資料である。口唇部はくの字に屈曲して開く。口縁部文様帯には二重隆線により渦巻文と弧状文が交互に配される。胴部との境には同じ隆帯が巡り、上下を区画する。下半は3本1単位の沈線による直線的な懸垂文および蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文は単節 LR。03 は円筒状の器形で、口縁部には楕円形の窓枠状の区画が設けられ、内部には縦方向の集合短沈線が充填される。胴部は単節 LR の縄文が縦方向に施文され2本の沈線による懸垂文が胴中位まで垂下する。胴下から底部にかけては無文となる。加曾利 E I 式新段階であろう。04 は口縁がくの字に屈曲して開き、胴部はやや内湾気味になる器形である。口縁部から胴部にかけて、沈線により三角形の区画帯や渦巻文逆コの字文様などが絵画的に描かれている。地文は単節縄文 RL が施文されている。加曾利 E I 式古段階と判断される。05 は円筒状の器形で口縁部が棒状に太くなる器面は無文。共存遺物より加曾利 E I 式段階と判断される。06 は小形のキャリバー形土器である。文様は描かれず、前面に単節 RL の縄文が縦施文される。07 は把部の資料である。眼鏡状を呈し、頂部には三叉文が刻まれている。盲孔が内面に貫通している。加曾利 E I 式の資料であるが、三叉文を刻む点など勝坂式的な要素を併せ持つ。08 は02と同様の破片であるが、口縁直下の隆帯部分に交互刺突によるクランク状の文様を配置している。加曾利 E I 式土器であるが、勝坂式的な手法を取り入れている。



第240図 SK05

SK05 (第240・241図、図版70・104)

本遺構は A・B・3 グリッドにおいて検出された。SD02 と重複関係にあり、これに切られている。平面形状はほぼ円形を呈する。上端の長軸は 2.43 m、短軸 2.28 m を計る。底部はいわゆる袋状を呈しており、最大径は 2.19 m。確認面下の掘り込みの深さは 78 cm、覆土は自然堆積で 6 層に分層される。

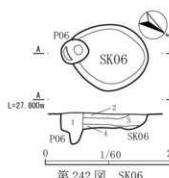
本遺構からの出土遺物の内 4 点を掲載した。

01 は内湾する口縁で口唇部は僅かに外反して開く。器面には僅かに縄文の施文が見られる。02 は胴部の破片である。上位に 3 本の沈線が描かれ、断面三角形の棒状隆帯が垂下する。髷状文が 1 段巡る。地文に横描波状文が施文される。阿玉台 I b 式。03 は 02 同様の破片であるが、地文は見られない。阿玉台 I b 式であろう。04 は無文の土器片錘である。重量は 9.3g。



第241図 SK05出土遺物

## SK06 (第242図、図版70)

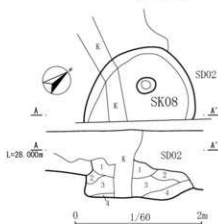


第242図 SK06

本遺構はB-1・2グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸1.29m、短軸1.03mを計る。確認面下の掘り込みの深さは24.8cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。遺構の南側をP06に切られている。P06は平面形状は楕円形を呈し、長軸41cm、短軸36cm、深さは最深部で51cmを計る。

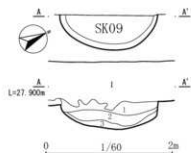
本遺構から出土した遺物で、掲載遺物はない。

SK06  
 1層 101B 3/4 砂礫土上 コームブロックφ1~2cm多量。  
 2層 101B 3/4 砂礫土上 コームブロックφ1~2cm多量、炭化物ブロック。  
 3層 101B 3/4 砂礫土上 コームブロックφ1~2cm多量。  
 4層 101B 3/4 砂礫土上 コームブロックφ1~2cm多量。  
 φ1~2cm 雑草量。



第243図 SK08

SK08  
 1層 101B 3/4 砂礫土上 コームブロックφ1~2cm中量、炭化ブロックφ1~2cm雑草量。  
 2層 101B 3/4 砂礫土上 コームブロックφ1~10cm多量。  
 3層 101B 3/4 砂礫土上 コームブロックφ1~2cm極少量。  
 4層 101B 3/4 砂礫土上 コームブロックφ1~10cm極少量、しまりあり。



第244図 SK09

SK09  
 1層 101B 3/4 砂礫土上 コームブロックφ1~20cm多量。  
 2層 101B 3/4 砂礫土上 コームブロックφ1~2cm多量、瓦上ブロックφ1~2cm雑草量。  
 3層 101B 3/4 砂礫土上 コームブロックφ1~10cm極少量。

## SK08 (第243・245図、図版70・105)

本遺構はB-3グリッドにおいて検出された。SD02と重複関係にあり、本遺構の方が古い。また、西側を部分的に擾乱によって破壊されている。南東側が調査区外になっているが、平面形状は楕円形を呈するものと思われる。長軸不明、短軸1.66mを計る。確認面下の掘り込みの深さは35cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。遺構の床面中央北寄りにピットが1基検出されている。ピットの長軸は33cm、短軸27cm、床面からの深さは47cmを計る。

本遺構の出土遺物として取り上げられた遺物は、ラベルの表記にSK08・09と記載されており、いずれに帰属するものか不明である。SK09で詳細を述べる。

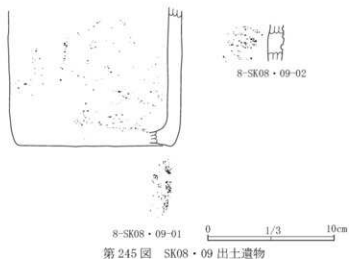
## SK09 (第244・245図、図版70・71・105)

本遺構はA-4グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。南北軸は1.56mを計る。確認面下の掘り込みの深さは50cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。断面形状は緩やかなU字状を呈する。

遺物はその帰属がSK08と区別することができないために、本遺構でまとめて掲載した。

01は深鉢胴下半部から底部の破片である。無文で底部には網代底が残る。02は隆帯による曲線文様が描かれる口縁部付近の破片であろう。隆帯上には縄文が施文されている。阿玉台IV式か。





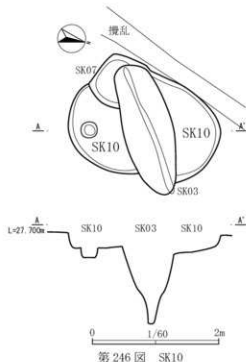
第245図 SK08・09 出土遺物

## SK10 (第246・247図、図版71・105)

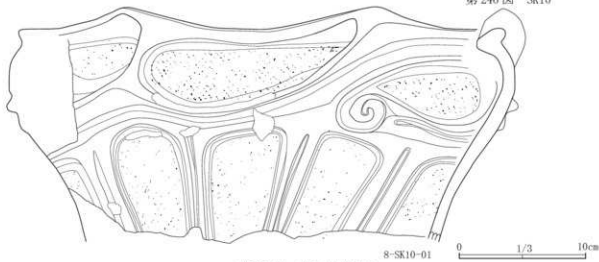
本遺構はA・B-5グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸2.41m、短軸1.66mを計る。確認面下の掘り込みの深さは29cm、遺構の中央を横断するようにSK03・SK07が重複している。SK03・07同様新旧関係は不明。床面南壁寄りにピット1基が検出されている。ピットは平面形状は円形を呈し、直径26cm、床面からの深さは20cmを計る。

本遺構からの出土した遺物の内1点を掲載した。

01は深鉢形土器の上半部資料である。口縁は6単位の波状口縁となり、隆帯による窓枠状の区画が設けられる。区画内には単節RLの縄文が横方向に施文される。胴部との境に渦巻文が配されている。胴部は沈線により縦方向のスリット状の区画を設け、内部に単節RLの縄文を縦方向に回転施文している。加曾利EⅢ式古段階。SK03・07と形式の差は感じられない。



第246図 SK10



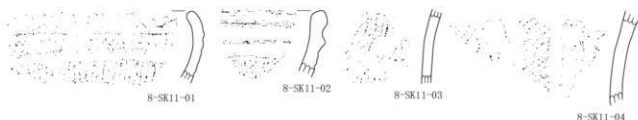
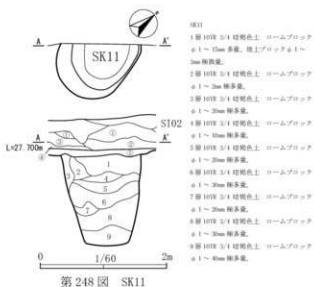
第247図 SK10 出土遺物

## SK11 (第248・249図、図版71・105)

本遺構はA-9グリッドにおいて検出された。SI02の床面下より検出されたものである。平面形状は楕円形を呈するもので、落とし穴状と想定される。長軸不明、短軸1.15mを計る。SI02床面下の掘り込みより1.42mを計る。覆土は自然堆積で9層に分解される。上層の第①～⑤層まではSI02の覆土である。したがって、本遺構の方が古い。

01は内湾する口縁の破片である。口辺部は無文帯となり、以下に円管による交互刺列が巡る。以下胴部には縦方向の燃糸文が施文される。いわゆる連弧文様式の土器である。02は直線的に開く口縁部破片である。口唇直下に太い沈線が2条巡る。以下胴部は単節LR調文が施文される。03は胴部の破片である。蛇行沈線が垂下する。地文は単節LR。04はやや幅広の磨消懸垂文が垂下する。地文には単節RL調文を縦方向に回転施文する。

02～04は加曾利EⅢ式期と想定され、01の連弧文様式土器との共存関係には齟齬はない。



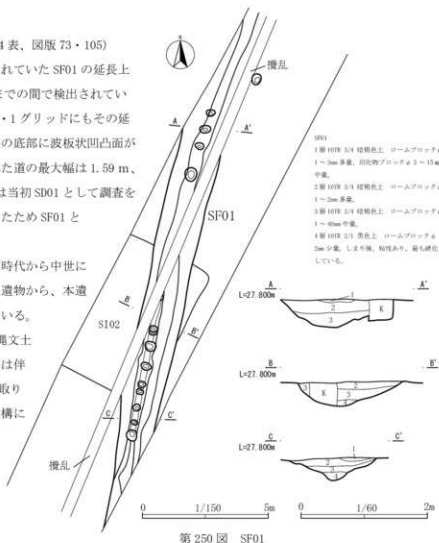
### 3 道路状遺構 (SF)

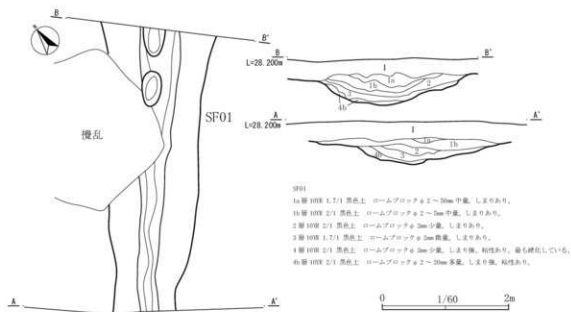
SF01 (第250～253図、第23・24表、図版73・105)

本遺構は第5区において検出されていたSF01の延長上に当たる。A-5～B-12グリッドの間で検出されている。さらに第1区東側東端部A-0・1グリッドにもその延長上が確認されている。形状は道の底部に波板状凹凸面が検出されている。本区で検出された道の最大幅は1.59m、深さは44cmを計る。尚、本遺構は当初SD01として調査を行ったが、道であることが判明したためSF01とし、SD01は欠番になっている。

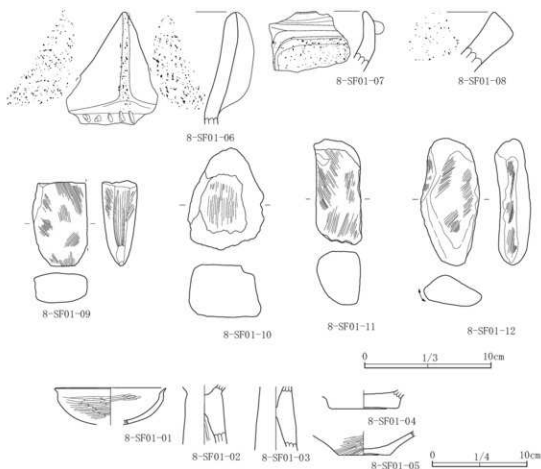
本遺構から出土した遺物は縄文時代から中世に至る。第5区において検出された遺物から、本遺構の所属時期は中世と判断されている。したがって、本区のSF01出土の縄文土器・古墳時代の土師器は本遺構には伴わない。一方で、8区覆土として取り上げられた2点の遺物が本来本遺構に伴う資料と判断される。

06～12は縄文時代の遺物である。06は三角形に大きく尖り、中央部に隆帯が十字に施文される深鉢突起部である。隆帯





第251図 SF01 (1区との交差部分)



第252図 SF01 出土遺物 (1)

および全面に単節RL縄文が施文される。阿玉台IV式。07は深鉢口縁部の破片である。隆帯による貼り付け文が施文される。地文は単節LRが充填される。加曾利E I式。08は端部がやや方形になる浅鉢口縁部の破片。阿玉台式。

09は磨製石斧である。基部は折損し刃部側も一部破損している。断面は長方形を呈するもので、定角式石斧であろう。材質は細粒斑輝岩。10は砥石である。上面および側面に僅かな磨り面が認められる。材質は白雲母を多量に混入する花崗岩であろうか。11は磨石・敲石である。側面に僅かながら擦痕が見られ、端部は敲打により潰れている。また、被熱により破損している。材質は砂岩。12は側面のみ磨滅する磨石カ。材質は安山岩。

01は土師器である。口縁は短く外側につまみ出される。器面の整形から古墳時代中期末葉の遺物と考えられる。02-03は高坏脚柱部の資料である。いずれも孔は貫通しておらず上腕部に大きな窪みを有している。接合時にソケット状の蓋が施されたものであろう。04は円盤状に突出する底部で壺形の土器の可能性はある。05は平底で胴部は大きく外反気味に開く。胴下半部で上半との接合を行う甕であろう。

第23表 8区SF01古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSP-81C-SF-1-南	土師器	杯	(11.6)	—	(3.9)	43.4	体面は緩やかに内湾し、内側に明確な線を有した短く外縁する。	口縁は内外面共に横ナブ、体部内面は剥落しているものの僅かにミゴキが確認出来る。外面はミゴキ。	良好	内外面10186/4に深い黄褐色	長石・石英等小粒多い、雲母やや多い、スコリア少量。	1/5	
2	ASSP-81C-SF-1-南	土師器	高坏	—	—	(6.2)	96.9	ほぼ円柱状であるが、下方に向けやや大ききを増す。接合部にはソケット状の窪みを確認される。	外面は剥落、内面はナブ整形。	良好 二次焼成	内外面7.5186/6に深い黄褐色	長石・石英等小粒多量、雲母多い。	胴部	
3	ASSP-81C-SF-1-北	土師器	高坏	—	—	(6.6)	129.4	ほぼ円柱状であるが、下方に向けやや大ききを増す。ソケット部分は円筒状に脱く穿たれている。	内外面共に剥落。	良好 二次焼成	内外面10186/4に深い黄褐色	スコリア目立つ。	胴部	
4	ASSP-81C-SF-1-南	土師器	壺	—	7.3	(1.95)	134.2	底部は円盤状に突出している。	外面は剥落、内面はナブ整形。内面はミゴキ。	良好 二次焼成	内面10186/4に深い黄褐色 外面10187/4明黄褐色	石部多い、黒色部多量、スコリア少量。	底部	
5	ASSP-81C-SF-1-南	土師器	甕	—	5.2	(2.4)	84.3	底部はやや上方座落の平底。胴部下部は僅かに外反気味に開く。	外面はヘラケズり後戦いミゴキ、内面はナブ整形。	良好	内面10184/2 灰黄褐色 外面10185/3に深い黄褐色	長石・石英等小粒多い。	底部	

表採-01は青磁碗の口縁部細片である。器面には削り出しにより鐘蓮弁が刻まれる。釉薬は青緑色を呈し、厚い。15世紀代中国龍泉窯で生産されたものであろう。02は古瀬戸後期の灰軸輪碗か。釉薬は薄い。生地はやや灰黄褐色を呈している。



第253図 SF01出土遺物 (2)

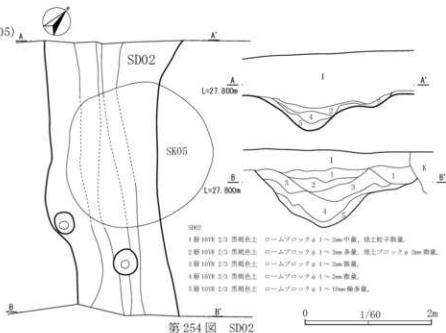
第24表 8区SF01中世遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSP-81C-フクダ	磁器	青磁	—	—	(1.9)	2.2	ほぼ直線的に開く短く口縁部片。	削りだしによる鐘蓮弁。釉薬はやや厚い。	良好	精良	内外面2.5G15/1オリーブ灰	口縁部片	龍泉窯
2	ASSP-81C-フクダ	陶器	皿	—	—	(2.95)	4.7	僅かに内湾する。	ロクロ整形。灰軸の上長石輪が顕る。	良好	精良	内外面517/3 黄褐色	体部片	古瀬戸

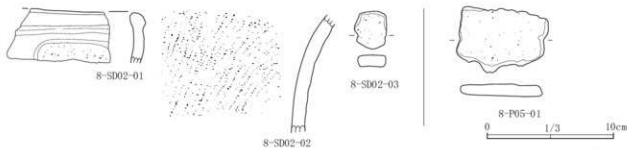
## 4 溝 (SD)

SD02 (第254・255図、図版72・105)

本遺構はA・B-3グリッドにおいて検出された。SK05・08を切っている。調査区を東西に横断するものでSF01と重複する可能性があるが形状は異なる。調査を行った長さは4.19m、幅は最大で2.16mを計る。断面は浅いV字形を呈し、確認面下の深さは52cmを計る。覆土は5層に分層され自然堆積である。



第254図 SD02



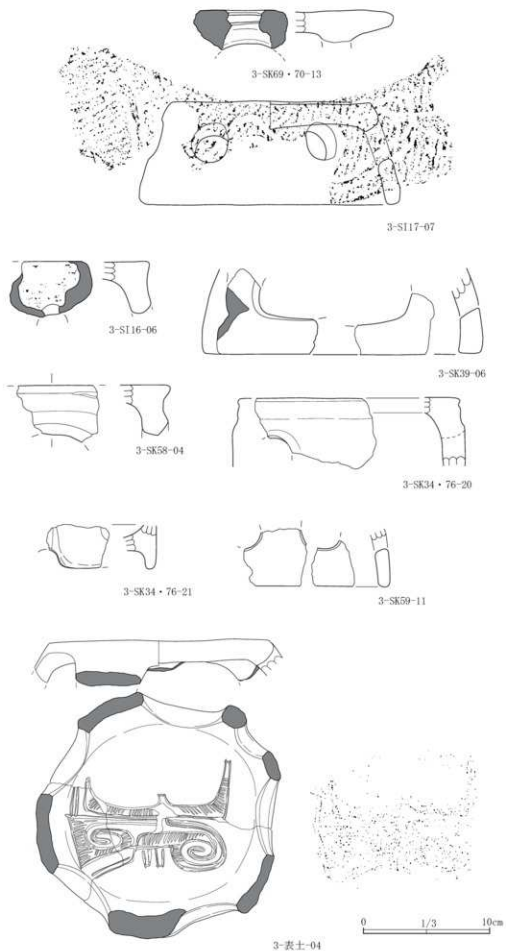
第255図 SD02出土遺物

第256図 8区ピット出土遺物

01は隆帯による窓枠状区画を設け、内部に単節LRの縄文を充填させている。02は胴屈曲部の破片で、大きく外反する。単節RLの縄文が縦方向に施文される。加曾利EⅡ式以降。03は土器片鏝である。僅かに縄文が施文される。重量は8.4g。

## 5 ピット (第256図、図版71・72・105)

本地区からは北側寄りに少量のピットが検出されているものの図・表ともに割愛した。出土遺物としてはP05から土器片鏝1点が検出されているのみである。重量は40.6gを計る。



第 257 图 台形土器集成图

## 第5章 まとめ

### 第1節 台形土器と内面に絵画が描かれた台形土器

台形土器は中部・南関東地域では勝坂式土器より加曽利EⅢ式にかけて伴出することが知られているが、本遺跡において検出された台形土器は9個体、11点に上る。東関東の遺跡でこれだけまとまって出土した遺跡は少なく、茨城県内の類例として管見に触れたものは竜ヶ崎市南三島遺跡6・7区(1985年)において出土がある。点数は少ないが、主体となる遺物は加曽利EⅢ・Ⅳ式段階で、報告を行った斎藤弘道も該期の資料と判断している(斎藤1985)。

本遺跡出土の資料は、完形品はないが、ほぼ形状が判別できる2個体を含めて、個体数で9個体ある。

形状は大半が無文で、台部と脚外面が磨かれるものが主体となっているが、3-SK34-76-20では受け面が内湾しており、碗の海部のように窪む。台付鉢の脚部の可能性もある。一方で3-SI17-07では外面に縄文が施文され、加曽利EⅡ～Ⅲ式古段階の連弧文が施文される。このことから、連弧文様式土器のモチーフを取り入れた台形土器と考えている。

脚部の開き方で数種類に分類が行える可能性があるが、ここでは言及を避ける。

台形土器の分類については、室伏徹が『総覧 縄文土器』の中で「台形土器」としてまとめている。この分類でみるならば、本遺跡で検出された台形土器は3-SK69・70-13が受け部が張り出すB類に含まれ、その他はすべてC類に分類されるものであろう(室伏2008)。

特筆されるものでは、表土出土遺物3-表土-04がある。同遺物は6本の脚が付され、脚の配置状況は、脚中央部に大4、小1の孔が穿たれており、すべてが同じ間隔で穿たれるものではない。1方向のみ孔が小さくなるもので、室伏の分類では1-5になるものであろうが、一致しない。動物や昆虫の脚を意識したものであるならば、前後の意識が働いている可能性もある。外面は無文でよく研磨されている。脚部はいずれも端部が折損しているが、残存する脚は端部が摩耗(人為的な研磨)し、ほぼ同じ長さで切揃えられていることから、二次的な偽脚部としてそのまま使用されていた可能性が高い。現状で伏せて置くと受け面はほぼ水平に安定する。同様に脚部を欠損しながら欠損部分を接地させるとほぼ受け面が平坦になる資料として管見に触れたものでは、千葉県成田市久井崎Ⅱ遺跡から出土した遺物がある。同遺物は加曽利EⅡ期の土坑から出土している。

本遺物の内面には、遺構外出土遺物の項でも説明したが、絵画が描かれている。信州系統の土器の中で蛇の文様を描く例があることを知られている。『古代史発掘3』に野口義麿により紹介されている(野口1974)台形土器の内面に描かれた蛇体文がある。同資料は三叉文状の文様を描くものであり、積極的に蛇体とは判断できない。渦巻を蛇体とみるならば、本資料では二匹の蛇が描かれているようにも見える。いずれにせよ戸田哲也・斎藤弘道・塚本節也氏にも同様に意見をうかがったが、類例を知らないとの意見であった。

文様はどちらを天として見るかでその様相は異なるが、複雑な幾何学文様で、船や波、台形土器に盛られた食材または装飾品のようにも見える。筆者の個人的な見解では、山形の冠をかぶり、目を渦巻状の右巻と左巻きの渦巻で表現し、2本の方形の区画帯は鼻梁を表しているようにも思える。ある意味仮面的な表現と考えるならば、鯨面の弥生人ではないが、顔面に入れ墨を施す形相にも見える。

台形土器は所謂土器づくりの為の粘土を、紐状に練る台として用いられたものとの説が有力であるが、本遺物には内面に絵画が描かれ、祭祀的な意味合いを強烈に感じさせるものである。そういった視点から、他の資料を観察すると、やはり各遺物とも整形が極めて良好で、共存する他の土器の整形とは明らかに異なっている。

粘土を練る為には、台にかなりの圧力が加わる。更に脚部に意識的に円孔を穿つ行為は、この圧力にたいする耐久性を減少させるものであり、粘土紐作りや木の実を押しつぶすための台としては、その使用目的に疑問を抱かざるを得ない。現在のところ、台形土器の使用目的については不明であるが、このような絵画が描かれる例が発見されることより、日常的ではない特殊な用途を想定しなければならないであろう。

## 第2節 赤弥堂遺跡出土の連弧文様式土器

連弧文様式土器は山内清男が『日本先史土器図譜』で紹介したのが最初とされている。時期は加曽利E式に伴うことが広く知られているものの、明確な時期編年については諸説ある。ここでその編年に触れるつもりはないが、従来言われてきた連弧文様式土器は、加曽利E式と曾利式の関係の中で論じられ、その分布も関東西部から南部に中心があるとされてきた(永瀬2008)。筆者も加曽利E式土器を出土する遺跡に幾分かかわってきたが、千葉県北部や茨城県南部においてこれらの資料に触れる機会があまりなかった。ところが、今回の調査において比較的好な連弧文様式土器資料が検出されたことは、初出ではないにせよ類例に乏しい地域の資料としては意義がある。以下、概略的ではあるが、供伴した遺物と並列して北東関東地域の一遺跡の様相を提示するものである。

第25表 連弧文様式土器供伴関係一覧表(1)

	連弧文系土器	供伴土器
1-SI 04		
1-SI 08		
1-SK 25		
1-P 21		



本遺跡出土の連弧文様式土器については表 25～28 にその共伴関係をまとめた。最も良好な共伴資料を出土した遺構は 1-SI04、1-SI08、1-SK25、3-SK59、3-SK65、3-SK52、3-SX01 である。

1-SI04 は連弧文様式土器群では 3 段階に含まれるもので、加曾利 E Ⅱ 式新段階から加曾利 E Ⅲ 式古段階に伴っている。

1-SI08 では連弧文様式土器群は 3 段階に含まれ、加曾利 E Ⅲ 式新段階に共伴する。

1-SK25 では連弧文様式土器は 3 段階に含まれ、加曾利 E Ⅲ 式古段階から新段階に共伴する。

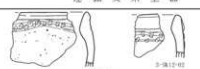



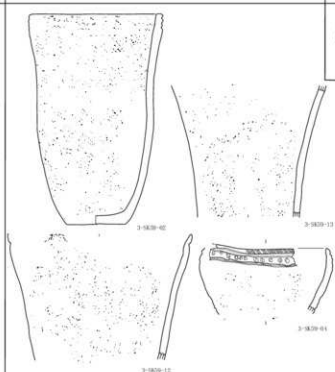
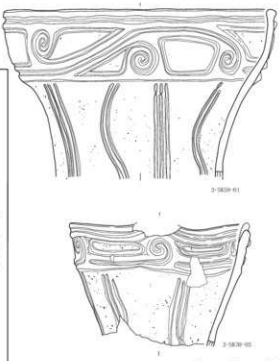
3-SK59 では連弧文様式土器群は 3 段階に含まれ、加曾利 E Ⅱ 式新段階に共伴する。

3-SK65 では連弧文様式土器群は 3 段階に含まれ、加曾利 E Ⅲ 式新段階に共伴する。

3-SX01 では連弧文様式土器のモチーフが加曾利 E Ⅱ 式新段階の器形に用いられるものであり、加曾利 E Ⅱ 式新段階から加曾利 E Ⅲ 式古段階に共伴するものと判断した。

総合的に判断すると、北関東霞ヶ浦西岸域に位置する本遺跡における連弧文様式土器は、加曾利 E Ⅱ 式新段階に出現し加曾利 E Ⅲ 式新段階まで継続している事が確認できる。

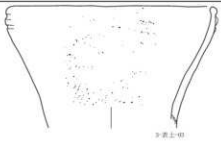



第 26 表 連弧文様式土器共伴関係一覧表 (2)

	連弧文系土器	共伴土器
3-SI 12		
3-SK 31		
3-SK 40		
3-SK 59		

第27表 連弧文様式土器相伴関係一覧表(3)

	連弧文系土器	相伴土器
3-SK 65		
3-SK 69 ・ 70		
3-SK 01		

第28表 連弧文様式土器共伴関係一覧表(4)

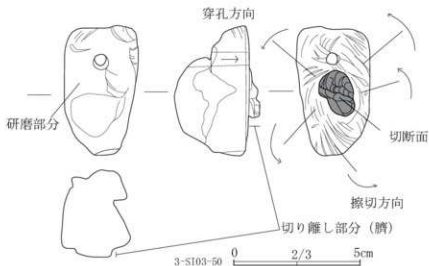
	連弧文系土器	共伴土器
3- 表 土 01		
5- P 21		
8- P 21		

## 第3節 琥珀大珠

出土したのは3区のSI03-50である。搬出した遺物の時期は加曽利EⅠ式段階、勝坂式段階、中峠式段階と混在が激しいが、加曽利EⅢ式に共伴するものと判断している。尚、形状並びに穿孔の技法から大珠の用語を用いた。縦4.1cm、横2.3cm、厚さ2.6cm、孔径4mmを計るもので、円形の岩塊を擦り切り技法によって分割している。相京和茂の分類(相京2007)では本遺物は5cm未満であるので、玉類としての範疇になる。穿孔軸は単軸系、形態では明確にあてはまるものはない。筆者はかつて分割を行う資料として富山県開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡で出土した2点の琥珀玉について報告した。この中で同遺物の分割の可能性を指摘したが、相京氏は同遺物をもとは中軸系の遺物であったものを再加工したもので、短軸系丸玉としている。

威信財としての分割行為については、上野修一の論考がある(上野2007)。時的にもヒスイが多くこの地域にもたらされた時期にも合致するもので、同様の分割行為が行われた可能性が高い。

切断の技法については、軟質の琥珀であるために、様々な石器類が想定できるが、観察からすれば、中心部を残しながら回転するように薄刃の石鋸状の工具を用いた痕跡が残されている。早期末か前期に知られる袂状耳飾りの



第258図 琥珀製大珠切断技法図

切断技法として確認されている、糸切り技法の痕跡とは異なるように思える。穿孔は切断の後に行われている。

威信財としてヒスイが好まれるこの地域において、加曾利E III期に琥珀玉が出土する例は少ない。茨城県内の報告で相京氏が紹介している2点は東茨城郡茨城町出土の資料である。墓坑からの出土である。長さが1.6 cm程度の小形の楕円形で、相京氏は短軸系玉類としている。東京都日陰山遺跡出土の玉の形状によく似ている。

産地同定分析は行っていないが、周辺では久慈・鏡子が比較的近距离にある。いずれかの地域からの移動が想定できる。奈良文化財研究所の室賀照子氏による科学的な分析が試みられ縄文時代の資料は鏡子産で、古墳時代以降のものは久慈産分析結果が示されている(室賀1979)。一方で藁科氏の教示によれば、黄褐色の琥珀は酸化によって赤褐色に変化することが指摘されている。久慈周辺では縄文時代にも盛んに琥珀玉の生産がおこなわれており、産地について明確な差異を示すことができないと伺っている。原産地の特定は困難な状況であるが、立地的にはより鏡子市に近接しており、同市粟島台遺跡を中心に展開する、原産地の琥珀が運ばれた可能性が高いものと判断される。

#### 第4節 土偶

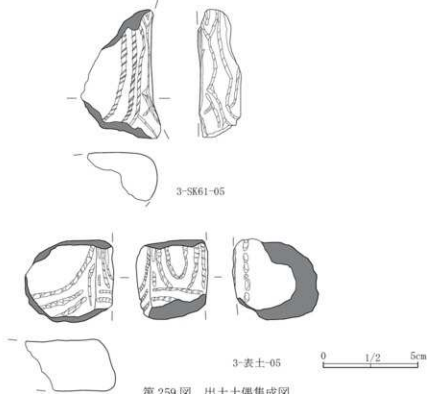
本遺跡で出土した土製品として特筆される資料としては、2点の土偶がある。

出土遺物はいずれも3区からの出土で、3-SK61-05と3-表土-05である。

3-SK61-05は胸部の破片で側面から腰部にかけての部位であろう。背面(背中)部分のみで腹部側は欠損している。板状の中実土偶である。背面は胸部の側面に沿って3条の有節沈線が走り、臀部に向かい腰の部分で緩やかに湾曲する。側面は同様の有節沈線による文様が描かれる。

本遺物にともなった遺物はSK61-01～04までを掲載したが、いずれもその特徴から加曾利E III古段階である。有節沈線の有り方から、阿見町官平貝塚出土の遺物に類似することからも阿玉台式の可能性を考えたが、共存遺物から判断すれば該当時期になる。

加曾利E式段階の土偶については類例が少なく、文様施文法についても明瞭ではない。関東における中期の土偶は中期前半阿玉台段階で一旦終焉を迎えている。



第259図 出土土偶集成図

江坂輝弥によれば、関東地方における中期の土偶として紹介される、宮平貝塚板状の土偶は東南北部の十字土偶との類似が指摘される(江坂1990)。平成2年に茨城県歴史館で開催された、特別展東国の土偶においても該当する時期の資料は、前述の2点のほか、常陸太田市佐竹小学校遺跡、大宮町諏訪台遺跡、日立市諏訪遺跡、水戸市愛宕町出土の資料が増加しているが、いずれも本遺跡の資料同様の有筋沈線で文様が描かれ、中実の板状土偶で、阿玉台式の資料と判断されている(茨城県立歴史館1994)。

本遺跡出土の2点の土偶もこういった特徴から、加曾利EⅢ式の住居の覆土の中に混入した、阿玉台式期の土偶と理解したい。

## 第5節 発掘された赤糸堂遺跡の全体像

赤糸堂遺跡の調査は、東地区・中央地区・西地区と東西2.1km、南北1.4kmに及ぶ台地の縁辺に沿って実施されている。農業用道路整備という目的のために遺跡の中に細長いトレンチを格子目状に入れたような調査であったが、その面積は総合計で凡そ16,771㎡に及ぶ。想定されている赤糸堂遺跡の全体面積は約94,900haであるので、調査を実施した面積はその僅か約14%に過ぎない。しかし、今回の調査で得られたものには多くの貴重な資料が含まれるもので、各地域別に3冊に分冊して報告した内容でその問題点に若干ながら触れたつもりである。

本報告書はその赤糸堂遺跡の第3冊目で、平成20・21年度発掘調査の区切りになる。ここでは、これまでに検出された赤糸堂遺跡の全体について概要をまとめ、遺跡の全体像を僅かばかりかでも明確にしたい。

### 縄文時代草創期～早期

検出された遺物を見ると、西地区は旧石器時代と境の段階と判断される有種尖頭器(男女Bタイプ)が出土している。また東地区では微隆起線土器、井草式直前段貝の遺物、夏島式土器と草創期の資料が僅かながら出土している。早期では田戸下層式、早期後半で子母口、野島式、鶴ヶ島台、等の条痕文系の土器群の出土もあった。撫糸文系土器、条痕文系土器を含め草創期から早期に及ぶ遺物は東地区にその中心域を見いだせそうである。遺構としては3基のファイアーピットが検出されている。草創期から早期条痕文系土器に伴うものと判断される遺構は、早期条痕文系土器に伴う東地区のこの3基のみであった。

### 縄文時代前期

明瞭な遺構として捉えられたのは縄文時代前期関山Ⅰ式段階が最も古い。これらの遺構はほぼ住居跡のみで、土坑は確認できていない。全ての住居跡の覆土中に貝層を有するもので、東地区で5軒、中央地区で2軒が確認されており、全体的には東側台地縁辺部と中央地区の東側でも台地中央寄りにその中心域を有するように判断される。関山式土器はⅠ式段階とⅡ式段階に分けられ、いずれの住居からも貝の出土が確認され、出土した貝の組成は明らかに古い段階と新しい段階では差異が認められるもので、新しい段階になるほどヤマトシジミの増加が見られ、海退の現象が推察される。

黒浜式の遺物は少ない。続く浮島式では若干量の遺物が検出されている。浮島Ⅰ式～Ⅲ式まで出土があるがやはり量的に少なく、遺構も検出されていない。十三菩提式土器も僅かながら見られる程度である。

前期の資料は全体に少量ずつ出土しているものの、台地の東側縁辺部に遺跡の中心があるものと想定できる。

### 縄文時代中期

縄文時代中期では霞ヶ浦西岸の特徴的な様相が見られ、特に阿玉台式終末から加曾利E式前半にかけての資料は充実したものがある。調査区域別では、東地区と中央地区に集中する傾向が見られる。一方で加曾利EⅡ～Ⅲ式段階になると集落の中央は西に移動し、西地区で最も充実した状況が見られる。

中期における問題点として掲げられる問題では、以下の項目が特筆された。

- 1 阿玉台Ⅳ式土器と勝坂式および広義の中峠式土器の関連

2. 台形土器の出土
3. 連弧文様式土器と加曾利EⅡ～Ⅲ式土器との共伴関係
4. 威信材としての琥珀大珠及び土偶の出土
5. 袋状土坑の終焉

#### 縄文時代後期～晩期

遺構は検出されていない。遺物として堀之内式と考えられる数点の出土が見られる。

#### 弥生時代

該期の遺構・遺物は検出されていない。

#### 古墳時代

本期の遺構は、1区ではSI05、2区ではSI01、3区ではSI01・SI02、4区SI01・04、5区SI02・03、8区SI02の9軒であった。各区に1軒から2軒程度が散逸して検出されている。いずれもカマドを敷設する住居跡は検出されておらず、出土遺物から判断して、カマド導入直前の古墳時代中期後半の遺構と判断される。滑石製模造品を出土した1区SI06は本遺跡が和泉期を主体に展開していたことを示すものであろう。

一方で、古墳は確認されなかった。出土遺物が皆無であり時期を特定できなかった6区のSD01は覆土の様相から古い遺構の可能性がある。

#### 中世

本遺跡において検出された最大の遺構であるSF01は第5区から8区にかけて検出されたものである。床面は固く硬化しており、硬化面を剥がすとさざ波状の長楕円形の掘り込みが連続して施され、古瀬戸灰釉碗、貿易陶磁器青磁鍋運弁の碗、播鉢の出土から、該期の遺構と判断した。

以上が赤弥堂遺跡の2年間にわたる調査成果である。

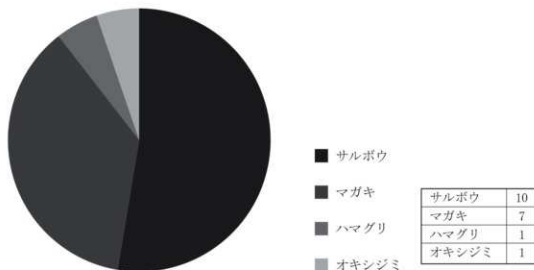
## 第6節 自然科学分析

## 赤弥堂遺跡（西地区）

SK01 出土具は上層に僅かにその分布が見られたもので、出土資料は点上げを行った。出土遺物から所謂貝の個体数は、明瞭にすることはできなかったが、殻頂部が存在しない資料も含めて20点が出土している。種別ではサルボウ19点、マガキ7点、オキシジミ1点、ハマグリ1点である。これらの個体数の比率を赤弥堂中央地区並びに東地区の貝塚と比較すると、中央地区の4区SK03の組成に最も近く、本遺構の時期とほぼ同じであることが判明している。

和名	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
	オキシジミ	<i>Cyglina orientalis</i>
	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
	サルボウ	<i>Anadara subcrenata</i>

第29表 8区SK01 出土具組成表



第30表 8区SK01 出土具一覧表

No.1	サルボウ	殻頂部片	1		
No.2	サルボウ	不明	1		
No.3	サルボウ	破片	4		
No.4	サルボウ	破片	1		
No.5	サルボウ	左	1		
No.6	ハマグリ	破片	1		
No.7	サルボウ	不明	1		
No.8	カキ	身	1		
No.9	オキシジミ	不明	1		
No.10	カキ			蓋	1
No.11	カキ			蓋	2
No.12	サルボウ	不明	1		
No.13	カキ	身	1	蓋	1
No.14	ハマグリ	殻頂部片	1		
No.15	カキ	身	1		

## 【参考・引用文献】

- 西村正衛 1969 「千葉県小見川町木之内神明貝塚（第一次調査）『学術研究』第18号早稲田大学考古学会
- 西村正衛 1970 「千葉県小見川町阿玉台貝塚—東部関東における縄文中、後期文化の研究—その二」『学術研究』第19号早稲田大学考古学会
- 西村正衛 1971 「千葉県佐原市三郎作貝塚」『学術研究』第20号早稲田大学考古学会
- 野口義典 1974 「蛇身装飾の分布と背景」『古代史発掘3 土偶芸術と信仰』講談社
- 室伏 徹 1976 「台形土器について—坂井遺跡出土例を中心にして—」『丘陵』第1巻 第2号
- 室賀照子 1979 「奈良県富郷丸山古墳・於・慈恵寺塚本古墳出土土の総合的研究」『橿原考古学研究所論集』第五
- 青森弘道 1985 『南三島遺跡6・7区』茨城県教育財団 第30集
- 江坂舞弥 1990 『日本の土偶』六興出版
- 茨城県立歴史館 1994 『特別展 東国の土偶』
- 塚本師也 1997 「第六章 考察」『浄法寺遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第196集 栃木県文化振興事業団
- 塚本師也 2003 「茨城県北部域における縄文時代中期中葉の土器の様相」『領域の研究—阿久津久先生還暦記念論集』
- 塚本師也 2005 「田木谷遺跡出土の縄文中期中葉の土器について—霞ヶ浦北岸における中期中葉の土器様相—」『五里村立史料館報』第10号
- 塚本師也 2006 「田木谷遺跡出土の縄文中期中葉の土器について（2）—霞ヶ浦北岸における中期中葉の土器様相—」『五里村立史料館報』第11号
- 相京和茂 2007 「縄文時代におけるコハク流通（上）」『考古学雑誌』第91巻 第2号
- 2007 「縄文時代におけるコハク流通（下）」『考古学雑誌』第91巻 第3号
- 上野修一 2007 「他小丸玉—硬玉大珠の二次的変形」『縄文時代の社会と玉』日本玉文化研究会第5回シンポジウム栃木大会実行委員会
- 塚本師也 2007 「乾燥形貯蔵穴」『縄文時代の考古学5 なりわい—食糧生産の技術—』同成社
- 塚本師也 2007 「茨城県における袋状土坑研究の視点」『考古学の深層—五次聖先生還暦記念論集—』
- 塚本師也 2007 「茨城県北部における出現期の袋状土坑について」『茨城版—川井正一—青森弘道・佐藤正好先生還暦記念論集』
- 今福敏江 2008 「勝坂式土器」『総覧 縄文土器』
- 小林達夫編 2008 『総覧 縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
- 塚本師也 2008 「阿玉台式土器」『総覧 縄文土器』
- 永瀬史人 2008 「蓮沼式土器」『総覧縄文土器』
- 細田 勝 2008 「加曾利E式土器」『総覧 縄文土器』
- 室伏 徹 2008 「台形土器」『総覧縄文土器』
- 大賀 健ほか 2009 「赤赤堂遺跡（現地区）」土浦市教育委員会・有限公司勾玉工房Moai
- 塚本師也 2009 「栃木県における阿玉台式土器出土遺跡」『野州考古論攷—中村紀男先生追悼論集—』
- 塚本師也 2009 「茨城県北部における大木7b式期の土器—特に七郎内II群と所謂スワタイプについて—」『常総台地』16
- 大賀 健ほか 2010 「赤赤堂遺跡（中央地区）」土浦市教育委員会・有限公司勾玉工房Moai
- 塚本師也 2010 「鬼怒川・小貝川流域の加曾利E1式期の土器—田間城町西原遺跡第61号住居跡出土土器の位置づけ—」『茨城県考古学協会誌』第22号